
バカと速攻と昆虫少年

榊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと速攻と昆虫少年

【NZコード】

N2176S

【作者名】

榎

【あらすじ】

文月学園一年Fクラス所属、七伏博人。昆虫をこよなく愛し、昆虫少年の異名を持つ彼。そんな彼の兄や幼なじみ、そして級友達を交え、我が道を走りながらも愉快に学園生活をおくっていく。そして最近はいろいろ逃げ道がない。そんな彼の召喚獣の戦い方、それは『速攻』。駄文になりますが、お付き合いいただけすると嬉しいです。サブタイトルは使い道のない豆知識です。偶数日の定期更新です。

第一回～植物のクローンはよく見られる～（前書き）

第一話です。サブタイトルは気にしないでください。

第一問～植物のクローンはよく見られる～

第一問

校舎へ続く道が桜に彩られる新学期。

僕は双子の兄である行平ゆきひらと幼なじみの佐藤楓さとうかえで通称メープルと共に坂道を登つていく。

ちなみに桜の品種のソメイヨシノは全てクローンなので、条件が揃えば同時期に咲く。

他愛もない雑談をしながら歩くと玄関の前に西村先生、通称鉄人が立っていた。

「「「おはようございます」」」

「ああ、お前たちか。これがクラス割だ」

そういって渡されたのは茶色の封筒。

適当に開けると中にはFの文字、つまりこの学校の最低クラスが書いてあった。

「そつちはどうだった？」

二人に聞いてみると、Aクラスだと返ってきた。

「残念だがこれもルールだからな」

そう西村先生に声をかけられる。

「うう ハクと一緒に良かつたつす」

「へつす」というのはメープルの口調。

ちなみにハクというのは僕、博人のことだ。

「試召戦争、頑張つて下さい」

デフォルトで丁寧なのは行平の口調だ。

そして二人と別れ、今Fクラスの前に立つている。

ドアを開けると、畳と卓袱台、座布団という斬新な設備の教室がひろがっていた。

ああ、今日もいい天気だなあ。

…………ダメだ。ありきたりな現実逃避じゃ逃げ切れない。

こうなつたら、現実逃避その2を使うしかない。

「（読書中）」

よし、これで問題ない。

第一問～植物のクローニングはよく見られる～（後書き）

感想、ご意見をよろしくお願いします。

第一問～アリは働く者～ハッ！～轟せやせりてゐたま～（前書き）

第一問です。

第一問～アリは働き者～ハツ！～巻はやまつてゐた～

第一問

しばらく現実逃避していると、僕を呼ぶ声が聞こえた。

「自己紹介をおねがいします」

いつの間にか自己紹介の順番になっていたようだ。

「七伏博人／ななふしはくと／です。趣味は昆虫採集です。よろしくお願いします」

席についてふたたび読書を始める。

すると、少しあたってから教室のドアが開かれた。

そこには息を切らせて胸に手を当てる女子生徒と、従姉である杉本秋音／すぎことにあきね／。ウチに居候中の物理教師だ。

「ちょうど良かったです。今自己紹介をしてくるといふので姫路さんと杉本先生もお願いします」

「は、はいーあの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします

」

つづいて秋音姉。

「私は杉本秋音。Fクラスの副担任の物理教師だよ よろしくね！」

その後本来Aクラスにいるはずの姫路さんが何故Fクラスにいるか
といふ話になつたが、風邪による途中退席が原因だそうだ。

僕の場合は色々あつての遅刻なんだけど。

教卓がぶつ壊れたり、なんやかんややつてこらつちに、最後の自己紹介になつた。

「Fクラス代表の坂本雄一だ。俺のことは代表でも坂本でも、好き
なように呼んでくれ」

坂本雄一。高身長で、タテガミのような髪が特徴の僕の悪友。

「さて、皆に一つ聞きたい」

雄一は教室内の各所に目を移す。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしい
が——」

一呼吸入れて静かに告げる。

「――不満はないか?」

『大ありじやあつ――。』

ですよね~。

そして雄一はその状況を改善するため、あることを提案した。

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思つ」

第一問へアリは働く者へハッ！ | 鮎はやまびこ（後書き）

感想、ご意見等お願いします。

第三問～石油にはセキユバエ～（前書き）

だいぶ省略した感があります。第三話です。
サブタイトル～石油は生物にとって毒と変わらず、生息が困難です。
しかし、セキユバエの幼虫は石油を生活の場としています。

第三問～石油にはゼキコバエ～

第三問

Aクラスへの宣戦布告。

クラス内からも否定的な意見がでるほどAクラスとFクラスの戦力の差は明らかだ。

ここ文月学園では、上限の無いテストの点数に応じた強さの自身をデフォルトした召喚獣を使い、クラス間での戦争が行われる。

つまり、学力が最高のAクラスとFクラスでは天と地ほどの差があるということだ。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

。 その戦力差を知りながらも、雄一は堂々と宣言した

そして、Aクラスに勝てるといつ根拠をこれから説明してくれるらしい。

まず始めに呼ばれたのは畠に顔をつけて姫路さんのスカートを覗いていた土屋康太。

顔に残る畠の後を隠しながら壇上にあがる。

「こいつがあの有名なムツツリー二だ」

「……（ブンブン）」

ムツツリー二、簡単に言つとムツツリスケベだ。

ただし、そのムツツリ度は常人の比ではない。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だつてその力はよく知つてゐるはずだ」

試合戦争に至るとしたら強力な戦力となるだろう。

「木下秀吉だつている」

木下秀吉。演劇部のホープで、双子の姉の木下優子が有名だ。

そして途中にキングオブバカ、吉井明久をバカにした後、ぼくのなまえがよばれた。

「七伏博人。こいつはこのクラスの秘密兵器といつてもいい。皆も昆虫少年という名前は聞いたことがあるだろう」

『Aクラスレベルって話だよな』

『運動もすごいつてきいたぜ』

『まさに秘密兵器つて訳だ』

「明久にはDクラスへの宣戦布告の死者になつてもらひ。無事大役

を果たせー。」

別に誤字ではないと思ひ。

明久は最初は渋っていたが、あっさり騙されて意気揚々とロクラスへ向かっていた。

「騙されたあつー。」

「やはりそうきたか

満身創痍といった体の明久が転がり込んできたが、別に予想通りだつたので特にリアクションはしなかった。

「あの程度でだまされる明久がわるかつたんだよ」

さて、これで本格的にロクラスと戦争になるわけだが僕の役目は秘密兵器。

つまりなにが言いたいかってこと、ロクラス戦では秘密兵器はずつと秘密だったってことだ。

相手の代表に姫路さんが奇襲をかけておわったそうだ。

第二問～石油ではヤキバエ～（後書き）

感想、ご意見等ありましたらお願ひします。

第四問へペシトボトルは生マリと一緒に燃やしたせいかここりこくへ（前書き）

第四問です。

第四問～ペントボトルは生ハリと一緒に燃やしたほうがこよりいい～

第四問

Dクラス戦が終わり、行平とメープルと一緒に帰る。

「試合戦争」苦労様でした

「最終目標はAクラスってことですか？」

「うん、そうだよ。といつかいつも通りのしゃべり方でいいんじゃない？」

メープルの『～す』という口調は本人曰わくキャラ作りだそうだ。

「ねえ、それじゃあわ、ちょっと勝負してみない？」

ふむ、勝負か。

「内容によるね

「ハク達がAクラスに勝つたらハクの、負けたら私の言つことを見
くつてこいつのはじづ？」

「うん、乗った

実は結構賭事好きだつたりする。

ちなみに一番好きなのはポーカーだ。

「それじゃ、また明日！」

メープルの家の前で別れ、すぐ隣の我が家に入る。

明日は点数補充テストがあるので一通り教科書に目を通しておく。

翌朝、いつも通り学校に向かう。

今日は昨日試験で消費した点数の補給テストになる。

僕としては、このテストが今後の戦力となるので少し気合を入れてやっておく。

第四問～ペットボトルは生ゴミと一緒に燃やしたほうがいい～（後書き）

～サブタイトル～

生ゴミだけで燃やしても十分な熱が得られず、うまく燃えない石油をかけて燃やしているらしいのですが、ペットボトルと一緒に燃やすとうまく燃えて、石油の無駄遣いになりません。

第五問～子の方が親より大きいアベコベガエル（前書き）

だいぶ短いですが第五話です。

第五問～子の方が親より大きいアベコベガエル～

第五問

4教科のテストが終わり、昼休みとなつたのでFクラスのいつものメンバーと行平とメープルを加え弁当を食べていたのだが——

ガクガクガクガクガクガクガク

姫路さんの弁当を食べたムツツリーと雄一が大ダメージを負つて倒れていた。

生存者で作戦会議を行い、僕は一つの結論を出した。

(僕達は自分の弁当あるから、姫路さんの弁当は遠慮させてもらひ)

(私もまだ死にたくないっす)

(頑張つて下さい)

見捨てましょう

(そんな！ひどいよ！)

(俺達は仲間だろ！)

明久と復活した雄一が生贊を増やそうと必死だが、無視して二人で

和やかに食事を再開する。

「雄一が犠牲となる」とで場がおさまったと思ったが、デザートがあり、秀吉がさらなる犠牲となつた。

「そういえば坂本、次の目標だけど」

「ん？ 試合戦争のか？」

「うん」

姫路デザートで死にかけた秀吉に明久が大量に茶を飲ませている。確かに抗菌作用があるが、姫路さんの料理に入っているのは化学物質だから効果は得られないだろう。

「相手はBクラスなの？」

「ああ。 そうだ」

Aクラスを目指とすると、なぜBクラスと戦うのかという島田さんの質問だが、おそらくAクラスと有利な状況で戦うためにBクラスを利用するつもりだろう。

「正直に言おう。 どんな作戦でも、うちの戦力じゃには勝てやしない」

「雄一らしくもない戦う前からの降伏宣言。

Aクラスの約四十人はBクラスよりも少々点数が上のふつうの生徒だ。

しかし残り10人の点数はばば抜けて高い。

Fクラスのふつうのメンバーでは全員で取り囲んでもやられてしちゃうだろう。

だから雄一は一騎打ちに持ち込む作戦のようだ。

Bクラスはそのための脅しの使いつもりらしい。

今回も明久がBクラスへの死者（使者）にされ、役目を果たしてボロボロになつて帰ってきた。

第六問～巣の外で働くハチは年長者～

第六問

Bクラス戦。今回はまずは防御側にまわり、雄一の護衛として掃除用具入れに隠れていた。俺が呼ぶまで出てくるなという指示通り、ずっと隠れていた。

現在、Cクラスに不穏な動きがあり、不可侵条約を結ぼうといつことになった。

しかし、引っかかる事がある。それは、Cクラスの代表とBクラスの代表が付き合っているということだ。

「雄一！不可侵条約を結ぶのに、僕も連れて行ってほしい！」

掃除用具入れの中なので、大きめの声で叫ぶ。

「 分かった。出でこい」

意図を察してくれたのか、少し考えてから了解してくれた。

秀吉を残して、Cクラスに向かつ。

「Fクラス代表の坂本雄一だ。このクラスの代表は？」

「私だけど、何か用かしら？」

前に出てきたのは、気が強そうな女子の小山友香さんだ。

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

「クラス間交渉？ふうん」

「ああ。不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねえ。どうしようかしらね、根元クン？」

予想通り、教室の奥から根元恭一が現れた。

「当然却下。だって、必要ないだろ？」

「なつ！？根元君！Bクラスの君がどうしてこんなことになるで！」

Fクラスをはめるためです。

取り巻きも二人ほど見える。ちょうど良い。

4時までに決着がつかなかつたら翌日に持ち越しという協定を盾にして、攻撃を仕掛けるか。残念ながら予想通りでしかないこの作戦はもう意味が無い。

「長谷川先生！Bクラス芳野が召喚をーー」

「Fクラス、七伏が受けます。試獣召喚」

雄一達を教室から逃がし、相手と向き合ひ。

チャンスは簡単にピンチに変わることをしつかり教えてあげよう。

「Bクラスの皆さん。コレだけでは役不足なので、まとめてかかってきてください」

Fクラスの生徒にバカにされたからか、簡単に挑発にのってくる。

『試験召還!』

残りの六人も召還をし、点数が表示される。

『Bクラス モブキャラ × 7
数学 平均 150 くらい

Fクラス 七伏博人
数学 584 点』

僕の召還獣は武器は両手のクロード、足の鉤爪、肘のブレード。防具はすねのアーマーと全身にフィットしている服だけだ。

相手が動き始める前に一人目に肉薄し、クロードで頭を斬る。

そのとなりの二人目のは肘のブレードを突き刺す。三人目は膝蹴りを食らわせ、四人目と五人目は両手を広げてクロードで同時に斬りつける。

六人目を七人目の方へ蹴り飛ばし重なったところをかかと落として決める。

流れを乱さず、4秒程度で始末を終える。

教室を見回すと、慌てて逃げる根元の姿が見えたが雄一達と合流する事を優先し、教室を後にする。

実際1分位しかクラスにいなかつたので、すぐに追いつく。明久と島田さんがみえないが、教室外に配置された追撃部隊を引きつけているらしい。

作戦は把握しているし、行平とメープルが待っているので一足先に帰る。

第六問～巣の外で働くハチは年長者～（後書き）

サブタイトル

成虫になつたばかりの働きバチは、巣の中での仕事を担当します。

第七問～クロスッポンは生息地が人工池のみ～（前書き）

第七話です。

第七問～クロスツッポンは生息地が人工池のみ～

第七問

この戦争の勝者に戦争を仕掛けるであろうCクラス対策に秀吉を要とした作戦を行う。

僕がつっこんでもCクラス相手だと殲滅に20分位かかるから、無駄な戦争はやらないに越したことはないだろう。

今回の作戦は秀吉に女子の制服を着せて双子の姉であるAクラスの木下優子の演技をして挑発してもらい、Cクラスの敵意をAクラスに向けようといふものだ。

僕が行平の真似をするという意見は始めからない。顔は結構似ているが、身長が僕の方が明らかに低い。

「と、いうわけで秀吉。用意してくれ」

「う、うむ　　」

制服を受け取り、その場で着替え始める秀吉。

同性の着替えなのにガン見している明久の考えがよくわからない。

「（パシャパシャパシャパシャー）」

ムツツリーは指が擦り切れるんじゃないかってほどの速さで連写

していた。

「よし、着替え終わつたぞい。ん？ 皆どうした？」

僕にもなぜクラスの皆が複雑な表情をしているのかわからない。

「まあ、とりあえずCクラスに行ひみ」

「ああ、そうだな」

「うむ」

秀吉を連れて教室を出て行く。

「あ、僕も行くよ」

その後を明久が慌てて追いかけてくる。

FクラスからCクラスまでは結構離れているので、しばらく歩く。

「それじゃあ秀吉、ここからは一人でお願い」

Aクラスの使者になりますので、僕達は同行できない。

よつて、離れた場所から様子を窺う。

「気が進まんのう」

「や」を何か頼む

「むつ 仕方ないのう」

「とにかくCクラスを挑発してAクラスに敵意を抱くよつて仕向けて。頼んだよ、演劇部のホープ」

「あまり期待はせんしてくれ」

ガラガラガラと秀吉がCクラスの扉を開ける音が聞こえる。

『静かになさい、この薄汚い豚ども!』

おおつか。

「流石だな、秀吉」

「意外とノリノリだね」

「うん。これ以上はない挑発だね」

この時点でのCクラスの敵意はもうAクラスに向いていたことだらう。

『な、何よアンタ!』

この声は昨日会ったCクラス代表の小山さんなのだから。

当然だが、いきなり豚呼ばわりされて怒氣を含んでいる。

『話しかけないで!豚臭いわ!』

自分から来くせに豚臭いというシッ ハハハハハ満載のセリフだが、

「Cクラスからシシ「//」の姫はあがらない。

まさかCクラスはシシ「//」が不足しているのか？

『アンタ、Aクラスの木下ね？ちょっとと点数良いからつていい氣になってるんじゃないわよー何の用よー。』

知名度としては秀吉よりAクラスの優子のほうが高い。

そもそも女装しているので簡単には見分けがつかない。その上挑発して冷静に判断ができないようにしている。

かなり良い作戦と言える。

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！貴女達なんて豚小屋で充分だわ！』

『なつ！ 言うに欠いて、私達にはFクラスがお似合いですつ て！？』

いや、誰もFクラスとは言つてないのに、豚小屋の方がFクラスより衛生的だと思つ。

『手が汚れてしまつから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送つてあげようかと思うの。ちょうど試召戦争の準備もしている様だし、覚悟しておきなさい。近いうちに、私達が薄汚いブタの貴女達を始末してあげるからー。』

そう言い残し、靴音を立てて教室から出てきた。

「これで良かったかのう?」

どこかスッキリした顔で秀吉が近寄つてくる。

「それはもう素晴らしい仕事ぶりだったよ

『Fクラスなんて相手にしてられないわ! Aクラス戦の準備を始めるわよ!』

「作戦もうまくいったし、僕達も今日の戦争の準備をしよう。あと10分で始まるよ

第八問～鳥合の衆つて実は凄い～（前書き）

第八話です。

サブタイトル

カラスは餌のみつけにくくなる秋頃から集団をつくり、
目の数を増やして確実に餌をとろうとします。

カラスはあまり攻撃してこないのですが、大きなクチバシを持った
カラスの大群は恐ろしいものです。

第八問～鳥合の衆つて実は凄い～

第八問

Bクラス戦が始まつてからじばらぐると、戦線にいるはずの明久が駆け込んで来た。

「雄二ーっ！」

「うん？どうした明久」

「脱走だつたらチョキでシバくよ」

「話があるんだ」

「…………とりあえず、聞こいつか」

“ひやら今は冗談に付き合つてゐる暇はないらしい。

それを察して真面目な顔で向き合つ。

「根元君の着ている制服が欲しいんだ」

「…………お前に何があつたんだ？」

明久は真面目な顔で男子の制服を欲しがる変態だったのか。

「ま、趣味は人それだからね

「そうだな、勝利の曉にはそれくらいなんとかしてやるわ」

「で、話はそれだけ？」

本当にこれだけだったら半殺しにしても文句は言われないだろ。

「それと、姫路さんを今回の戦闘から外して欲しい」

「理由は？」

「理由は言えない」

「どうやら、いちが本題つてことかな。

「どうしても外さないダメなの？」

「うそ。 うしても」

雄一が顎に手を当てて考え込む。

貴重な戦力である姫路さんを戦闘から外すなんて自殺行為といつてもいい。

「頼む、雄一！」

明久は深く頭を下げる。

ノーリターンでハイリスク。はっきり言って無謀だ。

「 条件がある

「 条件?」

「姫路がやるはずだつた根元に攻撃をしかける役目をお前がやれ。」

「 もちろんやってみせるー絶対に成功させるぞー。」

「 良い返事だ」

おっと、そろそろ僕も行動開始の時間のようだ。

「 明久。お前にはお前の強みがある。それをつましく使ってみな

一言残し、教室を出て行く。

第八問～鳥合の衆つて実は凄い～（後書き）

感想や誤字脱字の指摘等お願いします。

第九問～カラスはマヨネーズを好むらしい～（前書き）

第九話です。

第九問～カラスはマヨネーズを好むらし～

第九問

『お前らしい加減諦めろよな。昨日から教室の出入口に人が集まりやがつて。暑苦しいことこの上ないっての』

遠くから根元の声が聞こえてくる。

『どうした？軟弱なBクラスの代表サマはそろそろギブアップか？』

姫路さんを戦闘に参加させていないので、雄一率いる本隊も出動せざるを得なくなつたのだろう。

『はア？ギブアップするのはそつちだろ？』

『無用な心配だな』

『そつか？頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？』

『お前ら相手じゃ役不足だからな。負け組代表さんよお』

『負け組？それがFクラスのことなら、もつすぐお前が負け組代表だな』

『さつきからドンドンと、壁がつるせえな。何かやつているのか？』

『さあな。人望のないお前に対しての嫌がらせじゃないのか?』

『けつ。言つてろ。どうせもつすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ!』

『 態勢を立て直す! 』田さがるぞ!』

さてと、そろそろ出番かな。

『どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか?』

退却を始める雄一達と入れ替わるように廊下の窓から校舎に入る。

「Fクラス、七伏博人がここにいるBクラス全員に化学勝負を申し込みます。試獣召還!」

『Fクラス 七伏博人
化学 632点』

「アハハハ!」

フィールドを駆け抜けながら殲滅をする。

こんなヤツらじゃ弱すぎで話にならない!

「だああ——っしゃあ——!」

明久がロクラス側の壁をぶち破って入ってくる。

物理干渉能力をもつ、観察処分者ならではの作戦だ。

しかし、彼らはBクラスの近衛兵に囮まれてしまつ。

こちらはBクラスの殲滅が終わつた。

ちゅうどそこには保育教師を連れてムツツリーが窓からやっている。

Fクラス、土屋康太

「待った！ムツツリーーー！こいつは僕が片づける！先生、根元恭二に勝負を申し込みます」

る。保体の先生はまだフィールドを展開していないので、化学で勝負す

明久達が近衛兵を引きつけたので、丸裸になつた根元。これで詰みだ。

『Bクラス』 根元恭二 化学 198点

Fクラス
七伏博人
632点

「少しば面白い戦いができると思ったんだけど、残念だ」

先ほど召喚した召喚獣をそのまま引き連れてクロード一閃。

これでBクラス戦は終結した。

第十問～ヒガンバナは飢饉に備えた非常食だった（前書き）

サブタイトル

球根を水にさらして毒を取り除くと食べられるそうです。

第十問～ヒガンバナは飢餓に備えた非常食だつた～

第十問

「ずいぶん思い切った行動にでたね。明久」

終戦後、拳をおさえている明久に、声をかけておく。

「うう。痛いよう、痛いよ」

100%全てがファイードバックしないとはいっても、素手で鉄筋コンクリートを壊したのだからその痛さは並みじやない。

「なんともお主らしい作戦じゃったな」

「で、でしょ？もつと褒めてもいいと思ひよ？」

「後のことは考えず、自分の立場を追い詰める男氣溢れる作戦だつたね」

「遠まわしに馬鹿つて言つてない？」

何を行つてゐるんだ明久は？

「その通りだけど」

「ウキイーーー！」

いきなり襲いかかってくるので、鳩尾に拳を叩き込んで黙らせる。

「ま、それが明久の強みだからな」

雄一がバンバンと明久の肩をたたく。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「

床に座り込んでいる根元。それまでの強気が嘘のようだ。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素手な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

そんな雄一の発言に、ざわざわと周囲が騒ぎ始める。

「静肃に…静肃に…前にもい言つたけど僕達の目標はAクラス。ゴールはここじゃない」

「つむ。確かに」

「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやるつかと思つ」

その言葉でクラスの皆が納得したような顔になつた。

Dクラス戦でも同じことを言つただろうから、雄一の性格を皆理解し始めたんだねつ。

「 条件はなんだ」

「 条件?それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと?」

「ああ。お前には散々好き勝つてやつてもらつたし、正直去年から田障りだったんだよな」

凄い言ことづだが、誰もフオローしない。それだけのことをやっているからだ。

「セレ」で、お前らBクラスに特別チャンスだ」

おやじく」れがAクラス戦との取引材料になるのだろう。

「Aクラスに行って、試合戦争の準備が出来ていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやつてもいい。ただし、宣戦布告するな。すると戦争は避けられないからな。あくまで 戰争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「・・・・・それだけでいいのか?」

それだけな訳がないでしょ?」

「ああ。Bクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら 見逃さう」

そう言って雄一が取り出したのは秀吉の時と同じ、女子用の制服。

これは明久の要望を叶えるためと、雄一の個人的感情だろう。

「ば、馬鹿なことを言つたなー」この俺がそんなふざけたことを
「！」

根元が慌てふためく。そりゃあ嫌だよね。

ま、嫌がつても関係ないし。

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！必ずやらせるからー。』

『それだけで教室を守られるなら、やらない手はないな！』

何よりBクラスからの声援もある。

「んじゃ、決定だな」

「くつーよ、寄るなー変態くふうつー！」

「とりあえず黙らせました」

「お、おつかりがとう」

一瞬で根元を見限つて腹部に拳を打ち込むBクラスの男子。いい仕事するね。

「では、着付けに移るとするか。明久、まかせたぞ」

「了解つ」

明久はぐつたりと倒れている根元に近づき制服を脱がせる。

ここからは見ていて毒なので身を翻して帰宅を決意した。

第十一問「昔はゴキブリは金持ちの象徴だった」（前書き）

サブタイトル

ゴキブリは温暖な気候に適しているので、江戸時代などは冬でも暖かい裕福な家に住んでいました。わざわざゴキブリを買って家に放して裕福になれるよう願った人もいたようです。

第十一問「昔は「キブリ」は金持ちの象徴だった

第十一問

Bクラス戦が終わり、2回たつた。

残すはAクラス戦のみとなり、もうすぐ別れる予定のFクラスの教室で最後の作戦の説明をしている。

「まず皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらず此処まで来れたのは、他でもない皆の協力があってのことだ。感謝している」

「ゆ、雄二」ビビったのか。らしくないよ?」

「ああ。自分でもそう思つ。だが、これは俺の偽うざる気持ちだ」「まあ、Fクラスなのにここまでこれたのはたいしたことだと、僕も思う。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強すればいいともんじやないという現実を突きつけるんだ!」

『おおーっ!』

『やつだーっ!』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

勉強だけじゃないからって疎かにしていいわけじゃないけどね。

「今日のアクラス戦だけど、一騎打ちで決着をつけたいと思つ」

雄一の隣で説明すると、教室中にざわめきが広がつた。

『どうこいつ！』とだつ。

『誰と誰が一騎打ちするんだ？』

『それで本当に勝てるのか？』

『落ち着いてくれ。それを今から説明する』

雄一がバンバンと机を叩いて静まりせる。その衝撃で壊れないか心配だ。

『やるのは当然、俺と翔子だ』

実際誰が考へても不可能だと思つが、それがあえて作戦とするのだから裏があるのだろ？

『馬鹿の雄一が勝てるわけなああつ！？』

裏を読めない馬鹿は雄一からの洗礼としてカッターが頬を掠めた。

『次は耳だ』

「顔面じゃなくて良かつたね、明久」

耳なら当たつても生きていけるだろ？。

「まあ、明久の言つとおり確かに翔子は強い。まともにやつあえば勝ち目はないかもしない」

「だけど、それはロクラスとBクラスの時も同じ。まともにやつあつたら勝てなかつた」

だけど僕達は勝ち進んできている。

「今回だつて同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ちは揺るがない」

最初は皆勝てないと思つていた試召戦争を勝利に導いた雄一の言葉だ。それを否定する人間はこのクラスにはいないだろ？。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『おおお——つーー』

「さて、具体的なやり方だが——騎打ちではファイールドを限定するつもりだ」

「ファイールド？何の教科でやるつもじゅじや？」

「日本史だ」

霧島さんが日本史が不得手としているとも、雄一が得意としているとも聞いたことはない。

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粹な点数勝負とする」

小学生レベルで上限あり。この内容だと満点が前提になり、ミスをした方が負けるといった注意力が勝負の鍵となる。

「でも、同点だったり、きっと延長戦だよ？ そうなったら問題のレベルも上げられちゃうだろ？」、ブランクのある雄一には厳しくない？」

「確かに明久の言つ通りじゃ」

「おじおじ、あまり俺を舐めるなよ？」、「くらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などと言つものか」

「?? それなら、霧島さんの集中力を乱す方法でも知っているとか？」

「いいや。アイツなら集中なんてしていなくとも、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろ？」

先生の監視がある中での妨害程度で主席がミスするとは思えない。

「雄一、あまりもつたいたぶらないでそろそろタネ明かししてたほうがいい」

「ああ、すまない。つい前置きが長くなつた

「雄二がこのやり方を探つたのは、ある問題が出れば、霧島さんは確実に間違えるから、だよね？」

「ああ、ある問題——『大化の革新』が出ればアイツは必ず間違える」

「大化の革新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？そんな小学生レベルの問題で出でてくるかな？」

小学生レベルで出でこないつて自分で言つているんだから、ほかの問題だよ。勝手に結論を出すのは愚かしいぞ。

「もつと単純に、何年に起きた、とかじやないかな？」

「ビンゴだ博人。お前の言つ通り、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ」

こんな基礎的な問題を学年主席が間違える　　雄二がそのことを知つてゐることば、何か繋がりがあるはず。

「大化の革新が起きたのは、645年」

「こんな簡単な問題、明久ぐらいじゃないと間違えない」

「だが、翔子は間違える。そうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室とおやじぱつて寸法だ」

さつきから少し気になつていたけど――

「あの、坂本君」

「ん? なんだ姫路」

「霧島さんは、その 仲が良いんですか?」

わざわざから霧島さんのことを、アイツとか翔子とか呼んでいた。

「Jで解答を間違えると明久達に襲われるだろ?」

「ああ。アイツとは幼なじみだ」

「総員、狙ええつ!」

「なつ! ?なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える! ?」

「黙れ、男の敵! Aクラスの前にキサマを殺す!」

「待て、そんなこと言つなら博人はAクラスの佐藤と一緒に登下校しているぞ」

「うん。メープルとは幼なじみだからね」

「聞いたか! ?今愛称で呼んでいたぞ! 狙うなら『アイツ』が先だろ!」

愛称って言つほどじゃないと思つけどなあ。

佐藤楓 さとうかえで サトウカエデ メープルってだけだしね。

現在ほとんどの男連中が僕に向かって上履きを構えている。

「なに？やるつもり？」

スタンガンをバチバチ鳴らしながら笑顔で問いかける。

このクラスをまとめるには武力が一番だと思い、持ってきていた。

『』

よし、鎮圧成功。

何故か明久が島田さんと姫路さんに戦闘態勢を取られているがこの際無視していいだろ？

「とにかく、俺と翔子は幼なじみで、小さな頃に間違えて嘘を教えていたんだ」

幼なじみだから弱点を知っていたということか。

「アイツは一度覚えたことは忘れない。だから今、学年トップの座にいる」

でも今回はそれが仇となるってわけだ。

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机は——」

『システムデスクだ！』

第十一問～昔は「キブリ」は金持ちの象徴だった～（後書き）

感想、誤字報告などよろしくお願ひします。

第十一問「奇想天外のウェルウィッチア」（前書き）

サブタイトル

ウェルウィッチアは砂漠に生息する植物で、園芸名は『奇想天外』です。

現在もっとも最古のものは樹齢一千年をこえるといわれています。

第十一問「奇想天外のウェルウィッシュア」

第十一問

「一騎打ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争としてAクラス代表に一騎打ちを申し込む」

恒例の宣戦布告。今回は代表の雄一と、僕、明久、姫路さん、秀吉、ムツツリーニと首脳陣が勢ぞろいだ。

しかしこれでは明久がボロボロにならない。かなり残念だ。

「うーん、何が狙いなの？」

雄一と交渉のテーブルについているのは秀吉の姉、木下優子だ。

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

優子が訝しむのも当然だろう。下位クラスの僕達が一騎打ちで学年トップに挑むのはあまりに不自然だからだ。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることが出来るのはありがたい

けどね、だからと言つてわざわざリスクを犯す必要は無いかな

「賢明だな」

予想通りの返答。ここからが交渉の本番だ。

「ところで、Cクラスとの試召戦争はどうだった?」

「時間は取られたけど、それだけだつたよ?何の問題もなし」

「Bクラスとやつあつ氣はあるか?」

「Bクラスって。。。昨日来ていたあの

「ああ。アレが代表をやつっているクラスだ。幸い戦線布告はまだされていないようだが、さてさて。どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月間の準備期間を取らない限り試召戦争は出来ないはずだよね?」

試召戦争の決まりである、準備期間。

泥沼化を防ぐために、敗北したクラスは3ヶ月間試召戦争を申し込む権利を失うというものだ。

「知つているだろ?実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなつているつてことを。規約には何の問題もない Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

これは今まで設備を入れ替へなかつたからこそできる方法だ。

「 それで脅迫？」

「 もちろんやー。」

自信満々で答えてやれば、相手は何も言えないだろう。

「 何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」

代表同士の対決だったら雄一に勝ち田があるとは思えないだらう。

「え？ 本当？」

あまりにあっさり決まつたからか、明久が驚いて声をあげた。

「だつて、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん」

微妙なところで根元が役に立つたな。

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そ
うだね、お互い五人ずつ選んで、一騎打ち五回で三回勝つた方の勝
ち、つていうのなら受けてもいいよ」

「 う
」

やはり警戒されているようだ。

「なるほど。」ひかり姫路か博人が出てくる可能性を警戒してい

るんだな？」

「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶好調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないし、博人相手だとどうなるかわからないからね」

優子が僕のことを呼び捨てなのは、メーパルと優子がよく一緒にいるので必然的に交友があるからだ。

「安心してくれ、うちからは俺が出る」

「無理だよ。その言葉を鵜呑みに出来ないよ。これは競争じゃなくて戦争だからね」

「そうか。それなら、その条件を呑んでも良い

一騎打ち五回か。結構いけそうだね。

「ホント? 嬉しいな」

「けど、勝負する内容はこいつらで決めさせて貰う。そのくらいのハンドルはあつてもいいはずだ」

「え? うーん」

さすがに戦争の勝ち負けが係わってくる内容なだけに悩んでいるようだ。

「受けてもいい」

「うわっー。」

明久は、静かに現れた霧島さんに驚いたようだ。別に驚くほどのことでもないだろう。

「雄一の提案を受けてもいい」

「あれ？ 代表。いいの？」

「 その代わり、条件がある」

「 条件だと？」

「 うん」

霧島さんは雄一を見た後、姫路さんみて再び雄一を見た。

「 負けた方は何でも一つ言ひこと聞く」

後ろで馬鹿一人が何かやつていたが、雄一も気にしていないようで無視することにした。

「 じゃ、うしょ？ 勝負内容は五つの内三つそっちに決めさせてあげる。一つはうりで決めさせて？」

全部とはいかなかつたが、妥協案が得られた。

「 そのへりこなら問題ないよね？」

「 ああ。交渉成立だ」

「ゆ、雄二、博人！何を勝手に！まだ 姫路さんは了承していない
じゃないか！」

は？なんでそこで姫路さんが出でくるの？

「心配すんな。絶対に姫路に迷惑はかけない」

姫路さんに迷惑はかけないってことは誰かが犠牲になるのか？

「 勝負はいつ？」

「 そうだな。十時からでいいか？」

「 わかった」

「 交渉は成立したし、一日教室に戻ろう」

「 そうだね。皆さんも報告しなくちゃいけないからね」

第十一問「奇想天外のウェルウィッシュア」（後書き）

指摘等ございましたらお願ひします。

第十三問～ヤモリはファンテルワールス力を使って壁にはつこっている～

第十三問

「では、両名共準備は良いですか？」

今日はAクラスの担任で学年主任である高橋先生が立会人を務める。暇なのか秋音姉も教室内で観戦している。

「ああ

「問題ない」

一騎打ちの会場はAクラス。オンボロ教室じゃあ狭すぎるからね。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよ」

向こうのは秀吉の姉の優子。

対する「ひひは、

「ワシがやるわ」

その弟である秀吉だ。

姉弟だからこそ、弱点や集中力の乱し方を知っているはず。

「とにかく、秀吉」

「なんじや、姉上?」

「じクラスの小山をられて知つてゐる?」

「はて、誰じや?」

小山——じクラスの代表で秀吉が優子の演技をして豚呼ばわりした人物。

「じゃ——いや。その代わり、ちょっとじりちに来てくれる?」

「うふ? ワシを廊下に連れ出しちばするんじや姉上?」

おわりく抹殺するつもりだと想ひます。

「姉上、勝負は——どうしてワシの腕を掴む?」

「アンタ、じクラスで何してくれたのかしら? どうしてアタシがじクラスの人達を豚呼ばわりしたことになつてているのかなあ?」

「はつはつは。それはじやな、姉上の本性をワシなりに推測して——あ、姉上つ! ちがつ——その関節はそっちには曲がらない

「...」

ガラガラガラ

扉を開けて優子が戻つてくる。

「秀吉は急用できたから帰るつてやつ。代わりの人を出してくれる？」

「それじゃあ、僕がこいつかな」

ハンカチで返り血を拭う優子の前にである。

「急にこいつが代わっちゃったから、お詫びとして三対一でやらせて

て

「自分がいくつす」

「では私も」

名乗り出でるのはメープルと行平。

「ちょ、ちょっとーーくら相手が強敵だからって三対一は

」

「本氣でこなこと、負けるよ? それでは物理でお願いします

「それでは召喚をしてください」

「「「「試験還」」」

魔法陣が現れ、四体の召喚獣が出現する。

「一体目、おなじみの僕の召喚獣。」

「一体目、西洋風の鎧にランスを持った優子の召喚獣。」

三体目、左手に盾、右手に刀を持ち、和服姿のメープルの召喚獣。
四体目、スーツとシルクハットを装備し、手には銃のようなシルエットで、弓のようなバーツのついた——

「繚乱の対弩！？」

銀と金のフレームを持つたボウガン。なんであんなものを持っているんだ。

よく見たらメープルのある片手剣に似ている。

『Aクラス 木下優子
物理 321点

Aクラス 佐藤楓
物理 398点

Aクラス 七伏行平
物理 399点

Fクラス 七伏博人
物理 798点

「あれ？ メープルも行平も振り分け試験は調子悪かったの？」

今表示されてるのはAクラスの人は振り分け試験の点数のはずだ。

いつもは450点ぐらいのはずなんだけど。

「ハクのことが心配だつたつす」

確かにあの口は遅刻しちゃつたからなあ。

「ありがと。それじゃあ、始めよ」

400点いっていいというのはありがたい。400点オーバーでなければ腕輪の使用はできないからね。

三対一は分が悪いので、やつぱり作戦は――

「始め!」

先手必勝だ。

一瞬で優子の前まで移動し、クローキーをクロスさせて全力で攻撃する。

完全な不意打ちなので、ランスの腹でかろひじて防がれたが勢いよく吹っ飛ぶ。

行平とメープルの方を見ると行平は弾の装填を終え、メープルは盾を構えていた。

『Aクラス 木下優子
物理 102点』

ふむ、一撃では倒せなかつたか。

今度は盾を構えているメープルの前に行き、回り込もうとするが、行平により妨害される。

若干ぎこちない動きから、召喚獣に慣れていないことがわかる。

しかし楽観してはいられない。おそらく一分もしたら一人とも慣れてしまうだろ？

必然的に短期決戦に持ち込むしかない。

少し離れている行平に距離をつめ、クロードで斬りつける。

すんでのところでかわされ、結果は肩を切り裂くだけとなつた。

『Aクラス 七伏行平
物理 273点』

もう一撃加えようとするが、後ろからメープルが切りかかってくる。

それをブレーダで受け流し、メープルが武器を持っている右手をつかみ、行平との対角線上に動かす。

行平が放った銃弾がメープルに迫るが、盾で弾かれたので、蹴り飛ばして距離をとる。

復活した優子がランスで突進してくるが、横にステップして回避。

行平により銃弾が放たれたので、優子に追撃するのを諦めて弾をは

じぐ。

僕は今のところノーダメージで戦っている。操作の危うい相手に対して、素早い動きの僕は戦いにくいのだろう。

僕の武器は素早さ。防具がほとんど無いかわりに、高速戦闘が可能だ。

速さに乗せれば力が弱くとも重く、攻撃に当たらなければ防御は必要ない。それが僕の戦い方。

優子とメープルが同時に攻撃を仕掛けてくる。

ランスは近い間合いだと突くことができない。

よつて、優子を最初に仕留めることにした。

メープルの剣を左手で弾きながら、突いてきたランスを紙一重でかわし、その腹を踏み、地面に押さえつけてランスの動きを封じる。

無防備なその体に、ブレードを一閃。撃破する。

しかし、疎かになっていたメープルの盾による打撃と、行平の狙撃を受けてしまった。

『Aクラス 佐藤楓
物理 314点

Aクラス 七伏行平
物理 273点

『Fクラス 七伏博人
物理 403点』

一旦距離をとり、再び攻撃する。

しかし、メープルは刀で防御し、クローラーの刃と刃の間に刀を入れてきた。

速さを充実した戦い。しかしヒットアンドアウエイではなく、勢いを殺さず流れで攻撃する。無駄を省き、攻撃を繋げているので、動きを攻撃を受け止められると動きが止まってしまう。

今がまさにそれだ。

動きを止めた僕に、行平は容赦なく狙撃していく。

すぐに回避につつなが、2、3発当たる。

『Fクラス 七伏博人
物理 301点』

だいぶ慣れてきた二人は始めて比べだいぶ厄介だ。

まずはサポート重視の行平を倒すことを目標にする。

牽制で放たれる銃弾をかわし、肉薄する。

右手の攻撃は銃身で防がれるが、左手の攻撃は当たる。

しかし一人に集中することは、もう一人を疎かにすること。

メープルの刃が今にも当たるといつとこで、腕輪の能力を発動する。

「来い、ジャコウアゲハ」

メープルの剣は、突然現れた蝶『ジャコウアゲハ』に防がれた。

攻撃を防がれ、無防備などこりにフェイントをいれ、後ろに回り込んで蹴り飛ばす。

盾で防御姿勢をとっていたメープルは、なすすべもなく後ろをとられ、飛ばされる。

武器として昆虫を呼ぶ『昆虫召喚』。それが僕の腕輪の能力。ちなみに攻撃を受けても昆虫は死ない。

『Aクラス 佐藤楓

物理 163点

Aクラス 七伏行平
物理 42点

起き上がったメープルが、再び攻撃してくるが、ジャコウアゲハで防ぐ。

その間に行平にトドメをさすため肉薄する。

だがその瞬間行平は銃身を持ち、ボウガンを振り回してきた。

それを左手で受け流し、懷に潜り込む。クロ一を突き刺すことに成功するが、最後にカウンターとして蹴りを入れられた。

『Fクラス 七伏博人
物理 231点』

蹴りによって少し宙に浮いたところにジャコウアゲハを振り払ったメープルが上から刀を振り下ろしてくる。

かろうじて防御に成功するが、無理な体勢な上にそのまま地面に叩きつけられてしまう。

「来い、キイロスズメバチ」

もう一度腕輪をつかい、キイロスズメバチで追撃を防ぐ。

『Fクラス 七伏博人
物理 146点』

体制を立て直し、キイロスズメバチと共に攻撃をする。

メープルは盾で攻撃を防ぎ続けるが、腕をキイロスズメバチに噛まれ動きが阻害される。

止まつたところに勢いをつけ、全力で攻撃を叩きつける。

『Aクラス 佐藤楓
物理 0点』

これでFクラスの一勝目が決まった。

第十三問～ヤモリはファンタルワールスカを使って壁にはつてこむ（後書き）

感想、誤字脱字報告等よろしくお願いします。

第十四問～「オリウオは血液が透明～

第十四問

Aクラスのトップクラスに対して三対一での勝利。

このことでFクラスの志氣は最高潮に達していた。

「流石だな、博人」

「お褒めにあずがり光栄です、代表」

待機場所で迎えてくれた雄一とハイタッチする。

「よくやった　さっすが博君！」

観戦していた秋音姉が頭をなでてくれる。

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

Aクラスからは佐藤美穂さん。

「よし。頼んだぞ、明久」

「えー？僕ー？」

Fクラスからは明久が出るよつだ。

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

自信たっぷりの雄一の言葉。

やつぱり明久が負けることを信じているんだろうな。

とこりかこまだに頭を撫でられているのは何故だろつ。

「それそろやめて？」

秋音姉は中学生と言われても納得できる容姿と身長だ。それに頭を撫でられているところのせどりも良くない。

「この撫で心地はやめられない、止まらない」

むづ、撫でられる少し気持ちいいから困る。

「あれ、氣づいた？」名答。今までの僕は全然本気なんて出しあやあいなー

おや、明久がまだくだらない戯言を言っているよつだ。

処刑準備しておくか。

「それじゃ、あなたは

「..」

なんでこんな嘘を信じるんだろ？

「そりゃ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕一

大きく息を吸つてこの場にいる皆に告げてきた。

「――左利きなんだ」

『Aクラス
物理
佐藤美穂
389点

1

物理
Fクラス
吉井明久
62点

一瞬で勝負が終わつた。

「人がせつかく上げた志氣をどうしてくれるのでかな？」

「か、
関節が！ 関節があああああ！」

ついでに頸動脈を絞めて意識を刈り取つておく。

「よし。勝負はここからだ」

— そ う だ ね。」 こ れ か ら が 本 番 だ よ。」

一では、三人目の方どうぞ」

「スック」

ムツツリーーが立ち上がる。

科目選択権のある今回は圧倒的に「あらが有利だ。

「じゃ、僕が行こうかな

対してAクラスからは工藤愛子さん。ショートカットの髪のボイッシュな女子だ。

「一年の終わりに転校してきた工藤 愛子です。よろしくね

「科目はなにこしますか?」

「保健体育」

ムツツリーーの唯一にして最強の武器が選択される。

「土屋君だっけ? 随分と保健体育が得意みたいだね?」

転校生って言っていたから、ムツツリーーの力を理解していないのだろうか?「

「でもボクだってかなり得意なんだよ? キミとは違つて、実技で、ね?」

実技? それってやつぱり怪我の治療とか?

「そつちのキミ、吉井君だっけ? 勉強苦手そつだし、保健体育でよかつたらボクが教えてあげようか? もちろん実技で

「フツ。望むところ

」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！永遠に必要ありませ ん！」

「

「島田に姫路。明久が死ぬほど哀しそうな顔しているんだが」

「それそろ召喚を開始してください」

「はーい。試獣召喚つと

「・・・・・・・・・・試獣召喚」

二人に似た召喚獣がそれぞれ武器を持って現れる。ムツツリー二は小太刀の二刀流。そして工藤さんは、

「なんだあの巨大な斧はー？」

見るからに破壊力満点の巨大な斧。おまけに腕輪を装備している。

『Aクラス 工藤愛子
保健体育 446点

V S

Fクラス 土屋康太
保健体育 572点』

しかし点数ではムツツリー二のが上、腕輪も両方が付けているので、点数で争っている上藤さんの方が不利だな。

「…」いつなつたら（ペラシ）

「…！」（ブシャアアアア）

何だ！？何が起きたんだ？いきなりムツツリー二から鼻血が間欠泉のように吹き出したよ！？

ムツツリー二が鼻血で倒れている間に、上藤さんはムツツリー二の召喚獣を倒した。

この勝負は一体何だったのだろ？

第十五問～春の七草のホトケノザの別名は「ホーラン」～（前書き）

サブタイトル

七草のホトケノザとは別にホトケノザという植物があります。
七草の方はホトケではなくオニです。

第十五問～春の七草のホトケノザの出現～

第十五問

「これで一体一ですね。次の方は？」

「あ、は、はい。私です」

「ううから出るのは、当然姫路さんだ。

今Aクラスと真っ向から戦えるのは彼女のみだ。

「それなら僕が相手しよう」

Aクラスから出てきたのは学年次席の久保利光君。

「やはり来たか、学年次席」

姫路さんに次ぐ学年トップクラスの実力の持ち主である。

明久のことが好きな同性愛者といつ話も聞くが、気にしないでおこう。

「ソレが一番の心配だ」

雄一が心配するのは、姫路さんと久保君の実力がほぼ互角だからだ。

互角の戦いでは、負ける可能性も大といつことだ。

「科目はどうしますか？」

雄一が科目選択をするので、今回こちらは科目選択をできない。

「総合科目でお願いします」

総合科目。科目を選べるなら、自分の得意なものを選ぶのは定石だが、久保君はここで実力をハッキリさせたいと思っているのだろうか。

「それでは

「試験召喚つ！」

『Aクラス 久保利光
総合科目 3997点

VS

『Fクラス 姫路瑞希
総合科目 4409点』

決着は一瞬でついた。

『マ、マジか！？』

『いつのもにこんな実力を！？』

『「Jの点数、霧島翔子に匹敵するぞ！』

至る所から声があがる。

点数差が400点オーバーなのだから無理もない。

「ぐつ！姫路さん、どうやってそんなに強くなつたんだ？」

「 私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

まあ、人の（不幸）の為に行動するのはよく見かけるね。

「これで二体一です」

高橋先生にも若干変化が見られた。FクラスがAクラスと渡り合っていることに戸惑っているのだろうか？

「最後の一人、どうぞ」

「 はい」

Aクラスからは代表の霧島翔子さん。

対するJからは当然、

「俺の出番だな」

Fクラス代表、坂本雄一だ。ここまでは作戦通り。

「教科はどうしますか?」

霧島さんが負けるわけないと思つてゐるのか、Aクラスの皆は特に騒いでいない。

深く考えれば危機的状況だと思つねど。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方は百点満点の上限ありだ!」

ざわ !

雄一の宣言で、Aクラスにざわめきが広がる。

『上限ありだつて?』

『しかも小学生レベル、万点確実じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ』

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しのまま待つていてください」

ノートパソコンを閉じて、高橋女史は教室を出ていく。

その背中を見送り、雄一に近づく。

「最終決戦。頑張つて」

「ああ、勝つてみせるぞ。」

手を挙げて思いっきりハイタッチする。

「雄一、後は任せたよ」

「ああ、任せられた」

明久が差し出した手を、雄一はグッと握る。

次にムツツリーーーが歩み寄り、ピースサインを雄一に向ける。

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「フッ（フッ）」

口の端を軽く上げ、ゆっくりと戻っていく。

「坂本君、のこと、教えてくれてありがとうございました」

「ああ、明久の事か。気にするな、後は頑張れよ」

「はいっ！」

高橋先生が戻つて来て、雄一と霧島さんに声をかける。

そして、決戦の会場へと向かつた。

僕達はモニターで視聴覚室の様子を見る。

『では、最後の勝負、日本史テストを行います。制限時間は50分、満点は100点です』

画面の向こうで日本史担当の先生が問題用紙を一人の机においた。

『不正行為等は即失格になります。いいですね?』

『　　はい』

『わかつてゐる』

『では、初めてください』

二人により、問題用紙が表にされる。

そして、ディスプレイに問題が表示される。

平城京、平安京、鎌倉幕府―――大化の革新

『あ　　!』

「よ、吉井君つ

「うん」

「これで、私たちつ！」

「うん！」これで、僕らの卓袱台が

『システム』テスクに…』

Fクラス皆が声を揃える。

「最下層に位置した僕たちの、歴史的な勝利だ…！」

『うおおおおおおおおおおお…！…』

Fクラスの面々が、歓喜の雄たけびを上げた。

しかし、ついさつも重要なことに気づいてしまった。僕は苦笑いしかできない。

(あれだけ自信満々だったから忘れてたけど、雄一が百点取れなかつたら意味ないよね？)

「あれ？どうしたの博人？せっかくの勝利なんだから、もつと喜ぼうよ」

少し変な僕の様子に気づいたのか、明久が声をかけてくる。

「水を差すよつて悪いけどさ、雄一はこのテスト百点とれるんかね？」

「ははは、まさかそんな――――

<日本史勝負 限定テスト 100点満点>

『Aクラス 霧島翔子 97点』

VS

『Fクラス 坂本雄一 53点』

Fクラスの卓袱台が、みかん箱になつた。

第十五問～春の七草のホトケノチの出現地～（後書き）

誤字脱字報告、感想等ありましたらお願ひします。

第十六問～哺乳類は全て絶対音感を持つてゐるか～（前書き）

サブタイトル

耳の構造的に音の高さを聞き分けられるのですが、ヒトは言葉を使つ際に、違う高さの音でも同じ言葉としてとらえられるように絶対音感を捨てたのです。

第十六問～哺乳類は全て絶対音感を持つているらしい～

第十六問

「三対一で、Aクラスの勝利です」

視聴覚室になだれ込んだFクラスの面々にに対する高橋先生の締めの言葉。

まさかこんなことが予想通りになってしまったとは。

「雄一、私の勝ち」

床に膝をつく雄一に霧島さんが歩み寄る。

「殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやるー歯を食い縛れ！」

雄一に制裁を加えようとしている明久にあるものを渡す。

「はい、ナイフ」

別に殺傷用ではなく、こぞとこの時の十徳ナイフだ。

「吉井君、落ちついてくださいー」

ナイフを受け取らうとした明久に姫路さんが後ろから抱きついた。

「だいたい、53点ってなんだよー。点なら各前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だとーーー」

「いかにも俺の全力だ

「IJの阿呆があーつー。」

「アキ、落ち着きなさいー。アンタだったら、30点も取れないでしょひがー！」

「それについては否認しないー！」

「もしくは『否認できな』、だね

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっー。」

「くつーと何故止めるんだ姫路さんに美波ー。IJの馬鹿には喉笛を斬り裂くと言つ体罰が必要なのにーーー。」

「それって体罰じゃなく処刑ですー。」

「明久、ナイフは使い終わったら返してね。明久も負けたんだから同罪だし」

「ジンマイイ雄ーー。気にするなー。」

切り替え速いな。

「 でも、危なかつた。雄一が所詮小学校の問題だと油断していなければ負けていた」

「 言い訳はしねえ」

つまり図星だと。

「 ところで、約束」

「 !（カチャカチャカチャ！）」

霧島さんの言葉で、突然ムツツリーーと明久が撮影準備を始めた。

そういうば僕もメープルと約束してたな。どんな要求なのだ？

「 それじゃ——」

霧島さんは小さく息を吸つて、

「 雄一、私と付き合つて」

言い放つた。

「 やつぱりな。お前、まだ諦めてなかつたのか」

「 私は諦めない。ずっと、雄一のことが好き」

「 その話は何度も断つただろ？他の男と付き合つ氣はないのか？」

「 私には雄一しかいない。他の人なんて、興味ない」

「拒否権は？」

「 ない。約束だから。今からアートに行く」

「ぐあつー放せーやつぱー」の約束はなかつたこと――

ぐいっ つかつかつか

霧島さんは雄一の首根っこを掴んで教室を出て行つた。

「

「

「

「

しばしの沈黙が教室に訪れた。

今の出来事に言葉が出ないようだ。

「さて、Fクラスの諸君、お遊びの時間は終わりだ

それを破つたのは、とある教師の声。

「あれ？ 西村先生。僕らに何か用ですか？」

「 ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思つてな」

『我が』 Fクラス、という」とは——

「西村先生。もしかして担任が福原先生（現担任）から西村先生に
変わるんですか？」

「そのとおりだ。良かつたな、お前ら。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『なにい！？』

クラスの男子生徒から悲鳴があがる。

「いいか。確かにお前らはよくやつた。Fクラスがここまで来ると
は正直思わなかつた。でもな、いくら『学力が全てではない』と言つても、人生を渡つていく上では強力な武器の一つなんだ。全てじゃないからと言つて、ないがしろにしていいものじゃない」

負けた僕達には言い返す言葉もない。

「吉井。お前と坂本は特に念入りに監視してやる。何せ開校以来初の『観察処分者』とA級戦犯だからな」

「そりはいきませんよ！ なんとしても監視の目をかいぐつて、
今まで通りの楽しい学園生活を過ごしてみせます！」

「お前には、悔い改めるといつ発想はないのか」

明久はああ言つてゐるが、実際は次の試合戦争に向けて勉強する気だろう。

「どうあえず明日から授業とは別に補習の時間を一時間設けてやる
う

放課後こそ学園生活を最も満喫できる時間なのに。

それに、もし休日まで補習を入れられたら、昆虫採集の時間が減る
じゃないか！

こうして、僕らの最初の試合戦争は憂鬱を残して終わった。

第十六問～哺乳類は全て絶対音感を持つてゐるか～（後書き）

感想、誤字脱字報告等よろしくお願いします。

第十七問～地球の自転が少しすつ遲くなっている～

第十七問

戦争が終わった田の、七伏家。

リビングにて、僕、行平、メープルが集まっていた。

「いやあ、楽しかったねえ試召戦争」

「うん。こりこりあつたけど、本当に楽しかったよ」

「ナリですね。本気で戦つところのは自分分の良いものですね」

あ、そういうばーーー

「メープル、あの約束は？」

「私の言ひとを聞いてくれるんだよね？」

「賭は僕の負けだからね」

「それじゃあ、今から私が言ひ」とこ、逃げないで、正直に思えて。
それがお願い」

それぐらにならおやすごい用だと、首を縊ふ。

「あのね 私はハクのことが、小さい頃から好きだったの。
だから、付き合ってほしいの」

え？

好き？あの可愛くて綺麗で明るくて優しくて勉強もできる通称メー
プルこと佐藤楓が僕のこと？

……ハツ！少しトンでしまった。

これに逃げずに正直に応える。それが僕のとる行動。

少し息を吸つて、答える。

「僕も、小さい頃から、メープルのことが好きだった——と思つ

『『思ひ』』？」

「自分のことは良くわからないからね。けど、僕はメープルのこと
が好きだといえる

「やう。それじゃ、その思いを確信にしてあげる」

そういうて、僕の前に来て唇を合わせてきた。

「それじゃあ、また明日。ユキ、それと私の恋人さん

」

メープルはそういう残して、去つていった。

ちなみにユキとは行平のことだ。

その後5分間僕は顔を真っ赤にしたまま、動けなかつた。

ちなみにその日は危なっかしくて任せられないということで台所から追い出された。

第十七問～地球の自転は少しすつ遅くなつてゐる～（後書き）

感想等よろしくお願ひします。

次回はキャラ紹介です。

設定

『七伏博人』（ななふしはくと）

身長161cm 幼い顔立ちなので、小さい印象を受ける髪は短めの黒髪

得意科目：理数系

趣味：昆虫採集、科学系の本の読書

特技：運動全般（人並み以上）、記憶、ポーカー

好きな物（事）：昆虫、甘いもの、疑う事、科学、難しい事

嫌いな物（事）：苦い物、信じる事

召喚獣：クロ一、足の鉤爪、肘のブレードが武器。

防具は脛のアーマーのみ。

腕輪は『昆虫召喚』で、武器として昆虫を召喚し、自由に操る。

その他：周りを気にせず我が道を行く。『信じるよりも疑う方が確実に真実にたどり着ける』という。『昆虫少年』や『速攻』の二つ名がある。折りたみ式の捕虫網を常時装備。

『佐藤楓』（さとうかえで）通称メープル

髪形：灰色がかつたサイドボニー

身長：159cm

得意科目：国語、英語

趣味：読書、折り紙

特技：速読、細かい作業

好きな物（事）：文学、よく考える事、博人

嫌いな物（事）：付和雷同

召喚獣：着物（防御力高）、盾、刀

その他：瑞希ほどではないが、スタイルが良く、人気がある。『
つす』という口調はキャラ作り。結構な策士。博人との仲は公表を
避けている。理由は『デレた私はハクの物。衆愚には晒さない』と
のこと。しかしついつい見せつけるように行動してしまつ。

『七伏行平』（ななふしゆきひら）

身長：178cm 博人とは反対で大人びた印象を受ける。

肩にかかるほどで少し長めの黒髪

得意科目：社会系

趣味：散歩、旅行

特技：射撃、ブラックジャック

好きな物（事）：歴史や文化、面白い物

嫌いな物（事）：平穏すぎること

召喚獣：スーツとシルクハットを装備し、ライトボウガンが武器。
その他：博人の双子の兄。丁寧な口調に反して、弄るのが好きな
の人。面倒見がよく、好かれやすい。

『杉本秋音』（すぎもとあきね）

身長141cm 中学生のような容姿 明るい髪の色で、ストレート

趣味：物体の運動観察

特技：球技、暗算

好きな物（事）：科学、のんびりする事

嫌いな物（事）：面倒事

召喚獣：白衣にツインチエーンソー

その他：一年Fクラスの副担任。小さい身長に対してスタイルは良

い。のほほんとした霧園^{ムクニ}。

短編 僕とメープルと殲滅戦（前書き）

僕と暴徒とラブレターの関連話です。

短編 僕とメープルと殲滅戦

短編「僕とメープルと殲滅戦」

明久がラブレターを貰うといつ騒動の翌日、僕はいつも通り三人で登校していた。

「ところで一人の恋仲は公表するんですか？」

「する必要はないと思つけど」

「それビックリか、学校ではいつも通り幼なじみの関係よ

『『デレた私はハクだけの物だから』』というのがメープルの理由。

「おや、残念。学校でもいじれるかと思ったのですが」

そんなとき、僕達の話を聞ける距離に誰かの足音が聞こえた。

「あれ、雄一。おはよう」

その人物は、Fクラス代表坂本雄一だった。

「雄一君じゃないですか。おはよう」

メープルは他の人が来たので、『『つす』』という口調になっていた。

その後雄一も交えて雑談しながら学校へと向かった。

「工藤」「はい」「久保」「はい」

毎朝の恒例行事の出席確認。

「近藤」「はい」「斎藤」「はい」

いつも騒がしい教室にのどかなひとときが訪れている。

今日は平穏に過ぎせ——

「坂本」…………博人が佐藤楓と付き合い始めたようだ

『殺せええつ……』

そうもなかつた。

「やつぱり聞いていたんだね、雄一」

あのときもつと速く雄一の気配に気づくべきだった。

『以前からイチャイチャしてやがつたが、付き合い始めるなんて

『これはもつ殺すしかないな』

『弁明の余地はないな』

「手塚」「七伏ロス」「藤堂」「七伏ロス」

「返事は『はい』だ！」

西村先生が殺意をこめた返事をした奴らを注意する。

「ちょっと待つて先生！ 昨日はそんなこと言わなかつたよね！」

昨日明久はまったく同じ展開になつたが、そこは生活態度の差だろう。

出席確認が終わり、西村先生が出席簿を閉じる。

「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉学に励むよう！」

教室を出て行く西村先生に、後ろからついていく。

西村先生のいる状態では手が出せないのか、Fクラスの連中も攻撃してこなかつた。

そのまま職員室前まで行き、次の授業の先生と一緒に教室に入った。

そんなことを繰り返してなんとか昼休みまで逃げ切つた。

時間はたっぷりあるので、殲滅を開始する。

「見つけたぞ！ 誰か応援にぶへつ！」

早速一人目が来てくれたので、注意がそれた隙に足を払い転ばせる。

手足を縛つてから西村先生に連絡し、補習室に送る。

「いたぞ！B部隊に連絡して挟み撃ちにするぞー。」

昨日と同じく部隊編成までしている。

少し厄介なので、ダッシュして逃げる。

僕を追うためにバラバラになつた奴らを一人ずつ縄で縛り、補習室に送つてやる。

これで雑魚は殲滅完了。

そんな時、いやな気配を感じて横に動くとしきまで立つていた場所にペンが刺さつっていた。

「…………裏切り者には、死を」

文房具を手に構えてこちらを狙つているのは、ムツツリー。動きが素早いので、敵の中では一番厄介だ。

「いくよ、ムツツリー！」

「…………次はカッターを投げる」

脅迫は気にせずつつこんでいくと、宣言通りカッターを投げてくるが、刃が出でていないので手で弾く。ムツツリーが次の行動に移る前に足払いをして、転ばせてから縛りあげる。

昼食をゆっくり食べるため、早めに殲滅することにして、敵を探していると木刀を持つ須川がいた。

「ここまでだ、七伏！」

「うつさい速くくたばれ」

腰から取り出した捕虫網の柄で須川の木刀を弾き飛ばし、やっぱり足払いを転ばせてから縛る。

「ぐふう！」

丁度良くなが現れたので、何か言つ前に潰した。

「これで残るは後一人、坂本雄二だ。」

「これは一番簡単に始末できるので、わざと最後に回した。」

携帯電話を取り出し、ある人物にかける。

「あ、もしもし。霧島さん？ 雄一が霧島さんと昼食を食べたいんだつて。恥ずかしがり屋だから霧島さんから迎えにいってあげて」

はい終了。

「ハク！ 大丈夫だったすか？」

「いやはや、面倒なことになりましたね」

丁度メープルたちと合流できたので、昼食を食べるため、Aクラ

スに向かう。

メープルとの関係がばれたのは予想外だつたけど、これはこれでいいんじゃないかな。

第十八問～**ハリコー**は水を求めて雲のあむじにひだりタチシハリコー（前書）

ハリコーはオーストラリアに生息する飛べない鳥です

第十八問～HIIKO～は水を求めて雲のあるとひびタダッシュ～

第十八問

とある日の七伏家。

居候である杉本秋音が、僕、行平、メープルをリビングに集めた。

「皆さんには重大な話があります」

「一体何ですか？」

行平が聞くと、秋音姉が自信満々に答えた。

「いやあ、実は私ね、試験召喚システムの腕輪の開発を手伝つてたのね。そこで、清涼祭の『召喚大会』の賞品として学園長の作った『白金の腕輪』とは別に『黄金のこがね』の腕輪つていうのを作つたんだけど、欠陥があつてね」

「それで、欠陥はどんなものなの？」

暴走が起きたりするのだろうか？

「500点以下の点数で使うと95%の点数を失っちゃうんだよ」

「酷すぎるー。」

たとえ400点とっても、使った瞬間2点になるとか不良品すぎるだ。

「というわけで、君たちには私のミスをもみ消して欲しいのだ。」

「今やううと大人の事情を言つましたね」

失敗の隠蔽とかなんてことを頼むんだこの人は。

「君たちなら、得意科目はよしーで500点突破してるものね」

「その依頼の私達メリットは?」

そつメープルが聞くと、フツフツと笑つてから、

「優勝者には『如月ハイラング』のペアチケット一枚が進呈されちゃいます!」

「絶対やつてみせる」

メープルは即答していた。

「え? びついたのそんな急に?」

「博人、つまりこうじつ」とです。メープルは博人と如月ハイラングでデートがしたい、と

「ほえ? そんな

「

「まつたく、博人は恋愛事の話に弱すぎです。反応が面白すぎて弄りたくなつてしまふがありません」

最近は恋愛事の話になると赤面したり言葉がでなくなることで、頻繁に行平にいじられている。

行平は丁寧な口調とは裏腹に、弄るのが好きならなのだ。

「ちなみに、企業側が訪れたカップルを無理やり結婚させようとしてるつて噂もあるよ」

「これはもう受けるしかないわ。この依頼」

結婚 かあ。

「さて、博人が処理落ちしかけていますが、召喚大会はペア出場ですよね? どう組み合わせるんですか?」

「私としては、近接型の博君と、遠距離型の行君のペアが良いと思うな」

「それじゃあ私は他の人を誘つてみる」

「どうやら、方針は決定したようだ。」

「んじや、これで解散!」

こつして召喚大会の出場が決定した。

その後いろいろ面倒事を押しつけられたけど。

第十九問～チョウとガに明確な差はない～（前書き）

サブタイトル

日本ではあまり知られていませんが、実際チョウの仲間にシャクガモドキ上科というガと考えられていたグループも入ります。

第十九問～チョウとガに明確な差はない～

第十九話

新学年になつて最初の行事である『清涼祭』。

そして今は、その準備の為のLHRの時間。

どの教室も活氣づいているのだが。

『吉井！ こいつ！』

『勝負だ、須川君！』

『お前の球なんか、場外まで飛ばしてやるー。』

我がFクラスのほとんどの生徒は野球をしていた。

さつき西村先生が連れ戻しに行つたからじきに戻つてくるだひつ。

ちなみに僕は秋音姉に任された清涼祭のパンフレットのレイアウトを考えている。

「さて、そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃ

いけない時期が来たんだが――」

野球を中断して戻つて来た雄一はだるそつびざの上に座つて、いる僕達を見下ろしながら宣言した。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

ふむ、要約すると『俺はやる気ないから、誰かやつとこでくんね?』ってことだね。

「んじゃ、学園祭実行委員は島田といひ」といいか?

「え? ウチがやるの? うへん 、ウチは四喰大会に出るから、ちょっと困るかな」

「雄一。実行委員なら、美波より姫路さんとか博人の方が適任なんじやないの?」

「え? 私ですか?」

「姫路には無料だな。多分全員の意見を丁寧に聞いてこひつちにタイムアップになる」

少数派の意見を切り捨てられない姫路さんでは時間がかかりすぎる。雄一はその辺のことを雄考えて島田さんに任せられたのだろう。

「僕は杉本先生からの仕事が入つていて忙しい」

その存在を示すためトントンヒミカン箱（超補強）の上の紙を叩く。

「それにね、アキ。瑞希も召喚大会に出るのよ」

「え？ そうなの？」

「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

「あ、ちなみに僕も」

「学校の宣伝みたいな行事なのに。三人とも物好きだなあ」

召喚大会は、ぶっちゃけると試験召喚システムのPR企画だ。

「ウチは瑞希に誘われてなんだけどね。瑞希つてば、お父さんを見返したいって言ってきかないんだから」

「お父さんを見返す？」

「うん。家で色々言われたんだって。『Fクラスの』ことをバカにされたんですー許せませんー』って怒ってるの」

「あらら。姫路さんが怒るなんて珍しいね」

「だって、皆のことを何もわかつていなければ、Fクラスっていう理由だけで バカにするんですよ? 許せませんつ」

「

Fクラスをよく知っているから」と言える事がある。

このクラスはバカばっかりだ。

「僕は賞品の腕輪目当てかな？」

「あー、4人とも、こっちの話を続けていいか?」

「あ、『ゴメン雄一』。美波が実行委員になる話だつたよね?」

「だからウチは召喚大会に出るって言つてゐるのに

「なら、サポートとして副実行委員を選出しよう。それなら良いだろ?」

チラッと雄一は明久の方を見た。

なるほど。明久を生け贋にするつもりか。

「ん~。そうね、その副実行委員次第でやってもいいけど

「

「そりが。では、まず皆に副実行委員の候補を挙げてもらう。その中から島田が一人を選んで決戦投票したらいいだろ?」

皆もいいな、とクラスメイトに告げると、ちらほらと推薦の声が聞こえてきた。

『吉井が適任だと思つ』

『やはり坂本がやるべきじゃないか?』

『いや、七伏のほうがいいだろ？』

『姫路さんと結婚したい』

『いじは須川にせつてもうつた方が』

一回変なの混じってたな。

「ワシは明久が適任じゃと思つがの」

秀吉が明久に一票投じてくれる。

「秀吉。僕もそういう面倒な役は、できればパスしたいな～なんて」

『いじでたたみかけて納得させてしまおう。

「それは他の皆も同意見だよ。それだったら適任の人によつてもらつたほうが良いと思うよね？」

「むう……。それはそうだけど……」

島田さんのサポートなんだから、明久以外の適任がいるはずはないわ。

「よし。じゃあ島田。今拳がつた連中から一人を選んでくれ

「そつね～。それじゃ……」

ある程度候補の名前が挙がったといじりで、島田さんはボロボロの黒板に候補者の名前を書き連ねた。

『候補？……吉井』

予想通り明久だ。

『候補？……明久』

こつちも明久だ。

それにしても斬新な候補の挙げ方だ。

「さて、この二人のどちらが良いか、選んでくれ」

「ねえ雄一。明らかに美波の候補の挙げ方はおかしいと思わない？」

そこは気にしても無駄なんだよ、明久。

『どうする？どうが良いと思つ？』

『そりだなあ……。どちらもクズには変わりないんだが……』

「いらっしゃー真面目に悩んでいるフリをするんじやない！あと、平然とクラスメイトをクズ呼ばわりするなんて、君らは人間のクズだ！」

それを言つたら明久もクズになると思うんだけど。

まあ結局明久が副実行委員になり、壇上にあがつた。

「んじや、あとは任せたぞ。ふあ……」

入れ替わりに席に戻る雄一だが、欠伸をこらえる気もなくダルいオーラを纏っていた。

「ウチは議事進行をやるから、アキは板書をお願いね」

「ん。了解」

第一十問「イルカが可愛い？集団で雌裏つて血が出るまで攻撃する生物だぞ…」

第一十問

「それじゃ、ちやつちやと決めるわよ。クラスの出し物でやりたい
ものがあれば挙手してもらえる?」

島田さんが言つと、何人かが手を挙げた。

少し位やる氣のある人はいよいよつだ。

「はい、土屋」

「…………（スクツ）」

名前を呼ばれてムツツリー一が立ちあがる。

「…………写真館」

「…………土屋の言ひ写真館つて、かなり危険な予感がするんだけど」

僕も同意見だ。裏で写真の売買が行われるのは必至だらつ。

「アキ、一応意見だから黒板に書いてもらえる」

「あいよー」

【候補？写真館『秘密の覗き部屋』】

黒板に書かれた候補には、謎な名前がつけられていた。

「次。はい、横溝」

「メイド喫茶——と言いたいけど、流石に使い古されていると思うので、ここには斬新にウェディング喫茶を提案します」

「ウェディング喫茶？それってどういうの？」

「別に普通の喫茶店だけど、ウェイトレスがウェディングドレスを着ているんだ」

ウェイトレスつていつても、このクラスに女子は一人。秀吉を合わせても三人だけだ。ウェディングドレスを主役に持つてくるのは厳しいだろう。

でも、ウェディングドレスか

————ハツ！結構トリップしてたみたいだ。

慌てて黒板を見てみると、候補？が書かれていた。

【候補？ウェディング喫茶『人生の墓場』】

集客力の低そうな名前だな。いや？興味本位で来る客もいるか。

「さて、他に意見は——はい、須川」

「俺は中華喫茶を提案する」

そう言いながら須川は立ち上がった。

「中華喫茶？ チャイナドレスでも着せよ！」

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ。そうやってイロモノ的な格好をして稼ごうってわけじゃない。そもそも、食の起源は中国にあるという言葉があることからもわかるように、ひと『食べる』という文化に対しても中華ほど奥の深いジャンルはない。近年、ヨーロピアン文化による中華料理の淘汰が世間では見られるが、本来食というものは——」

確かに中華料理は地域差が大きいって話だから、奥の深いジャンルとこのも頷ける。それにしても随分こだわりがあるんだな。

「アキ。それじゃ、須川の意見も黒板に書いてくれる？」

「あ、うん」

明久は返事したのは良いが、話を全く聞いていなかったので、何を書いたら良いのかわからぬようだ。

「どうこうの？ 早く書いてよ」

「りょ、了解」

【候補？ 中華喫茶『ヨーロピアン』】

頭に残つた言葉を適当に書いたよつだ。

明久がちょうど書き終えた時に、西村先生と秋音姉が教室に入ってきた。

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

「今のところ、候補は黒板に書いてある三つです。

黒板に書いてあるのは——

【候補？『写真館』『秘密の覗き部屋』】

【候補？『中華喫茶』『ヨーロピアン』】

【候補？『エディング喫茶』『人生の墓場』】

「……補習の時間を倍にした方が良いかもしけんな」

当然の反応といえるが、流石に倍はきつい。

「あー、西村先生。』の中は無視してください」

「それなら妥当なところだな

ふう、回避成功だ。

「しかし、吉井にこんな大役を任せていいいのか？稼ぎを出せば設備を向上させられるぞ？」

溜息混じりの鉄人の声を聞いて、クラスの皆の目が光った。

『そつかー！その手があつたか！』

『なにも試合戦争だけが設備向上のチャンスじゃないよなー。』

『いい加減この設備にも我慢の限界だ！』

一気に教室内が活気づく。ランクが下がる前の設備でさえ不満があつたんだ。この設備に不満がないわけがない。

僕も最近はこの教室から避難するためにAクラスに入り浸っている。

「み、皆さとつ！頑張りましょっ！」

姫路さんが手を胸の前で握り、立ち上がつていた。

……………

『出し物はどうある？利潤の多い喫茶店が良いんじやないか？』

『いや、初期投資の少ない写真館の方が

『けど、それだと運営委員会の見回りで営業停止処分を受ける可能性もあるだ

『中華喫茶ならはずれはないだろ？』

『それだと田舎しさに欠けるな。汚いせいであまり人が来ない旧校舎だと、その特徴のなさは致命的じゃないか？』

『ウエディング喫茶はどうだ？』

『初期投資が大きすぎる。たった一田間の清涼祭じゃ儲けは出ないんじやないか』

『リスクが高いから』セツターンも大きいはずだ』

皆がやる気になつたのは良いが、あまりにもまとまつが無さすぎる。

「はいはいーちょっと静かにしてー。」

島田さんが手を叩いて注意するが、あまり効果はなく、それぞれ好き勝手言つている。

『お化け屋敷とかの方が受けないと困つ』

『簡単なカジノを作り』

『焼きとりせんじを売り』

うーん。これだけまとまつのにクラスをまとめるのは難しいだろうなあ。

それにそろそろ五月蠅くなつてきた。

「IJの中から一つだけ選んで手を挙げてー。」

業を煮やした島田さんが決を採りにかかる。

結果は僅差で中華喫茶の勝利だった。

「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！全員、協力するよ！」

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けろよ」

「…………（スクツ）」

と、須川とムツツリー二が立ち上がった。

「ムツツリー二、料理なんてできるの？」

「…………紳士の嗜み」

中華料理が紳士のたしなみなんてのは聞いたことがない。

おそらくチャイナドレスを見るため中華料理店に通っていたら見様見真似でできるようになったのだう。

まずは厨房班とホール班に分かれてもうからね。厨房班は須川と土屋のところ、ホール班はアキのところに集まつて！

いつの間にか明久はホール班のトップにされたようだ。

「それじゃ、私はホール班に―――」

「ダメだ姫路さん！君はホール班じゃないと――」

平然と厨房に入ろうとした姫路さんを明久が呼び止める。

自覚がないので質が悪い。

『良くやつた、明久』

『明久、グッジョブじゃ』

『……………！（「ク」「クー…）』

アイコンタクトで明久の功績を褒め称える。

「え？ 吉井君、どうして私はホールじゃないとダメなんですか？」

本当のことをいつと、料理の腕を向上させるために毎日作つてきますなどというのだろう。死の危険をおさえるためにも、うまく『まかさなくちゃいけない』

「あ、えーっと、ほら、姫路さんは可愛いから、ホールでお客さんに接した方がお店として利益が痛あ”つーみ、美波ー僕の背中はサンドバックじゃないよー！」

「か、可愛いだなんて……。吉井君がそいつなら、ホールでも頑張りますねっ」

「いや、効率的にもホールに専念して」

もつともらしい理由で排除しておべ。

「アキ。ウチは厨房にじょうかな～？」

「うふ。適任だと思ひ」

『……………』

明久、そこは気を使つたほうがいいぞ。

「それなら、ワシも厨房にしようつかの」

「秀吉、何をバカなことを言つてるのさ。そんなに可愛いんだから、もちろんホールに決まってみぎやあつーみ、美波様！折れます！腰骨が！命に関わる大事な骨が！」

本当に学習しないと死ぬぞ、明久。

「……ウチもホールにするわ」

「そ、そうですね……。それが、いいと、思います……」

Fクラスらしく、ドタバタした状態で設備のかかつた重要な学園祭が幕を開けた。

第一十問～イルカが可愛い？集団で雌裏つて血が出る凶暴攻撃する生物だぞ…

感想、指摘等あつましたらよろしくお願ひします。

第一十一問 オーストラリアと言えば? コアラ? カンガルー? 違う! 毒蛇だ! -

サブタイトル

オーストラリアには三百八十種ほど陸棲ヘビが生息していて、そのうち二十五種ほどが毒を有します。ちなみに毒も強力なものが多いです。

第一十一問～オーストラリアと言えば？「マラ？カンガルー？違う…毒蛇だ…」

第一十一問

『…………賞品の…………として隠し…………』

『…………「JR」勝手に…………如月ハイラングでに…………』

『失礼しまーす…』

『…………当に失礼…………どもだね…………返事を待つ…………』

『やれやれ…………だといつのに…………ですね…………話を続け…………差し金ですか？』

『…………言わないでおくれ…………「」のアタシが…………手を使わなきゃ…………のぞ。…………ないといつのに』

『…………だか。学園長…………隠し事が…………ですから』

『…………詰つてこるよつて…………なんて無いね…………違ひだよ』

『…………ですか。預定されたる…………もうこいつはとて…………ましょ
う』

『…………では、この場…………任せてくださいまゆ』

教頭の竹原が踵を返して学園長室を出て行くのを確認する。

「ふうへ。疲れた」

「まつたく、ねちっこい男は嫌なものねえ」

そう言って、学園長室の『本棚の下の書類を入れるスペース』から秋音姉と共に出てくる。

「…………」

「…………」

そして、学園長室にいた明久と雄一と田代があつた。

「あれ? どうしたの二人とも」

「学園長に何か用事?」

「さつさと用件をいいな、ガキども」

平静を装いつつ話題を変える。学園長との連携も完璧だ。

「今日は学園長にお話があつて来ました」

僕たちの連携に流され、用件を話し始める雄一。

「私は今それどころじゃないんでね。学園の経営に関することなら、教頭の竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀つてモンだ。覚えておきな

学園長が礼儀知らずなので、説得力はない。

「失礼しました。俺は一年F組代表の坂本雄一。それでこっちが一
一一」

雄一が明久を指差し紹介する。

「———一年生を代表するバカです」

随分わかりやすい説明だね。

「ほう……。そうかい。アンタたちがFクラスの坂本と吉井かい」

「ちょっと待つて学園長!僕はまだ名前を言つていませんよね!？」

明久といえばバカ。バカといえば明久なのは誰でも知っている。

「気が変わったよ。話を聞いてやるうじやないか

映画の悪役のように口の端を吊り上げて笑う学園長。少し妖怪っぽい。

「ありがとうござります」

「礼なんか言う暇があつたらさつと話しな、ウスノロ

「わかりました」

今のところ雄一は敬語を保つていて、崩れるのは時間の問題だ

れい。

「Fクラスの設備について改善を要求しききました」

「そりゃかい。それは暇うつで羨ましいことだね」

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように穴だらけで、隙間風が吹き込んでくるような酷い状態です」

やつぱり予想通りだつた。

「学園長のように戦国時代から生きている老いぼれはらともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます」

丁寧な口調を崩さず、危険な言葉をちりばめていた。これでお願いに来ていふといふのだから驚きだ。

「要するに、隙間風の吹き込むような教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、わざと直せクソババア、というワケです」

そんな雄一の説明を受けて、学園長は思案顔をしていた。

何度も話に出てきた体調を崩す生徒ってのは姫路さんのことだらう。おそらく、このままの教室の設備じゃ転校することになるのだろうな。

「あの、学園長……？」

明久が雄一の発言に学園長が機嫌を損ねたのではないかと心配そう

に発言する。

「……ふむ、丁度いいタイミングですね……」

学園長は小声で呟いた。じつやら面倒事をやうせらるつもつのようにひきこもつてゐるのようだ。

「よしよし。お前たちの言いたいことはよくわかつた」

「え？ それじゃ、直してもらえるんですねー？」

姫路さんの転校が関わっている以上、明久も真剣なようだ。

「却下だね」

「雄一、このババアをコンクリに詰めて捨ててしまつ

「……明久。もう少し態度には気を遣え」

雄一がそれを言つのは間違つだ。

と、そんなときに肩をトントンと叩かれる。

(どうしたの秋音姉?)

(もしかして学園長はあの一人に『白金の腕輪』を任せせるつもりなの?)

(準優勝の可能性がある低得点者だからね。丁度いいんじやない)

(学園長はひねくれてるから欠陥を正直に話さないだらうね)

白金の腕輪には欠陥がある。

それは、高得点者が使ひと暴走するところなのだ。

(「わざわざ」の部屋の盗聴器は?)

(竹原が仕掛けたのは全部破壊しちゃったよん)

雄一たちは学園長と取引をしていて、それを妨害するであろう竹原に情報が伝わらないのは良いことだ。

(やるやく取引が終わつたみたいよ)

「それじゃ、ボウズども。任せたよ」

「「 わいよーー. 」」

教室の改修との交換条件を引き受け、話は決まつたようだ。

「…………といひでなんで、博人はあんなところから出でてきたの?..」

明久がわざわざつと思つていた疑問をやつと口にしたようだ。

『黄金の腕輪』の欠陥は言えないことなので、誤魔化す。

「変な噂のあるチケットを勝ち取つてくれつていつ学園長からのお願いを聞いただけだよ」

「それじゃ、僕達と同じだね」

明久は気づいてないだろうが腕輪が本当の目的ってところもおなじだ。

雄一は薄々気づいているようだが。

まあ、当田に必要なやつを購入していくことは気がつかれないだらう。

第一十一問～オーストラリアと言えは？コアラ？カンガルー？違う！毒蛇だ！

感想、誤字報告お願いします。

第一十一問～YESレジ袋～NOエコバッグ～（前書き）

サブタイトル

今流行りのエコバッグですが、エコバッグをつかうと石油の使用量が増えるそうです。

レジ袋は石油の中でも使い道のないただ同然のものを使っていますが、エコバッグは石油の中でもそれほど量の無い成分を使って作られます。

レジ袋が廃絶されると、使い道のなくなった石油は処分され、汚れなどで買い換える必要のあるエコバッグを作るために石油を無駄にします。

……もともとただ同然だから、レジ袋も無料なんです。

第一十一問 YESレジ袋-NOHパック

第一十一問

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」

「ホント、いつもはただのバカなのにね」

「それはお前たちが言えることじゃないよ」

「やつすよ」

清涼祭初日の朝。

いつもの汚い教室は、中華風の喫茶店へと姿を変えていた。

「このテーブルなんて、パツと見は本物と区別がつかないよ」

教室内に設置されているテーブルは、最初はクラスのみかん箱を使つつもりだったが、時間が余つた僕が木材で作ったテーブルを使つてゐる。

「あ、それは七伏君が作ったテーブルに、木下君が綺麗なクロスを持つてきて、手際よく作ってくれたんですよ」

クロスの布は演劇部で使つてゐる小道具なので、なかなか良さそうな生地だ。

「うーん、ハクはさすがつすね」

なぜAクラスのメープルがここにいるかといふと、霧島さんに頼んでFクラスの手伝いをする許可をもらつたそだ。

「時間がなくてニースは塗れなかつたけどね」

いつの間にかムツツリーが胡麻団子をもつて近くに来ていた。

「…………飲茶も完璧」

「おわづ」

ムツツリーは気配が薄いので、明久はいきなり現れたように思えて驚いてた。

「ムツツリー、厨房の方もオーケー？」

「…………味見用」

そうこうしてムツツリーは手に持つていた。胡麻団子を差し出してきた。

「わあ…………。美味しいぞ！」

「土屋、これウチらが食べちゃつていいいの？」

「…………（口クリ）」

「では、遠慮なく頂こうかの」

「いただきまわ」

秀吉達と一緒にお盆の上の胡麻団子を手に取る。

「お、美味しいですー。」

「本当ー! 表面はカリカリで中はモチモチで食感も良こしー。」

「甘すぎなことないも良このう」

「…………（モグモグ）」

「ハクも満足してゐみたいっす」

僕の中では甘こ=うまいが成り立つ。

よつこれは甘こ（うまい）。

「お茶も美味しいです。幸せ……」

「本当にねー……」

「ハク、食べかけで良いならこれ食べるつすか?」

「わらひひんご」

あると、口のまえに胡麻団子が差し出される。

「はー、あーんっす」

「…………（パク）」

かなり恥ずかしいので無言で食べる。

周りから強烈な殺氣を感じるが睨みつけたらある程度緩和された。

一人で殲滅したのがこんなところで役に立つたようだ。

「うーっす。戻ってきたぞー」

と、そんなとこりに雄一が戻ってきた。

「あ、雄一。お帰り」

「喫茶店はいつでもいけるな？」

「無論だよ」

「よし。少しの間、喫茶店は秀吉とマジックリーに任せせる。俺は明日と召喚大会の一回戦を済ませてくるからな」

「あれ？ アンタたちも召喚大会に出るの？」

「え？ あ、うん。色々あってね」

学園長から出場理由についての口止めをされてるので、下手なことは言えない。

「もしかして、賞品が目的とか……？」

「うーん。一応そりこりとなるかな」

詳しく述べと、賞品と設備の交換が目的だね。

「……誰と行くつもり?」

「ほえ?」

島田さんの目が細くなつた。これは攻撃色だ。

「吉井君。私も知りたいです。誰と行こうと思つていたんですか?」

気がつくと姫路さんも戦闘モード。

「だ、誰と行くって言われても……」

「明久は俺と行くつもりなんだ」

明久が返答に迷つていると、雄一が助け船?を出した。

「え? 坂本とペアチケットで『幸せになり』行くの……?」

「俺は何度も断つているんだがな

助け船というよりは明久を追い詰めたかつただけだな。

「アキ。アンタやつぱり、木下よりも坂本の方が……」

「ちょっと待つて! その『やつぱり』って言葉は凄く引っかかる!」

それと秀吉一少しでも寂しそうな表情をしないでよー。」

「このままこの誤解が広まると明久は同性愛の似合いそうな人ランキン
グが上がる」とになるのだろう。

「吉井君。男の子なんですから、できれば女子に興味を持つた方
が……」

「それができれば明久だって苦労はしていないぞ」

「雄一、もつともりしゃべることを言わないで！全然フォローにな
なってないからー。」

「つと、やるそろ時間だ。行くぞ明久」

「……くつーと、とにかく、誤解だからねー。」

自分の意見を真っ向から無視される明久を見て、僕はある決心をし
た。

それはともかく、僕もやうそろ試合なので行平と会流するため教室
を出る。

第一十三問／フタバスズキリュウ？いいえ、フタバサウルス・スズキイですか？

サブタイトル

日本では、恐竜の名前は学名で呼んでいるので、呼び方を統一するならフタバスズキリュウはフタバサウルス・スズキイです。

第一二三問 フタバスズキリュウ？いいえ、フタバサウルス・スズキイですか

第一二三問

「えー。それでは、試験召喚大会一回戦を始めます」

校庭に作られた特設ステージで、召喚大会は催される。

僕達のBブロックは、立ち会いの先生の関係上、明久達のDブロックとは科目が異なる。

僕達の一回戦は英語。行平も僕も得意科目ではない。

「では、召喚してください」

「「「試験召喚」」」

さて、こちらへんで僕達の召喚大会の目的を整理しておこう。

まず、僕達の目的は優勝賞品の『黄金の腕輪』。

腕輪の能力は召喚フィールド作成と、特殊能力『攻撃追加』と『不可視盾』だそうだ。

フィールド作成をするには500点以上必要だが、特殊能力の使用には400点あれば問題ないらしい。

次に、明久達を準優勝させなくてはいけない。学園長の作った『白金の腕輪』は高得点者が使うと暴走してしまつ。腕輪を使っても暴走しない、準優勝することのできる低得点者、それが明久達。

つまり、明久達とは決勝以外で当たることはない。

明久は準優勝との交換条件で、姫路さんの転校を防ぐことが本当の目的だが、僕にとつてはどうでも良いことなので、とにかく優勝することが目的だ。

ある程度考えをまとめたところで、点数が表示される。

『Bクラス 田中太一
英語 165点
&
Bクラス 平林拓人
英語 173点
VS
Aクラス 七伏行平
英語 452点
&
Fクラス 七伏博人
英語 448点』

開始と同時に走り出し、相手が動くまえに胴を真つ一つにして、おまけで四肢と頭を切り落とす。

これで一体目撃破。

すかさず一体田の背後に回り、羽交い締めにする。いきなり倒すのも面白くないので、行平の訓練をする。

「右手」

僕がそう言つと、相手の召喚獣の右手が行平のボウガンによつて撃たれた。
少し中心からずれているが、召喚獣でこの精度なのはすごいことだろ。うう。

「左手」

今度は左手の中心に風穴ができる。

といふか召喚獣を使ってこの銃弾を弾いたことのある僕つて結構人外なんじや……

「両足」

続けざまに一発の銃弾が放たれ、2つの風穴があく。

相手の召喚獣を上に放り投げ、次の被弾場所を指定する。

「両手両足の付け根」

またも寸分違わず命中する。

行平のボウガンの一度に装填できる弾は8発なので、次の弾の装填をしていた。

「額」

最後の一撃が召喚獣の頭を貫き、勝負が決まった。

「勝者、七伏兄弟」

「いやあ、それにしても楽だつたね」

「Bクラス相手に無傷で勝てる方がおかしいんですよ」

まあいいや。僕がおかしいのは元からだし。

それよりもクラスの喫茶店がどうなっているかが気になる。

「それでは私は教室に戻らねばなりませんので」

「うん。次もしっかり慣れよう」

行平と別れて教室に行くと、中から大きな声が聞こえてきた。

『こんなモン食えるわけないだろー..』

『まずいしな！』

なるほど、喫業妨害か。

「責任者はいないのかーこのクラスの代表、ペツ！」

「代表は今はいませんので、私が代わりとさせていただきます。何とかご不満な点でもございましたか？」

ホテルのウエイターのように恭しく頭を下げる。口調は行平の真似をすれば良い。

「不満も何も、今連れが足払いされたんだが……」

そんな些細な」とま気にするまでもない。

「それは私の『足払いから始まる交渉術』に対する圓滑ですか?」「ふ、ふざけんなよこの野郎……! 何が交渉術ふざやあつ…」

ガスッ!

「そして『鳩尾強打でつなぐ交渉術』です。最後には『鳩尾強打(強化版)で締める交渉術』が待っていますので」

「わ、わかった! こちちはこの夏川を交渉に出そう! 俺は何もしないから交渉は不要だぞ!」

「ちょ、ちよつと待てや常村! お前、俺を売ろうつと書いつのか! ?」

夏川の髪型は坊主。常村の髪型はモヒカン。
記憶完了だ。

「それで、交渉はまだ続行しますか?」

「い、いや、もう充分だ。退散させてもらひつ」

賢明な判断だけどーーー

「そうですか。それではーーー

手遅れだ。

「おこつー! 俺もう何もしてないよな! ? ビリしてそんなげぶるあつ

!」

「——これにて交渉は終了です」

膝で思いつきり鳩尾を強打。短時間で一度食らったわけだから痛いだろうな。

「お、覚えてるよっ！」

倒れた夏川を抱えて走り去っていく常村。ありきたりな捨て台詞で覚える氣にもならない。

密に少なからず迷惑がかかったので、謝罪と商品を半額にして提供することことで場を治めた。

第一十四問～竹の花が咲くと災いが訪れる～（前書き）

サブタイトル

竹の花は約六十年に一度咲きます。

竹はアサガオ等と同じく、花が咲いた後に枯れます。

竹は地下でつながっているので、竹林一つが一個体ということもあり得て、それが一斉に開花してしまいます。

花の後には実ができますよね？

その実を食べて、本来食料が足りず繁殖が制限されていたネズミが爆発的に増えます。そうすると、ネズミが穀物などを食い尽くし、飢饉が訪れるということです。

現在はその心配はありませんが。

第一十四問 竹の花が咲くと災いが訪れる

第二十四問

召喚大会一回戦は、一人一殺で一撃で片付いた。

クラスに戻つてみると、明久達と小さな女の子がいた。

葉月と紹介の結果もしたのに、

瑞希！」

「假想」

「」

ナイスコンビネーションだ。

「瑞希。そのまま首を真後ろにひねつて。ウチは膝を逆方向に曲げ
るから」

このままだと明久が殺されるので、介入する。

「落ち着いて、一人とも。だいたい明久がそんなことするわけないと思つよ」

「仕方ないわね。包丁を五本差したら話を聞いてあげるわ」

「絶対話聞く気ないよね」

「じゃあ一本で良いわ」

包丁=刃物……一本でも危険。

「本数の問題じゃない」

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」

と、葉月といつていた女の子が島田さんを見て涙を引っこめていた。島田さんに対しても姉ちゃんと言つていたことと、容姿から、島田さんの妹と思われる。

「ああっー。あのときのぬいぐるみの子かー！」

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月ですっ」

「どうやら明久は島田妹のことを見失っていたようだ。

「あれ？ 葉月とアキツて知り合いなの？」

「うん。去年ちょっとね。美波こそ葉月ちゃんのこと知ってるの？」

「知ってるも何も、ウチの妹だもの」

やはり予想通りか。

「それでも博人、さつきは助かったよ」

「今までは明久が酷い目にあうのを見るのはまあまあ面白いな」とか思つてたんだけど、明久を幸福にするといつ超難問をやってみよう決心したんだよ」

「超難問で言われるほど僕は不幸なの？」

なにをいまぢ。

「まあ、というわけでこれからは明久の味方をするよ」

「とにかくこの密室には客が少ない。いくら何でも不自然だ。」

「そういえば葉月、ここに来る途中で色々な話をきいたよ?」「ん?どんな話だ?」

雄一が屈み込んで目線を合わせながら島田妹に問う。

「えっとね、中華喫茶は汚いから行かない方がいい、って

と、そんなことを聞いていると僕の携帯が鳴った。

カナカナカナカナ

着信音はヒグーラシ。ということはメープルからだ。

「どうしたの?」

『Fクラスに対する営業妨害っす!』

「場所は?」

『ちょっと挨拶にいった、Aクラスっす』

「わかった。すぐに向かうよ」

明久達は島田妹からの情報をうけて、すでに走り出していた。
短いスカートという単語が聞こえた気がするがこの際無視だ。

第一十五問～イワサキセダカ～は右巻きのカタツムリしか食べない～（前書き）

へじは偏食のやつがぬこです。

第一十五問～イワサキセダカベは右巻きのカタツムリしか食べない～

第一十五問

「明久、 じいはやめよ！」

「ここまで来てなにこつているのもー早く中に入るよー。」

「頼むーここだけは、 Aクラスだけは勘弁してくれー。」

Aクラスの出し物は【メイド喫茶『』主人様とお呼び…】というウチの【中華喫茶『ミーロピアン』】と良い勝負のネーミングセンスだった。

「ハク、 じいでモヒカンと坊主が営業妨害してるつす」

モヒカンと坊主といつと常夏コンビか。

「またあいつらか……」

「『また』といふことは以前も？」

「うん。僕が追い出したけどね。そういうえば召喚大会の方は？」

「問題ないつす」

「それじゃ、 入るわよ。お邪魔しまーす」

話をしていると、 島田さんを先頭にして中に入つていくので、 それ
に続く。

「……おかえりなさいませ、『主人様にお嬢様』

僕たちを出迎えてくれたのは霧島さんだ。
それをしてか雄一が渋々入ってくる。

「……お帰りなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

これはマニユアル通りの対応ではないはずだ。

席に案内され、立派な装丁のメニューを渡される。
Aクラスは学校行事にも眞面目なようだ。

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で

「あ、私もそれがいいです」

「葉月もー！」

この三人は仲良くシフォンケーキのようだ。

「『アイスココア』っす

「僕は『アイスティー』。ガムシロップは二つで

ガムシロップは一つでは足りないので、いつも二つ入れる。
なんてつたつて無料だし。

「僕は『水』で。付け合わせに塩があると嬉しい」

「んじや、俺は——」

「……』注文を繰り返します」

雄一の注文を霧島さんが途中で遮る。

「……『ふわふわシフォンケーキ』を二つ、『アイスココア』『アイスティー』『水』を一つ、『メイドとの婚姻届』が一つ。以上でよろしいですか？」

「全然よろしくねえぞっ！？」

え？ 何も問題なかつたと思うけど。

「では食器をご用意いたします」

もちろん雄一の食器は実印と朱肉だ。

「しょ、翔子！ これ本当にうちの実印だぞ！ どうやって手に入れたんだ！？」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ちください」

霧島さんがお辞儀をしてキッチン歩いていくと、入れ違いに行平がやつてきた。

「おや、博人。 いらっしゃいませ」

「あ、行平。 何か新情報あつた？」

「そうですね……次の対戦相手の情報が少しあります」

対戦相手の情報か。 知つておいて損はないだろう。

「次の相手はDクラスのペアですが、一人はAクラスレベルの実力です」

「Aクラスレベルなら試召戦争のときに難関となつたはずだけど」「どうやら試召戦争の日は風邪だつたようです。 それと、Dクラスにいる理由ですが、聞いた話だとテスト中にシャーペンが折れたり解答欄を間違えたりと、恐ろしく不幸だつたようです」

そんな不幸スキルを持つているなら口癖は『不幸だあ——』だろう。実際そんなことはないだろ'つけど。

そんなことを考へていると常夏コンビ対策のためか雄一がメイド服を持つていた。

「着るのは明久、お前と——」

「いやああああつ！」

絶叫する明久を無視して雄一の首腕を回していくでも締められるようになる。

「で、雄一？ 明久とだれナノカナ？」

「おそらく」ことのじだから僕にもメイド服を着せるつもりだったのだろう。

「くつー」になつたら……楓、お前は博人のメイド服を見たくはないか？

卑怯な！ メープルを味方につけようとすると

「なにいつてるすか雄一君。 そんな大切なものを衆愚にさらす必要はないっす」

「助けてくれてありがとうだけど否定はしないんだ」

つまり一人きりだったら見たいといつことだらう。

「というわけで明久。 メイド服を着て醜態をさらしてください。 大

丈夫ですよ。あなたの人生に忘れられない汚点がつくだけですから

「行平が一ツコリ笑顔で明久の心を抉る。

とりあえず明久を女装させるためAクラスを出て、トイレへ向かつた。

明久の女装姿は酷いものではなく、秀吉のメイク技術のおかげもあり、なかなか似合っていた。

そんな明久を行平が写真に撮り、良い交渉材料が手に入りましたといつて笑っていた。

明久がバックドロップを決めてから、痴漢されたと大声をあげたことにより、痴漢退治という名目で雄一が攻撃を仕掛けたが、最終的には逃げられてしまった。

第一十六問～マルハナバチは飛ぶときに空気の粘り気を利用してくるらしい～

第一十六問

召喚大会第三回戦。科目は数学。

「 「 「 試験召喚」 」 」

おなじみの魔法陣から、召喚獣が現れる。

『 Dクラス 清水美春
数学 94点

&

Dクラス 浅井 海渡
数学 411点

VS

Aクラス 七伏行平
数学 439点

&

Fクラス 七伏博人
数学 621点

「うつわ、これは厳しいな」
「大丈夫です。海渡がいますから」

相手の召喚獣は、清水さんは剣と日本風の鎧という標準的な装備な

のだが、もう一人は急所に突いている装甲が防具で武器は――
――ネギだ。

「…………なんでネギ?」

思つたことを素直に口に出してみる。

「なんかバグだつて話だ。格好いいだろ、これ。『ネギ』の『ナギナタ』つまり『ネギナタ』というわけだ」

浅井はネギナタを回転させてポーズをとつてくれる。

「それでは、良い試合をお願いします」

軽い雑談が終わり、勝負が始まる。

僕はもちろん開始と同時に攻撃を仕掛けた。

初撃をかわされるが一撃目はネギナタと打ち合つた。

ネギとぶつかったはずなのに、金属同士をぶつけた音がする。

意外と強いのかもしれない、ネギナタ。

僕が浅井を攻撃している間に、清水さんは行平に走つていった。
遠距離型の行平は近距離戦に持ち込まれると戦いにくい。

しかしそこは行平の実力でカバーする。

ボウガンを槍のように構え、突きで攻撃した。

清水さんの召喚獣は剣で攻撃を防いだが、点数差があるので吹き飛ぶ。

ちょうど僕の方に向かってくるので、浅井の方を向いたまま肘のブ

レードで後ろから飛んできた清水さんを串刺しにする。

清水さんに注意が少し逸れたので、防戦一方だつた浅井が反撃してくれる。

相手の攻撃を全て捌くが、体勢が悪いので一旦退く。
距離をとる隙は行平が狙撃して作る。

二体一で不利な状況だからか、浅井は別のアクションをしてきた。

「武器追加！」

どうやら腕輪の能力のようだ。

その言葉の通り、浅井の召喚獣はもう一つ武器を手にしていた。

ゴボウ

今度の武器はゴボウだった。

「あれ！？俺イメージでは剣だそつと思つたんだけどー！？」

能力を使った本人もゴボウに驚いていた。

「まあ良い、これで仕切り直しだ！」

ゴボウとネギを構えてつつこんでくる。

攻撃をすべてかわすが、相手もそれを予想していたようで、次の攻撃を仕掛けてきた。

「武器追加！」

ジャガイモ

空中に現れたジャガイモを「ゴボウで叩きつけて、ものすごい勢いでジャガイモが飛んできた。

体勢が悪く避けきれないでの、防御する。

しかし、鈍い音を立てて当たつたジャガイモに弾き飛ばされてしまった。

なぜジャガイモで鈍い音がするのかわからない。

「よつしゃ もう一発！武器追加！」

……ニンジン

瑞々しいニンジンが現れ、それは行平へ一直線に進んでいった。行平はこれを撃ち落とし回避する。

ニンジン投擲で隙ができたので、接近して斬り続ける。

防御姿勢の浅井にネギとゴボウでふせがれるが、僕は囮だ。

僕の召喚獣の頭のすぐ横を通り、弾丸が浅井の召喚獣の頭を打ち抜く。

これで僕たちの勝利だ。

『勝者、七伏兄弟』

「いやー良い勝負だつたぞ」

ステージを降りた僕たちは、浅井と雑談をしていた。

「うん。僕も面白かったよ、浅井

「海渡でかまわねえよ、博人、行平」

「わかつたよ、海渡」

「ところで、どうして清水さんと組んで出場していたんですか?」

「ああ、俺と美春は幼なじみなんだよ」

「へえ、そなんだ~」

「盛り上がりってきたところですが、私もクラスの手伝いをしなければなりません。ここで失礼します」

「また戦えるのを楽しみにしてるよ」

「おつ、また戦ろうぜ」

勝負の中で仲良くなつた海渡とわかれ、Fクラスの教室に向かう。

Fクラスに戻ると、出迎えたのはチャイナドレスだった。

第一十六問～マルハナバチは飛ぶときに空気の粘り気を利用してこらし～

神はお気に入り登録が増えたり、感想が来ると喜びます。

第一一十七問「フレミングは右手の法則もある」

第一一十七問

「ハク、おかえりーっす」

教室に戻った僕を出迎えてくれたのはチャイナドレスに着替えたメープルだった。

「…………」

「おや、どうしたつすか？私のチャイナドレス姿に見とれたつすか？」

「え？あ、あ、うん」

しまった！ついウカリ本音が！

「ふえつ！？な、なにいつてるすか！」

メープルも僕の言葉に驚いたのか、二人とも顔が真っ赤になってしまった。

赤面したメープルも可愛いと思つ。

「フツフツフ、ハクもついに素直になつたつすか。このまま欲求に素直になつちゃう？」

「それはない」

節度を守つたお付き合いをしましょ。

「ま、冗談はここまでにして、試召大会勝ち抜きお疲れ様です
「うん、ありがとう。メープルも勝ち続けているんだよね」
「当たり前っす」

こうやつて平和な会話をしていると、教頭竹原の陰謀とかはどうでもよくなつてくる。実際それは明久達が解決する問題だし。

「お～、召喚大会は順調だね～」

それより僕たちの問題はいま登場した秋音姉からの依頼だ。
ちなみに秋音姉は手伝いということでチャイナドレスに着替えていた。

「これで私の給料ダウンが一歩遠のいたね～」

はつきり言つて一発シバきたい。
しかしここは大人な対応をしなければ。

「あ、そういえば一日田の清涼祭の様子をHPに載せるから、見回りして写真撮つてきて」

そう言つてデジタルカメラを渡された。
それじゃあメープルと一緒につてこようかな。

雄二に見回りの顔を伝えて教室を出て行く。

「どこ行きたい？」

「まずは外の運動系に行つた方がいいんじゃないですか？」

うん、やっぱりそうだよね。

というわけでやつてきた野球部のストラックアウト。召喚大会の会場の近くとあってかなかなか盛況だ。

「そんじゃ、いきます」

第一球を振りかぶつて軽めで投げる。

肩が暖まつてないのでいきなり速く投げてはいけない。

ボールは左上の一番を打ち抜く。

続いて一球目三球目で2・3番を打ち抜く。

そろそろなれてきたので細かい技をやる。

四番と五番の間のフレームに当てて、一枚落とす。これにはまわりから歓声があがる。

残りも四枚も一枚抜き一回で簡単にあわつてしまつた。その後野球部から勧誘されたが丁寧に断つておいた。

「さすがハクつす！」

メープルはこの状況を利用して抱きつこうとしてくるが、軽く受け流す。

色々な出し物をまわつて、現在3・C。クイズ大会だ。

二人一組のペアで、クイズに答えていくという簡単なものだ。

「それでは第一問。第二次世界大戦で初めてつかわれた兵器を三つ

あげよ」

「戦車、飛行機、毒ガス」

「正解です！」

よし、一問クリアー。

「第二問。農薬の危険性について書かれた『沈黙の春』の著者はだれか」

「レイチエル・カーソン」

「正解です！」

今日はメープルが答えた。

「第三問です。マグニチュードが一大きくなる」とにエネルギーは何倍になる？」

「約三十一倍」

「またまた正解です！」

これで僕たちのペアは三問連続正解だ。

ピンポン

「文芸復興」

「正解です」

ピンポン

「ウェルウィッシュニア」

「正解です！」

「竹取の翁」

「正解です！」

「またまた正解です！」

ピンポン

「1392年」

「正解です！」

ピンポン

「フビライ・ハン」

「せーかいです」

ピンポン

「f a l l」

「正解」

ピンポン

「三畳紀、ジュラ紀、白堊紀」

「正解です！」

問題内容は適当に想像してほしい。

なんか適当にやつてたら十問連続正解で他の人に一回も答えさせなかつた

「それでは商品の『図書券』です

係の生徒から賞品を受け取る。

まだまだ見回りをしなくちゃいけないので、先を急ぐ。

第一十八問～スッポンは防御を捨て、素早さを得た～（前書き）

スッポンは甲羅が他のカメに比べ、柔らかいのですが、その分陸上で機動力が高いです。

第一一十八問) スッポンは防衛を捨て、素早さを得た

第二十八問

ちょうど見回りが終わつた頃に召喚大会第四回戦になつた。

相手は三年生のAクラスだつたが、難無く撃破。これでつぎは準決勝だ。

教室に戻ると、みんなあわただしく行動していた。

「ハク！ 大変つす！」

僕の姿を確認するなり、メープルが近づいてきた。

メープルは周りに聞こえないよう小さめの声で話してきた。

「ウエイトレスがさらわれちゃつたつす」

ほほつ、これはまた予想通りな……

「メープルは大丈夫だつたんだよね」

「もちろんつす。秋音さんは事前に察知して、私と一緒に少し席を外していたつす」

全員を逃がすと誘拐犯がどんな行動をとつてくるかわからないから、喫茶店の戦力として一人を残したというわけか。

「何にしてもメープルが無事で良かったよ
「誘拐されそうになつたといふことは心に深い傷をのこしていった
つす」

……どうしよう、なんかいやな予感がする。

選択肢？スルー

選択肢？心の傷について聞く

？は後々怖ううなので2番を選択。

「その心の傷はどうすれば治るの？」

「ハクヒイチャイチャしたらつす

うん、だいたい予想通り。

「じゃあ、後でね」

「やつたつす。約束つすよ？」

「うん、だからはやく秋音姉を手伝つてあげて」

メープルが僕のところにいると、現在動けるウェイトレスは秋音姉だけになってしまつ。

「了解つす！」

メープルは上機嫌な様子で接客を始めた。

……帰つたらどうしよう？

少し時間がたつたら、また召喚大会の時間になつた。

準決勝は僕達とメープルの試合。

正直とても楽しみだ。

中華喫茶をFクラスのメンバーに任せ、会場に向かつ。誘拐された人たちも明久達が助けに行つたから、そろそろ戻つてくるだろう。

『それでは、召喚大会準決勝を始めます』

ステージの上で、メープルと向き合つ。
真剣勝負ゆえに特に雑談はしない。

『Aクラス 工藤愛子

保健体育 463点

&

Aクラス 佐藤楓

保健体育 428点

VS

Aクラス 七伏行平
保健体育 444点

&

Fクラス 七伏博人
保健体育 438点

点数に大きな開きはない。

つまりこの戦いで重要なのは、召喚獣の扱い方だ。

目前の勝負に向け、集中する。

『始め!』

いつも通り、開始と同時に攻撃を仕掛ける。

狙いはメーブルだ。

しかし、メーブルもこの一手を読んで、僕の召喚獣に刀を全力で叩き込んできた。

お互いの攻撃は相殺したが、僕の召喚獣は軽いので、少し弾き飛ばされた。

体勢が崩れた僕に攻撃を仕掛けようとしてくるが、行平の援護射撃で体勢を立て直す。

その間に愛子が行平に向かっていったので、僕はメーブルに集中する。

とにかく連続攻撃で相手の攻撃の隙を奪うが、さすがはメーブルと

いつたところで、時々僕の攻撃の合間を縫つて攻撃してくる。

両方決定打はなく、お互いの点数を少しづつ削り合っている。

s.i.d.e 行平

博人を援護したのは良かつたのですが、愛子さんにだいぶ接近されてしまいました。

相手が振り回していく巨大な斧に対し、ボウガンを使って受け流します。

相手が武器を振り切つてできた隙に弾丸を一発打ち込みますが、さすがに一撃とはいがむ、大きく点数を削るだけでした。

点数を大きく削られた愛子さんは短期決戦に持ち込むため、腕輪の能力を使い、斧に電撃を宿してきました。

……………どうしましょつかね。

side 博人

メープルと点数を削りあっていると、行平達の方に動きがあった。

点数を大きく削られた愛子が腕輪を使って勝負に出たのだ。

その斧が当たる瞬間、行平はあるキーワードを口にした。

「防御」

愛子の斧は行平の召喚獣に当たることなく弾かれた。

行平の腕輪の能力『絶対防御』だ。

当然弾かれれば隙はできるので、行平は正確に頭を打ち抜き勝負を決した。

試合の流れが変わったからか、メープルは一度距離をとってきた。

僕とメープルが今持っている武器は近接用。距離があいたら、攻撃はできないはずだ。

しかし、メープルにはこの距離で攻撃する方法があった。

「砲撃！」

メープルの刀の先から紫色の球が飛んでくる。
いやな予感がして、それをかわすと、目前にメープルが迫っていた。

「来い、マイマイカブリ」

召喚獣の半分ほどの大きさの昆虫で攻撃を受け止める。

「拡散！」

メープルがさつきとは違つキーワードを叫ぶ。
今度はさつきとは違い、紫色の霧がメープルの周りに広がった。
僕はそれに当たってしまい、点数を確認すると点数が減つていった。

「私の能力の『毒』つす。砲撃、拡散と攻撃方法は色々あるつす」

説明を聞きながらも攻撃する。

時間がたつごとに点数が減つていく。

もう時間がないので、最後になるであろう攻撃をする。

まずは行平が一いち方に突っ込みながら狙撃をする。
動きが止まつたところで全体重でクロ一を叩き込む。

決死の攻撃はメープルの盾によつて防御されてしまつたが、これで詰みだ。

後ろに回つたマイマイカブリがメープルの召喚獣胴体を切り裂く。

『勝者、七伏兄弟』

第一十九問～ある地域では、オリオン座とそり座が一緒に見える時があるり

第一十九問

清涼祭一日目が終わり、僕達の貸し切り状態となつてゐるFクラスの教室。

テーブルでお菓子を食べていると、急に雄二が告げた。

「明久。 そろそろ来る時間だぞ」

「？ 来るつて、誰が？」

「ババアだ」

といふか学園長が来ないんだつたらこんな教室に残つてゐる必要はない。

「学園長がわざわざここの来るの？」

「俺が呼び出した。さつも廊下で会つた時に、『話を聞かせ』ってな」

「話ねえ……。ダメだよ雄二。一応相手は田上の人なんだから、用事があるならこいつちから行かないと」

一応ではなく、確實に田上だ。

「用事もクソも……」の一連の妨害はあのババアに原因があるはずだからな。事情を説明させないと気が済まん

「ババアに原因が——えええつー？」

雄一が当然のよつて告げた当然の事実に明久は驚いていた。

「あ、あのババアー僕らに何か隠してたのかー。」

そもそも何をもつてババーー学園長に隠し事が無いと判断したんだ。

「……やれやれ。わざわざ来てやつたのに、随分どじ挨拶だねえ、ガキどもが」

声と同時に教室のドアが開いて学園長が、続いて右脇に秋音姉を抱えた行平が入ってきた。

「来たかババア」

「出たな諸悪の根源め！」

「おやおや、いつの間にかアタシが黒幕扱いされてないかい？」

まあ学園長はどうでも良い。気になるのは別の方だ。

「行平、利き手が使えるように抱えるのは左脇が良いと思つ

「いや、そもそも抱えてることにつつこむべきつす！」

こつちでワイヤワイヤつてゐるのを無視して雄一は学園長と話をしていた。

「黒幕ではないだろ？が、俺たちに話すべきことを話していないのは充分な裏切りだと思うがな」

「ふむ……。やれやれ。賢しいヤツだとは思つてていたけど、まさかアタシの考えに気がつくとは思わなかつたよ

「最初に取り引きを持ち掛けられた時からおかしいとは思っていたんだ。あの話だったら、何も俺たちに頼む必要はない。もつと高得点を出せるヤツ——それこそ『七伏兄弟』とかを使えばいいわけだからな」

「あ、そういうえばそうだよね。準優勝者に後から事情を話して譲つてもらうとかの手段も取れたはずだし」

「そうだ。わざわざ俺たちを擁立するなんて、効率が悪すぎる」

「話を引き受けてきた教頭の手前おおっぴらに妨害することができない、とかは考えなかつたのかい？」

「それなら教室の補修に関して渋つたりしないはずだ。教育方針なんてものの前にまず生徒の健康状態が必要なはずだからな。教育者側、ましてや学園の長が反対するなんてありえない」

「つまり、僕らを召喚大会に出場させる為にわざと渋つたつてこと？」

「そうこうになるとなるな」

話が長くなつたのでまとめるが、教頭が準優勝賞品の『白金の腕輪』を暴走させ、学園長の失脚を狙つていて、それを阻止できる明久達の妨害をしたということだ。

話が一旦終わつて今度は秋音姉が話し始める。

「一応優勝賞品の『黄金の腕輪』も欠陥があつて、その影響を受けない博君達に優勝をしてもらつんだよ。こっちが妨害を受けなかつたのは、優勝の阻止が難しいのと、欠陥が大したことないからだね」「これでアタシ達の説明は終わりだ。一人とも、明日は頼んだよ」

明久達にはまだ、準決勝が残つてゐる。相手は教頭側の人間。これ

に勝たないと学園の存続が危うい。

「腕輪の色はカラースプレーで誤魔化せるし、能力の発表もしないから、どっちが優勝しても良い。だから、明日は本気で戦おう」「もちろん！」

無事帰宅、したはずなのだが――――

「ああて、何して貰おっかなあ～？」

ベットで寝てたらいきなりメープルに馬乗りされて動けない状態だ。結構頑張れば抜けられなくもないが、メープルに怪我をさせてしまう可能性があるのでやめておく。

さて、どうする？僕。続きを読むWEBで。なんて言つてられない。

「ええと……まずはゆっくり話がしたいから――――」

口をキスによつてふさがれたため、最後まで言い切れなかつた。
えー？何この状況？

「…………ん…………む…………」

舌まで入れられた。いつたいどうじゅつていうんだ！？

「えーと、一応ここは僕と行平の共同の寝室だから…………」

部屋に標本や飼育ケースを置きまくつていたり、寝るスペースがなくなってしまったからだ。

行平もだいたい似たような感じで色々置いてある。

「根回しませぬといふあるから、気にしないでいいの」

万事休すとしか言いようがない。

「ハハハ、それじゃあ———」

その後はまあ…………やつこいつがあったところでもじり想像にお任せします。

第二十問～蝶の鱗粉は蛹の時の排泄物からできているらしい～

第三十問

清涼祭一日目。僕たちはステージの上で、準決勝を勝ち目的を果たした明久達と向かい合っていた。

『召喚大会決勝戦、勝ち上がってきた中にはFクラスが三人！これはFクラスが最低であるという認識を改める必要があるかもしれません』

司会の声を無視して意識を集中させる。ただ目の前の敵を倒すために。

『それでは召喚を開始してください』

「 「 「 「 試験召喚」 「 」 」

『 Fクラス 吉井明久
現代国語 67点
&
Fクラス 坂本雄一
現代国語 183点
VS

Aクラス 七伏行平

現代国語 453点

&

Fクラス 七伏博人

現代国語 458点

点数の差は一目瞭然。圧倒的だ。

『開始!』

合図と同時に走り出す。クロード斬りかかるが明久は予想していたのか大きく横に跳んだ。

僕の攻撃を予測していたのはいいが、回避動作は大きかった。その隙を逃さず攻撃を掛けるが、雄二が割つて入ってきた。

「しつかりしろ! 明久!」

雄二の点数は高い方だが、それでも僕には劣る。一対一なら三十秒持てばいい方だ。

ドンドン点数が削られている雄二の援護に明久が木刀で突きを繰り出してくる。

それにピッタリ位置をあわせクロードの突きを放つ。真正面からクロードぶつかつた木刀は二つに裂け、明久自身もダメージを追つた。

雄二が構えをつくつて攻撃準備をしているので、ある指示を行平に出す。

それを受けた行平は『僕』に銃弾を放った。

飛んできたそれをブレードで雄二の方向に弾く。

弾丸は肩に当たり、雄二の攻撃は失敗に終わった。

明久、雄二が傷つき動きを止めたところに突っ込み、暴れる。

斬り、貫き、刻み、潰し、砕き、裂く。圧倒的な力で、場を支配する。

ちなみにこの技を生身でやるのだとすると、激痛で動けなくなるだろう。現に点数も50程減ったし。

最終的にフィールドに残つたのは、僕と行平。

『七伏兄弟の勝利です！』

これでミッション完了。残るは腕輪のデモンストレーションだ。

学園長から表彰を受け、もらつた腕輪を着ける。ステージの上なので、観客の方に四人で並ぶ。

「アウエイクシ
起動！」

まずは雄二の白金の腕輪で召喚フィールドを形成する。

「試験召喚…それに…ダブル
一重召喚！」

続いて明久が「一体の召喚獣を呼ぶ。

一旦歓声がやむのを待ち、僕達の番。

「アウェイクシ
起動」

黄金の腕輪が形成したフィールドが雄一の作ったフィールドを消し去る。

これが黄金の腕輪の能力の一つ『干渉不可』だ。

「試獣召喚！」

続いて召喚獣を呼び出し、武器を振るつと、武器の通った外側にエフェクトが出た。

『攻撃追加』、攻撃範囲を広げる能力だ。エフェクトの出た場所は攻撃が発生している。

モーションによって特殊効果もあるらしいが、今回は省く。

一旦フィールドを消し、行平が腕輪を起動する。

「アウェイクシ
起動……『試獣召喚』」

行平の召喚獣はボウガンを構えたまま足を動かさずにフィールドを動き回った。

能力『滑走移動』。その名の通りフィールドを滑る力だ。ちなみに1mにつき1点消費する。

以上で「デモンストレーションは終わりだ。

召喚大会は終わつたが、まだまだ清涼祭は続くので、教室で忙しく仕事をする。

第三十問～蝶の鱗粉は蛹の時の排泄物からできているらしい～（後書き）

博人達を使いたいなんて人がいたら、遠慮なくどうぞです。

第三十一問「人間は深海でもペチャンコにはならない」（前書き）

サブタイトル

空気の入っている部分は潰れます、体の大部分は水が占めているので、それほど潰れません。

第三十一問「人間は深海でもペチャンコにならな」

第三十一問

「失礼しまーす」

「邪魔するだ

ノックと挨拶をして、明久達が学園長室に入ってくる。さすがにもう少し気を遣つべきだ。

「お主ら、全く敬意を払つておらん気がするのじゃが……」「そつ…きりんとノックをして挨拶をしたけど?」

確かに雄一よりはマトモだった。

「明久。返事を待つてから部屋に入るんだよ」

「あ、そうだつたね。ところで学園長、準優勝の報告にきました」「言われなくともわかっているよ。アンタたちに賞状を渡したのは誰だと思っているんだい?」

学園長もむづちゅっと言葉遣いを氣をつけてほしい。

「それにしても、随分と仲間を引き連れてきたもんだねえ」「こいつらもババアのせいで迷惑を被つたからな。元凶の顔くらい揃んでもばちはあたらぬはずだ」「……ふん、そうかい。そいつは悪かったね」「それで、白金の腕輪は返却した方がいいですか?」

「いや、それは後でいいさね。どうせすぐに不具合は直せないんだ」「む？不具合とはなんじゃ？」

「あ、そっか。秀吉は知らなかつたんだね。この白金の腕輪はちょっと欠陥品でね、得点の高い人が使うと暴走しちゃうんだよ」「そうじゅつしたのか」

それにしてもどうして明久はそんな重要な事をただ被害にあつたつてだけで他人に話すのかな。

「明久、言葉には気をつけた方が良い。この部屋には盗聴器が仕掛けられていたんだ。もし破壊していなかつたらこんな話を録音されてしまう学校の存続の危機だよ？」

「まあ、結果的には良かつたんだから、これでいいさね」

「話は終わつたことだし、早く打ち上げにいッときな。僕もすぐに追いつくよ」

「ああ、わかった」

雄一が礼もせずに部屋を出ていく。明久達はキチンと礼をした。

学園長の椅子の右後ろから、明久達を見送る。
ちなみにここが僕のいつもの立ち位置だ。

あ、そういうえば学園長に話があつたんだ。

「学園長、教頭の悪事の資料、集めておきましたよ」

脇に抱えていたファイルを机の上に置く。

「そいつはありがたいね」

「でも、博君にはもう一つ用事があるんだよね。じつは召喚獣の実

験を生徒に手伝つてもらおうとおもつてね？『無作為』に選んだ結果、博君となつたのでした！」

秋音姉は無邪気な面で微笑みかけてくるが、明らかに故意的に選んだだろ？。

「それってどんなの？」

メリットを聞かなくてやや受けれる気にはならない。

「まずは暴走対策として、システムの別領域になると、召喚獣に何かあっても強制的に動かせるように召喚者との繋がりを強くするの。」これで操作性は大幅に向ふるけど、フィードバックが発生しちゃうね

操作性の向上か……僕にとってはとても良い話だ。

「ま、面白いならいいよ」

「そう言つと思つたよん

「それじゃあ学園長。僕も打ち上げなので、これで失礼します

「ああ、楽しんでおいで」

といつわけで打ち上げ会場の公園。

手渡されたコップに何故か入っていた酒を捨て、持参したココアを飲む。

とこりかこいつらはなんで酒を買ってきただんだ？

するといひに、背中から軽い衝撃が来た。

「ハク～！遅いっす～」

と、メープルが「こり笑みを浮かべてこる」と油断して足払いをされて、「こにに反応できなかつた。しかも馬乗りをえたし。いつもなら軽く避けられるはずなのだが……。どうやら最近はメープルと一緒にだと、少し気が緩んでしまうようだ。

「で、なんでこうなつたの？」

「とくに理由はないっす」

キレイで良い？ キレイで良いよね！ ？

…………まあ、メープル相手にそれはできないんだけど。

「フフフ。今の私はお酒で酔つてゐるから、何しきりつかわかないなあ？」

「全く醉つてなつてみつて見えるのはどうだい？」

おやじく飲んだとしても、ほんの少し口を付けたくらうだろ？

「おや、信じてくれないの？」

「もちろん」

「それでこそ私の好きなハクだよ」

僕は昔から信じじると言つたことはない。そもそも僕は向も信じたくない。ない。

信じじる」と可能性が限られる。それでは眞実にたどり着くのは難

しい。だから疑う事で得られる数々の可能性あら真実を探りたい。
それが僕の考え方。

だつて僕は知ることを常に望んでいるから。

「そんなことは置いといて、私は今何をしようかな～って考えてる
ところなの」

「僕を解放するつるのは？」

希望を込めて言ってみる。

「どうしようかな～…………周りの田があるから…………」

華麗にスルーされた。それと周りの田がなかつたらどうする気なん
だろう？

と考えていたところで、いきなりキスされた。一分くらい。

「（）馳走さま。んじゃ、みんなと一緒に楽しんでこなひ？」
「…………うふ。やうだね」

少し間が空いたのはドキドキしていたからではない。決して。

その後、暴行されそうになつた明久を助けたり、面白く過ごした。

「ハボ話」～のんきと速攻～（前書き）

糖分摂取魔さんの作品『バカとのんきと召喚獣』の田野造とのハボです。

バカとのんきと召喚獣、とても面白いのでは非見てください。

あまり出来は良くないですが、見てくれるとうれしいです。

のんきと速攻

ダダダダダダダダ

ここ、文月学園は高校だ。だけど、今全力疾走していつたのは小学
生くらいの身長だったような……？

「へいへい！面白い物拾つてきたよ～」

見た目中学生な物理教師、杉本秋音は召喚実験室で待っていた僕たちに、

「で？ その低身長君の何が面白いって？」

「低身長君ではなく月野造です。よろしくお願ひします」

「七伏博人。よろしく」

「佐藤楓つす。よろしくお願ひするつす」

「七伏行平、博人の双子の兄です。よろしくお願ひ致します」

「これで各自の自己紹介は終つ」。

それでは、本題に入らう。

「もう一回聞くけど、月野君の何が面白いの? とこつかどついた経緯で連れてきたの?」

「造君は女性の先生方に大人気でね、今日も洋子先生達に追われてたから、暇つぶしに連れてきたってわけ。で、面白いのは……物理フィールド展開!」

秋音姉がフィールドを展開すると、ポンッと音を立てて月野君が消えた。

よく見てみると、消えた月野君のかわりに召喚獣いた。

「ほらほらーーー体が消えて召喚獣に意識が移っちゃうんだよ」

「へえ……それは面白いな。是非とも実験……じゃなくて観察……でもなくて、調べてみたいな。」

「召喚獣に意識ですか……虚む……コホン。手合わせしてみたいですね」

などといきなり行平が言い始めた。

僕も手合わせしたかったのだが……

「うーん、召喚獣勝負ねえ…………うん、許可するよー。ちなみに造君は観察処分者だからね~」

「フィードバックありなんてまさに好都合ではないですか。試験召喚!そして、起動!」

行平は現在物理フィールドがあるのにも関わらず、黄金の腕輪を起動した。

黄金の腕輪のフィールドは干渉が起きず、他のフィールドを破壊する。

よって、現在は地理フィールドとなつた。

行平……得意教科で苛めてみたいとかうつ氣全開だな。

ちなみに丹野君の装備は魔法使いの格好に武器が箒だつた。

まあ、召喚獣の強さは見た目では判断できないから、武器だけで弱いと判断はできない。

海渡なんかが良い例だ。

しかし、あの箒で遠距離攻撃は難しいだらつ。

そう踏んで、行平は遠距離から正確な狙撃を開始していく。

はっきり言って行平は最も得意な地理では、無敵と言つても良い。

月野君もうまく避けようとしているが、点数を活かして高速で動き回りながら射撃をする行平の前では点数がだんだん削られていく。

行平が弾の装填中に、月野君は行動を起こした。

月野君の掛け声と共に、行平が吹き飛ばされる。

「クッ……厄介ですね！」

ギリギリの所で体勢を立て直して、『滑走移動』で足場がない状態でも、踏みとどまつた。

一旦攻防が終わり、両者共に睨み合いの状況となつた。その静寂を破つたのは――

ドバン！

「「「造君、大丈夫ですか！？」」

造君LOVEな先生方だつた。

何この力オス。

「ふむ、形成不利。というよりこの後の展開が予測できるので戦略的撤退させていただきます」

行平は恭しく礼をして、颯爽と去つていつた。

そうなると、先生達の怒りは行平に向けられることとなり、今度は方向性を変えて別の人物へと襲いかかった。

「造君！何かおかしな部分があるかもしれないの、保健室に行きましょ。いえ、なにもなくとも行きましょ！」

「嫌です！」

この会話から、月野君の苦労が窺えるようだ。

しょうがない、助けよう。

メープルと秋音姉に田配せして、合図を送る。

まずは秋音姉が閃光弾で軽く視界を奪つ。
何故持っているかは聞くべきじゃない。

「ほら、行くよー！」

ぼけつとしていた月野君を拾つて肩に担ぐ。

それほど身長が高いわけではない僕でも楽に運べるくらい、月野君は小さかつた。

行平にいつも身長で負けてるからちょっと優越感。

後ろから黒いオーラが感じられる恐怖の鬼じつじだったが、なんとか撒くことに成功した。

「なかなかスリリングでしたね」

いつの間にか合流した行平が全くスリリングを感じたように見えない顔で感想を言つてくる。

「さて、今日はせつかく逃げられたんだから、早く帰った方が良いだろ?」「

「今日はありがとうございました七伏君、佐藤さん、杉本先生」

「七伏は一人いるから、僕のことは博人と呼んでもらってかまわないよ」

「わかりました。えーと、ハクさん!」

ハクさん……どうやらあだ名のようだ。

「それでは、私も名前で呼んでください」

「私もメープルと呼んでもらいます」

「了解です。ユキさん、メーさん。自分のことも、呼び捨てにしてください」

「これで結構親睦は深まったかな?」

「何か困ったことがあつたら呼んでよ。興味があつたら助けるからだ」

「バイバイっす~」

手を振つて造と別れる。なかなか面白い人物だったな……。

また合ひつきが楽しみだ。

ちなみに余談だが、用事があつたので校内に戻つたら、先生達にエ
ンカウントして、鬼ごっこ第一弾がスタートした。

「ハボ話」～のんきと速攻～（後書き）

閲覧ありがとうございます。

僕とメープルと遊園地（前書き）

なんかいろいろおかしき気がしますが、どうぞ読んでください。

僕とメープルと遊園地

僕とメープルと遊園地

「ねえねえハク。如月ハイランドはいつ行く？」
「そうだねえ……今週末は空いてるけど」
「じゃあ、今週末にしよ？そういうえばこんな普通っぽいデート始め
ただね」
「うん、確かに」

今までのデートは山か図書館か博物館のどちらかだ。
お互いの好きなことをした方が楽しめるから、というわけだ。

そして週末、如月ハイランドのゲート前にて。

「ところでメープル
「うん、なに？」
「遊園地つてどう楽しむ物なの？」

遊園地つてなにが楽しいんだ？よくわからん。

「私もアトラクションの楽しみ方については微妙だけど、とりあえず、私はハクと一緒に楽しよ」

ふむ、なるほど。たまにはのんびり一緒に過ごすのも良いだらう。

鷲田はプレオープンと云ひとど、あまり待つことなく係員の前まで進めた。

「いらっしゃいマセ！如月ハイラングへようこそ！本日はプレオープンなデスが、チケットはお持ちですか？」

「はい、これです。あ、ウエディングシフトは必要ありませんよ」「了解でース」

メープルがチケットを手渡す。学園長に頼んで上方に話をしてもらつたのだ。もちろん、ここで式を挙げるのを条件で。

…… できれば僕にも話を通して欲しかった。

「じゃあまずは……ってあれ？下クラスのメンバーがいるよ。」

広場の方を見ると、明久、秀吉、ムツツリー、島田さん、姫路さんがいた。

「何してんの？」

「あ、博人達も来てたんだ」

このメンバーがここにいるとなると、田的是は一つだろ？。

「坂本夫妻の結婚の手伝いか……面白いそうだね」

「私達も手伝うつす」

「え？でも一人はデートなんじや……」

「私達は面白いのが一番つすから」

というわけで協力が決定。

また後で連絡すると言つことで一旦別れた。

ジエットコースターの運動の計算や、文学的なお化け屋敷のお化けの解説をメープルから受けたりして楽しんだ後、明久から電話がかってきた。

『もしもし博人？ちょっとお願ひがあるんだけど』

「うん、どんな内容かな？」

『雄一達の前でイチャイチャして、霧島さんを動かして欲しいんだ』

「了解つす！」

何故かメープルが返事していた。

『どうかイチャイチャつて……』

まあ何言つても仕方ないので作戦決行となつた。

雄一と霧島さんが向こうから歩いてきて、タイミングを見計らつて

メープルが抱きついてきた。

さうやらのメープルの髪が僕の首をくすぐる。

チラッと雄一の方を見るところからを観察していた。
そろそろメープルは脣を奪ってきた。

「…………雄一」

「田を瞑つて迫つてくるなー。」

霧島さんが感化されたのか、雄一に迫っていたが、ダッシュで逃げ
ていってしまった。

これでだいたいミッション成功なんだけど……

「…………んむ…………はあ…………」

いまだにキスされていた。どうすればいいんだろ？
といふかいつもいつでも主導権握られっぱなしのよつた気がする。

「ふう…………」馳走さま

「…………で？ 次はどうするの？？」

「うへん…………ってコキじゃないあれ？」

メープルが指差した方には、行平と秋音姉がいた。
どうやら行平のプレミアムチケットを使つたようだ。

「これは…………追跡するしかないね？」
「うん。なかなか楽しめそうだ」

結果―――結構良い感じだった。

「どうしようハク。まさかこんな展開になるなんて」
「まあ、あの二人はあれで良いと思うよ。少なくとも何か言つ氣は

ないね」

「うん、そうだね。……カメラカメラ」

メープルはカバンの中のカメラを探しているようだ。
証拠写真か？それとも後々の交渉材料か？

行平には弱みを握られまくっているから、少しでも役に立つものを
集めないと、抵抗すらできない。

ふと時計を見ると、そろそろ帰宅するべき時間となっていた。

「そろそろ帰ろう。メープル」

「うん、楽しかったね」

友人を嵌めたり、追跡したりと普通の「デート」とは全く違うだろうが、
僕にはとても楽しかった楽しかった

手を差し伸べられたので、きちんと手をつないで帰った。

僕とメープルと遊園地（後書き）

感想をいただけると嬉しいです。

僕とプールと水着姿？

僕とプールと水着姿？

如月ハイランドのデートの翌週、僕は明久の家にいた。

現在はハンティングアクションゲームを楽しんでいる。

「おい、明久！ 餓こっちあるんだから速く来い！」

「いまが攻撃チャンスなんだよ！」

「餓にかけたほうが楽だろうが！」

「あつ！ ピヨつた！」

「ふざけんな！ もう二落ちしてるんだから後がねえぞ！」

「そう思うんなら粉塵でも……あ」

「くそ！ 明久の所為で失敗じゃねえか！」

「雄一がサポートしないから悪いんだろ！」

「何だと！ 自分の失敗を人に押しつけるのか！」

「その言葉そつくり返してやる！」

どちらにしても僕がほとんびダメージあたえたんだが。

明久と雄一がテーブルの上のコーラを取る。

「何だ、やるのか？」

「いつかは決着をつける必要があると思っていましたからね」

ちなみに明久に良いゲームの選び方や、中古の買い方などを教えた
ら、だいぶ生活が潤ってきたため、飲み物程度なら常備してあるの
だ。

両方ともコーラのボトルを構え、機をうかがう。台所の水滴が落ちるとともに勝負にでた。

△所の水滴が落ちるとともに勝負にてた

シャガシャガシャガシャガ（ヘッドホト川を掘る音）

音)
バタバタバタバタ（コーラが目に入った明久と雄一がのたうち回る

「『目がつ！』『目がああああつ！』」

「二つの頭がもんで『いいのやつだ。』

「全く、こんな」とでふやけてないで。雄一はそのままだと気持ち悪いだらうから、先にシャワー浴びてきな」

「明久はまずは雑巾で床を拭く」「はーい」

これ以上変な戦いを続けても意味ないので、ひとつと処理をする。

「あ、そういえば―――お金払い忘れてたから今日はお湯が出ないんだった」

『ほわああーーっ！？』

ガチャツ ズカズカ

「……先に言えや」「ラ」

「『じめん』『じめん』。言い忘れてたよ。えっとね、心臓に近い位置に一

八

「冷水シャワーの使い方は説明しなくていいから」と

「でも僕の家のお湯が出ないといふ事実は変わらないし……」

「外?あ、そつか。雄一の家に行くんだね」

「それでもいいんだけどな。どうせならシャワーだけじゃなくてプ

「ポーラ」とは

スパリゾートはちょっと遠いから違つてしまふ。

「ああ。シャワーもプールもあって、ここにから近くて、尚且つ金もかかるない」というがあるだろうが

シャワーもプールもあって、金がかからないといえば学校だね。

「オッケー。すぐに用意するよ。雄一は水着どうするの？」

一 僕はこのまま帰るね

「俺はホケサーハンツで泳ぐぞ。水着と対して変わらんないだろ?」「つよーか!。そりゃ専門家、また学校で

「つてことがあって、おかげで散々な週末だったよ」

週明けの教室で、明久がプールで西村先生に捕まつてプール掃除を任されたことについて愚痴つていた。

「そうじゃったのか。それは災難じゃたのう……」

秀吉は気遣うような表情を浮かべているが、明久達のあれは自業自得だ。

「オマケに今週末はプールの罰掃除だよ。はあ……」

「まあそう言うな。褒美つてほどじゃないが、『掃除をするのならプールを自由に使ってもいい』と鉄人に言われたぞ」

「え？ そうなの？」

「ああ。だから秀吉とムツツリーと博人も今週末にプールに来ないか？ ただし、ムツツリーと博人には掃除を手伝つてもらうけどな」

「…………」

「うん、別に構わないよ」

ムツツリーは掃除ということで返答に悩んだようだが、プール掃除程度は問題ないので軽々しく受けける。

「ちなみに、姫路と島田にも声をかけるつもりだ」「あ、雄二。メープルと行平も呼んで良い？」「もちろんだ」

「……ブラシと洗剤を用意しておけ」

「どうやら女子が来るところ」とドムツッコーーは引き受けのりしこ。

「つむ、そうじやな。貸切のプールなぞ、こんな時でなければなかなか体験できんじやうつし、相伴させてもらおうかの。無論、ワシも掃除を手伝おう」

「え？ 結構大変だと思ひけど、いいの？」

「つむ。お安い御用じゃ」

秀吉も参加してメンバーが結構増えたので、プール掃除も結構楽になるだらう。

「んじや、あとは向こうの一人だな。おーい、姫路、島田ー」

「どうしたの坂本？ 何か用？」

「呼びましたか、坂本君？」

「二人とも今週末は暇か？ 学校のプールを貸切で使えるんだが、良かつたらどうだ？」

「え……？」

プール、という単語に二人は一瞬反応した。メープルに話したときはどんな反応されるだろう。

「あ、さては一人とも予定があつたりする？」

そういうことではないぞ、明久。

「い、いや、別に予定はないんだけど。その、どうしようかな……？」

「プールっていうと、やっぱり水着だし……」

「そ、そうですよね。水着ですよね……。その、えっと……」

「まあ、お前らにほお前らの悩みがあるんだつが……。一つ言つておくと、秀吉は来るぞ、水着姿を明久に見せに、な」

「ひ、卑怯よ木下！自分は自信があるからって！」

それにしても水着、かあ……

メープルはどうなんのだろうな？

べ、別に気になつてなんかないんだからねつ！

ツンデレっぽく言つたのと、メープルの水着が気になつていないと
いつことで一重の意味で「冗談だ。

ま、水着は明日になればわかる。

「とにかく全員オッケーのようだな。んじゃ、土曜日の朝十時に校門前で待ち合わせだ。水着とタオルを忘れるなよ」

そんな雄一の締め言葉と同時に、西村先生が教室に入ってきた。

僕とプールと水着姿？

僕とプールと水着姿？

「おはよー。絶好プール日和だね」

やつてきた週末。

抜けるような青空の下、校門前で待っている僕たちに明久が手を挙げて挨拶したきた。

「おはよみづや明久。良い天気じゃな」

「おはよみづ」ざこます明久君。今日は良い一日になりそうですね

「雲量〇、快晴だね」

「おはよっすー」

「今日は良い天気で良かつたですね」

なにやら明久が拳を握って喜んでいるが、放つておこう。

「ムツツリーー。おはーーーー」

「…………（カチャカチャカチャ）」

明久はムツツリーーに声をかけようとしていたが、やめた方が良いだろう。なにせここまで鬼気せまっているのだから。

「ムツツリーーは鼻血で倒れないように輸血の準備をしていくんだ

つて

「最初から鼻血の予防を諦めているあたりが男らしいよね」

準備といえば、メープルは新しい水着を買つたらしい。

買い物についていこうかと訪ねたが、秘密にしたいからと断られた。
……後ほど更衣室に連れ込んだけばよかつたなどと言つていたのは気がかりだつたが。

まあ、家を出る時から気合を入れていたので、楽しみだ。

その後島田さんと島田妹が現れ、着替えに移つた。

——そして十分後——

「ハークッ！」

ドンと後ろから軽い衝撃とともにメープルがやつてきた。
……背中に柔らかい感触がする。

「メ、メープル…ちょっと離れ——」

最後まで言葉を継げなかつた。

紫を基調としたビキニ。布の面積もどちらかと言えば小さめだ。メープルの整つたスタイルと合つて、見惚れてしまつた。

「見惚れちゃつたすか？ハク」

「…………うん。とっても良く似合つているよ

メープルがニヤニヤしているので、素直に言つひととペースをいつ

ちに持つてこよう。

「…………ふえ？」

「いつかはまばづぐんだ。

「今まで何回か見てきたけど、今回のが一番良いと思つよ
「…………ハク、…………ありがとう～」

すっかり赤くなつたけど、流石はメープルといったところで、自分の水着姿をさらに有効活用するため、またくつついてきた。

…………わかつていた…………わかつていたんだよ。この程度じゃメープルのペースを完全に崩すことはできないって！

「さあさあ 今日のプール掃除の監督といつ建前でやつてきた杉本先生だよ～」

何故か秋音姉も来ていた。

「おや、なかなか似合つていますよ
「こやははー、ありがとー」

行平がなかなかうまく褒める。

自然な流れで褒める、これは重要かもしねりない。

抱きつかれたままメープルと一緒に雑談していたら、（お一人とも見せつけてるんですか？b y行平）はて？何のことだろう。残りの人も来て、明久がトチくるつたり、ムツツリー二が死んだり、雄二の目が大ダメージを受けたり色々あつたが、今は落ち着いてプール

を楽しんでいる。

すると、いきなり足を掴まれて、水中に引きずり込まれそうになつた。

少し抵抗すると、あつさり諦めてくれたので、水中から足をつかんだ人物を引き上げる。

「何やつてんの? メーブル?」

「明久君が『水中鬼』ってゲームを提案したんだけど、水中に引きずり込んで、人工呼吸をしたら勝ちなんだつて」

「僕は溺れてないから人工呼吸は必要ないよ。残念でした」

するとメーブルは口を一やりと歪めて、

「おや、私の田には今にも助けが必要なように見えるけど?」

と言つた。

なるほど。事実はどうでも良いから、とにかくキスをするとこういふとか。

ならばーー

たたかう バッグ
ポケン にげる

逃げるしかない。

「逃がさないつすよー」

水の中をクロールで進む。

……プールから上がりなきや逃げ場なくない？

その後僕の心配通り、プールサイドに手をかけたところでタイムロスして、やられてしまった。
何がとはさつき説明した通りだ。

そして、いつの間にか工藤さんが来ていたが、特に問題ないだろ？
そんなことより重要なのは——

「——実は、今朝作ったワッフルが三つ」
「第一回つ！」（雄一の声）
「最速王者決定戦つ！」（明久の声）
「ガチンコ水泳対決——つ——！」（明久と雄一の声）
「イエーイ！」（秀吉とマッシュリーの叫びの手）

この殺人ワッフルだ。

でもまあ、水泳対決なら丁度良い。おそらく生き残れるはずだ。

「明久、ルール説明だ！」
「オッケー！ルールはとっても簡単。ここにプールを往復、速くゴールしたひとの勝ちという、誰にでもわかる普通の水泳勝負です」

そう、普通の水泳勝負だ。三位以内に入らねば死ぬということをのぞけば。

「ハク！がんばるっす！（大丈夫、いざとなつたら、うまくフォローバスれるから）」「うん、がんばるよ（お願ひ）」

建前を貼り付けてのアイコンタクト。長年一緒にいたので、意志の疎通は樂々できる。

しかし、重要なのは明久と雄一の動きだ。妨害にでるか、本氣で勝負してくるか。

「位置について——よーい、スタートつー

「「くたばれえつー!」」

工藤さんの合図と同時に明久と雄一はお互い全力で飛び蹴りを放つていた。

「「くわっ!…やつぱり雄一も同じことを考えていたねー!?

どうやら僕たちを妨害するのは難しいので、残る一枠に入るため他のヤツを蹴落とすつもりのようだ。

それなら好都合。ひとつとゴールするだけだ。

ゴールまであと数メートルというところで明久たちがプールに入ってきたが、樂々ゴールする。隣を見ると行平も同着だった。

プールから上がつて水を見ると、真っ赤に染まっていた。

どうやら秀吉の水着がされたのが原因で、ムツツリーが鼻血を出したらしい。

……流石にこの量は死ぬんじゃないかな?

「あ、木下っ…とにかく胸を隠しなさい…十厘の血が止まらないから…」

「こ…イヤじやつ…ワシは男なのじゃ…胸を隠す必要はないのいや…」

「木下君、我が儘言ひ切らダメです！土屋君が死んぢやいます！」

「…愛子。救急車の手配、頼める？」

「はーい。やっぱFクラスの皆は面白いねえ」

「バカなお兄ちゃんたと、いつも楽しそうで羨ましいです」

といふか今気づいたんだけど秋音姉がいない。おそらく処理が面倒だから逃げたんだろう。

僕も今すぐにでも逃げ出したい。

結局ムツツリーは懸命な手当でなんとか生き延びた。

……ああ、水上！」走りやりたかったなあ
……
この機会じやないとできないだらつ。

バカテスト？（前書き）

すっかり忘れていたバカテストです！

バカテスト？

バカテスト？

第一問（化学）

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火をかける鍋に製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為、危険であるといつ点。

合金の例……ジュラルミニン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目といひつかけなのですが、姫路さんは引つかかりませんでしたね。

七伏博人の +

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払つていなかつたこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

七伏博人のツツ ノミ

そもそも化学の問題なんだから、経済的なことは問題としていない。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（すゞく強い）』

教師のコメント

すゞく強いと言われても。

七伏博人のツツ ノミ

せめて『未元物質』くらい言つてくれないかな。

七伏博人の豆知識

『ウツド合金という合金は、融点が低く、七十度で溶ける』

第一問（国語）

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい

- 『（1）得意なことでも失敗してしまつ』と
- 『（2）悪いことがあつた上に悪くなる』ことが起きる喻え

姫路瑞希の答え

- 『（1）弘法も筆の誤り』
- 『（2）泣きつ面に蜂』

教師の「メント

正解です。他にも（1）なら、『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、（2）なら、『踏んだり蹴つたり』や『弱り田に祟り田』などがありますね。

佐藤楓の+

弘法つながりつすが、弘法は筆を選ばずといふことわざがあるつすが、後に本人が訂正していく、弘法も筆を選ぶつす。

土屋康太の答え

- 『（1）弘法の川流れ』

教師の「メント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

- 『（2）泣きつ面蹴つたり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

七伏博人の豆知識

『蜂に関連して。ミツバチとかの社会性のハチは周りに仲間がいないと寿命が短くなるらしい』

第三問（化学）

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『C₆H₆』

教師のコメント
簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

七伏博人のツッコミ

化学式でカタカナを使つお前にビックリだ。

吉井明久の答え

『B - E - N - N - E - N』

教師の「メントあとで土屋君と一緒に職員室に来るよつ」。

七伏博人のツッコミ

そもそもお前は化学式をどんなものだと思つてゐるんだ?

僕とバイトと頼まれ事

僕とバイトと頼まれ事

『スマン！助けてくれ！』

電話で第一声がそれでもわかるわけがない。

『いきなりどうしたの？ 海渡』

『いや、実は俺喫茶店ラ・ペディスの副店長やつてるんだよ』

『前にも聞いたね』

確かに幼なじみの清水美春さんの父親の手伝いをしているうちに任せられたらしい。

『で、店長が奥さんと娘さんに逃げられた』

『清水さんとそのお母さん？』

『ああ、理由は聞かないでくれ。とにかく、そのショックで店長がイカれてバイトの人かいなくなっちゃったんだ』

『僕に手伝ってほしいと？』

『ああ。できれば行平も頼む』

確かに行平は接客に向いていそうだ。

「わかった。僕は問題ないけど、行平には確認とつてみる」

『助かる』

「じゃあ、また後ほど』

行平に聞いたところ問題ないそつで、海渡からバイトの詳細を聞き、土曜日の開店一時間前に『ラ・ペティス』に集合した。

「どうして博人がここにいるの？」

バイトの人気が来るとは聞かされていたが、それが明久達だったようだ。

「僕は海渡に頼まれたんだよ。明久達はバイトだよね」

「さて、皆集まつたな。今日は店長が美春達に逃げられたショックでグロッキーだから、俺が仕切ることになる」

そう言って持つてきた制服を渡していく。

……秀吉には女子用のヤツだ。

「性別が合わないのじゃが」

「ここにいるのは全員男子だ。華がなくなるから最も適した木下が女装してくれ

どうやら海渡は秀吉をきちんと男子と認識しているようだ。最近性別を些細なこととして捉えていたヤツが多いから少しほつとした。

「やつじやな、ここにいるのは『全員男子』じゃから仕方あるまご」

きちんと男子として認識されたのが嬉しいのか、上機嫌で「了解してくれた。

ロッカー室はあまり広くないので、まず僕と行平から着替えた。

「博人と行平。お前たちは少しキツいと思うが、ホールと厨房を掛け持ちしてもいい。……奴らは何するかわからないからな」

最後の一言には激しく同感だ。

全員着替え終わり、再集合する。

「ホールは吉井と木下。厨房は俺と坂本と土屋が担当する。博人と行平は最初は厨房で作り方を覚えてくれ。その後臨機応変に対応してくれ。今日仕切ってるのは俺だが、立派な仕事だ。気を引き締めてやってくれ」

「…………了解!」

現在僕は厨房、行平はホールだ。

『エスプレッソ、レモンティー、シャーベット』

「わかったよ。あ、三番にこれ持つてつて」

客が結構来していく、休む暇なく料理を作り、渡していく。

『ホットココア、オレンジジュース、ミルクティー、チーズケーキ、ホットケーキ、モンブランを一つずつと、頑張ってを三つ』

「なんでお前は客に勧まされているんだ?慣れないだらうけど落ち

着いていりつよ

そして、時間が流れ、

——カラソロロン

「「いらつしゃこまゼー」」

現在ウェイター中の僕は入り口付近で明久と一緒に挨拶した。

「ハク、遊びにきたつす」

「ほんにちは、明久君」

「メープルいらつしゃーい」

「え？ 姫路さん？」

やつてきたのは、メープルと姫路さん、続いて島田さんと霧島さんだ。

……霧島さんはもの凄い勢いで厨房に向かっていったが。

「やつてるわね、アキ。へえ、結構似合つてるじゃない」

「あれ？ 美波まで？」

明久が思わず来客にボーッとしてるが、仕事中だというのを忘れてもらつちゃ困る。

「何名様ですか？」

「六人つす。一人はここにいて、後一人は遅れてくるつす」

メープルが体をずらして影から秋音姉が出てきた。

「やつほ～。しつかりやつてるね～？」

「の人士曜日に仕事は無いのだろうか？」

『……ゆづじ。妻への隠し事は浮氣の始まり』

『なんだ！？』いるはずのない翔子の声が聞こえるぞー？呪いか！？』

『霧島、厨房は関係者以外立ち入り禁止だ』

『……でも私は雄二の——』

『だから坂本、お前ちょっと休憩。早めに話付けてこい』

『は？イヤイヤイヤイヤイヤイヤ俺はまだ仕事が——』

雄二を連れて霧島さんが戻ってきた。海渡め、なんて良い仕事をするんだ。

「『』注文はお決まりですか？」

「うーん……何がいいでしょうか？」

「……どれも美味しそう」

あの人達の接客は明久に任せとて、他の客を捌くとじよつ。

数分後——

「な、なんだ！？ビリして翔子がいきなり戦闘態勢になつているんだ！？」

「明久君…やつぱり美波ちゃんとデートしたんですね！？」

『キンヂ

「秀吉、ちよつといにいかしりっ。」

なにこのカオス？

こいつらの関係者だと思われたくないのか、メープルと秋音姉は離れた席でゆっくり談笑していた。

とこうかこの状況をどうおさめると、無理難題に頭を悩ませていると、

「お前たちはなにをやっているんだ！！！」^{レジではふざける場所じゃない！マナーが守れないなら出ていけ！」}

だいぶ怒った様子の海渡が出てきた。

さすが副店長。全員静かになったよ。

「お客様、大変失礼致しました。^{どうぞお気になさり下さい}」^{ゆづくつ}
トーレー

海渡が客に頭を下げ、フォローを入れたところで、

――カラソロロン

店のドアが開いた。

「どう、海渡？お父さんは反省してた？」
「ああ、だいぶショックを受けてたぞ」「そう、それならそろそろ戻りましょう」「それよりも美春。手伝ってくれないか？」「ええ、わかりました」

「OK。仕切り直しだ

その後もバイトはつづいて、結構うまく仕事ができるようになった。

明久達は給料が少し減額されたが、まあ妥当だわ。

それにしても、今日は変なことが起きなくて良かったなあ……

私と彼と主導権と―――（前書き）

これから二回はオリジナルの短編で、その後三巻に入ります。

私と彼と主導権と――

私と彼と主導権と――

皆さん今日は、佐藤楓、渾名はメープルです。

今回は、私の視点でいきます。

今回の主役ですから。サブタイ通り。

さて、今回は私たちの日常を紹介する話です。

それでは、開始です。

「ハク、起きて~」

定番イベント、幼なじみに起しがれる……はいいんだけど現在六時。
正確には五時五九分。

ハクは六时になると起き出すので、それまでに起しがないとイベン

トにほならないのだ。

まあ、七伏家に泊まっていたから、それほど難しくはなかつたわ。

それにしてもハクの寝顔は可愛いなあ

「うん？ 朝なの？」

全く眠りでなく目を開けてすぐに起きあがつてくる。

隣を見るとコキも起きてきた。

六時になると起き出すとかこの家の人はやつぱりどいかおかしい。

「おはよう、メープル」

「おはよう」

私の恋人さんはもう覚醒して、さつきの可愛らしい顔より少し凜々しくなつた。

……「れだけ格好良くて可愛いんだけど自己紹介で

『好きな昆虫はルリタテハ、好きな爬虫類はサイドワインダー、好きな鳥類はハシブトガラス、好きな両生類はアベコベガエル、好きな魚類はヤマメ、好きな軟体動物はタガヤサンミナシです!』

と言つたら台無しだと思つ。

私はそれも含めて愛しているけど。

「それじゃ、僕はちょっと外行くけどメールも来る？」

ハクの朝の口課はランニングがてら昆虫採集だ。

「もちろん。着替えるからちょっと待つてね。あ、覗いても良いよ」

ハクは顔を紅く染めて着替えを取りに行ってしまった。
ああ……」ハグヒーとヒルも可愛いいな。

ランニングも終わり、休日なのでハクと一緒にまつたりしていると、良いことを思いついた。

本を読むのに集中していて、周りがあまりよく見れていらないハクに気配を消して近づく。

たとえ集中していても、気配を消せないとすぐつかれるのがめんどくさい。

「…………ふーっ」

「ひやううー」

そつと耳に息を吹きかけると、可愛らしい声をあげて反応してくれた。

部屋の隅を見ると、ユキがキッチンとビートオ撮影したくれていた。

グッジョブ！流石わかってるね。

「ななな、何！？いきなり！」

「ねえねえ、ゲームしない？」

「うん、いいよ。何やる？」「..」

「えつりこじとをやる？」「..」

「却下あああああーーー！」

「冗談だつて…………。44ダブルで勝負しない？」

44ダブル…………因対四のダブルバトル。ハクが一番得意なルールだ。

ハクの戦法のスピードと火力の両立をしたトリパはかなりやりづらい。
耐久も結構あるし。

ゲーム名はあえて出さない。

「OK。それじゃ、始めよ！」

よしよし、うまくのひてきた。

「ハクが一体倒す」と私が一枚脱いで、私が一枚倒す」とに一枚

脱ぐね 「

「…………〔冗談は置いといて、何でそんなに僕を誘惑しようとするの？そんなことしなくても僕は…………その…………メーブルの」と、ちやんと好きだよ」

「それはわかつてるけど…………ハクは魅力的だから、どうなるかわからないから。だから、私から逃げられないようにしないこと」

すると、ハクは私を引き寄せてキスをしてきた。

「もうメーブルから、逃げられないよ。本当に好きだし。…………つてあああああああー！死にそうー何これ！恥ずか死ぬー！」

格好いいセリフも最後で台無しだ。

「それじゃ、これからはみんなに見せつけて、ハクが私を愛していることを知つてもらわないとな」

「いや、外では止めてほしいんだけど…………」

「イヤ」

「…………はあ…………」

ハクは主導権を握り、と頑張っているけど、「なんんじゃいつまでたつても私の尻に敷かれたままだよ？」

でも、本当に今は楽しいなあ。

願わくば、ハクといつまでも共にいることを。

少女は昆虫少年と共に歩み、彼を支え、愛し、抱擁する。
そして共に笑いあう。

僕と紳士との弱點と――

僕と紳士との弱點と――

「行平！お願いがあるんだ！」

ある休日、僕は行平に泣きついていた。

「ほう、なんでしょう？」

「僕つてさ、いつもいつもメープルに主導権握られっこりやね？」
「ええ、そうですね」

アツサリ即答された。自分から問い合わせたとはいえ、なんか悔しい。

「だから、少しあんとかしたいということだよ」

「ふむ、こつかはそんなことを聞かれるんじゃないかと思いまして、回答は用意しておきました」

おおっ…さすがマイブランザー。気が利いている。

「私の回答としては――――――

「無理です。あきらめましょう」

「…………は？」

『無理です。あきらめましょう』 ですと?

「行平にはマル秘弱点帳があるんでしょ?」

「ええ、確かにメープルについての交渉材料はありますね。しかし、脅迫材料は一つもありません」

「じゃあ、その交渉材料で良いから!」

「メープルに対しての交渉材料の内9割は博人を犠牲とするもので、残りは過去の失敗程度で、有力といえるカードではあります」

僕を犠牲に交渉するってどういうことだ。

「それに対しても、博人への脅迫材料はメープルとのキス画像が13枚。同じくメープルとのキス動画が2本。黒歴史が一つ。メープルにばらしたく無いような会話の録音データが一つ。どちらが不利か一目瞭然ですね」

怖い、怖いよこの人！

「まあ、もしもメープルに対しての良い材料があつたとします。それを突きつけたあと、どうなると思います？私の予想はお仕置きと称して色々なことをしていくと思つのですが」

『「こんなことを調べちゃうなんて……悪い子にはお仕置きだね」と言しながら迫つてくるメープルが鮮明に想像できる。

マル秘弱点帳が最後の頼みの綱だつたのに……

「しかし、まあなんとかする方法がないとは言い切れませんよ？」

「そんな言い方をするつてことはなんにか裏があるんでしょ？」「

それもおやじくモロに僕が犠牲になるヤツが。

「別にそんなに難しいことではありませんよ。ただ博人が積極的に出て、襲つぐらいの勢いで行けばいいんですよ？」

「できるかあ！」

茶田つ氣たっぷりに爆弾投下した行平に、せめてもの抵抗として大きな音立ててドアを閉めて逃げ出した。

『「クククッ。少なからず今の言葉を気にするでしょうから、どんな展開になるか楽しみですねえ」』

僕が出て行つた行平の部屋には、そんな呴きがあつたそつた。

「あれ？本当にどうしたの？」

積極的に……か……

「おりょりょ？反応がないね？」

『ただ博人が積極的に出て、襲うぐらいの勢いで行けばいいんですよ』

「そうだよね。入籍予定だからね」

「入籍はしていない」

最初っからメープルペースだ……

「お出迎え」苦労様、旦那さん

「いらっしゃい、メープル」

軽快な声と共にメープルが家にやつてきた。

「お邪魔しまつすーー」

襲ひ……はなしとしても、少しごりごは効果あるかもしない。

「お～い、聞いて――」

僕の顔を覗き込むようにしていったメープルの唇を奪ひ。

そのまま抱き寄せ、舌を入れる。

ヤバイ恥ずかしいぢうじょう嫌われないかな大丈夫かなこのあとどうすればうわああああ――！――！

だいぶ一人で悩んでいると、いつの間にかソファーの上にメープルを押し倒しているような格好になっていた。

すぐさま離れて、土下座する。

「自分調子くれてました！」めんなさい、「めんなさい」「めんなさいごめんなさい」「めんなさい！」

ガシッ

額を床にすり付けていると、メープルにしっかりと掴まれた。

「どうしてそこまでやめちゃうの？期待してたのに……」もつ怒ったからね――

そのまま襟首を掴まれて寝室に連行される。

「今日は全面的にハクが悪いんだよ？しつかり代償は払ってね？身

体で「

結論、積極的に出でもやつぱり無理。おとなしく尻に敷かれるしかない。

「まさかにこまでつまくいくとは思いませんでしたよ。それにしても今日は運が良いですね。まさか博人がメープルを押し倒す動画を入手できるなんて」

七伏行平。紳士で名の通っている彼はサディスト成分も含んでいる。

そんな彼のいじり相手は主に博人。

そして、彼の持つ弱点帳。

そこには文月学園に在籍するほとんどの人間の弱みがかかっているらしい。

少々うを含んだ紳士は、過去も今日も未来も昆虫少年《半身》と、最高の相棒であり続けるため、日々に刺激を求める。

僕と従姉とお義姉をさて——（前書き）

はい、こつも通り甘く仕上がつました。

そろそろまとめておけらねば……

僕と従姉とお義姉さんと――

僕と従姉とお義姉さん? と――

「さて、今回は新しい召喚実験、やってみよう」

卷之三

召喚システムの実験室に呼ばれ、ノリノリで無駄にテンションをあげていく。

「テーマは『召喚獣の装備』。今から召喚獣の装備をランダムで変更するから、それで操作してね

「試獸召喚」

キーワードに合わせて幾何学模様が浮かぶ。

現れた召喚獣はいつも通りの武器を持つていた。

「変更するよーー！」

言葉と同時に召喚獣が光に包まれる。

そして、僕の装備は皮の鎧と、短剣になっていた。

メープルは鎖鎌、行平は投げナイフに変わっていた。

動作を確認してみても、特に異常はなく、動かしやすかった。

メープル達も同じような様子だ。

「次いくよ！」

また召喚獣が光に包まる。

今度の武器はジャージとアイスピックだった。

今度はメープルと行平は、蛇腹剣とダーツだ。

「ふむ……やっぱりある程度召喚者の特徴が出るみたいだね」

確かに僕の装備は、機動性が高いもの、メープルはテクニック、行平は遠距離系の武器だった。

「うん、今日はここまでデータ取れれば良いかな。また後で実験して、回数を重ねてみよう」

とこつわけで、今日は解散となつた。

今日はメープルの両親の帰宅が遅くなるので、メープルも交えての食卓となつた。

そこまでは良い。

ただ、もつたいないからという理由で、秋音姉が貰い物の酒を飲んでしまったのを止められなかつたのが間違つた。

「ふつふつふ」 良いではないか良いではないか」

「ちよつ……秋音さん…？」

秋音姉が酔つ払つてしまい、手がつけられなくなつてしまつた。

「あつ…………ダメだつて…………！」

メープルが胸を揉まれて、身動きがとれなくなつている。

「…………『メン、僕を標的にされたくないから、そのままでいて。

「彼氏さんはちゃんと助けないとダメだぞ』

…………なにつ！？

高速移動する秋音姉に襟を掴まれて、引っ張られる。
なんて力だ！

力なく地面に座り込んでいるメープルの方に引っ張られる。

……まずいつ！なんとかスピードを殺して、激突しないようにせねば！

メープルに覆い被さるよつた形で床に手をついてしまつたが、なんとかセーフー——

ガチャン

左手を見ると、床についた手とメープルの手が、手錠で繋がつていた。

「はい？」

ガチャン

右手も繋がれた。

ガチャン

「一人仲良しく、お風呂にトイレ 頑張つてね！」

流石に両手繩がれたら無理でしょう？

つと思つたら、テーブルの上に鍵が一つだけ置いてあつた。

まずは両手封じて無力化してから、後でイベントを楽しむつてことか……

「そろそろ落ち着いてください、秋音さん」

「行君…………だあ～いすき」

「ありがとうござこます」

秋音姉の告白を難なくスルー。救世主だ！その調子で鍵を取り返してくれ。

「断ります」

まだ口に出してないんだが……

「むう～、私は真剣なんだよーねえ、キスしたらわかつてくれる？」

「わかりました。いいでしょう」

行平の答えを聞いて、秋音姉がゆづくつ顔を近づける。

あと数センチ、といったところで行平は手刀で秋音姉の意識を刈り取っていた。

「すみません……その思いに応えるのは、あと一年待ってください

二年後…………つまり卒業後か。

「行平、鍵探して」

「もううん断ります」

「のべそがああああつ！――！」

教師は紳士と約束をする。紳士が彼女の思いに応えられる時がくるまで、彼らの関係は今まま。

僕と従姉とお義姉わざとい（後書き）

感想、誤字報告等よろしくお願ひします。

第三十一問～むりやらカモシカはウシリシ～

第三十一問

新学年になつてから2ヶ月がたち、日の沈む時刻が段々遅くなつて
いる今日この頃。

僕たちはいつも通り三人で登校していた。

「明日から学力強化合宿だね、ハク」

「うん。準備は昨日のうちに終わらせたから、万全だよ」

明日からは学力強化合宿。四泊五日で卯月高原にいくのだ。

「四泊五日なんて、修学旅行みたいで面白そうですね
「僕としてはFクラスに不安があるんだけど」

理由：ヤツらは何をしでかすかわからないから。

「それも含めて面白そりではありますか？」

はつきり言つてそれには共感できない。

少々の不安もしくは多少の不安または微量の不安でもなく現実から
目を逸らせずに実は結構大きく的中しそうだと認めた不安を抱え、

その元凶であるFクラスの教室に向かっていった。

教室のドアを開けると、明久、雄一、ムツツリーのメンバーが額を寄せていた。

「」で選択肢発生。

? 危険なので見なかつたことにして席でおとなしくしている。
? 危険なので少しでも関わつて改善できるように声をかける。

……？ だな。

「三人とも何やつてんの？」

「博人か……丁度良い。話がある」

「あ、僕のほうもお願ひ」

雄一と明久が事情説明中――

各相談を行はずつとまとめると、

雄一『結婚が目前に迫つてゐる』

明久『変態として周囲に認識されたり』

詳しく述べ、

雄一『プロポーズ（偽）が録音されていて、霧島さんに結婚の話を進められそう』

明久『清涼祭のときのメイド服に女装した時の写真が盗撮されて、脅迫されている。無視したら写真を公表』

…………若干今更感があるのは言わないでおこう。

「明久は盗撮写真の犯人、雄一は盗聴の犯人を探せばいいんだね」

「ああ、頼む」

まあ、このぐらいの頼みならいだろ？

「わかつたよ。力を尽くしてみる」

話が終わって丁度良いところに、西村先生がやつてきた。

「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、だいたいのことは今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくよう。まあ旅行に行くわけではないので、勉強道具と着替えさえ用意してあれば特に問題ないはずだが」

イヤイヤ。トランプ系統は必須でしょ？

ちなみにトランプの絵柄は四季を表していて、数字を全て足していくと364。これにジョーカーの一枚を足して365で一年を表しているらしい。2枚目のジョーカーは閏年だそうだ。

「集合の時間と場所だけはくれぐれも間違えないように」「

しおりの集合場所と時間の書かれているページを探す。

どれどれ……Aクラスなんかだいぶ豪華だな。

Fクラスは……

「いいいあ、他のクラスと違つて我々Fクラスは——現地集合だからな」

『『『案内すらないのかよつー?』』』

さすがにこれはあんまりだと思つ。

第二十一問へ せりやらかモシカはウシらしニヘ（後書き）

感想等よろしくお願ひします！

第三十二回～冬に飛ぶ蛾、フユシャク～（前書き）

昆虫は基本冬には活動しませんが、フユシャクは冬を狙って活動します。

ちなみにメスは翅が無く、脚で動きまわります。

第二十二問～冬に飛ぶ蛾、フユシャク～

第三十二問

強化合宿一日目の日誌

七伏博人の日誌

『電車から降り、感じた気温が低いことから、標高が高いことが感じられた。合宿所の辺りには木がけつこうあり、チラッとしたが、キタテハが見えた』

教師のコメント

博人君が普段どんなことを考えているかわかりました。

七伏行平の日誌

『行きのバスの中、メープルが博人について熱弁をふるっていました。微笑ましい光景でした。最近弄るネタが少なくなってきたので、今回の合宿は良い機会になりそうです』

教師のコメント

いつも紳士的な行平君ですが、意外な一面を見ました。

佐藤楓の日誌

『バスの中、優子と愛子にハクについて話すのに熱中してしまった。行平がいつも以上に二コ二コしていたけど、握られる弱みもないし、

からかわっても開き直るので問題なしだな』

教師のコメント

彼との仲が良好なのは良い」とですが、節度を守つておせき合っこしてください。

電車に揺られ、一時間程。

「あと一時間くらいこままでですね」

姫路さんが携帯で時刻表を確認したようだ。

僕の後ろの席に座っている明久はやることがなくて暇そうだが、僕はまったく問題ない。

「異議あり！」

これだけ聞けば何をしているかおわかりだろう。

どんな状況でも逆転させる裁判だ。

これでプレイは十五週目だ。現在は田を隠つてもクリアできる。

ストーリーを楽しみながらクリアすると、時刻は一時十五分を指し

ていた。

「あ、お皿ですね。それなら——」

と、姫路さんが鞄の中から何かを取り出そうとした。嫌な予感がする。

「実は、お弁当を作つてきたんです。良かつたら……」

まづ、「田の前に化学兵器が出現した。

「姫路。悪いが俺も自分で作つてきたんだ」「すまぬ。ワシも自分で用意してしまつての」「……調達済み」「僕も、お弁当があるんだ」

皆自衛策は万全だ。

「やついつわけで、明久にでも駆走してやつてくれ

雄一が勝ち誇った顔をしているが、昔に比べ今の明久の財力はまともになつているから明久も何か用意してあるだろ？

「いめん。僕も実はこいつして惣菜パンを」「おつと、手が滑つた（パシッ）」「……足が滑つた（グシャツ）」「ああつ！パン！僕のパン！」

雄一が叩き落としてムツツリー二が踏み潰した。びっくりするほど連携プレーだ。

「あはは。気をつけてよ。まったく、食べ物を粗末に——」「——してはいけないからな。これは俺が責任を持って処分させてもらおう。明久は姫路の弁当を分けてもらってくれ

「「…………（ガンのくれ合い）」「

「おつと、『ゴメン雄一』。僕も手が——」

「滑らないようにきつしきつ掴んでおいてやるからな

「「…………（メンチの切り合い）」「

さすがに現在は明久に分が悪い。助け舟をだそつ。

「せつかくだからそこ」の四人で分け合えばいいと思つよ

明久から『グッジョブ』というアイコンタクトが、雄一からは『俺を殺す気か！？』というアイコンタクトが返ってきた。

うまく雄一を巻き込めたと思ったが、結果的に明久が姫路さんの弁当を食べて生死の境をさまようことになった。

Aクラスのバスの中——

『せつかくだからハクと一緒に電車で行きたかったつす』
『アタシ達はAクラスなんだからきちんと決まりは守らなきゃだめ

よ

『そこに守らなきやいけない規則なんてあるなら、そんな幻想はブチ殺すべきっす』

『……はあ。それにしても博人も大変ね。Fクラスで一年間過ごすなんて。Fクラスなんてバカの集まりじやない』

『ボクは楽しくつていいとおもうけどね』

『愛子の言つとおり、結構楽しいクラスですよ。それにハクはFクラスを嫌だなんて思つていないつすよ』

『でも勉強のレベルが——』

『《机の上で学べることもあるれば、僕のように昆虫と触れ合つことで学べることもある》ハクが言つたことつす。だからハクは今Fクラスでバカなことをやつて学べることを吸収してゐるつす。ハクにとつては勉強というのは机の上だけじやないつす。いつでも勉強なんすよ。だからクラスがどうとかは関係ないつす。そりや、確かに一緒にの方が嬉しいけど……』

『そこまでアツアツだと、もうあんなことからこんなことまで経験ずみなのかな?』

『いや、まだあんまりーー』

『待ちなさい楓。まだあんまりつてことは少しならあるつてことよね?』

『…………そうこつたのはまだ一回つ』

『えー? どんなことやつたの?』

『ヒミツっす』

『え~。教えてよ~』

『この話はこれで終わりつす。変わりにハクの苦手な物の話をするつす』

『博人の苦手な物なんて想像しにくいわね』

『虫とか蛇が大好きつて言つてたもんね』

『まずは苦い物つす。本人曰わく『苦味』というのは本来有毒物質を感じするための味覚なんだ。だからそれを嫌うのは正当だ!』 だそ

「うひ

『科学的ないいわけだね』

『次に犬が嫌いといつか苦手つす』

『へえ? どうして?』

『それは『あんな凶暴な肉食獣どじや れあえるヤツの気が知れない』
つて言つてたつす。ついつかりると蹴り飛ばしやつになると
つてたつすね』

ふむ、新情報が聞こえたることはありますでしたね。
面白い話は終わってしまったので、ゆっくり景色を楽しむとし
ましよ。』

第三十四問 蝶は死体や腐った果実にもぐる

第三十四問

旅館に到着——は良いのだが、明久がかえつてこない。

現在AED（自動体外式除細動器）を使って蘇生を試みている。

「反応があつたぞ！」

「よし、そのまま続けて！」

その後も懸命な処置を続け、なんとか明久の蘇生に成功した。

「……昨日、犯人が使つたと思われる道具の痕跡を見つけた」

実際の死から逃れることができたので、今は社会的な死について会議中だ。連続で死の危険について考えるなんてこの学園はハッキリ言つてどうかしてる。

「……手口や使用経路から、明久と雄一の件は同一人物の犯行と断定できる」

「そんなことをする人はそうはないから、断定してもよさそうだね」

まあ、この学年に一人もいる時点でおかしいけど。

「それで、その犯人は誰だったの？」

「……（フルフル）」

明久が訪ねるが、ムツツリーは首を横に振った。さすがにこの短期間の調査では犯人まで割り出せなかつたのだろう。

「あ、やっぱりまだ犯人はわからないの？」

「…………すまない」

「僕の方もこれだけの情報じゃ、犯人予測は難しいかな」

「いや、そんな。協力してくれるだけでも感謝だよ」

「…………『犯人は女生徒でお尻に火傷の痕がある』ということしかわからなかつた」

「君は一体何を調べたんだ」

明久の意見に同感だ。普通知り合いでもお尻の火傷の痕の有無なんて知らない。

「…………校内に網を張つた」

そう告げながらムツツリーが取り出したのは小型録音機。これで盗聴を行つたのだろう。

——ピッ 《——らつしゃい》

スイッチを押すとノイズ混じりの声が聞こえてきた。

「随分と音が悪いね」

「校内すべてを網羅したのなら仕方ないだろう」

「音質や精度にこだわる余裕もないしね」

辛うじて女子の声だとわかるが、人物の特定はできない。

『……雄一のプロポーズを、もう一つお願ひ』

これはおそらく霧島さんだ。

独特の話し方とセリフの内容から判断できる。

「しょ、翔子……！ アイツ、もつ動きっていたのか……！」

「よっぽど早く手に入れたいんだね」

『毎度。一度目だから安くするよ』

『……値段はどうでもいいから、早く』

『流石は太っ腹だね。それじゃあ明日——と言いたいところだけど、明日からは強化合宿だから引き渡しは来週の月曜で』

『……わかった。我慢する』

「あ、危ねえ……。強化合宿があつて助かった……」

「タイムリミットが月曜まで延びたね」

『実際は土日に行動ができないから、後四日だ。』

「…………それで、こいつちが犯人特定のヒント」

『——相変わらず凄い写真ですね。こんな写真を撮ってるのがバレたら酷い目に遭うんじゃないですか？』

『ここだけの話、前に一度母親にバレてね』

『大丈夫だったんですか？』

『文字通りお灸を据えられたらよ。全く、いつの時代の罰なんだか』

『それはまた……』

『おかげで未だに火傷の痕が残ってるよ。乙女に対しても酷いと思わないかい？』

それ以降も他愛もない商談が続いた。

「……わかつたのはこれだけ」

「なるほど。それでお尻の火傷の痕つてことか」

「今のお会話を聞いても女子というのは間違いなさそうだな」

「口調は芝居がかっていたけど女子なのは間違いないだろ?」

「……確かに火傷の痕は有益な情報だけじゃ、確かめる手段がないよね? 赤外線でも無理だろ?」

僕の言葉に對して明久と雄一は真剣に女子のお尻を見る方法を考えていた。

「おぬしら、わざわざから何の話をしてもあるのじや?」

「秀吉、実はね——(以下略)」

秀吉はおそらく事情を話せば協力してくれるだろ? 使える駒がふえるのは良いことだ。

「そうじゅつたのか。それにしても、尻に火傷とは……」「そうだ! もうすぐお風呂の時間だし、秀吉を見てきてもうえぱいいのか!」

「明久。何故にワシが女子風呂に入る」ちが前提になつておるのじや?」

秀吉のツッコミはもつともだ。

「それは無理だ、明久」

「そもそも秀吉は男だし、しおりの三ページを見てみな

・「クラス木下秀吉… 20:00~21:00 個室風呂?

「……くそつーこれじゃ秀吉に見てきてもいいことができないー」

「やうこじことだよ」

「どうしてワシだけが個室風呂なのじゃ！？」

……おや、何か大勢の足音がこちらに向かっている。

足音を消す気配もないし、危なくはないだろう。

しかし、嫌な予感があるので布団の入っている押し入れに隠れる。

——ドバン！

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい！」

第三十五問～発見を予言された昆虫キサントパンスズメガ～（前書き）

マダガスカルに生息するキサントパンスズメガは長さ一十センチ以上の距をもつランが存在することから、この蜜を吸える花粉媒介昆虫はいるはずだと予言されました。

けつこう有名なネタでしたね。

あとがきにアンケートがあります。

第三十五問～発見を予言された昆虫キサントパンズズメ～

第三十五問

何が起こったのかと隙間から覗いてみると、女子の大群が乗り込んでいた。

「な、何事じや！？」

「木下はこっちへーそっちのバカ三人は抵抗をやめなさいー！」

どうやら明久たちは咄嗟の判断で窓から脱出しよいつとしたようだ。この状況なら、誰かを生け贅にして隠れるのが一番効果が高いが、明久と雄一はピンポイントで狙われるから、窓から脱出が良い手なのだ。

「なぜお主りあ咄嗟の行動で窓に向かえるのじや……？」

それは今問題じやない。まあ、強いて答えるなら、『慣れ』だらう。

「仰々しくぞろぞろと。いつたい何の真似だ？」

「よくもまあ、そんなシラが切れるものね。あなたたちが犯人だつてことくらいすぐにわかるといふのに」

集団の中から一步前に出て高圧的に言い放つたのはじクラスの代表の小山さんだ。

「犯人？犯人ってなんのことさ？」

「コレのことよ」

「ここからじゅ よく見えない。 いつ たい何だ？」

「…… CCDカメラ小型集音マイク」

「お、ナイス解説だムツツリーー！」。

「女子風呂の脱衣所に設置されていたの」

なるほど、 盗撮か。

「え！？ それって盗撮じゅ ないか！ 一体誰がそんなことを
「とぼけないで。 あなたたち以外に誰がこんなことをするつていう
の？」

「異議あり！」

そろそろこのバカみたいな状況を打破するために押し入れの中から
飛び出した。

ちなみに今の僕のポーズは思いつきり指を指している格好だ。

「一つ聞くけどさ、 どうして明久たち以外盗撮をしないって言える
の？」

「そんなの決まってるじゅ ない！ コイツらの生活態度が——
「あの方、 なんでそんなものが証拠になるんだい？ ハッキリ言つて
一つも道理にかなつていない」
「それでも、 コイツらが疑わしいことには——
「ほんとくだらないね。 君たちは何一つ疑つちゅ いない。 疑うつ

てのはすべての可能性について考へることだ。否定的なことを信じるつことじやない

ああ、くだらない。全く持つてくだらない。

「ならば美春が証言します！」

……は？

「美春はこの人たちが脱衣所に入るのを見ました」

ほひ……面白い、叩き潰してやる。

「裁判長、弁護側からも証言を要請します」

「わかりました。それでは検察側は証人を入廷させてください」

ちなみに裁判長はいつの間にかいた行平だ。きちんと木槌をもつて
いる。

（証言開始）

『あれは合宿場についてすぐのときでした』

『Iの旅館の中を散策していると、怪しい影を見つけました』

『その影を追つていいくと、その怪しい影は脱衣所に入つていきました』

『その怪しい一団は約三分後にそこから出てきました』

『人数は三人でした。そこの三人組と同じです!』

よし、まずは気になつたところを揺さぶつていこう。というか証拠品がないので『つきつける』はできない。

『その影を追つていくと、その怪しい影は脱衣所に入つていきました』

「待つた！一つ聞きたいんだけど、どうしてそのとき先生を呼ばなかつたの？」

「それは―――そんな暇がなかつたからです！」

「異議あり！君はこうも証言している。『その怪しい一団は約三分後にそこから出てきました』と。つまりきみは三分間脱衣所の前にいたわけだ」

「ぐうっ！それは―――そうです！その人達を見張らうとしたからです」

「異議あり！見張らうとした、という割にはその後何もしてないようだけど。少なくともそんな怪しい人物なら、先生に報告するべきだ」

「やつ、それは―――」

よしよし、ここまではうまく攻められた。

しかし、さつとも言つたように僕は今証拠品を一つも持つていない。

これでは清水さんを犯人として告発する事はできない。
ならば、明久を助けるのを優先すべきだ。

「裁判長、『』覧も通りこの証人の証言は信用できません。再度調査

を要求します「

「そうですね、この状況では犯人のヒントすらありません。よって弁護側と検察側に更なる調査を命じます」

よし、これでだいたいやむやにできた。明日になつたらみんな忘
れているだろう。

「よし、これでひとまずは安心——」

僕が後ろを振り返ると、そこにはボロボロの明久と雄一とムツツリ
ー二がいた。

……いつのまに拷問されていたんだ？

第三十五問～発見を予言された昆虫キサントパンスズメガ～（後書き）

アンケートです。

四巻の内容についてなのですが、美波がキスするあたりのイベントの発生についてどうしようかと悩んでいます。

そこで、皆さんの意見を聞きたいとおもい、アンケートをする事にしました。

次の選択肢から選んでください。

- 1・オリキャラを美波の位置に入れてイベント進行
- 2・美波のまま原作通りイベント進行
- 3・四巻の内容はスルー
- 4・その他

できれば参加してください！

三十六問～割り箸は使つた方が良い～（前書き）

割り箸は木材を切り出した後の端材から作られます。なので、森林の破壊にはなりませんし、むしろ端材を使うので、森林がきれいに保たれます。

三十六問～割り箸は使つた方が良い～

第三十六問

「明久、大丈夫？」

「ああ、うん。心配してくれてありがとうございます」

それにもしても、証拠不十分なのに拷問なんて、ヤツらは決して
している。

「それにしても、今日はなんだかいつもより更に命の危機が多いよ
う……」

いつもよつと言つているが、いつもは命の危機がないのが普通だ。

「ところで雄一。さつきから黙つているけど、何かあったのかい？」

「…………上等じゃねえか」

少し怒りを含んだ声が響く。

「え？ 雄一。どうしたの？」

「どうせこいつまでされたんだ。本当にやつてやるじゃねえか」

「まさか、本当にやつて……」

「ああ、そのまさかだ。あつちがそう来るなら、本当に覗いてやる
うじやねえか！」

「雄一。そんなに霧島さんの裸がみたいなら、個人的にお願いした
らいいんじゃない？」

確かにこのタイミングで覗きに行つて成功すれば犯人までたどり着けるが、失敗すれば社会的な死だ。

「ハクは私の裸は見たいっすか？」

「ううん、まあ……」

「良いこと聞いたっす」

つてうえい！？何故ここにメープルが？
ああ、僕がいるからか。

メープルは風呂から上がったばかりなのか、頬は上気していて、肌もほんのり湿っていた。

……なんというか、こう、色っぽい。

「ハク、そんなにみられると照れるっす
「……あつーごめん」

いつもと違う魅力なので、またも見とれていたようだ。

「あー。俺たちは任務を遂行してくるから、好きにやつてくれ

「え？ ちょ待つ！」

「了解つすぐ留守番つすね？」

「……殺したいほど、妬ましい」

「ダメだよムツツリーー。博人の邪魔しちゃ

そういうて明久たちは速やかに部屋を出て行つた。

この状況で僕を置いていかないで（懇願）。

そんな思いもむなしく、部屋の扉が再び開くことはなかつた。

「さて、いい感じに一人つきりね

「待つんだ。いつの間に僕の上に馬乗りになつたんだ！？」

少なくともわざわざ普通に田の前にいたはずだ。

「わへ、あんまつさわがないでよ。先生が来ちゃうかも知れないか

」
「

「よし、今すぐ召ぼし

大きく息を吸つて声を出さうとするが、口を開く前にメープルの顔
が田の前にあつた。

僕の口はメープルの唇にふさがれている。すぐ田の前にあるメープ
ルの髪から、良い香りがする。

「…………ん…………ちゅ…………ふあ…………」

ダメだ。もうなつたらもう僕にはどうしようもない。
せめて先生が来ないのを願おつ。

一分ほど経つてキスから解放された。

「さすがにこじりじゃ、できるのはこじりまでね

「例えどこだらうと断固拒否する」

「そんなの流れに逆らへず無駄になつちやうのこ

……確かに今までそうだった。

「さて、それじゃハク。私は満足したからそろそろ帰るよ」

「あ、ちょっと待って」

「え？ やっぱりまだ足りなかつた？」

「こはスルーが吉だ。

「実はね——

明久たちの事情説明中

——というわけなんだ

「わかった。じゃあ明日の入浴の時にできる限り確認してみるね

「ありがとう」

これでメープルの協力が得られた。

男子だけで活動するより、グッと調査しやすくなるだらう。

……というかメープルのことだから、なにか情報をつかんでて、それで僕らがどう動くかを確認しに来たんだろう。

ちなみに、明久たちは先生達に迎撃されて捕まり、補習を受けている。

三十六問～割り箸は使つた方が良い～（後書き）

アンケートは次回の更新（7月4日）で締め切ります。

第三十八問～アリも毒針を持つやつがこ～

第三十七問

「……雄一。一緒に勉強できて嬉しい」

「待て翔子、当然のようすに俺の膝に座るやつするな・クラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている」

「ハクと平日に一緒なんて、最高っす」

「待つてメープル。僕に抱きついていたら、勉強できないと思つんだ」

強化合宿一日目。今日の予定はAクラスとの合同学習となっていた。学習内容は自由で、先生や周囲に質問しても良い。要するに自習だ。その為、机も生徒同士が向かい合いつ形になつてている。

「でも、なんで自習なんだりつへ授業はやらないのかな？」

明久はこの学習形態の意図に気がついていないようだ。

「授業？そんなもんやるわけないだろ」

明久の独り言を聞きつけて、これ幸いと雄一が霧島さんを置いて明久の隣にやつってきた。

「やひない？ やひして？」

「明久。お前はAクラスと同じ授業を受けて内容が理解できるか?」「むつ。失礼な。雄一にどつてはそうかもしれないけど、僕にどつてはFクラスもAクラスも大差ないよ」

おそらくどちらも理解できないからだろう。

「この合宿の趣旨は、モチベーションの向上なんだよ」

「つまり、AクラスはFクラスを見て、『あはなるまい』と、FクラスはAクラスを見て『あなりたい』と考えるつす。そういうメンタル面の強化がこの合宿の目的つす」

「だから、授業は問題じやないんだよ」

僕たちの説明に、明久は納得といった顔で頷いた。

「あ、代表に楓ここにいたんだ。それならボクもここにしようかな?」

そこにある友人の声が聞こえてきた。いそいそとメープルの隣で勉強道具を広げているのはメープルと特に仲の良い愛子だ。最近メープルと一緒にたまに家に遊びに来ている。

「工藤さん、だっけ?」

「そうだよ。キミは吉井君立ったよね?久しぶり

「ツと歯を見せて笑う愛子。その雰囲気と相まってとても爽やかそうだ。うだ。

「それじゃ、改めて自己紹介させてもううな。Aクラスの工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から7・8・5・6・7・9、特技はパンチラで、好きな食べ物はシュークリームだよ」

パンチラは特技では無いだろ？

「ハク……私がやつてあげるつすよ？」

「お願いだからやめて」

「そんな！ハクは私には魅力がないつて言つの？」

少し田を潤ませて上田遣いで見てくる。なかなかの演技だ。

「いや、魅力たつぱりだよ」

「ありがとうつす」

適当に返事をしたからか、メープルは少し膨れていた。
しうがないじやないか、大勢の前で本気で魅力的だなんて言つのは恥ずかしいし。

「おや、じゅらはだいぶ賑わつていますね」

続いて行平も登場した。

「ああ、ちょうど良かつた。少し世界史で聞きたいことがあるんだけど」

「かまいませんよ。それと、生物で聞きたいことがあるのですが？」

「うん、どこの？」

「ハク、私も化学で質問つす」

まずは僕から説明をするため、参考書を開く。

昔から一人に理科関係を教えてるので、最適な教え方がわかる。

「同性愛を馬鹿にしないで下さっこ！」

びつしたいきなり！？

見ると、学習室のドアを清水さんが開けていた。

…………この処理は海渡任せだな。

「ほら、美春。先生に見つからないうちに帰るぞ」「まだお姉様と一緒に帰っちゃう！何して…………！？」

清水さんが入ってきたこと同じ所から海渡が入ってきて、清水さんを連れ戻るため、お姫様抱っこしていた。

…………あの一人はいつたい何しに来たんだ？

でもまあ、これで少しあは平穏が訪れるな

「ハク、言い忘れていたことがあつたっす」

「なに？実は風呂の脱衣場に本命と思しき盗撮カメラがあつたっす

「やっぱりか。ところでメープルはそれに映つてないよね？」

「もちろんっす。私の裸はハクのものっすから

「…………んじゃ、その話はまた後で。今は勉強しないと周りに聞かれるからね」

「まったくハクつたらそんなに私の裸が―――」

「僕が話があるのはカメラの方」

なんだかいつもメープルのペースに乗せられている気がする。
そのうち尻に敷かれるようになるのかな？

第三十八問～アリも毒針を持つやつがいる～（後書き）

アンケートは締め切りです。
結果、一番になりました。

四巻の内容は現在執筆中です。

第三十九問 手から糸？ああ、シロアリモドキね～

第三十九問

明久達が出陣した後、意外な来訪者が来た。

「おつすー、入るぞ」

一人目は海渡、そしてもう一人、

「し、失礼します」

清水美春さんだった。

「どうしたんだい？こんなところに来るなんて？」

僕の質問に清水さんは少し躊躇い、海渡の方を一回見た。

海渡はその視線を受けて、一回頷いた。

「実は……初日のカメラ設置は美春がやりました…すみませんで
した！」

ああ、矢張か。

ミスつた、矢張さん家の政志くんじゃない。
ワンモアティク！

ああ、やつぱりか。

まあ、大体予想はできていた。

「僕は特に謝られる必要はないよ。まあ、とりあえず先生に事情は話してもらわないとね」

さすがにカメラ設置を見逃すことはできない。

「やつだよな…………」

「まあ、一番楽そうな秋音姉……杉本先生に話をしてくれよ

「ああ、助かる」

「それじゃ、明久達には僕から言ひておくれよ」

「何から何まですまないな」

僕だつてタダでいることをやる訳ない。

「報酬は後々でいいからね」

「やつぱり報酬を要求するところがお前じことつか……まあ
良い。後で店に来てくれ」

よつしーこれで甘いものが手に入るー

「えじや、そろそろ戻るわ」

「うふ。約束は忘れないよ」

軽く念を押してから海渡達を見送る。

……………明久達の覗きはもう意味がないんだよなあ……………

わざわざ補題を受けることになるなんて、ドンマイだ。

その後、明久が部屋に戻つて来たけど、すぐに呼び出しが受けた。

……………何だつたんだ？

翌朝。

「……………」

ヒヤッハ――――――!―これはもうテンションMAXですたい。

先生の目を盗み、日が昇る前から昆虫採集に勤しんだ結果、それはもつ最高だった。

「なんだ！？朝から明久が決まっているぞ！？持病か！？」

「ええい！落ち着くのじゃ明久！博人、西村先生、済まぬがこやつを取り押さえるのを手伝つて頂きたい！」

「…………！（口ク）」

「…………お前らは朝から何をやつているんだ」

「…………同感です」

本当に何がしたいんだ？

現在は朝食中で、覗きについて作戦会議をしているのだが、はつきり言つて意味がない。

しかしまあ、普通にバラしても面白みがないので、後で明久と秀吉だけに教えて、雄二達はそのまま無駄な努力をしてもらおうと思つ。

しかし、明久は演技に向いていないので、機を見て教えることにした。

「ねえハク、お願いがあるんだけど?」

自習中、メープルが小声で話しかけてきた。

「うふ、なに?」

「覗きの妨害、一緒にやらない?」

覗きの妨害……つまり召喚獣勝負か……明久達は今日の戦闘から外すとして、戦闘経験が積めるのは良いな。

「わかった。僕も参加するよ」

さて、これからどうぞん楽しくなつそつだ。

第三十九問～手から糸？ああ、シロアリモドキね～（後書き）

途中のは逆 裁判ネタです。

第四十問 深海魚オーボウズギスは体長より大きい胃を持つ

第四十問

さて、覗き防衛戦だ。

明久と秀吉は別任務ということで今回の戦闘からはずさせ、今は部屋でまつたりしてもらっている。

配置についたし、後は敵がくれば良いだけだ。

『「つおおつつ……』

『「ぶつ潰せ————』

前方より敵発見。殲滅を開始する。

『試獣召喚！——』

覗きの防衛の為の女子たちと、男子の声が重なる。

「試獣召喚」

一息遅れて僕も召喚する。

敵は……多くがここを迂回して逃げたので一五人程度。何秒もつ

だろ？

まずは一番近い敵に接近し、回し蹴りを放つ。

死亡報告

敵男子一体

味方女子一体

……………しまった！

大丈夫だ。もう一回やればちゃんとこくへばす。

死亡報告？

敵男子一体

味方女子三体

……………悪化した。

面倒なので、味方も気にしないようにしよう。

敵目掛けてクローゼットを振るつと、黄金の腕輪の『攻撃追加』が発動する。

攻撃範囲が広がるのはいいが、仲間がたくさん死ぬな。

「さて、これからは杉本先生のターンだよー！」

このフィールドを作っている秋音姉が、戦いに参加していく。

秋音姉の装備は白衣とツインチョーンソーだ。

回転している刃を振り回す度に敵が死んでいく。

それに乗つて僕もクローキー、ブレード、足の鉤爪を回転するように振り回すと、敵味方問わず吹き飛んでいく。

フハハハ…まるで「HII」のようだ…

……………「ゴメン調子乗つた。

それはともかく、僕と秋音姉の活躍（虐殺）によってこのHIIアリアは全滅した。

明日は巻き込んで殺す数を減らせるように努力しよう。

「てめえ、博人！裏切りやがったな！」

「裏切つた訳じゃない

「じゃあ何だつて言つんだ？」

「ただメープルに頼まれたから」

「……………そうだな。お前は尻にしかれているんだもんな」

その納得の仕方はムカつくな。

しかし、半分以上事実なので言い返す気はない。

「…………」の妻帯者が

言い返せないので、無関係の暴言を吐くことにした。

「お前だつて同じようなもんだろ！？」

何を言つてゐるんだか。

「残念ながら、坂本夫妻と違つて結婚なんて話はない」

「…………」

良い度胸だ。明日、徹底的で妨害してやんよ！

そんな感じで明日の作戦を練るために、一旦部屋を出て行つた。

消灯時間ぎりぎりまで散歩しつつ考え、明日に備えて指示を出しておいた。

「あれ！？やたらと単純！？」

夜中に一体どうした?

なんとなくイヤな予感がするが、明久が関連しているので、首を突つ込んでおこう。

第四十問～深海魚オーボウズギスは体長より大きい胃を持つ～（後書き）

バカテスの一期が始まりましたね。

第四十一問～オオメジロザメは淡水でも出現する～

第四十一問

明久のバカな声で目を覚まされると、部屋に広がっていた光景は――

- ・寝ている秀吉
- ・カメラを構えているムツツリー＝
- ・浴衣で雄一の布団に侵入使用としている霧島さん
- ・島田さんに迫られている明久

…………おかしいな。

もう一度見てみよう。

- ・メールの着信がある携帯
- ・みんなの荷物
- ・空に出ている二日月
- ・あざけない顔で寝ている秀吉

…………よし、異常はないようだ！

「「僕（俺）を助ける気はないのかつ！？」

一応メールの確認をしておこう。

どれどれ

【From: 佐藤楓 To: 七伏博人】

夜這いしてみると、たまると思つたけれど、その後が期待できないうらやめてみました】

助かつた！本当に助かつた！

ありがとう、
流石メーナル！

現実逃避するなあああ！！！」

なにことだつ！今吉井と坂本の声が聞こえたぞつ！』

あ、西村先生の声だ。

.....

ふう、やれやれまつたく雄一は駄目だなあ

「はうはうは。謙遜すんなよ明久。今のはお前が原因だろ」

「どうでも良いけど女子を逃がした方が良いんじゃない？あ、僕も
う寝るから。おやすみ～」

これ以上関わらない方が身のためだ。早く寝よ。

「ふあ……あふ……」

結局西村先生に捕まつて補習を受けた明久と雄一は、朝から眠そうにしていた。

「流石に眠いぞこり……」

まあ、朝まで教育について（拳で）語られたのだから、眠いのは当然だろ？

ちなみに僕はぐっすり眠れて頭が冴え渡っている。

早寝早起きバンザイ

「お主ら、災難じやつたのう……」

「災難といえば災難だつたかもーーーふわあああ〜〜

「俺も駄目だ……。全然気合いが入らーーーふおおおおつー?」

「こきなつづうした雄一ー?」

ダルそうにしていた雄一が写真のようなものを見た瞬間、いきなり覚醒しました。

「…………効果は抜群」

「何つー?一倍ダメージかー?」

「あ、ムツツリーー!。おはよつ」

明久の後ろの出入り口からムツツリーーがやつってきた。手に持つておるよつて見せるのは何じやへえりへ興奮しているのは…………[写真だな。

「ムツツリーー。今しがた雄一に見せたのは何じやへえりへ興奮しておるよつて見せるのじやが?」

「…………魔法の写真」

いつも物静かなムツツリーーには珍しく、誇らしげに胸を張つていた。

「どれ、ワシらにもその写真を見せてくれんかの?」

「少し興味があるよ

「…………(スツ)」

手にしている写真を手渡していく。どれどれ……

「魔法の写真だって?何を言つているんだか。僕らももう高校生なんだし、たかだか写真程度で気合いなんか入るわけがふおかおおつ

!」

「ほう。これはまた……」

「なかなかうまいね」

ムツツリーーの[写真]の一枚目には、姫路さんと秀吉が浴衣姿で[写つ
ていた。

「…………これは博人用^{ボソッ}」

そういうて、渡してきたのはメープルの写真。

おそらく初日の時に撮つたもので、髪が湿つていてとても色っぽい
やつだ。

へえ……こんなのが撮つていたんだ……

「今すぐこの画像のデータを消せ。そして今後メープルに関するも
のを販売または公開するな」

「…………一（口ク口ク）」

僕はいつの間にか僕が常に携帯している便利品ストラップの中から、
小型カッターを選び、ムツツリーーの首に突きつけていた。

まあ、一応承諾してくれたわけだし、今後契約違反したらいろいろ
攻撃していくとしよう。

「…………あ、今までに撮つたメープルの写真があるなら全部提出し
てね」

「わかつた（ガタガタ）」

第四十一問 テンキウナギは人間の喉にあたる部分に肛門がある

第四十一問

現在7時59分。

雄二たちが行動を開始すると思われる8時の一 分前だ。

ピピッ

腕時計から電子音がなる。

『うおおおおおおつ！』

上の階から雄叫びが響いてくる。

いい気合いだが、目的が覗きあることが馬鹿らしい。

まあ、とにかく殲滅だ。

まずやつてきたのは、Bクラスの生徒。

「試験召喚！」

まずは僕ではなく、秋音姉が召喚する。

緊急の書類仕事があるので、早めに抜けるからだそうだ。

『物理教師 杉本秋音
物理 994点』

900点代とは……これはけつこう楽にならうだな。

ちなみに今日のこの布陣は、僕、行平、メープル、秋音姉、海渡、高橋先生だ。

……何この無理ゲー。

「さて、一掃するよ。」

どうやら腕輪の能力を使いついで、召喚獣が手を前に構えていた。

その掌が光つたと思ったたら、敵が半分ほど消し飛んでいた。

秋音姉の腕輪の腕輪『電撃』。

その名の通り前方に一直線に電撃を放つのですが、量が多く、範囲も広めなので、かわしくない。

さりと、攻撃の瞬間光を放つので、一瞬視界が潰される。

ちなみにガード不可で、貫通する。

弱点といえば燃費が悪く、一回の使用につつ0点ほど必要とする」と

だ。

「連續十連射！」

その高い燃費を気にせず、連續で打ち続け敵を一掃した。

残っているのは、後ろの方にいた召喚をしていなかつた者だけだ。

「それじゃ、私は帰るね！バイバイ！」

点数をある程度消費したからか、そういう残して秋音姉はすたこらと去つていった。

さつきまで秋音姉がフィールドを展開していたので、今度は高橋先生がフィールドを展開し直す。

「――試験召喚」――

僕、行平、メープル、海渡、高橋先生が試験召喚獣を呼び出す。

「くそつ！駄目だ！圧倒的すぎる！」

「援護はまだか！？」

はつきり言つてBクラス程度の戦力では、僕達に太刀打ちできない。

一人、また一人と相手の数が減つていく。

昨日と違い、仲間が強い人なので僕の攻撃に巻き込まれることがな

いので、存分に攻撃できる。

クロード右フックをして、その勢いのまま左足で後ろ回し蹴り。正面を向く際に、肘のブレードで薙払う。

これだけで10人近くが死亡。

さて、次の獲物は誰かな？

誰に攻撃しようか物色していると、待ち望んでいた敵が来た。

「待たせたな！Bクラス！援軍として、FクラスとAクラスが参戦しに来てやつたぞ！」

『うおおおおおおおおおつーー！』

さて、雄一にAクラスも加わったようだが関係ない。

メープルと行平までいるんだ。速攻で切り刻んでもらう。

第四十一問 テンキウナギは人間の喉にあたる部分に肛門がある（後書き）

閲覧ありがとうございます。

感想、ご意見、誤字脱字報告等よろしくお願いします。

第四十二問～地下水脈にはメクラゲンパロウが生息している～（前書き）

サブタイトル

開発などにより、地下水が枯渇している地域もある上に、地下であるため調査が難しいので、絶滅危惧種です。

第四十二問 地下水脈にはメクラゲン「ロウ」が生息している

第四十二問

「悪いがここは通らせてもらひつぜー！行くぞーー一起動つー！」

雄一の掛け声を受け、白金の腕輪が起動する。

雄一の腕輪の能力はフィールド作成。つまり、

「干渉ですか……いやつてくれましたね坂本君……！」

「行くぞムツツリーーー！」

「…………任せりつー！」

異なるフィールドが同じ場所に展開されると、双方の効果が打ち消される。

僕と行平の腕輪なら、干渉を起こさず「相手のフィールドのみを消滅させるが、雄一の腕輪がこうこうこうに使えるのは、僕達とは違った利点だらう。」

召喚獣がない状態では、高橋先生は生身の女性。脇を通り抜けるのは楽だ。

僕が止めるに止めるに止まぬのだが、ここはあえて通りさせておけ。

『坂本たちに続けーつ！』

「起動つ！」

他の男子も雄一たちに続ついづとしたが、それを僕が腕輪を使いフィールドを開いて防ぐ。

『試験召喚！』

『Fクラス 七伏博人
生物 941点

&

Aクラス 七伏行平
生物 511点

&

Aクラス 佐藤楓
生物 520点

&

Dクラス 浅井海渡
生物 401点

&

学年主任 高橋洋子
生物 674点

さすがに高橋先生でも、僕の生物には勝てないようだ。

まあ、唯一物理干渉ができるので、後ろで待機していくつもりつつ。

「さて、速攻でつぶすよー。」

「ええ、了解です。打ち抜いて差し上げましょー。」

「撲殺と斬殺と毒死。どれがいいつか?」

「ネギの切れ味見せてやる!」

まずは僕がスピードを生かして突っ込む。

戦闘に展開しているFクラスの集団に、両手を頭上で合わせて、回転しながらクロ一で突っ込む。

「ドリルラナー！」

直線で前に攻撃したので、それほど被害は出でないが、相手集団の中心に入ることができた。

今度は広範囲に攻撃するため、クロ一を軸として鉤爪のついた足を広げて回転する。

普通なら攻撃に隙間ができるしそうが、黄金の腕輪の能力で、それをカバーしている。

相手の中心で回転していても、一度は被害が出てもその後はただ回転しているだけになってしまふが、今はこれでいい。

回転する僕に向かつて、行平が銃弾を放つ。もちろん僕の召喚獣の本体にはには当たらず、それは様々な方向に弾かれしていく。

弾かれた弾丸は、周囲の敵を貫いていく。

さて、そろそろ回転が止まるので、軸としていたクローでいつたん飛び上がり、メープルの盾の上に着地する。

囮まれた状態での攻撃停止は自殺行為だからね。

そして、僕と入れ違いになる形で海渡が突っ込んでいく。

僕のように全方位攻撃はできないので、一人ずつ狙つて切り裂いている。

海渡が堅実に敵の数を減らしていく時に、相手側にも動きがあつた。

「吹き飛べっ！…………よし、次…………つてうおい！危ねえ！」

敵の陰から強烈な攻撃をしてきたのは学年次席久保利光。一番厄介な敵だ。

「いつたん下がれ、海渡！」

「すまん！」

久保君はまずこちらの戦力を減らすために、海渡を倒したかったようだ。

「行くぞ！久保君！」

第四十四回～蠅を食べるシャクトリムシがいる～（前書き）

サブタイトル

ハワイに生息しています。

第四十四問～蠅を食べるシャクトリムシがいる～

第四十四問

久保君の召喚獣のもとへダッシュし、フェイントも何もなく一撃を放つが、案の定防がれる。

「甘い！」

すかさず反撃してくるが、軽く受け流してその勢いを利用して思いつ切り力技上げる。

武器の根元部分でからつじて防がれたが、相手は今宙に浮いている。

「見せびらきをありがとうございます」

空中で動けない相手に対して、容赦なく行平の銃弾が襲つていった。

『Aクラス 久保利光
生物 0点』

意外とあっけなく終わつたな。

でもまあ、敵の大将が沈んだ今、士氣もこちらの方が有利だ。

「来いー・サムライアリ！

点数を百点ほど消費して、サムライアリを10体呼び出す。

サムライアリは、クロヤマアリなどの巣を襲撃して、奴隸として働かせることで知られている。

他のアリに比べてアゴが鎌状に長いので、戦闘には向いている。

「行くぞー！」

僕の『昆虫召喚』で呼び出した昆虫は全部僕が操作するので、その分召喚獣の動きが鈍るのだが、たった10程度では問題ない。

サムライアリの群れとともに虐殺していたが、周りを囲まれそうになつたので、華麗にジャンプして退く。

シュタツ ザシユ

『学年主任 高橋洋子
生物 0点』

……あれ？

わざと何が起きたんだろう。

・僕の召喚獣がジャンプした勢いを殺すために右手を地面についた。

・左手は後ろに振り切っていた。

・振り切つた左手で攻撃追加が発動。

・真後ろの高橋先生が斬殺される。

OK理解できた。

『…………全員突っ込めえええっ！』

『理想郷！理想郷！理想郷！理想郷！』

先生の召喚獣がいないので、ここに止めるすべはないが、少しでもと生身で意識を刈っていく。

『佐藤さんー今すぐ風呂に入っちゃやああああああああああああー…』

メープルになんて」と言つてるんだううね？

『みさやあああああああー』めぐへシーんな口フシーわざやああああー！』

全くうるさいなあ。

「わっすが私のナイト様っす！」

メープルがいい機会だと言わんばかりに抱きついてくる。

ふう…………つてしまつた！何落ち着いているんだ僕は。

「離してよ、メープル」

「落ち着いてたのにつすか？」

それを言わると痛い。

しかしあま、覗きの迎撃は失敗したが今日に限つては問題ないだろう。

『割に合わねえーつつ!!』

現在風呂に入っているのは学園長。まさに地獄だ。

処分通知文月学園第一学年

Aクラス七伏行平

Dクラス浅井海渡

Fクラス木下秀吉、七伏博人、吉井明久
を除く男子生徒

総勢 144名

上記の者たち全員を

一週間の停学処分とする

僕とFFFと大激突（前書き）

今回のは時間軸的には三巻の前です。

僕とFFFと大激突

僕とFFFと大激突

『『『もう我慢ならねえ…………！』』』

愚者達は立ち上がった。

『これ見よがしにイチャイチャしゃがつて…………！』

『学校の風紀を乱すヤツは死あるのみ！』

『キキキククククケケケケケケ！－！－！』

己の私怨のために。

『『『待つていろ！七伏博人！』』』

そして、愚者達と昆虫少年は激突する。

「ふう～～今日の授業は終了～～

授業が終わり、残るはHRのみ。いや～早く帰りたいなあ。

ガラツ

「お前ら席に着け。H.Rを始める」

～以下省略～

それで、終わったことだし帰れりつ。

「博人、ちょっと良いか?」

「どうしたの?雄一。」ソリで話すのも何だから、廊下に出よつか

「……チツ、鋭いな。皆一予定が早まつた!祭りの時間だ!」

『Year!Let's party!』

やはり何か不穏なことがあつたか。

だがもう教室を出るといふだ。後はそのまま帰[モ]すればいい。

と、余裕を持つていたといふで、気がついた。

教室の中心に飴が一袋……

重要度

危険(弱) × 飴一袋

そんなものにつられるわけが――――

ドサツ × 4

重要度

危険（弱）△飴五袋

くわおおおおおーーー

『よし、袋にしてやるがーー』

『不純異性交遊の罪、ゆるすべからずー』

くわー、囮まれた！こうなつたら徹底抗戦だ！

「僕と敵対したこと自体が死亡フラグだとおもこじらせてやる」

まづはーのままでは数で押されるので、出口付近の敵を投げ飛ばす。

そのまま一回教室外へ。

「学校の出入口を封鎖だ！残りの部隊は追跡しろー・絶対に一人になるなー！」

雄一が的確な指示をとばしていく。

明久は参加していないので、制裁目標は坂本雄一とその他ミッションを開始するー

『さつき影が見えたぞー』

『「Jの近くにいるはずだ!』

敵人数は四人。この程度は楽勝だ。

まず、自分の反対側に飴玉を一個投げる。

『敵か!?』

反応したところを、繩で素早く四人まとめて縛り上げ、行動不能にする。

これで残りはだいたい四十人程度だ。

このままだと帰るのが遅くなるから、連絡入れておこう。

……ポチポチッとな。

よし、送信完了。

それじゃあミッション再開だ。

次の目標を確認。

『B部隊と連絡が取れなくなつた。一瞬たりとも気を緩めるな!』

『氣を緩めようが緩めまいが関係ない。おまえたちに待つのはただ地獄だけだ。』

今度は飴玉ではなく、小さめの爆竹を投げる。

パンツ

すぐ近くで大きい音がして、怯んだところを次々と捕縛していく。

……よし、ここは殲滅完了だ。

そのまま次なる獲物を求めて徘徊する。

僕とFFFと大激突？

僕とFFFと大激突2

敵の約四分の一を倒したので、校門の封鎖に二十人程度使っているとすると、残る実働部隊は10人だ。

『くそつどこに隠れていやがる…………？』

『ダンボールを手当たり次第探せ！』

別に僕は蛇ではないぞ。

でもまあ、ターゲット発見。数は5だ。

『どこだ…………？』

『ブチコロブチコロブチコロブチコロ』

しまった！後方からも敵部隊確認。挟み撃ちだ……

幸い、敵には気づかれていないので、前方の敵に攻撃をしかけ、活路を開く！

腰に差してある捕虫網の柄を最大まで伸ばし、ダッシュで突っ込んだ

でいく。

『いたぞ！七伏だ！』

「遅い！」

打突を食らわせ、バランスを崩したところを蹴り倒す。

声に反応してこっちに向いた二人田も、飛び蹴りで撃墜。

そのまま走り抜けていく。

『追えー・追うんだ！』

こつからは持久走だ。くぱつたとこひるを一網打尽にしてやる。

「ハクー。追われてるんすよねー？」

僕を待っていたのか、廊下に立っていたメープルも合流して一緒についてきた。

「うん。 そりなんだけど」

「今すぐ後ろのを止める方法があるつす

「どんな作成？」

「説明している暇はないつす。すぐに実行！」

しうがない、やつてみよ。

一番近い空き教室に入る。

その中央間でいくと、メープルが向かい合つてきた。

僕のネクタイを引っ張つて、引き寄せてキスをしてきた。

『……………追い詰め……………失礼しました』

僕達の姿を確認すると同時に、気まずそうに去つていった。

その後記憶を消すため全員仕留めたのは言つまでもない。

「くっそ…………博人の野郎本気で殴りやがつて…………」

「…………雄一、お仕置や」

「は？ 待て、話が見えないんだが」

「問答無用」

「博人の野郎、なんてことしやぎやあああああああああああああ！」

「さて、ハク。助けてもらつた人に何かする事があるんじゃない？」

「あ、うん。ありがとうメープル」

「…………それだけ？」

「うん~? ううだけど」

「キスとかもつと甘い感じのないの？」

「ないです」

「じゃあ、恩人からの命令。動かないで」

「…………ハイ」

「それでは失礼して…………むぎゅ～」

「ほつ…………今日は抱きついてくるだけのようだ。

「ハクってホント柔らかくてスベスベだよねー！」

その評価は男子として喜んで良いのだろうか？

ところがこんなことやつてるから恨まれるんじゃないかな？

…………でもまあ、メープルの体温を感じていられるのだから、襲撃には目を瞑りつつ。

僕とFFFと大激突？（後書き）

感想、誤字報告等、またはお気に入りをお願いします！

第四十五問～ミヅクモは水中に巣をつくりて暮らす～（前書き）

今回から原作四巻の内容になります。

第四十五問～ミズグモは水中に巣をつくりて暮らす～

第四十五問

今日から覗きに参加した男子生徒の停学が明ける。

そんな日の朝に、ある連絡があった。

「ああ、そういえば今日からAクラスの稻垣が復帰だな」

この情報が後の波乱の伏線だった。

そんなSHRも終わり、やっとFクラス全員揃つての授業が始まる
かと思ったが、

一人、見慣れない来訪者が来ていた。

「やあ、明久。久しぶりだね？五年ぶりかな？」

「え…………？もしかして歌美？」

「うん、明久の幼なじみの稻垣歌美だね？」

といつ」とは今朝言っていたのが彼女か。

「いつ戻つてきてたの？」

「4月からこっちに来たんだけどね？ちょっと入院しなくちゃいけなくてね。久しぶりに会つ幼なじみに元気な姿で会いたいと思つてね？」うしてサプライズしたわけだね」

「そつか……お帰り、歌美」

「ただいまだね？明久。それと約束、果たしてもらえるかな？」

「約束？ええと……」

「明久だから忘れているかもと予想したけどね？じゃあ、思い出すヒントだよ？」

彼女——稻垣歌美は明久にそつと近寄つて軽くキスをした。

「さて、そろそろ授業開始だね？こりで失礼するよ？」

なんというか、喋り方が独特だな。

でもまあ、今気にするのは——

「明久君、どうこいつとトスカ？」

「ア～キ～～！～！」

『諸君。ここはどこだ？』

『最後の審判を下す法廷だ！』

『異端者には?』

『死の鉄槌を!』

『男とは?』

『愛を捨て、哀に生きるもの!』

『宣じて、これよつ――――・F異端審問会を開催する!』

明久の生命だ。

「歌美とは、小学校の時からの幼なじみで、五年前に引っ越したんだ」

明久を救出し、敵に見つかれないような場所で事情聴取を行つている。

「それで?約束つて?」

「実は……歌美と別れる時に告白されたみたいなんだ」

みたってなんだ。みたって。

そんな僕の様子に気づいたのか、明久が説明してきた。

「実はそのすぐ後に姉さんから折檻を受けて、記憶が飛んでたんだ

.....」

「それをやつべきのキスで思い出したと？」

「うふ……」

しかし告白と約束がどう繋がるんだ？ある程度の予測はできたが、本人から聞いてみないとどうしようもない。

「告白された時に、次に会ったときに返事してほしつて言われたんだ。それが、僕たちの約束」

ふむふむ…………といりで…………

「キスで思い出したってことは約束の時もキスしたの？」

「なつーへんじてそれをー！」

「予測だ」

だけど、今重要なのはキスの話じゃない。

「それで？明久はどう返事するの？」

「うふ……」

「確か彼女、入院してたんだってね。それを乗り越えて明久に会いに来たんだから…………きつちり返事した方が良いよ」

それが彼女に対する最良の選択だ。

「でも、僕なんかじゃ歌美と釣り合わないよ…………」

「そんなことはどうでも良いんだよ。ただ、彼女が好きななら想いを伝えて彼女にふさわしいと思えるような人間になればいい。今明久が気にするのは自分自身の彼女に対する想いだ」

実際、明久はやればできる人間だ。目標さえあれば、大いに伸びるだろう。

「博人、それから明久。ちょっと良いか?」

二人で真剣に話し合っていると、「ちらも真剣な様子の雄一」が声を掛けってきた。

……なにか面倒なことが起きたようだね。

第四十六問～歯が一本もなく、卵だけを食べる蛇がいる～（前書き）

今回は短めです。

第四十六問「歯が一本もなく、卵だけを食べる蛇がいる～

第四十六問

「何? また何かトラブル?」

「…………（「クリ」）」

「ああ。おまえのせいで面倒なことになつそうだ」

面倒なことか…………

「それで、面倒なことって?」

「…………Bクラスで試召戦争を始めよつとする動きがある」

「試召戦争? Bクラスが?」

なるほど、けつこう面倒だ。

「でも、Bクラスが試召戦争しても僕たちには関係ないでしょ?」

明久の言つとおり、ふつうに考えればそつだ。

「明久、雄一がわざわざ面倒なことになつたつていつたんだよ?」

「Bクラスの狙いはFクラスだ。明久」

「どうしてBクラスがFクラスに？」

Bクラスよりも下位のクラスである僕たちと戦つても、通常ならば得るものはないはずだ。

「簡単に言えば、逆恨みだ」

「逆恨み？」

なるほど、納得の理由だ。

「Iの前の覗き騒ぎで、Fクラスがもつとも処分されていない男子が多いから、じゃないかな？」

「その通りだ。幸いBクラスも今は点数補充中だし、システムのメンテナンスで明日まで試合戦争はできない。今日なんとかできれば、宣戦布告はされないはずだ」

さすがに今日攻め込まれることになつたら危なかつただろうが、1日あるならまだなんとかなりそうだ。

「雄一、逆恨みと言つても男子が中心だろ？~Bクラスの女子はどうな動きをしているんだ？」

「Bクラスの女子は開戦には否定的だ。男子を説得しようとしているが、代表が根本だけに効果はあまりないようだ」

ふむ、これは良い情報だな。士気の低い女子はあまり参加しないだ

ろつから、Bクラスの男子約二十五人を倒せば終戦させられるわけだ。Bクラスレベルの二十五人なら、下手をしなければいけるはずだ。

「今日は覗きの点数を補充するために先生が駆り出されているから、ほとんど白眉だ。これを利用して開戦を阻止するぞ」

「…………解つ……」

とは言ったものの、どうするかなあ…………

うーん…………まずはBクラスの女子に話をつけてくるか。

でも、今は休み時間じゃない。適当に時間を潰すしかないな。

こんな時は、暇つぶしに本でも読もう。

え？ もちろん常備してるポケット図鑑ですがなにか？

いや、図鑑を読むのも結構楽しいからね。

読んでいるとき分が良くなつてくるし。

さて、だいぶ読んだしそろそろ時間かな。

第四十七問～ハッチョウトンボは一円玉サイズ～

第四十七問

「こんな時間に話なんて悪いね。若下さん」

「大丈夫よ。で、用件はいつたい？」

呼び出したのは若下菊子さん。去年からけつこつ話したりする。

「BクラスでFクラスに戦争しようとしている動きがある」

「それは知つているわ」

「男子は開戦派だけど、女子は否開戦派。そこで、僕たちは戦争を平和的に終了させるために、君たちに協力してもらいたい」

「内容は？」

「まず、Bクラス男子を殲滅する。その後、協定を結び終戦という流れにしたい。だから、お願ひしたいのは協定を結ぶのと、あまり戦線にでない」と

「…………わかつたわ、みんなに話してみる」

交渉成功。いやー良かつた良かつた。

「ありがとう」

「別に良いわよ。私たちの為でもあるんだから」

さて次はどう活動するか……

この後の動きは、一応代表である雄一に聞いておこう。

「雄一」→Bクラスの女子とは交渉あわつたぞ～「

「良くやった。ところで博人、Bクラスレベルの相手なら、最低で何人倒せる?」

ふむ、代表としてまずは戦力を分析しているのか……

Bクラスレベル相手なら何人だろう…………?

「最低で三十人かな」

最悪の状況ならそのぐらいだと思つ。

「いったいどんな状況を想定しての最低だ?」

「教室内での五十対一」

狭い場所だと少し戦いにくい。それゆえ最悪の状況だ。

「一人ずつならどれくらいだ？」

Bクラス相手で一人ずつ…… それなら、

「百人は軽くいけるけど」

だつて無傷で勝てるし。

「そうか。それならBクラス戦で負けることはなさそうだ……だが、相手は根本だ。十分気をつけてくれ」

「わかつているよ。といつか僕を封じる方法なんてどんなことがあるんだろうね？」

人質程度じゃ軽く見捨てられるし、普通の人間に襲われたところで返り討ちにできる。

メープルを捕まえれば僕も本氣で相手してあげるけど、メープルは小さい頃から我が家の父上殿と関わって、いらん対人技術なんかを教え込まれているし、それに高い身体能力もプラスされているから、簡単に捕まえるのは不可能だ。

行平はまったく問題ない。むしろ相手さんご愁傷様です。

力チカチカチカチつと……

一応メープルに気をつけるようメール送つといったから、これで万全だ。

メープルが危険な目にあつのは嫌だからね。

さて、次はどうしようかな？

とりあえず指示が無い以上、動く必要はないだらう。

やつておいた方が良いこともないし……

まだ休み時間でもないのであまり大々的に行動できないし……

あ、自習の課題は終わらせたけど？

まあ、ひとまずは戦争のため、フィールドを作り召喚獣を動かす。

動作の確認や素振りをして、時間を潰す。

単純作業は時間が過ぎるのが早くていいなあ……

第四十七問～ハッチョウトンボは一円玉サイズ～（後書き）

夏休みのはずなのに、学校があります。

こんなの夏休みじゃない…………午前潰れるとか宿題が早く終わらん
ではないか…………

第四十八問 ナナフシは雌だけで増える

第四十八問

昼休み。

現在、Bクラスの連中にFクラスが何も気づいていないことを示すために、明久たちと散歩中だ。

Fクラスが戦争の準備を始めたら即宣戦布告してくるからね。

「うひうひってただフラフラ歩き回つていればいいの？」

一応今は休み時間だから、不自然なところはないが、あまりに露骨すぎるのもねえ……

「確かにただフラついてるだけっていうのもつまらんな。何かゲームでもするか？」

「ん。オッケー」

「いいね、やるうやるわ」

少なくともただ歩いているより良いだろう。

「んじゃ、英単語クイズでもやるか。英単語を言ひから、その意味を答えるんだ。五問のうち一問でも答えられなかつたら負けだ」

英単語クイズは、明久には勝ち田がない気がするなあ……

まあ、なにも賭けていないから問題ないだろ？

「ん。オッケー。ドンと来い」

「よし。それじゃ、罰ゲームは『負けたヤツが勝ったヤツの言ひこと何でも聞く』だ。行くぞ」

「えー？」

何か最後に付け加えられたな……

「ちよ、ちよっと雄一ー！？」

そう慌てる「ことでもないだろ？」。雄一じやなくて僕が勝つんだから。

” Astronaut ”

アストロノート。

けつこうわかりやすい単語だな。

でも明久は答えられるだろ？

「明久、なんだかわかつてゐ?」

「勿論わかるとも」

あ、わかつてないな。

「いつ自信がありそつたときは大抵珍解答だ。」

「じゃあ先に答えて良いよ」

解答を促す僕に、明久は焦らすように答えてきた。

「道路によく使われているアレだよね?」

「俺の勝ちだな」

バカにしたような雄一の勝利宣言だが、まあ当然のことだ。

「どうして最後まで聞かずにそんなことが言えるのさー! 勝負は最後までわからないはずだよ!」

「明久、答えは”宇宙飛行士”なんだけど、道路のどこに使うんだい?」

「博人は正解だ」

「…………ケアレスミス、か…………」

「一度辞書でケアレスミスの意味を調べてくれば?」

明らかに注意を損なつやつはなかつたはずだ。

「でも、負けは負けか……。認めるよ雄一」

ツツ「ミ街か? どう考えてそういう態度ができるんだとかツツ口んでほしいのか?

「今度は霧島さんが楓さんの番だね」

「…………頑張る」

「戦略的撤退!」

「逃がさないつす」

なぜだ……試合戦争で忙しいから今日は別々でお食べたから、居場所はわからないはずなの!…………

「ふつー? しょ、翔子! いつの間に? ー?」

反応が遅いぞ、雄一。僕のあの反応でもいいのやまなの!…………

「いつの間にも何も、問題を出し始めたあたりからずっといたじやないか」

「……雄一が『向でも立つ』とを聞くべつて言つたのが聞こえたか

「ひ

「気配消すのつかれたつすよ~」

霧島さんがいたのは気づいたが……さすがはメープルだ。

「それじゃ、霧島さんが雄一に。楓さんが博人に出題だね」

「……わかった」

「よくわかってるっすね～明久君」

恨むぞアキヒサア……

第四十九問 オオゴキブリは森に生息（前書き）

サブタイトル「ゴキだからって、家の中だけだと思つた」ということです。

第四十九問 オオコキブリは森に生息す

第四十九問

「正解すればいいんだ！ドンと来い！メープル」

「もつちつ答えてやりあー！」

「うなつたら自棄だ。運が良ければ僕が答えられる問題を出してくれるはずだ。

“—— Floccinaucinihilipilification”（メープル）

“—— betrothed”（霧島さん）

ダツ（身を翻す僕と雄一）

ガツ（その肩を掴んでくる明久とメープル）

「答えられないなら諦めていいなりになるつすよ」

なんでこんな長い英単語なんだ！？さては僕に勝たせない気だな！？

「あたりまえっす」

「雄一、どうに行こうとしているのかな？」

「明久、てめえ……！」

お互に詰んだようだな、雄一。

「霧島さん。いきなつドーメントのつのも可哀想だから、問題を変えてあげてよ」

「ハクに猶予はないっすよ」

「いつなつたり…………やるしかない。」

「意味は…………ない」

「ファイナルアンサー？」

「うん……」

「ハイ残念！」

速い！速すぎる！せめて溜めてほしかった！

「意味がない言葉は”*Supercalifragilistic expialidocious*”つす。今回出題したやつの意味は、【無価値とみなすこと】つす」

あ、確かに聞いたことがある。

まあ、負けは負けだ。諦めて帰るとしよう。

「なにちやつかり逃げよつとしているんすか?」

作戦失敗。

「きちんとルールを守らうとしないハクには罰ゲームプラスっすね」

「はあ…………で、いつたい何を要求するの?」

「人前でそれを聞くすか……?」

「えー? いつたい何されんの! ?」

激しく不安だ。

「冗談つす。ただ一緒に添い寝してもううだけつすよ」

それのどじが『ただ』なんだ。

でも、罰ゲームは罰ゲームだからなあ…………認めよつ。

『異端者三人を処刑せよ!』

『まとめてやつちまえ!』

『逃がすなー!』

おや? FFFのメンバーか。

僕――メープルと添い寝の約束

明久――稻垣さんとのキス

雄一――霧島さんに負けたため、何か約束事

なるほど、奴らが許さないわけだ。

まあ今日は雄一^{生贊}がいることだし、一人で相手するより楽だろう。

「喰らえ！ 投げつけろ！」

雄一をがっしり掴み、FFFに向かって投げる。

「なんてことしゃがるー。」

「続いてどびひざぱり！」

雄一を巻き込みつつFFFに攻撃する。

「博人おおおおおおつー、ゴフッ」

僕に攻撃しようと突っ込んできた雄一に明久が一撃入れていた。

これで僕&明久VS雄一VSFFFとなつた。

雄一の圧倒的不利。このまま雄一を沈めてFFFに差し出せば、僕たちに被害はない。

と思つていたら、いきなり首根っこ掴まれて

「博人、明久君、戦略的撤退っす！」

メープルに引きずられていった。

まあ、確かにあの場を雄一に押し付けるのは戦略的撤退だけじゃ。

ちなみにメープルになぜ僕を引きずつていったのか聞いたら、『ハクが目の前の私を見てくれないからっす』といつていった。

つい抱きしめそうになつたのは仕方がない。

第五十問～日本産で毒をもつクモは一種類のみ～（前書き）

サブタイトル

カバキコマチグモというクモです。

まあ、現在は外来種で有毒のやつが入ってきてるので、毒グモの危険は増えました。

第五十問～日本産で毒をもつクモは一種類のみ～

第五十問

「ぜえ……ぜえ……やつと撒いたぜ……」

次の行動のため、教室で待つていると雄一が息を切らしてやつてきた。

「おつー」

「だいたいテメエのせいで……」

労いの言葉をかけてあげたんだから、喜べばいいのに。

「で？ 次の行動は？」

「スルーかよ……まあいい、ムツツリーーは戻つてきているか

「今戻ってきたね」

教室内を見回していると、タイミングよくムツツリーーが入つてくるのが見えた。

「お、戻ってきたか。偽情報はどうだムツツリーー！」

「…………首尾は上々」

「この淡々とした受け答え。プロだな…………

「…………それで、次の仕事は?」

「ああ。今姫路が戻つてくる。やうしたら次の行動に移らう

?姫路さんに何か依頼してたのかな?

「やういえば、わざわざ手料理なんて作つてもいいじりますのを

そんな悪魔の儀式を依頼していたのか……恐るべし。

「姫路の料理は暗殺用の武器だ」

納得できる使い道だね。

「暗殺用?誰を?」

「Bクラスの奴だ」

「つまり、流した偽情報に釣られてきたBクラスの使者を暗殺する
んでしょ?」

そのBクラスの使者がせめて楽に逝けるよつむの底から願おつ。

「それから博人、お前に指示がある」

「なに？」

「今はBクラスと戦うのを先延ばしにするため動いているが、正直開戦を防ぐのは難しい。開戦したら、Fクラスの戦力はお前、姫路、明久、島田、秀吉のみだ。その中でもお前は主力で、お前によつてFクラスの明暗がかかっているといつても過言ではない。だから、お前は明日のために今日はもう動くな。その代わり、Fクラスの連中を説得して、少しでもテストを受けさせろ」

「了解、できる限り頑張る」

「ああ、俺たちも全力を尽くす」

「そう、じゃあ疑つて待つてるからね」

『疑つて待つている。その意味を雄一は理解してくれている。

『成功するか成功しないかは現時点ではわからないし僕はどちらの可能性も捨てられない。だから、変わることのない事実を示せ』結果

僕は信じるという言葉はあまり好かない。

信じることは多くの可能性を切り捨てる、いわば一本道。

それに対して、疑ふことは無限の可能性を受け入れること。一本道に対し、木のよぎに広がっていく。

それが僕の疑う理由。

知を望み、手に入れ、事実を知るための手段。

確かに他の人とは変わっているだろ？。

でも、それは僕が思想を変える理由にはならない。

大衆が正しいとは限らない。

そもそも善と悪、その判断をするのは僕だ。

まあ、信頼と信じることは別だ。

信頼はその人の今までの行動の考察からなる。

考察はいつでも変えられるものだが、そのキッカケがなければ信頼したままだ。

ゆえにメープルは信頼できるし、そのほかの人も言わずもがなだ。

メープルが最初に拳がったのは偶然だ。

第五十問～日本産で毒をもつクモは一種類のみ～（後書き）

感想よろしくお願ひします！

第五十一回 ペリカンアンソウは体色が透明に近い（前書き）

サブタイトル
透けて中が見えるようだす

第五十一問 ペリカンアンソウは体色が透明に近い

第五十一問

「我々Bクラスは、Fクラスに対し宣戦布告を行う。」

翌日、朝のHRの時間にBクラスの使者が宣戦布告をしてきた。
ちなみに添い寝は試召戦争があるので延期してもらつた。

放課後も活動していた雄一達の努力も、実を結べなかつたようだ。
「こまでは問題ないが、一つ困ったことがある。

「…………（ボーッ）」

放心状態の明久だ。

「明久、どうした？」

「…………（ボーッ）」

「…………やつちまつか。

ガツ！（明久の足を思いつきり踏みつける音）

「…………！（バタバタ）」

やつと気づいたようだ。

「で？ 明久、どうしたんだ？」

「謝罪の言葉が一つもないのは気になるけど…………実は、歌美から今日告白の返事をしてほしいってメールが来て…………アドレス教える暇なかつたけど…………僕はどうすればいいのかな？」

「アドレスはたぶんメープルが教えたんだと思う。なんか気が合つんで、だいぶ仲良くなつたらしいし。それは置いといて、明久。君は彼女をどう思つてている？」

明久の行動を観察したところ、「」の質問返答に予測はついている。そして、その後何を言つかも。

「僕は…………歌美のことが好きだ。小学生の時から。でも…………僕みたいな駄目な人間が歌美と一緒に居ていいいのかな？」

「明久、僕からのアドバイス、告白は付き合つ付き合わないの話だけじゃない。自分の考え、決意を言つことも可能だよ」

明久には、今伝えるべきことがあるはずだ。

「それに明久、僕はお前に協力すると言つた。自分の足りないものを補いたければ、そのときは相談してみて」

「ありがとう。僕はこの戦争が終わつたら、キチンと思いを伝える。

それと……ありがとう博人、僕を導いてくれて

「この面と向かって礼を言われるのも照れるな。

といふかそれ死亡フラグじゃないか……？

「どういたしまして。さて、まずは田先の問題から消化しないとね

「みんな、今からBクラスとの戦争だ。相手は上位のクラス。強敵だ。だが、勝機がないわけじゃない。全力で行くぞ！」

『おおおおおっ！』

「さて、僕からも話があるよ。今回、敵となるのはBクラスの男子だ。少なくとも、女子は開戦を望んでいなかった。故に、いくら追い詰めても設備の入れ替えまではしない」

僕の話を聞くと、クラスにざわめきが広がる。

「この設備に対する不満があるのはわかる。だが、君たちFFFの皆に聞いてほしい。

君たちが学校の風紀のために活動していることは知っている。だが、それは今日までにするべきだ。君たちには、人々の^{主に女子}幸せを願う集団になってほしい。

不純な異性交遊が許せないのはわかる。

でも、当人が幸せなら、少しは見逃すべきだ。だから、君たちがやるのはそれに対する制裁ではない。

君たちのやるべきこと…それは、もっと自分を磨き、女子を幸せにする事だ。

君たちにも、思う人が居るだろ?。その人を幸せにできるなら、本望ではないか?少なくとも、今の状況に甘んじていれば、それはできない。

皆!そのための布石として、この戦争、絶対負けないぞ!」

『うおおおおおおおおおおおお…』

「あ、ちなみに坂本雄二への制裁は今まで通り」

『よつしゅあああああ…』

キンコンカンコーン

ちゅうど良いくじりで開戦の合図がなった。

「よし!…皆事前に話した役割を遂行するんだ!」

『おおおおおつづ…』

…………ふう。これで明久も僕も追われることはなくなった。

明久が付き合い始めたら、大変なことになりそうだからなあ…………

でも、これでクラスがよい方向へと向かってくれたら良きことこの上ないな。

404

第五十一問～鳥も毒をもひます～（前書き）

サブタイトル

ニコーギニアの密林などに生息するズグロモリモズです。

第五十一問「鳥も毒をもちます」

第五十一問

開戦から十分。

クラスの戦力の大半をつぎ込み、相手を教室内へ押し込める成功した。

ここからは僕の出番だ。

「試験召喚」

今回は秋音姉の物理フィールドだ。

『Fクラス 七伏博人
物理 796点』

今までFクラスのメンバーで削ったBクラスの人間は3人。

あと22人倒せば良いわけだ。

まず、手頃な相手に肉薄し、首を刈り取る。

黄金の腕輪の『攻撃追加』により、斬撃のエフェクトが広がりさら
に一体葬つた。

続いて動きが止まつてゐる敵に狙いを付けて、突きを放つ。

そしてその場で腕を広げて回転する。近場にいた敵を五人ほど巻き込み、消した。

「く、くそっ！ 試獣召喚」

フィールドの召喚獣が減つてきたことによつて、焦つて召喚獣を呼び出してきた。

呼び出された瞬間に踵落として両断する。

召喚した瞬間は最も隙が大きい。それに気をつけなければいけないのに。

「来い、ハンミョウ！」

腕輪の能力『昆虫召喚』を使う。

だが、地上には一向に何も現れない。

それを好機と見たのか、こちゅうこちゅうこんでくるヤツがいる。

そしてそのまま———消えた。

「な、なんだ！？」

あれ？ わかつてないのかな？

「『ハンミョウ』幼虫・成虫ともに肉食性の昆虫だ。そして僕が呼び出したのは、幼虫。その生態は地中に巣穴を掘り、近くを通ったアリなどの昆虫を引きずり込み捕食する」

そして、僕が呼び出したのは五体。相手の有利である人数も、動きを制限されてしまえば効果はない。

相手がハンミョウに気を取られている内に、僕はどんどん敵を狩つていく。

はつやうり言つて弱すぎる。

「来い、ウチワヤンマ」

さうして腕輪の能力で昆虫を召喚する。

肉食性であり、飛行能力も高いトンボはかなり使いやすい。

空からはウチワヤンマ、地中からはハンミョウ、そして地上は僕。それぞれが攻撃を続け、敵の数を減らしていく。

10 ······ 9 ······ 8 ······ 7 ······ 6 ······ 5 ······ 4 ······ 3 ······ 2 ······ 1

「さて、残るのは君だけだ根本君

「ぐ、ぐそつーおいつ、女子もーこつをやりないとFクラスと設備交換だぞ！」

「投降の意志なしと見て、撃破」

根本の首が宙を舞つ。

「勝者、Fクラス」

「さて、Bクラスの女子のみなさん。和平をしましょ？」

「ありがとう、七伏君」

「僕たちもBクラスとの戦争で助けられた。お互い様だよ」

「わかったわ。それじゃあ、和平にて今回の戦争は終了」

双方の同意が得られたため、これで終結。

あ、そうだ

「根本君は勝手に処分して良い？」

「もちろん」

即答だった。

「佐藤さとしちゃんがここに来れば……」

「…なんとかなって言つていたみたいだね？」

第五十二問～ ハジアトには黒と灰色のツートンカラーのカラスがいる～

第五十三問

さて、次の問題だ。

それはもちろん明久。

今は放課後で、びひややや稲垣さんを屋上に呼んだらしく、僕は陰から見守っている。

「いや～どうなるつすかねえ？」

なぜかメープルもいるけど。

「そ、それじゃあ、僕からの、へ、返事を、するね……」

緊張しそすぎだ、明久。

「うん……？」

それでも稻垣さんはいつも疑問系だな。

「僕は…………歌美のことが好きだ。

でも、今の僕じゃ歌美と付き合つにふさわしい人間だとは思えない。だから、頑張つて努力して歌美にふさわしい人間になるから、もう少し待つてほしい

「……………明久はやっぱり変わつてないね？」

でも、好きつて言つてくれて嬉しかつた。今ここでそれが聞けただけでも十分、いくらでも待つよ？……………あ、ちょっと待つてくれるかい？やっぱ一学期が終わるまでにキチンと私にふさわしいと思えるようになること。いいね？」

「わかつた、約束するよ」

なかなか男前だぞ、明久。

「でも、付き合つていないとほいえ、両思いなんだから過度なスキンシップはいいよね？」

「え？ それは…………」

ああ、稻垣さんがなんでメープルと仲良くなつたかわかつた気がする。

「そこは絶対受け入れるべきつすよ、明久君！」

つて何やつてんのメープル！？

「別にスキンシップぐらい普通つす！それに、待たせるんだからそれなりの対価が必要つす」

ほら、こんな風なスキンシップは日常茶飯事つすと僕を引っ張つてぎゅーっと抱きついてきた。

「わかったよ。でも、あんまり他の人がいるところではやめてよ

明久の了承を聞き、メープルと稻垣さんはハイタッチしていた。

「あ、うたみんうたみん、このかっこよくて可愛い子が私の恋人つす」

「僕は七伏博人。一応七伏行平の弟であるから、名前で呼んでほしい」

「うん、わかったよ？私は稻垣歌美。名前で呼んでほしいね？」

「さて、それじゃあ帰るつすよハク。今日は添い寝なんすから

忘れていくれてたら良かつたのにな……

夜11時20分、ベッドには僕以外にもメープルがいた。

もちろん僕は端っこに避難している。

そんな僕の手を取つて、弄りはじめた。

「ハク…………あんま無理しちゃダメっすよ」

.....!

「700点を超えた力のファイードバック。少なからず疲労しているよね？」

「心配してくれてありがとう。でも、この程度は問題ないよ。まあ、ひとりでAクラスと戦えばひどいことになりそうだけね」

行平とメープルを相手したら特に。

「まあ、今日はそこそこいいけど、本当に無理しないでね

「大丈夫、僕は自分を優先するからね」

「さて、この話題はここまでで、早く寝よう～」

「おやすみ～」

翌朝。

目を明けてみると、肌色が目に入ってきた。

…………まさか…………

おわるおわる顔を動かしてみると、案の定メープルの胸に顔を埋める形となつてゐることがわかつた。

がつちりホールドされているので、逃げられやうもない。

それにしてもメープルのパジャマは不自然なくらいはだけてゐる。

ボタンも半分以上外れているし。

おわりくわせとだらり。

でも、体温が暖かく肌も柔らかいので心地いい。

もつぱなつといのままでもいいかな…………？

「…………（計画通り）」

第五十四問 カメガエルは水中にはいると溺れ死ぬ

第五十四問

Side明久

梅雨前線の影響を受けないこの季節にしては珍しく、午前中に雨が降つた日曜日の午後。

僕は遊びに来た歌美と一緒にゲームをしていた。

「よつーほつーーとつ、と」

「あれ？ むむつ？ うりや？」

本当は先週発売されたボクシングゲームをやろうと思つていたんだけど、あれば体を動かすから、まだ体力が戻っていない歌美を考慮して某『大乱闘』をやつている。

それについて歌美の声は可愛いなあ……

——ピンポーン

とそんなときに、甲高い呼び鈴の音が響く。

「ん？ 宅配便かな？ まったく、今いといふのに……」

「待つてあげるから早く行つたほうがいいんじゃないかな？」

「うん、行つてくる」

仕方がないので、僕は溜息混じりでゲームを一時停止して玄関に出ることにした。

「はーい。どうひきまでですかー？」

返事をしながら鍵を外し、扉を押し開ける。

少しだけ開いたその隙間からは、熱気と湿気を孕んだ風が流れ込んできた。

一瞬それに顔をしかめながらも、さらにドアを押し開ける。

すると、そこに見えたのは——

「…………え？あれ…………？」

目の前にいる人物を確認し、思わず僕は自分の目を疑つた。

僕の危険センサーが大音量で鳴り響く。

間違いない。この人は……

「…………ね、姉…………さん…………？」

本来ならここではなく海外にいるべき人の呼称で問い合わせる。

するとその相手は、

「はい。お久しぶりですね、アキくん」

そう言って、短めに揃えられた髪をわずかに揺らしながら静かに微笑んだ。

――なぜかバスロープ姿で。

「なんでバスロープなのさ―――っ！？」

この姉の奇行には度肝を抜かれた。

「日本は暑いですね、アキくん」

「今すべきは天候の話じゃない――してバスロープをあてているのかー？」

「アキくん。玄関先でそんな大声を出すなんて……。姉さんはあなたをそんな常識知らずな子に育てた覚えはありませんよ？」

「まさかバスロープで公衆の面前を歩いてくるような人に常識の有無を問われる日がこようとは……っ！」

絶対僕の方が常識人のはずなのに……！」

「それに、人の話は最後まできちんと聞きなさい、とも言っているはずですよ?」

「明久? 何かあつたのかな?」

大声を出していたからか、不審に思つた歌美が玄関まで来ていた。ゾクリ

――つ! ? 何だ、この悪寒は?

「アキくん? 姉さんはアキくんが一人暮らしをする時に、一いつの条件を出しましたよね。まさかそれを、忘れた、なんて言つつもりじゃないですね?」

「すっかり忘れてた――って言つたら、姉さんは怒る?」

忘れてたと言つた瞬間姉さんの眉が動いた気がしたので、慌てて後半を付け加える。

今の内だ。今の内に思い出せねば……!

「いいえ。怒りませんよ」

「え? そうなの?」

「はい。怒りません」

「良かつた? 実は僕、約束あまり覚えてなかつ——」

「ですが、代わりに『チュウをします』

「……たわけないよなつーそつ、あれだよー?『ゲームは二田二十分』、?『不純異性交遊の全面禁止』!」

「ええ、その通りです」

「ふつ……助かった。実の姉と廢が合わせるなんて[冗談じやない。

まだ歌美ともしていないのに。」

「それでは、懺悔は終わりましたか?」

「え?なんか悪い」とした?

「少なくともわざわざの約束を破った証拠は見つかって——

「家に女の子を呼ぶなんて、不純異性の現行犯です」

「待つたーこれにはわけがあるんだー!」

「田をつぶつて歯を食いしばりなさい」

「さつき自分で人の話は最後まで聞けって言つてたよね!?」

明らかに理不尽だ。

「話せばわかるから…………」

「問答無用です」

ああ……」んな風に犬養毅が殺されたんだっけ……

「姉さん……遺言いい？」

「せめてもの情けです。聞いてあげましょ」

情けをかけるんだつたら殺さないでほしいと言いたいが、今はツッ
「//よりこのチャンスを生かすことが最優先だ。

「アレはなんだろ?」

明後日の方向を指差すと疑いもせずそちらを向いてくれる姉さん。

——バタン。ガチャガチャンッ

その隙をついて、冷静かつ手際よく扉を閉じて鍵をかけた。

「どうしよう! ? 歌美?」

「ええ~? いきなりすぎてわからないよ?」

とりあえず歌美を連れて部屋に引きこもりつ。

籠城している間に姉さんを説得できれば生きていられる!

思いついた案を実行するために、歌美の手を引っ張つて連れて行こうとするが、いきなりだつたからか歌美が躊躇してしまった。

手を握っていたのでそれに引かれ、転んだ体勢は――

僕が歌美に覆い被さっている状態だ。

「はわつ！？」

歌美の顔が赤くなっているけど、可愛いなあ……

ガチャガチャ――ガチャン

「姉さんも合い鍵をもって――――――」

終わつた。もう逃げられない。

迫り来る姉さんに捕まり、僕の意識は闇へ落ちていった。

第五十五問～光るホタルは原始的～（前書き）

サブタイトル

光は夜間のみにしか効果がありませんが、匂いは四六時中効果があるので、フェロモンでおびき寄せるホタルの方が進化していると言われています。

第五十五問～光るホタルは原始的～

第五十五問

『私は心の底から明久を愛しています』

『…………仕方ありませんね。アキくんがあなたとお付き合こする」とを認めましょう』

『ありがとうございます』

『ですが、もちろん不純異性交遊は認めません』

『わかつてます。キチンとその辺はわきまえます』

『では、出来の悪い弟ですが、よろしくお願ひします』

『はい、任せてくれ』

「うん…………？あれ、おはよつ歌美」

田を開けると、心配そつとのやき込んでいた歌美と田があったので、快調を表すため挨拶する。

「ああ、うん。おはようだね? 明久」

ひとまず大丈夫だと判断したのか、ホッと一息ついてから返事してくれた。

「アキくん、本人から話は聞きましたが、今回のこととは私の認める以前の行為として減点300です」

「ちよつといい?」

「はい。なんでしょ?」

「認めたって何を?」

「アキくんと歌美さんがお付き合いでする」とです

「減点つて何?」

「それは、アキくんが一人暮らしを続行あいても良いかどうかを判断する基準です。最終的に、振り分け試験と期末試験の結果を比べ、プラスであったなら一人暮らしの続行を認めます」

「…………減点300つて最初からピンチじゃないか」

「ちなみに、点数のアップはどうすればいいの?」

「規則正しい生活や良好な学習成績などを提示してください。それによつて判断します」

昔の僕だったらいで狼狽えていただろ。しかし、今の僕は違う。
吉井明久m-k2と呼んでも差し支えないほどだ。

食事、睡眠、学習、起床。どれを見ても標準的で、おかしな点などない。

こんなところでも博人の助言ごすゝみが役に立つなんて……。レギゼ餌を差し入れしておいた。

「どういひでアキくさ。レジにてお土産に買つてきたローハーがありま
す」

B レジの出^{レジ}ῆーはこいつからお土産になつたんだりつへ。

「はこ、どうぞ」

バー檻にフルトップを引き上げて渡してくれる。

「うふ。あつがどう

受け取る手を伸ばすと、なんとなく予想していた通り、わざと
うつぶよろけて僕に「ローハーをぶちまけよ」としてきました。

「あ、すこません。手が滑つ——」

「ほつひとつ

すかさず回避行動を取る。余裕あり——

「明久、それだけじゃ不十分だよ?」

え?

ガツ(脚払いの音)

ドスツ(姉さんが倒れた僕のマウントを奪つ音)

ガシツー——バシャ(歌美が僕に「ほそりとしたコーヒーをつかんだけど勢い余つて歌美にかかつてしまつた音)

「ありや?」

「ちよつと姉さん一何やつてんの!?」

「アキくんの不注意です」

ビリビリビリビリ たらそつなるんだわ。

「仕方ありませんね、アキくんは。歌美さん、そのままではいけませんから、シャワーを浴びてきてください」

「はい、わかりました?」

「めんね、こんな姉さんに巻き込んで……

第五十六問～カンタンは故事から名がついた～（前書き）

サブタイトル～邯郸一炊の夢といふことわざが生まれた故事です。鳴き声がとても美しく夢の中に引き込まれるようであるから、 カンタンと名づけられました。

第五十六問 カンタンは故事から名がついた

第五十六問

シャアアアアア

日本国民は上記に選挙された国会における代表者を通じて行動し……

チャプ、……

我らと我らの子孫のために風呂の覗きをし、再び戦争の惨禍がおこらないように風呂に突撃……

「だああああ——つ……」

理性が！ 理性がものすごい勢いで削られる！

歌美の服の入った洗濯機を回すところでもある//シ・ショーン
がこんな眼があるなんて……

歌美がシャワー浴びてる音とかどひじりとー？

はつきり言つて拷問だ。

ま、まあなんとか洗濯機は回せたから早く退散しよ。」

その後姉さんが着替えを持つていつてくれたんだけど……

「なんでワイシャツだけなの?——」

裸ワイシャツ。まさかこの田で持める日がいつかは……。

「ああ、心配あつませんよ。アキちゃん」

「心配しかない状況の中でいつたい何が心配な?のを」

「ちやんとノーブラですか?」

「アウトオオオオオッ!」

なんでこの人は僕の理性を削るようなことをするんだひつへ。

「できればパンツもない方が良かつたのですが……」

「良くない。明らかに良くない。

「うう……明久あ……恥ずかしいよお……?」

「グハッ!」

床に座り込んでワイシャツの前を押さえながら涙田で上田遣い……
だと……?

ハハハ…………良かつた……破壊力がありすぎて僕の足が動かなくなつたのが幸いだ。

…………足が動いていたら確実に襲いかかっていたらつから。

「アキくん。早く結婚してください。」こんな可愛い義妹がほしいです」

まさか姉さんまで惑わせるとは……思ひべし。

「姉さん…………写真撮つたら早く着替え用意してあげて」

「写真撮るの！？早く着替えさせてよお…………？」

直視できない！だけじこのままがいい！

パシヤアアアアアアア

姉さんは高速でカメラを連写した後、着替えを取りに行つた。

「明久…………この格好変じゃない？」

「変だと言えば変だけど…………似合いますきて困る」

「あ…………ありがと？」

耐えろ、耐えるんだ僕の理性。

(襲つてしまえよ、こんなチャンスめつたにないぜ?)

出たな僕の中の悪魔。

(「ノーブラな上にシャワー浴びたばっかだから少し濡れてて透けてるんだぞ? 今みないでいつ見るんだ?」)

姉さんがいるんだからそんなことできるわけないだろ。

(「やうだよ。ヘタレ明久にそんなことできるわけないよ」)

上等だ天使、表に出る。

(「だいたいお前のことが好きなんだ。襲つてしまつても合意の上だろ」)

歌美とはまだつきあつてないじゃないか。

(「それはお前の我が儘でそうなったんだり? 向けつけはお前を望んでるわ」)

「着替えを持ってきました」

残念だったな悪魔。姉さんが来たからには、襲えるわけがない!

「ところで、どんなの持つてきたの?」

「はー、

ナース服です」

「普通の介護――つ――」

「ласпицькоюци?」

第五十六問～カンタンは故事から名がついた～（後書き）

感想・指摘等お願いします。

第五十七問～多雪地ではブナの葉の面積が大きい～

第五十七問

「『雄一の家に泊めてもらえないかな。今夜はちょっと……帰りたくないんだ』っと。よし。送信送信」

学校に向かいながら雄一にメールを打つ。歌美の家に泊めてもらいつわけにはいかないし……主に理性の面で。

本当なら今日は僕の家でボクシングゲームの再戦をする予定だったけど、姉さんが帰ってきているいまはそうはいかない。

このまま家にいたらまた減点もらいそうだしだし……

是非とも雄一に頼み込んで家に泊めてもらいたい。

メールの送信完了を確認してから携帯電話をポケットにしまう。

なんか雄一が酷い目にあつてる気がするけど、まあいいや。

Side 博人

「…………」

「…………」

シユパツ

ガツ

「…………」

「…………」

「どうしたの雄一？なんで僕の腕を掴むのかな？」

「お前じゃ、その携帯をどうする気だよ？」

やれやれ…………そんなこともわからないのか…………

「通報するためだよ！」

「まで、誤解だ！」

「ワインシャツヒートランクス一枚のヤツが何を言つてこらーん……」

「流石にそれはないっすよ、雄一君」

ほひ、隣にいるメープルも退いてるじゃないか。

カシャ

「あー、この画像を校内にまわしましょうかね」

行平は手際よく雄一の姿を写真に納め、それを発信してしまった。

「これには…これには理由があるんだあ…」

「わかつたわかつた。警察署でゆつくり聞いてあげるよ

「てめえ…俺をなんだと思つてんだ…?」

「変質者」

「否定材料が…………ない」

ほら見たことが。公衆の面前で裸ワイシャツなんて変質者じやなけれ
ば何だと言つんだ。

「翔子だ！翔子にやられたんだ！」

「あー、やっぱ…?」

「だからとこいつの格好はびうかと思つ
「俺にどうして…?」

「早く学校行けば?」

「ひくじゅおおおおお…」

おー、涙を流して走り去つていった。

あんな大声出せば注目集めるの……

「ちちが代表つす。あんな面白こじとを勧めつくなんて」

「少なくとも面白こからあんなことしたんじやないと思ひナビ」

ただ単に雄一の裸ワイシャツが見たかったのだね。

正直その思考は理解できないが。

「…………帰つたら裸ワイシャツやってみるつすかね？（ボソッ）

」

あれ？なんか嫌な予感なんだけどこじことのよつた微妙な予感がある。

第五十八問 カラスの行水は一般的（前書き）

サブタイトル

カラスが水浴びをする時間が短いことからできたことわざですが、水浴びは羽根が重くなるので天敵に見つかると大変危険な状態です。なので、どんな鳥でも水浴びは素早くすませるので、カラスが特別早いわけではありません。

第五十八問 カラスの行水は一般的

第五十八問

「おはよー、って雄一はどうしたの？」

おや、明久が登校してきたようだ。

「明久…………そういう趣味の人もいるんだ。察してあげて…………」

「『めん雄』…………何かつらいことがあるなら、相談に乗るから…………」

……

「そもそもテメエのせいだ明久！テメエのせいで俺は、下半身超ク
ーリビズ仕様で登校する羽目に…………死んで償えこのクソ野郎！」

「えええっ！？ いきなりどうしたの！？ 一体何があったのさ！？」

「黙れ！死ね！制服をよこせ！」

見苦しいハツ当たりだなあ…………。

『おい、知ってるか？坂本の話』

『ああ、裸ワイシャツで登校してきたんだってな。画像が回ってきた

てたぞ』

『俺のとこにもまわってきてたぞ……。流石としか言いようがないな……最近女装は見慣れてきたが、アレには度肝を抜かれたぜ……』

…』

おお、もう結構写真が広まっているようだ。

流石は行平、仕事が速い。

「あ～、すみません坂本さん。そういう趣味の人は歌美に悪影響を与えるかねないのでちょっと……」

「なんだそのよそよそしい態度！何気に距離とつてんじゃねえよ！そもそもお前が送ってきたメールを翔子に見られたせいでズボンを奪われたんだボケ！」

朝はとにかく弄つてたから詳しく聞かなかつたが、一体どんな内容が書かれているのだろう？

「明久はどんなメール送つたの？」ちょっと読んでみて

「えーと、雄一の家に泊めてもらえないかな。今夜はちょっと……
帰りたくないんだ！」

「？？？いたつて普通の頼み」とじやないか？

「別におかしな点はなかつたよね？」博人

「うん。同意」

「朝からお主らは何をやつているのじゃ？」

「聞いてくれ秀吉。実はこのバカがこんな朝早くから公序良俗に反するような発言をしたんだ」

「明久……。お主、朝っぱらから助平な」とを言つておつたのか?」

「違うよー。僕はそんなムツツリーーみたいな真似はしないよー。」

「…………失礼な」

ムツとしたような声でムツツリーーが返事をしてくる。

噂をすれば影つてやつかな?

「おはよウムツツリーー。どうしたの? 隨分荷物が多いけど」

ムツツリーーの両手には学校の鞄の他にも、大きな包みや袋を提げていた。

今日は体育がないからジャージではないだろ?」……

「…………ただの枕カバー」

「そのわりには包みが大きすぎる」

「…………そんなことはない」

おなじみの否定のポーズをとつてくるが、逆にそれが怪しさを増し

ている。

「『』めんムツツリーー。ちよつと中身を見せてね」

「…………あ」

明久が大きな荷物が邪魔で動きの鈍いムツツリーーから素早く包みを拝借する。

なにが入っているのだろうか？

そして、中から出でたのは――等身大の明久うせーラー服（*ルーム*）がプリントされた白い布。

「…………ムツツリーー何、これ…………？」

「…………ただの抱き枕カバー」

「ただの、じゃないつー今すぐ抱き枕カバーを回収して、歌美のに換えて持つてきてよ…………あ、ごめん。やっぱいいや」

「ほつへ・どつしへじや？」

「だつて…………歌美の許可はないし、何より僕は抱き枕で妥協したくないからね」

「おお～、なかなか言つよつになつたね。」

僕は抱き枕なんて考えられないからね……

メープルに見つかったらそのまま後ずっと添い寝させられる.....

第五十九問「ムカデの毒で死ぬ」ともある（前書き）

普通のムカデはさほどではないですが、20cmあまりのナンベイ
オオムカデは猛毒です。

第五十九問「ムカテの毒で死ぬ」ともある～

第五十九問

「とにかく、先ほどのお主らの話はなんじゃったのかの？」

「あ。えっと、何の話をしてたっけ？」

「俺が明久に裸ワイシャツでの登校を強要された、という話だ」

「明久、お主……」

「誰が雄一のなんか！そんなことするんだつたら歌美にもう一回やつてくれるよう頼むよ！」

……え？裸ワイシャツ見たことあるの？

つていうかちょっと危ない状況だな……。

まず、このことを歌美がうつかりメープルに漏らす。

メープルが裸ワイシャツの実行を決定する。

家に帰つたら実行される。

えらいこいつぢや！

最悪のパターンだ。

ま、まあ歌美がメープルに裸ワイシャツの件を話さなければ問題ないはず…………。

「…………明久、その話を詳しく」

流石はムツツリー、H口の話への反応が速い。

「まあ、その話は後にしておけムツツリー」。要するに、明久が送ってきたメールのせいで翔子が何かを勘ぐつて、それが原因で俺が酷い目に遭つたって話だ」「

「メール？それは今朝の明久の様子がおかしいのと何か関係あるのかの？」

ふむ、確かに今日の明久は……

「いつもより顔色が良くて、制服がに糊が利いていてパリッとしてるし、寝癖もないね」

「確かにおかしいな。最近顔色はまあまあ良かつたから違のはわからんが、制服がきちんとをしているのは妙だ」

「…………明久らしくない」

「どんどん分析されてるね。これはちよつとまづい状況なのかな？」

「たまにはそういう気分の日もあるんだよ！それより、そろそろチ

ヤイムが鳴るよ！鉄人がくる前に席に着ないと！んじゃ、そういうことだつ！」

多少強引だけど、話を打ち切つて逃げていつた。

「「「怪しい」」」

あ、そういうえば明久のお姉さんが帰つてきてるって秋音姉が言つてたな。

明久のお姉さんと秋音姉は結構仲が良い友人らしいが、変わつてる人だつて言つてたからなあ……

それの関係かもしれないな。

「さて、それじゃあお昼にしようか明久

「あ、うん。そうだね……」

近くの卓袱台を合わせ、『飯を食べられるようにする。

「あれ？珍しいね明久。弁当作つてきたんだ

いつもならおにぎり数個と買つた弁当だつたはずだ。

「あ～うん、気分だよ気分」

なんか』」まかせつとしてるみたいだな。

『明久、お姉さんが帰ってきたんだって？（ボソッ）』

耳打ちして話すと、明久は一瞬動搖したが、僕が小声で言ったのを理解してか、同じく小声でかえしてきた。

『そりなんだよね……それで、良好な生活態度を見せないといけないんだ……』

なるほどねえ。やつこいつわけでこんなにしつかりしていたんだ。

『明久君……もしかして歌美ちゃんに作ってもらつたんですか？』

おっ、なんか最近『き』ちなかつた姫路さんだ。

『いや、自分でつくりたんだけど……』

『嘘ですね』

『おい、吉井のやつ稲垣さんに弁護つべつてもひつたつてよ』

『まつたく羨ましいやつだな』

『ああ、ちよつとスキンシップしてみのんや』

『ブレーンバスターでいいよな？』

『逃げるぞ明久！』

「了解！」

スキンシップは最高でも5人までだが、奴らの攻撃力は半端じゃない。

ここは逃げが吉だ。

第六十問～オウムガイはアンモナイトから進化したわけじゃない～（前書き）

サブタイトル

似てますが、どちらかといふとオウムガイがアンモナイトに深海に
追いやられたから生き残っています。

第六十問「オウムガイはアンモナイトから進化したわけじゃない」

第六十問

「博人、どこ行く！？」

「Aクラスを頼るう！」

「了解！」

Aクラスならメープルがいるし、さらに行平、歌美もいる。

「失礼します！」

廊下を音をたてずに爆走し、Aクラスまでたどり着いた。

「あれ？ハクどうしたっすか～？」

「うん？明久もどうしたのかい？」

Aクラスの中に入ると、メープルと歌美が出迎えてくれた。

「ちょっと追われててね……」

「お疲れっす」

「ああ、ちょうど良い」と「うに。」Fクラスにとつては重要な情報がありますが、聞きますか？」

重要そうなつて言つてるんだから、聞かないわけはないだろうが、まあ様式美といつやつだろ？

「もちろん聞く」

「わかりました。試召戦争が今学期中は禁止されるわ！」

「理由は？」

僕たちFクラスにとって試召戦争は死活問題だ。

それこそ正当な理由がなければ皆納得しないだろ？

「まずはメンテナンスですね。最強調子が悪いようで、結構頻繁にメンテナンスをしています。最近秋音姉さんの帰りが遅いのもそのためです」

なるほど…………でも、それだと――――――

「メンテナンスって夏休み前に終わる予定だったはず

「ええ、もちろんそれにも理由があります」

「生徒が試験召喚システムの本質を見失つている――――つてことへ。」

「その通りです。校舎の破壊や教頭室の爆破、学年全体での覗き、そしてまた試召戦争騒ぎ――学生の本文からはずれている行動が目立ちますからね」

「そういえば文月学園はスポンサーがいて成り立っているんだもんね。ここまで問題行動起こしてちゃんと世間からあまり良い印象はもたれないよね」

「おお、明久がちゃんと理解してる。勉強の成果かな？」

「まあ、その代わりと言つては何ですが、特別にシステムのリセットをオマケしてくれるやうです」

「それは都合が良いね」

今度はFクラスにとってこれほど良い条件はないだろう。

「システムのリセット？」

「ああ、明久はこれはよくわからないみたいだ。」

まあ、システムのリセットなんてする事は滅多にないし、覚えておくことでもないからね。

「システムのリセットってことは、召喚獣の装備も白紙にもどされるんだよ。つまり、今回のテスト次第で、明久の装備がランクアップするかもしないってこと」

「おおーよし、勉強頑張ろー！」

「うん、明久が早く私と付き合つたためにも、頑張つてね？」

「ハクは頑張つたら」と褒美あげるつす

「よし、今までと同じ位でここへや

「結果があがつてなければオシオキつす」

「全力でやらせていただきます！」

「オシオキだつたら」」褒美のほうがいいや.....

まあ、僕も装備は強くなつた方が良いし、今回のテストは頑張つて
みるかな？

そういうえばメープルと行平は振り分け試験の時に不調だつたから、
今回で装備が強くなるんじやないかな？

うむ.....恐ろしい。

第六十問～オウムガイはアンモナイトから進化したわけじゃない～（後書き）

感想等よろしくお願ひします！

第六十一問～武家に役立つクツワムシ～（前書き）

サブタイトル

クツワムシは大きな音で鳴く昆虫ですが、人の気配で鳴り止むので、忍者の侵入を察知したそうです。

第六十一問～武家に役立つクソワガシ～

第六十一問

試合戦争お預けの連絡を聞いた後、なんか明久が家宅捜査される流れになつて、放課後家まで連行されていつたが、歌美もついていつたみたいだし大丈夫だろ？

さて…………一応テスト勉強やるかな…………

「ハク～、ビツツすか～？」

ダツ（逃走を試みる音）

ガツ（つかまれて失敗の音）

ダン！（地面上に叩き伏せられて馬乗りされる音）

わかつっていたわ…………逃走が不可能な！」ビグリ～…………

「まつたく、ビヘンして逃げよつとしたの？せつかくの裸ワイシャツなのに」

それが原因だよ。

「逃走しようとした罰として、なんかやつかやいましょうかな？」

「あれは逃走ではない！」

「うなつたら僕の巧みな話術で回避してやるー。

「へえ……じゃあなんだつたの？」

「トイレです

「…………」

「あ、やつぱりちゃんと喉が渴いたんで、甘いものでも飲もうかと」

「…………」

「えーと、ちょっと外の空気を吸つて」よつかと

「…………」

「それじゃあ、えーと、ちょっと待つて……メープルが魅力的だ
つたから、ついつい動こちやつたとか？」

「…………私は逆方向に？」

「ひ、っ…それは…………『めんなさい…』

「もつ良こよ。今日はハクで遊ぶ」と云したから

「「？」

今、なんとかしゃこめたか?

「わあへ、#めくさびひつよつかな~」

メーフルは馬乗つしたまま顔を近づけてくる。

「それじゃあ最初は…………ふーっ」

「ひやあつー」

耳に息をかけられた。耳は弱いの?……

「やつぱつ可憐になあ…………んじや、お次は…………つと」

せりて耳を甘噉みしつきた。

「ひやうつーやめて、やめてよおー」

「あーもうーなんで」「んな可憐にかなあ? 凜々しい時との差が大きいね」

「ふう…………せり、もつてこでしょ~」

やつと地獄から解放される…………。

「まだだよ~。本日の目的は、裸ワイシャツの感想を聞かにきたんだから」

裸ワイシャツの感想…………ねえ

「なんとか……田のやつ場に困る」

「ほほひっ。」

あれ？選択肢ミスった？

「じつして女の子の気持ちが理解できないかな」

「え？ だつて感想言えつて言われたし」

「セリは普通褒めるものなのー。」

「褒める……とは言つても、メープルなんだから似合つてるのは当然だし……」

「セリで自然にほめ言葉ができるの……」

「まあ、よくにあつてるんだけど、刺激が強いかなあつてことで」

「あら。セリも……触つてみたい？」

「いえ、結構です」

あ、っこりかり即答しちゃつた。

「くえ～、そんなに触りたくないんだあ？（怒）」

「イヤイヤ、ソウイワケジャナイデス」

「じゃあ、ほら、触つてみて」

そう言つて僕の手を取り、胸まで運ぼうとする。

「いや、ダメだつて！」

慌てて手を引つめるが、それを逆手に取られてメープルを抱き寄せることになつてしまつた。

「もう、大胆だなあ」

もう……どうでもいいや……

「さて、遊びはここまでね。それじゃあ勉強頑張つてね」

第六十一問 キノコの形は航空力学に基づく（前書き）

サブタイトル

胞子がより遠くに飛びやすいようになっています。

第六十一問 キノコの形は航空力学に基づく

第六十一問

「…………と云ふことがあつたんだ……」

翌日、明久と僕は昨日起きたことの愚痴を言ひ合つていた。

明久は家宅捜査され、さらに女子まで家に来たことから不純異性交遊とされて、さらに減点されたそうだ。

現在の合計は - 450 点。振り分け試験のときの点数は 800 点程度だったから、田指すは 1250 点。

ちなみに本来なら - 500 だったのだが、生活態度が良好だったために 50 点プラスされたそうだ。

「それじゃあ、放課後雄一でも誘つて勉強会やつてみるよ

「僕が力を貸せないばかりに…………すまない」

今日は家の料理当番なので、遅くまでの外出はできないんだ。

「別に良こよ。こつも助けてもらつてるんだし

「うへん、それじゃあ、明日ウチに来ない? 行平もいるから世界史のブースターにはちょうど良いだろ? 」

「ありがとう。それじゃあ、明日お邪魔するね」

「んじゃ、詳しく述べまた後ほど連絡するよ」

さて、今日は勉強よりも趣味に時間を費やそう。
といつわけで我が家^{第一の自室}の飼育室にはいる。

この部屋の鍵は自分の部屋と違つてコインでは開けられないので、
マープルは入つてこれないだろ？

鍵開けといつかな？

まあ、それはまず作業が終わってからだ。

去年羽化したヒラタクワガタのハンドペアリングをやつておきたい
し……

アオダイショウにも餌をやつとかないと。

他には…………カラスアゲハはしつかりコズの木を^{与えた}から大丈夫
だし……

とまあ、そんなこんなで一通りの作業は終わった。

鍵を開けて、現在は鑑賞をしている。

「やつほ～ハク～」

「こりゃしゃい、メープル」

「私のためにわざわざ開けてくれるなんて、ハクはそんなに私が好き？」

「なぜわざわざ開けたことがわかつた？」

「ハハハ何言つてるかよくわからないよ」

「やつ…………それじゃあ正直にさせんしかないね？」

「すみません、メープルが入つてこれるよつと開けました」

「ふつ、」の驚くほど早い降伏。

はつきり言つてこんなスキル身につけたくなかつた。

「そう、それじゃあ、嘘ついた人にはきちんと罰を与えない」と

OK、詰んだぜ兄者。

(ふむ…………諦めましょ～)

…………つーなんだ！？いま行平の一アドバイスが聞こえたような？

とこりかできればこの境地を逃れられる案を出して欲しかつた。

「 もう、 昨日に引き継がれたな」 って遊ばつかなか

」

めっちゃ上機嫌だし、メープル。

かく…… なすがままでも良いや……

第六十二回～湿氣を好むサンリモニ～（前書き）

今日は短めです。

第六十二問～湿氣を好むサンリモ～

第六十二問

「 「 「 「お邪魔します」 「 「 「

「いりつしゃい」

翌日、明久、歌美、秀吉、雄一、ムツツリーーが家やつてきた。

そういうえば、メープルが連れてきた愛子もいるな。

「まずはお茶出すからビングで待つて」

「 「 「 「はーい」 「 「 「

といつわけで勉強会が始まったわけだ。

まずは明久の世界史を行平が、秀吉の古典をメープルが、ムツツリーーの英語を歌美と愛子が、そして僕は雄一の数学を担当している。

「といつわけで秀吉君。用言の活用形は以上です、わかりましたか？」

「つむ、完璧じゃ」

「それじゃあ、助動詞のマスターをするつよ。」

「……………といふ」とですが、わかりましたか?」

「うん、ここまでわかりやすいなり樂勝だよ。」

「もうこいついただけるとありがたいです。」

「これで動名詞の説明は終わりだけど何か質問は?」

「……………ない」

「それじゃあ、次はボクが不定詞の説明をするね。」

「いや~雄一に説明は必要ないから出題されそうな問題を解かせるだけですんで楽だよ。」

「まあ、このへんはできなきゃ△クラスなんぢのまた夢だからな」

「さて、△飯ができたよー。」

一番手が空いてるところとで僕が夕飯を作った。

大人数に合わせて、鍋にしてみました。

……『え、決して面倒だからとかじゃないですよ。

ただここらで刺激がほしいかと思つて何か良いもんないかなあと思つてキムチ鍋にしたわけだ。

決して鮭や白菜が余つてたからじゃない。

『いただきまーす』

みんなで席につき、鍋をつづく。

いやー、口渋ですね。

みんなより早く食べ終わり、先に片付けを始めた。

そつしていると、みんなも食事が終わったのか、会話が聞こえてきた。

『ところでメーちゃんは、博人君のどじが好きになつたの?』

『あ、私も気になるかな?』

『ふむ…………難しい質問つすね…………簡単にまとめるなら全部。細かく言つなら心遣いができる、それでいて輝いていぬといひつか

『輝いている?』』

『やつは。ハクは昔から昆虫を追いかけていて、目が輝いていた
つす。今と変わらないその光に惹かれたのもありますね』

そう言われると、恥ずかしいな……

『…………怒氣やがって…………リア充爆発しひ…………』

つておこ馬子ども。心の底から憎しみを込めた声を出すな。

第六十四問 実際ティラノサウルスは最大の獣脚類じゃない（前書き）

サブタイトル

ギガノトサウルス、カルカロドントサウルス、スピノサウルスなどの方が大きく、腕もしつかりしています。

第六十四問 実際ティラノサウルスは最大の獣脚類じゃない

第六十四問

『まあ、好きなところってわけでもないっすけど、イタズラすると慌てたりするとことか、私から逃れられないところとか、可愛いっすね』

『でも博人君結構人気あるから不安にならない?』

『あ、それは大丈夫。ハクは責任感強いっすからね。初めてをハクにあげたので、逃げようとはしないっす』

『さて!そろそろ勉強を始めよっか!』

やつと片付けが終わり、公開処刑を中断させる。

「しようがないっすね。後でハクとデートするのを代償としてやめてあげるっす」

「そのぐらになら別に良いけど……」

「やつた」

『…………んんっー。』

おおつと、咳払こされてしまった。

「んじゃあ、今度は教科をかえてみたほうが良いよね？明久は一旦世界史をやめて……古典やつといった方がいいかもね」

『お邪魔しましたー』

勉強会が終わり、みんな帰つていった。

…………風呂入つて寝よ。

そう思い、えらく上機嫌だつた行平に先に入る了承をとり、風呂のドアを開ける。

「こりつしゃい」

なぜ…………メープルが入つている…………？

ここに来たときは電氣ついてなかつたのに。

といふか自宅の入ればいいのに。

わざわざウチで入らなくとも…………

といふかあれか？行平が上機嫌だつたのはこれが予想できたからなのか？

「せ、早く入らないと風邪引くよ」

「いじめ……」「田でるかい」

「えじゃ私もすぐ出るから、ちょっとだけ待つて」

全く……心臓に悪い」としてゐなあ。

風呂場の外に出て待つてみると、後ろに軽い衝撃がきた。

「出たよ~」

「ん、わかった」

できる限りメープルの方をみないようして風呂場に入る。

しかし、まわりにまれてしまつた。

「いつたい何の用?」

「いや、どうして田を逸らすのかな~って」

「最近薄着だから田に悪いんだよ…………」

それも一理あるが、やつぱり風呂上がりなのが一番だ。

なんといつか……いつも以上に魅力的だ。

「…………せ、ハクは風呂上がりがすきなんだ……」

ハイ、なんかバレた！

しうがないじゃん！なんか濡れた髪とか色っぽいんだからー！

絶対風呂上がったあと迫ってくるよ……

まあ、しうがないからさつと風呂に入ろう。

第六十四問 実際ティラノサウルスは最大の獣脚類じゃない（後書き）

どうかお気に入り登録してください！

第六十五問 ウナギの血には毒があるらしい

第六十五問

「おはよう雄一」

「おう、博人か」

はつはつは、能天気に挨拶なんか返しちゃって。

「雄一、昨日遅くまで女子と一緒に外出してたわけだけど、霧島さんには聞かれたら大変なことになるんじゃない?」

「.....」

ああ、『やつちまつた.....』って顔してる。

「大丈夫だ、やましいことは一つもない」

「.....言い訳なら、後で聞く」

おっナイスタイミング。

「なぜ翔子がここに.....?」

「…………優しい人がここに来ると良いことがあるって」

よしひ、ナイスだ行平。

「待て翔子、さつかも言つたとおり……」

「…………うん。言い訳は向ひついで聞かせてもらひ」

雄一＆霧島さん退場。

ミーハンミンミーン

その直後、メールの通知音が鳴り響いた。

携帯を取り出して確認してみる。

【Message From 坂本雄一】
たすけ

きつと『助けて』って打ちたかったんだひつと思つと、笑いがこみ上げてきた。

隣で一部始終を見ていた明久に見せると、雄一の消えていった方向に敬礼していた。

「勉強スペースがやばくなつたね……」

「今日は雄一の家でやる予定だつたもんね」

「昨日一昨日で結構できたからしばらく学校でだけにする?」

「うーん……今の状況だともうと点数あげないとキツいんだよね……」

「……吉井」

あ、霧島さんが戻ってきた。

服に赤い斑紋がついているけど、あれはケチャップだらう。

「……勉強に困ってる?」

「あ、うん。そななんだよ」

「……それなら、私も協力する」

「え? 協力つて?」

「……週末に、皆で私の家に泊まりに来るといい」

皆で泊まつーーーつまり、遅くまで勉強できるな。

わざと霧島さんにも教わることができる。

明久にはありがたいことだ。

「いいの、霧島さんつ?」

「(うぐつ)……吉井にはいつかお礼をしたいと思っていた」

「嘘で、ここに」とは僕たちも良いの？」

「……勿論」

それじゃあ、メープルたちも誘つてみよう。

「雄一は参加できるのかな？」

「……大丈夫」

「あ、そうなの？」

「……その頃には、きっと退院してる」

「やつか。それは良かった」

嘘でにこやかに頷き合つ。

…………嫌がらせでお見舞いにカイロ持つて行ってやるや。

バカの改革と教育方針（前書き）

今回の話は、少し時間を遡ります。

バカの改革と教育方針

バカの改革と勉強方針

『言つてみたい言葉!』

七伏博人

「氣をつける、そいつは幻影だ!」

七伏行平

「泣いて許しを請えばいいと思います」

佐藤楓

「すでに私の掌の上だよ」

杉本秋音

「こう、物理的に」

稻垣歌美

「私を幸せにしてね?」

浅井海渡

「あいや、待たれよ!」

テスト期間前、今日もいつも平穏が訪れるかと思ったのだけど……

「FFFFを失つた俺たちを導いてくれるのはお前しかいないー。」

となぜか須川君に土下座され、カウンセリング的なことをすることになった。

「まずは須川君。君に特技とか好きなこととかは？」

「料理だ」

「じゃあ、それを伸ばしていくたほうが良いと思うよ?まあ、勉強も必要だけど、きつちり基礎やればまあまあとれるから、余った時間で料理を特訓するようにしてみれば?あ、勉強だったらわからないところは教えるよ」

「ありがてえ…………導師様、これからは俺のことは気軽に呼び捨てにしてくれ」

「じゃあ、導師様って言つのはやめてよ

その後も導師様と呼ばれるのを止めさせつつ話を聞いていたら、全員終わらせることができた。

まあ、今回利用したのはポケン理論。

まずは重要な差別化から話をした。

自分と似た能力のものと比べて、優位性を際だたせることだ。

実際、ある程度能力が低くても差別化すればやつていけることもある。

ゲームでは、アンコ持ちとか、Sの高めのやつだ。後は特性と技。まあ、本来マイナー pocに使うことが多いものだから、低能力のFクラスにはぴったりだ。

長所を伸ばせば面白い集団になるだろう。

実際Aクラスの人間は、エリートと呼んでも差し支えないだろう。

ただ、エリートとじや天才と呼ばれる人間の劣化。

伝説が不可だから高種族値で代用するようなものだ。

Fクラスにはそれほどの力はない。なら、特別な強みを伸ばして戦うのみ。

これがAクラスに対するFクラスの差別化だ。

まあ、行平とかメープルはエリートを超えた天才、といつても良いほどな上に、独自の強さがある。

ありやあどうしようもない。

まあ、それは置いといてまずは今回のテストで自信を持たせ、そこから自主的に勉強させる……これが理想の流れだ。

結果―――

一週間で全体がEクラスレベルになりました。

恐ろしい、一週間でEクラスとは…………

さうして、クラスの大半はやりたい」と見つけて生き生きしている。

異端審問会も完全消滅して、クラスで浮いた話がある人がいても『羨ましいぞ、コノヤロー』というノリでじやれ合って技等をかけているだけだ。

あのドラゴンスクリューは見事だつたな…………

とまあそんなわけで良好なクラスになったわけだが、教師は未だに慣れていないようで、この教室に入るたび頬を抓っている。

まだ改革から一週間なので他クラスからの評価はさほど変わっていないが、じきに認識を改めることになるだろう。

そうすれば教室中で華麗な技が見られるんだろうなあ…………

まあ、僕にはほとんど攻撃できないわけだから、関係ない。

バカの改革と教育方針（後書き）

前半のものは気にしないでください。
伏線でも何でもありませんから……たぶん。

第六十六問～アンモナイトは平面だけで巻いてない～（前書き）

サブタイトル

異常巻きと呼ばれるものは二字型に蛇行したり、サザエのよつ型に巻いていたりします。

第六十六問／アンモナイトは平面だけで巻いてない

第六十六問

問　あなたの今までの異性とのお付き合いや経験について、正直に
答えなさい。

七伏博人の答え

『…………恋人に…………襲われました』

佐藤楓の答え

『てへつ』

吉井玲のコメント
——コメントです。

稻垣歌美の答え

『キスをしました』

吉井玲のコメント

まだつきあっていない状態では、少し行き過ぎな感じもします。

吉井明久の答え

『キスされて裸ワイシャツも見ました』

吉井玲のコメント

左手一本差し出しなれど

吉井明久のコメント

認めてくれたんじゃないの！？

吉井玲のコメント

それとこれとは別問題です。

「…………いらりしゃい」

呼び鈴を鳴らしてしばらく待つてこると、ドアを開けて霧島さんが
出迎えてくれた。

「「「お邪魔します」「」」

流石噂に聞いたとおり大きい家だな。

ウチも結構大きい部類に入るが、ここまで豪邸は始めて見た。

先導してくれる霧島さんの後ろをついていく。

長い廊下には、部屋がいくつもあった。

「うふっと質問良いい？」

「…………何？」

「あの鉄格子はまつてゐる部屋つて何で使ひの~。」

「……雄一の部屋」

なるほど、思かつたな雄一。

婿入りの準備はできてゐるだ。

「……やじいじが、勉強部屋」

しばり歩いたといひで、立ち止まつてドアを開ける。

中には誰もこなかつたのでびいやら僕たちが最初のよつだ。

ちゅうじ部屋こつた時、呼び鈴が再び鳴つた。

「……やつべつして

そつと霧島さんは部屋を出て行き、来た道を引き返していった。

「それにしても立派な家ですね

「ホントね。噂には聞いていたけど、『おまどとは思わなかつたな
あ』

「住み込みの家政婦さんとかもいそつだよね

「まさしく豪邸だね

「ただけ広い敷地ならこりでできるんだらうな

「七伏邸も庭の面積はそれなりでしょ？」

「敷地面積に対しても家は普通だからね……そのおかげでバタフライガーデンがつくれたんだけど」

「そもそもそれが目的ですからね」

心落ち着く三人（ただし権力が対等とは限らない）で会話していると、霧島さんが来訪者を連れてやってきた。

「やつほー。今日も頑張ろうね」

「つむ、じんにしあわじゅ」

「…………今日はよろしく」

やつてきたのは、工藤さん、秀吉、ムツツリーの三人だった。

第六十七問～トゲナナフシ＝トゲナナフシモドキ（前書き）

サブタイトル

トゲナナフシはトゲのあるナナフシ
もともとナナフシは、節の多い枝に似るところから、七節のも
どきとされていて、これが略されずに
トゲのある七節のモドキから、トゲナナフシモドキです。
つまり、モドキは本家と同じです

第六十七問「トゲナナフシ=トゲナナフシモドキ

第六十七問

その後もみんな続々来て、残りは明久だけとなつた。

その明久もさつき呼び鈴がなつたので到着したようだ。

少したつて明久が来るが、今はそのことを気にしている暇はない。

「だから、恩恵が多い雨パガ良いつすよ！」

「いいえ、相手を削りつつ耐久もあがる砂ですよ」

「Sに振らない分耐久に振れて、高速高火力高耐久が実現できるト
リパだよ」

『.....』

「仕方がないつすね。じつなつたらハクを懷柔するしかないつす

つーつくづく卑怯な.....！

しかし、簡単に屈するものか。

徹底的に抗戦してやる！

「ああて、どんな方法で誘惑するつすかねえ？」

。

「ま、ま、むぎゅーっと」

やーいがい。

「続いてちょっと位置を変えて……」

熙こく一。

「じゃあ最後に……ひゅつ

ふあ。

「わ、雨パはぢつかな？ 良いといひたくさんあるよな？」

「と、トリパが一番なのは変わらないけど、すいすいの速さとか技の強化とか認めても良いかなって思つても良いけれど。別に、メープルの説得に応じたわけじゃないからねー！」

メープルがそこまで叫んで、ちょっと見直してあげただけだ。

決していろいろ気持ち良かつたとか、メープルの誘惑に負けたとか、そういうことでは、ない。

「…………何やつてんの？」

お、明久いたんだ。

「いや、どのパーティーや強いのか議論してたんだけど」

「それあんなことに発展するのが謎だよね…………」

「その辺はメールだからしょ‘つがない」

「むしろ、バカップルだから仕方がない、ではないですか？」

「そんなことを言われるのは心外だな…………」

「清く正しくおつしを命こしてこると思つてゐるけど…………」

「「あれでー?」」

ダブルシッ ハリをやれてしまつた。

むう……そんなに酷いかな…………?

「まあ、そんなことは置いといて、全員集まつたんだし勉強会を始めよリみよ」

最初は明久とギクシャクしていた姫路さんと島田さんは来ないかと思つていたが、失恋を乗り切つたのか、もうほとんどの以前と変わつた様子はない。

まあ、僕としては明久には歌美が似合つと思つので、彼女らに協力できる」とはない。

未練がましく引きずつていっても鬱陶しかつたし、このよくな結果になつたのは純粋に嬉しい。

明久からせりに減点をされてしまつたと報告を受けたので、結構余裕が無かつたりする。

前回の合計より100点悪くなつて、-550点。

正直キツいかもしねない.....

第六十八問～毒のないヤドクガエル～（前書き）

サブタイトル

ヤドクガエルは食物から毒を得て いるので、ペットショップなどで
売られているものは、無毒になります

第六十八問～毒のないヤドクガエル～

第六十八問

「と」ひるで雄一「は？」

「……雄一を連れて來た」

ドサツ

絨毯の上にぐるぐるに巻かれた雄一が転がされた。

「ん？ 明久。どうしてお前たちがここにいるんだ？」

「……ああ、うん。霧島さんの厚意でね……」

そんなことよりなんどロープで縛られてるんだわ〜。

「雄一よ。お主は今日の勉強会の話に霧島から知らされておらんかったのか？」

「ああ。何も聞いていない。いつものよつて氣を失つて、目が覚めたらここにいただけだ」

いつもよつて……まあ、雄一だし良いか。

「それで、勉強道具は？」

「……大丈夫。準備は万全」

霧島さんは雄一の鞄を掲げていた。

着替えもあるようだし、手抜かりはないようだ。

「さて、それでは本当に全員そろったし、始めよう

「そうじゃな。それがいいじゃろ」

『それは違うよつー世論調査では成人女性の68%以上が——』

『…………違わない。世界保険機関の調査結果では成人男性の72%以上が賛同している』

『またそつやつて屁理屈を……』

『…………屁理屈じやなくて事実』

『ぐう…………つーこいつなつたら、今度のテストでムツツリーーー君を抜いてボクの方が正しうって証明してみせるからね！』

『…………学年一位の座は揺るがない』

『…………やつて憎たらしこ」と眞つて……ムツツリーーー君なんてこいつだよつー。（パリッシュ）』

『…………卑劣な…………つーー（ブシャアアア）』

早く勉強を始めないと、大変なことになりそうだ。

そう、メープルが感化されて色仕掛けをしてこない内に！

「さて、それでは明久。宗教は世界の歴史でも重要です。宗教によつて起こつた出来事も少なくありませんし。というわけで復習問題です。儒教、仏教、ジャイナ教の創始者をそれぞれ答えなさい」

「儒教が孔子、仏教がゴータマ・シッダルータで、ジャイナ教が……マハーヴィーラだつたつけ？」

「ええ、正解です。それでは次の問題です。聖人体質とは、どういつたものですか？」

「いきなり禁書 錄ネタ！？」

「おい島田。秀吉は今まで全問正解してるんだが、お前ももうちよつとしつかりやれ。お前は問題文さえ読めれば即戦力なんだから、弱点を強化しろ」

「うう……。ウチは別に畳と卓袱台も嫌いじゃないのに……」

「雄一よ。次の問題はまだかの？」

「なんだ秀吉。ずいぶん熱心だな」

「つむ、楓に教わってからなんだか古典がわかるよつになつてきでの。それに古来からの男らしさを学べば少しあ男らしくなるとおもつての」

「そつか。じゃあ、次の問題だ。【『はべり』の已然形を用いた例文を書いてみる】

「以前食べたケーキはベリー『デリシャスでした』

「恐れはべれば申さず……ところのせびり『じゃ?』

「秀吉は正解だ。島田はちよつとそこそこに正座しない

「裏切つたわね木下…………」

「普通にできてる問題ないレベルの問題なのじゃが…………」

第六十九問 ケラは地・空・水対応（前書き）

サブタイトル

ケラは普段は地中を潜っていますが、空も飛べ、泳ぎも上手です

第六十九問～ケラは地・空・水対応～

第六十九問

「ムツツリー君。たすがにこの問題はわからないでしょ？」

「…………中一で70%。中二で87%。中三で99%」

「え？ 何でこんなことまだ知ってるのー？」

「…………一般常識」

「うう……。正攻法で勝てる気がしなくなってきたよ……」

「…………藤はまだまだ甘い」

「う、うつなつたら……。あのね、ムツツリー君。実はボクー

ー

「…………？」

「——いつも、ノーブラなんだよね」

「…………つー? (ボタボタボタ)」

「え？ それなの」「いい感じが崩れないのかって？ それはね……実は（ボソボソ）つて感じのマッサージをいつも（ドリームドリーム）つてなるまで、毎晩毎晩——」

「殺す気か」（ブシャアアッ）

「殺すだなんて人聞き悪いなあ。別にボクは、ムツツリーー君が出血多量でテストで実力が出せなくなるといいのに、なんてことも考えてないし」

「…………」この程度のハンデ、どうとこい」とはない

「ふうん。そんなこと言つんだ」

「…………お前には、負けない！」

「セレーヌまで詫づなら遠慮無く。——それで、さつきの続きをだけば、（モードモード）を身体が熱くなるまでやつたり、最後には（ホーホー）を使って（ヒソヒソ）を——

「死んでたまるかっ！」

愛子とムツツリーは相変わらずだな。

「ハクー、日本書紀に赤鳥つてのがでるんすけど、いつたんぢんなものなんすか？」

「カラスが黒いのは、アミノ酸のチロシンが酵素によつて酸化され
てできるメラニンによつているんだけど、この黒または灰色の他に

も赤褐色から黄色のメカニンをもつてゐるんだけど、なんらかのことがあって、黒のメカニンだけが生成されず赤褐色が現れた。つてことだつたと思ひよ」

「なるほど～」

「……そろそろ夕飯だから、別の部屋に来て」

『氣づくと霧島さんの声が聞こえた。

もう六時か

「よし。島田、秀吉。とつあえず古典はこれくらいでいいだ。飯にじよりや」

「うう……。活用形ってなんなのよ……。知らなくても生活には困らなこい」

「古典作品はなかなか面白いのじゃがのう……」

メープル…………ちょっと教えてだけで秀吉がえらい変わつてゐる。

「…………生き残つた……！」

「ムツツツリー君。また後で、じつへつボクとお勉強しようね」

「…………断る」

「…………」

「や、行こうメープル」

座っているメープルに手を差し出して、立ち上がりやすこよつこす
る。

「あつがとうす

「じついたしまつて」

「……案内するから、ついてきて

『はーー』

先導してくれる霧島さんと雑談しながらついていく。

「いやー、最近はちやんとした料理が食べれて嬉しいよ

「明久はもうちょっと食費を増やしてもいいんじゃないかな?」

「歌美が『いつならうかるかな』

「その…………なんなら」飯作りにいつても…………?」

「いや、食事くらいこは自分でやるよ。歌美に頼りつきりは駄目だし
ね

部屋を出しうぐい、元へがしててきた。

「…………」の部屋

霧島さんが案内した部屋には、『馳走の良い匂いが広がっていた。

「す、凄い……っ！」

「わあ……」

「これはまた、贅沢じゃな」

一般家庭ではないような大きさのテーブルに、所狭しと料理が並んでいた。

第七十問～有毒哺乳類は古い～（前書き）

サブタイトル

現在は毒でじわじわ弱らせるより、走つて捕まえてその場で殺すのが主流です。

第七十問～有毒哺乳類は古い～

第七十問

「ところで、ここに食事を摂るのはワシントンだけかの？霧島の家族はおらんのか？」

「…………うん。私たちだけ」

部屋の中には僕たち12人のみ。

「翔子の家はそれぞれが自由に暮らしているからな」

「…………うん。だから気兼ねしないで好きに過ごして欲しい」

確かに雄一の部屋があるほどなんだから、だいぶ自由なのだけれど。

「…………それじゃ、適当に座つて」

指示に従い、手近な席に座る。

『『 いただきまーす』』

みんなで手を合わせて、食事に入る。

栄養は迅速に補給しろ！

「「」れはまた、絶品じやな……」

「あ、美味しいです……」「」また食べ過ぎちゃいます……」

「……鉄分補給」

「翔子。なぜ俺に取り分けた料理だけ毒々しい紫色をしているんだ」

「……おかしな薬なんて入つてない」

「ボク中華料理大好きなんだよねー」

まるで高級ホテルの貸し切り部屋だな。

「吉井君。ボクがたべさせてあげる。はい、あーん

「ハクつー今すぐやるつすよー」

「いやだ」

「嫌よ嫌よも好きの内つすー！」
「だが断る」

「心からのお願いをそんなネタで返す人にはお仕置きが必要つすね

」

「すみませんつしたあーー！」

「でも許さない」

「なにゅえー？」

「ほら、口開けて。恥ずかしかつたら口閉じて良いから。あーん
確かに口をあけたままよりか、閉じた方が周りの反応がわからない
から、恥ずかしくないだろう。

「」で拒否しても後の展開が読めないので、大人しく口を開じて少し口を開ける。

すると、まず感じたのは柔らかい感触。

次に、口の中に入ってきた食物の味。

ん？なんかおかしくないか？

口を開けてみると、入ってきたのは口を開じて僕と歯を合わせているメープル。

これって……口移しじゃないですか！？

明らかに「はー、あーん」より高度なあれじゃないですか！

「えへへ、『かわいい』、ハク」

いきなりこんなことされたぼくだが、みんなにみられたのが少し恥ずかしかつたのか、頬がうつすら染まっているメープルにはなにもいえない。

強いて言へることがあるなり、

「お粗末様でした」

ところのことだけだ。

一万ユニーク記念（前書き）

読んでいただきありがとうございます！

一万ユニーク記念

一万ユニーク記念

「「試験召喚」」

お馴染みの魔法陣のような幾何学模様が現れ、そこから召喚獣が出現する。

いつもと違った、動物をモチーフとした姿で。

「うんうん、実験成功だね」

一万ユニーク記念『本当にありがとうござります!』これからもよろしくお願ひします!』

『さて、この小説も一万ユニークを達成できたといつわけで、記念をする』とになつたんだよね』

『記念ですか…………まあ、いくつかコーナーでもやりましょ!』

『んじゃ、最初は最近出番の少ないというかない私、秋音がいくよ

「

「海では出番があるつすよー。」

『杉本秋音の動物召喚獣！』

「今日は私が、召喚者の本質に応じた動物を象った召喚獣がでてくるように、システムをいじってみたよーんじゃまあ、早速やってみよう」

本質に応じた動物か……まあ、動物にもいろいろあるので、どれだけ特徴が動物の生態や見た目の情報から得たイメージに似ているかってことだろ？。

「それじゃあ、私とハクが先頭で」

「了解。いくよ———」

「「試験召喚」」

おなじみの魔法陣が浮かび、僕らの召喚獣が現れた。

僕の召喚獣はいつもと同じクロ一と足の鉤爪。

肘のブレードは外れ、全身に鱗状の模様の服と、少しの羽毛を装備していた。

「これは……？」

「うん、ディノニクスだね～」

「ああ、学名の意味が恐ろしい鉤爪の、獣脚類の恐竜で、良くな動く鉤爪を持つた、あの有名な恐竜の」

「ディノニクスの特徴か……」

「つまり、速さと攻撃性ってことだらうね」

「ハクつぽいね」

さて、続いてメープルの召喚獣だが……

やたら複雑な形の殻を被つていた。

「これは…………ニッポニテスだね メーちゃん」

「説明お願い、ハク」

「了解。ニッポニテス…………Nippornites mirabilisは異常巻アンモナイトと呼ばれる一種で、日本を代表する化石。複雑な形の殻を持つが、その巻き方は規則的で、対称面を中心にして字形の蛇行を繰り返して巻く。うーん…………特徴というと、規則的に巻くこと、そして、成長の段階で殻口の向きが変わらないこと…………あ、これは異常巻アンモナイト全般にも言えることだけだね。まあ、成長するたび向きが変わっていると、捕食や敵から逃げるときに不利だからね。

規則的ということから、巻き方は決まってるってことだよね?つま

り、決まった形……物事を予定通りにする…………策士つていじやないかな。

で、向きの変わらない殻口は…………本体の向きが変わらない…………こつでも自分らしく、つひとことだと思つ

「メーちゃんらしこね~」

「んじゃ、秋音さんとゴキも召喚してみて」

「わかりました」

「「試験召喚」」

まず、行平の召喚獣は

赤と黒の体色で、トカゲのような頭を被つていた。

…………まさかこれは…………

まんま行平だな。

流石行平の特徴。こんなものを出すなんて…………ブククッ

「博人? なにひとりで理解して笑つていいのですか?」

「いや、だつて――――すみませんでした!」

危ない…………恐ろしく危なかつた…………なんか懐に手を入れ始めたよ…………

いつたい何を出す気だつたんだ……？まあ、怖いから聞かないけど。

「それでは説明よりしふくお願ひします」

「行平の召喚獣はヒーラモンスター、和名アメリカドクトカゲだよ。名前の通り毒を持つてるんだけど、蛇と違つてすぐに毒を相手の体内に入れられないんだよね。だから、相手に噛みついたままで、じわじわと毒を染み込ませていくんだよね。じわじわと相手をいたぶっていくところが行平にぴったりだよね」

「ほほう

「博君、行君は確かにちょっとだけ、根は優しい紳士だよ！」

「ありがとうございます、秋音姉さん」

さて、お互に見つめ合つていぬといひの悪いんだが、次は秋音姉の召喚獣だ。

「これは…………マルハナバチだね。空気の粘り気を利用して

「あとは、空飛ぶぬいぐるみとも呼ばれていますし、可愛らしい、
という感じではないでしょうか」

「行君」

「さて、全員やつたし、次の企画こいつー。」

一万ユニーク記念（後書き）

「記念」と言いつつ話をまたぐ暴挙にでます！

一万ユニーク記念？

一万ユニーク記念？

『フリートーク！』

博人「さて、フリートークなんだけど、何話す？」

秋音「暇だからしりとりしてみる？」

行平「良いですね」

メープル「それじゃあ、スタート」

博人 行平 メープル 秋音

リストロサウルス 酢 スリランカ 角運動量保存の法則

クロノサウルス 巣 スエズ運河 ガウスの法則

クロアゲハ 歯 羽田 ダークエネルギー

ギフチョウ 鶲 ウクライナ 波

ミカドアゲハ 葉 ハワイ 因果律

ツリテラ 羅 ラトビア アーンショーの定理

』…………『

メープル「何でそんなに趣味全開なの！？」

秋音「メーちゃんたって、一文字の言葉しか言つてないよ」

メープル「キッチンと意味もあるから全然セーフだよ！」

博人「僕たって全然問題ないよ」

行平「私も問題ありません」

』…………『

博人「しつとりは止めよう」

行平「そうですね。これ以上は不毛です」

秋音「でも、話すネタが無くなっちゃうよ？」

メープル「じゃあ、なんかお題を出そう」

『博人のカバンの中身』

博人「なにゅえ！？」

メープル「いやあ～ほら、気になるなあと」

行平「というわけで、早速探つてみましょ！」

秋音「わくわく」

博人「させるかあーーぐえつ！」

メープル「これも企画だから、ちょっと動かないでね」

行平「ナイスホールドです。まずはサブポケットの方から開いてみましょ！」

ガサゴソ

十徳ナイフ を てにいた！

秋音「特におもしろいもにじゃないから先に行こー！」

博人「勝手に人のカバン開けといて何その態度！？」

ガサゴソ

懐中電灯 ラジオ ドライバーセット 小型メジャー USBメモリ 爪切り ミニライト 小銭 テレフォンカード を てにいた

メープル「かなり応用がきくね」

秋音「災害にでも備えてるのかな?」

行平「シークレットというほどの物はありませんね。それでは、本戦行きましょう」

博人「せめて自重はしてよ…………」

ガサゴソ

ハツカ飴をてにいれた

博人「あ、一つ食べて良い?」

メープル「はい、あーん」

行平「さて、お次は…………」

ガサゴソ

メープルの写真をてにいれた

『…………』

博人「あ、それはムツツリーーーから渡されたヤツだ」

秋音「カバンに入つてたつてことは、肌身離さず持つてるんだね」

博人「いや、ただ忘れてーーー」

メープル「無理やり口をふさいでやるーーー」

行平「はいはい、バカツブルバカツブル」

秋音「さて、もう探すものはないし、そろそろ締めにここうよ～」

博人「今まで、このような拙い文章を読んでいただき、ありがとうございます」

メープル「いろいろと至らない面もあると思いますが、」

秋音「よろしくお願ひします！」

一万ユニーク記念？（後書き）

これからもよろしくお願いします！

第七十一問「ミノカサ」は同種にも毒を使つて

第七十一問

まわりからの暖かい視線を乗り越えたといひで、雄一と霧島さんが話し始めた。

「……雄一」

「なんだ翔子」

「勉強の進み具合はどう?」

「まったくもつて順調だ。心配はいらねえ」

「……本当に?」

「ああ。次のテストではお前に勝つちまうかもしねないぞ」

「そうしたら俺は晴れて自由の身だな」

楽しそうに笑う雄一を見て、霧島さんの目が細くなった。

「……やうめで囁ひのなり」

「ん?」

「……勝負、ある?」

霧島さんは普段あまりしない挑発的な目で雄一を見ている。

「勝負だと?」

「……うん。雄一がどの程度できるよ?」なつたのか、見てあげる

「ほほっ……隨分と上からの田線で言つてくれるじゃねえか」

乗せられてる、乗せられてるぞ雄一。

「……実際に、私の方が上だから」

「くつ。上等だ! 勝負でもなんでもしてやる! ジヤねえか! 本当の実力の違ひってヤツを見せてやるあ!」

それにしてもうまく言葉に乗せられるなんて、霧島さんがからむと冷静じゃなくなるな、雄一は。

僕なんてどんな冷静にしてたつていつの間にかメープルの罠に嵌められて、もうすでに手遅れなんてことがあるから、言葉の一つ一つに気を付けてこるとこつのは。

まあ、それでも大した効果はないんだけど。

「……わかった。それなら、この後に出題範囲の簡単な復習テストで勝負」

「おうよー今までの俺と思つなよー。」

「……それで、私が勝つたら、雄一は今夜私と一緒に寝る」

「は？」

目が点になる雄一。

そんなこと言われたんだから、即反撃しないとビリジョウもなくなれるぞ。

まあ、雄一は負けても良い状況だ。

「霧島さん、『メン』杏仁豆腐を食べたいから刃物を貸してくれないかな？」

「……今持つてくる」

「待て翔子！今のコイツに刃物を渡すな！俺の命に関わるー。」

「大丈夫だよ雄一。ただ勝負に集中できなくなるくらい傷を付けるだけだから！」

「そんなんだつたらむしろ殺せ！妬みで殺せー。」

「ハハハ、なに言つてんの雄一。僕には歌美がいるんだから、妬む必要なんてないじゃないか」

「」このバカップルが！」

「いや、まだつきあつてないし」

「……代わりに、雄一が勝つたら吉井と一緒に寝るのを許してあげる」

「驚くほど俺のメリットがねえぞー。」

いや、雄一が負ければ既成事実というメリットがあるじゃないか。
「いいな。そういうの、面白うだよね。ボクもなんかやりたい
なあ」

いやいや、そんなことやっての誰も得しないって！

「……愛子も勝負する？」

「それもいいけど、折角だから——

わざと一呼吸入れる愛子。まさか——

「——そのテスト、皆で受けて、その点数で部屋割りを決めようよ

最悪のセリフだつ！

「そんなことして良い訳ないじゃないか！」

「でも、保健体育の実戦とか、博人君も復習したほうがいいんじゃ

ない？」

「な、な、復習つて何のこと?」

「何のことだろ?」

「大丈夫つすよ、ハク!ちゃんといろいろ教えてあげるつすから」

「いいわけないでしょ…………」

第七十一問～ミトキリマニッシュは百度以上の氣体を発射する～

第七十一問

「面白そりだから、私もやるうかな？」

なんと歌美まで参加してきた。

「えつー・?・?、歌美…………その…………」

「あ、明久が希望するなら…………そりこいつ」とも…………？」

「あははっ。もひこんなに参加者がいるんだから、博人君も逃げられないんじゃない？」

「くつ。逃げられなくても……逃げる！」

「うん、無理」

ぎゃー。羽交い締めされた。

「…………じゃあ、まだ開けてない新品の模擬試験を持つてくれる

「待て翔子ー俺はまだ承諾していないぞー」

「……決定事項。さつき雄一は勝負するつて言つた。反対意見は認めない」

「ぐつ……つーそ、それはそうだが……！」

雄一は目を泳がせて何か考えているようだ。

そして、テーブルの上を見て、霧島さんに見えないような角度でなにやら毒々しい色の液体が入ったコップを傾けた。

「つと、すまん翔子！ 服にからなかつたか？」

「……大丈夫」

ああ……そういうことか。だいたい雄一の作戦はわかつた。

「いや、大丈夫じゃない。お前には見え辛いかもしれないが、服の裾のそのへんにかかつたみたいだ」

「……それは困るかも」

「悪い。俺の不注意で——」

「……あの薬は纖維を溶かすから」

「待て。お前は俺の飲み物に何を入れたんだ」

「おお……」ほれた液体が絨毯と反応して煙を出しているよ……。けつこいつ強そうだな。

「……着替えてくる」

「やつした方がいいだろ？が……それなら、ちょっと早いが先に風呂にしてないか？腹」なしも兼ねてな」

ふむ……やはり風呂の間に何か仕掛けたつもりだな。

「……わかった。それなら先にお風呂にする」

「んじゃ、模擬試験はその後だな」

「……うん」

霧島さんが同意し、僕たちは着替えようの部屋に行くことになった。

「さて、行くか」

部屋に入つて数分すると雄一が立ち上がつた。

「覗き？」

「…………任せとおけ」

「お主、「」

秀吉は一人で別の部屋に連れて行かれたが、こつそりこつちにやつてきていた。

「違つた。俺が行こうと書つてこるのは翔子の部屋だ」

「やつぱつか……」

「大方、さつきの話にあつた模擬試験の問題でも盗み出すのではないですか?」

「ああ、やつだ」

「けど、別に僕らは問題を盗む必要なんてないんだけど」

「() () それより、覗きが大事」

「あ、ムツツリー。歌美をみたら殺すから」

「…………肝に銘じておく」

「本当にやつ思つか?」

雄一の十八番ともいえるもつたいぶつた口調で明久達に問っていた。

「なにが言いたいのや」

「いいか明久、よく考えてみろ。お前の家に今帰つてきている姉貴は、何を禁止していた?」

「?『ゲームは一日三十分』、?『不純異性交遊の禁止(相手が歌美の場合はある程度は認める)』だけど?」

「女子と一緒に寝ることになつたらどうするんだ?」

「え?歌美なら大丈夫だけど」

「協力しなければテーマをバラまく」

「外道つーこの外道つー!」

まあ、わかつっていたことだ。

「それにムツツリーー。お前も危険だぞ」

「…………どうして?」

「出血多量で死ぬ。確実に」

「…………」の俺が、死を恐れるとでも?」

なんか無駄にかつこいい気がするが、実際はただの過度なスケベだな。

「だが、予想されるテストの順位を考える。上位の人間から相手を選んでいくとなると」

たぶん

? メープル、行平、僕のどれか。科田によつて変わる? 霧島さん?
歌美、姫路さん? [愛子] だろうな。

「楓は言つまでもなく、霧島が雄一、稻垣が明久となると、工藤愛子は誰を選ぶかの?」

待て、言つまでもないのは少しおかしい気がするんだ。

「工藤はムツツリーーーを選ぶだらうな」

「 めでか」

「せつもの言い争いもある。ムツツリーーーを失血死させて、保体の王者の座を奪つてしまひじゃないか?」

「 つーつべつべ、卑怯な つー

なんか妙なライバル関係だな。

第七十二回 オオハマタラは蝶が金色へ（前書き）

サブタイトル

結構有名なことですね。

周囲の光を反射するので、保護色になります。

第七十二問 オオノマタラは蟻が金色

第七十三問

「…………あんなスペツツ」ときに、殺されるわけには……っ！」

死ぬのではなくスペツツで殺されるのが嫌なだけって…………つくづくお前はどういう考えしてんだと疑問に思つただが。

「というワケだ。協力してくれるな？」

「わかったよ。協力するよ」

「…………やむを得ない」

「七伏兄弟はどうだ？」

「私は関係ありませんので」

「もつともだ。

「僕も必要ないね。簡単な復習テストつていつてたから、多分満点で決着を避けられるし」

といつかテストは基本メープルが一番有利なんだよな……

言語系は科田多一し……

行平なんて地歴公民特化だから、僕とメープルよりも点数が取りに
くい。

まあ、それでも同程度取つてくるんだけど。

「ワシも協力しよう

「え？ 秀吉が？ どうして？」

「どうしても、じゃ」

まあ、秀吉にも複雑な理由があるんだろう。

「よし。 さつと決まれば行動開始だ。翔子の口ぶりから察するに、
テスト問題はアイツの部屋にある。 そこに忍び込むぞ。

「 「 「了解」 」 」

『 霧島さん。 お風呂はどんな感じなんですか？』

『 大浴場と露天風呂がある』

『 おお～す』 いね？』

『 それは楽しみっすね』

『ボクも楽しみだよ。温泉も、姫ちゃんに、楓、歌美のこれを見ること

見るのも、ね』

『あやひ。ど、どう触つてんじですか工藤さんひ』

『本当におつかなね。何が入ってるんだろ?』

『……羨ましい』

『やつーか、霧島さんまでひ』

『ちくがここの大きれば反則じゃないかな?』

『歌美ちゃんと佐藤さんはウエストがバツチリじゃないですかっ!』

『ハクのためひす』

『まったく、不公平よね……。平均しても、十分立つぐらいになるなんじやないかしり…………』

ふう、サッパリした。

広い風呂とこづものもたまにほっこりものだ。

まあ、実際やることは変わらないわけだから気分の問題だな。

ウチの風呂がでかくつたつて邪魔なだけだ。

さて、現在は女子たちがまだ風呂から出ていないので、お泊まりの定番といえるトランプを三人で（雄二とムツツリーはあれ以後確認できず）やつているのだが……

「…………レイズ」

「…………「ホール」

「えつと…………「ホール？」

結構本気のポーカーをやつている。

もちろん役を揃えるだけじゃなくて、チップをかけて、その点数を競う、マジルールだ。

現在の点数は僕>行平>>>>>>>>>>>>>>>>>>>

明久だ。

ウチではトランプはよくやつているので、明久程度では相手にならない。

実質僕と行平の勝負だ。

まあ、ポーカーはどちらかと言えば僕の方が強い。

その代わりブラックジャックでは行平のが強い。

さて、相手の表情、賭け金の吊り上げ。

そこから相手の手札を予想しなくてはならない。

一瞬の油断が命取りとなるゲームだ。

この勝負……本気で行くぞっ！

第七十四問～ヤマカガシは首に毒がある～（前書き）

サブタイトル

首というか頭の後ろあたりですね。
掘ると毒が飛び出します。

第七十四問～ヤマカガシは首に毒がある～

第七十四問

ポーカー勝負は僕の勝ちに終わった。

そして結局テストは中止となつた。

どうやら秀吉が活躍したらしい。

雄一達が戻ってきてまた勉強を始めて、数時間。

日付が変わったので、そろそろ就寝となつた。

こんなに起きていたのは久しぶりだな。

朝方の生活習慣を心掛けているから、夜は早く寝るし。

まあ、今日くらいは夜更かしそう。

～～～そんなわけで男子部屋～～～

「坂本雄一から始まる」（雄一のホール）

『イヒーッ！』（今この手）

「古今東西」

『イヒーッ！』

「爆ぜれば良い」と思う人間の名前」

「おいーなんだそのテーザーー！」

パンパン（手拍子） 雄一の番

「【吉井明久】ー。」

「やんのか」「うー。」

パンパン（手拍子） ムツシローーの番

「…………【須川亮】」

「え？アイツリア充だつたのかーー？」

パンパン（手拍子） 秀吉の番

「え、えつとえつと【坂本雄一】じゃー。」

パンパン（手拍子） 僕の番

「【浅井海渡】！」

うん、アイツについては後で詳しく述べよう。

パンパン（手拍子） 行平の番

「【七伏博人】です」

『同意』

大変不本意な回答だな。

パンパン（手拍子） 明久の番

「えつと【七伏行平】？」

「…………これはダウトだ」

「やつだな」

「ええ、私にお相手なんていませんから」

「杉本先生は？」

「教師と生徒で恋愛など成立するわけないですよ」

ま、従姉弟なら成立してもおかしくないけどね。

「というわけで、明久。罰ゲームだ」

「はい、クジ引いて」

「なになに？『女子部屋に行つて歌美のホイッスルを返してくれる』つてこれは僕の書いた罰じゃないか」

「なんだ明久。お前は随分とヌルい罰ゲームを書いたもんだな」

「え？ セリフでも、女子部屋に侵入だよ」

ミッシェン自身は難しくないだろうが、リスクがでかいな。

「ところで、皆はどんな罰ゲームを書いたの？」

「俺は『翔子の部屋から婚姻届を奪取してくる』だな。当然、盗つてこれるまで何度もアライしてもいい」

「ワシは『本気女装写真の撮影』じゃな。ワシの苦しみを皆も味わうべきじや」

「…………『各グッズ用写真の撮影』。ポーズを決めてくる写真はなかなか撮れない」

明らかに個人的な目的だな。もっと僕みたいに普通なやつにすべきだ。

「僕は『バック転下座を決める』だよ」

「私は『厨』発言五十連発です。もちろん動画サイトにこもります」

「晒しー?」

何を言うか。ただ難易度高めの普通の罰ゲームだろ。

第七十六問～毒をもつせしむこと～（前書き）

サブタイトル

まあ、日本ではないだけじゃ。

第七十六問～毒をもつせりせらる～

第七十六問

ギイ……

鍵は中に入がないときしかかけないのか、ドアは簡単に開いた。

(俺は向こうに行く。そつちこや、見つかならないようにね)

(了解。そつちこや、見つからないようにね)

万が一雄一が見つかったら、僕まで発見される可能性がある。

雄一のとぼっちりなんて、まっぴりごめんだ。

そつと歩き、ホイッスルがおいてあつた場所を探す。

「ん……つ」

誰かが寝返りをうつ氣配を感じ、振り向く。

するとその先には、歌美が上体を起こしていた。

「明……久……？」

(うあ、歌美ー?!)コレは違うんだ!コレは、その、ホイッス

ルが落ちていたから返しにきただけで……つー

ホイッスルを差し出しながら必死に弁明する。

すると、歌美は察してくれたのか、

「そのホイッスルをなくしたのは勉強が終わったあたりなんだけど、どうしてすぐ渡さなかつたのかな?」

「うううううん! やらしい気持ちはちょっとしかなかつたんだ!」
ついつい声が大きくなつてしまつたが、誰も起きていないようなので、一安心する。

「フフフ、言つてくれれば恥ずかしいけど、何でもするのに…………?
」

「ダメだよ。歌美は自分の体を大事にしなきや」

「明久…………私、不安なのかな? 明久と離れてると、なんか…………よくわからぬけど、変なんだね?」

「そうか……確かに今の好きだけどつき合つていないと、この状況は不安定だ。安定だ。

ましてや五年間も離れていたんだ。不安にもなるだろ?」

「わかつたよ。僕は、今回のテストで、歌美にふさわしいって言えるようになる。まだ、足りない部分もあるかもしれないけど、絶対幸せにするから」

「ありがとう…………？」

つてあれ?なんかプロポーズみたいなこと言つちやつたよ?な……?
……?

「明久?」

「ん?」

ちゅつ

僕を呼んだ歌美の声に反応すると、歌美の神秘的で、可愛らしい顔
が田の前にあつた。

その柔らかさに誘われてつい抱きしめて、もつと求めてしまひ。

「ん…………ふあ…………?」

(じ――――――)

「「「のわつ」「」

起きてるー楓さんが起きてるよー

カメラを持つて、起きてるよー

「いやーなんか外から人が入ってきたのを感じたんで起きたんすけ
ど、御馳走様っす」

「いや、ちが、それは

「いやー、私も『絶対幸せにするから』なんて言われてみたいものつす

ま、まさか録音とかされてないよね?

「さて、このまま弄り続けるのも良一ですが、ちょっとハクのところ侵入してくるのでここで失敬するつす」

楓さんはいつこって音も立てずに出で行ってしまった。

第七十七問～タ「に触手はない」（前書き）

サブタイトル

触手ではなく、腕と触腕です。

第七十七問～タ「に触手はない」

第七十七問

朝起きたら、メープルが横にいた。

いろいろシッコミたことがあるが、まだ気持つよとやつて寝ているので、延期しよう。

それにしても、近い。

吐息がかかるほどで、今にも脣が合わせつけそうだ。

逃げたいところだけど、拘束が結構強いし、これを解くよつだと、メープルは起きてしまつ。

まあ、気にしても仕方ないので、寝よう。

唇が合わせても意識しないように。

幸い右手だけは動くので、メープルの頭を丁寧になでてから、目をつむる。

綺麗な髪だったし、ものすごいからひらひらだったなあ……

二度寝して起きた（朝6時半）僕の視界に入ってきたのは、えらく
ビアップなメープルの顔だった。

つまり、キスされていた。

「あ、おはようハク

「おはよう、メープル」

何をしていたか、なんて聞かない。

聞いたところで自滅するのは田に見えてくる。

まあ、僕としてもこの状況はちょっと嬉しく……なんでもない。

まあ、こんな感じで勉強会の朝が始まったわけだ。

そして夕方。

霧島さんの家から帰ってきて、勉強したしもういつかー。

とだらけていたら、明久から電話がかかってきた。

まあ、内容を要約すると、

『玲さんのためにおいしい料理を作つてあげよ』と思つたのに、玲さんはテストで点が取れなかつたときの言い訳にされても困る、と言つた。』

ところなどだそりだ。

うーん……ここからは僕の推測も入るからあんまり自信はないけど……まずは一言、言つておいつ。

「氣をつける、そいつは幻影だ！」

「.....は？」

電話先から帰ってきたのは、純粋な疑問だつた。

言いたいことをまとめすぎた上にネタに走ってしまったようだな。

「つまり、明久が感じていることだけが全てじゃないわけ。何か隠された事実があるかもしれないんだよ。あ、そうそう。知ってる？あり得ないことを消していくば最後には真実が残るんだよ」

「わかつたよ…………姉さんがなんでああ言つたか、考えてみる」

「よひしー」

「あ、んじゅ切るね」

「ん。わかった。じゃあ最後に一言『冷蔵庫』」

あ、別に水受けで有名な電化製品お化けのフォルムチョンジではない。

まあ、今の明久なら、ヒントをあげなくても気づいたんだろうけど、少しは勉強の手伝いをしてあげなくっちゃだしね。

少しでも時間減らしてやるべだらう。

でもまあ、今の調子だとよほどのへマをしなければ問題無いはずだ。

頼むからこれがフラグであつてくれるなよ。

第七十七問～タコに触手はない～（後書き）

言つてみたい言葉、一人目回収

第七十八問) ハチの巣は紙製? (前書き)

サブタイトル

木などから作る種類はみな紙製です。

第七十八問 ハチの巣は紙製？

第七十八問

いよいよやつてきたテスト当日。

どうやら明久は昨日の件は解決したらしい。

そんなことも手伝つてか、だいぶスッキリした顔で勉強していた。

点数が取りやすい世界史を勉強していくと、今は忘れそうなことをメモしているようだ。

まあ、僕は特に勉強することもないのに、暇つぶしにルービックキューブをしている。

ストラップなので、持ち物検査には引っかかるない。

よし、揃つた。

タイムは52秒か。

まあ、この小さじや仕方ないか。

今日のテストは六科目。

現代国語・英語・世界史・数学?・化学・保健体育の六つだ。
ローディング

今日は数学?、化学が狙い目だな。

他の教科はメープルと行平に教わったことを思い出せば楽に取れる
だろう。

「よしお前ら、席に着け。今日は期末テストの一科目だが——」

いつもの時間通りに西村先生がやってきて、連絡事項を告げた。
まあ、いつも通りのことだったので、特に気に留めるとはなかっ
た。

まあ、結果を言つと——

成功だった。僕も明久も。

しかし、明久は玲さんが帰ることを望んではいないようだ。

僕の予想だと、昨日は玲さんが料理を作りと頑張ってたはずだ。
勉強で忙しい明久の為に、苦手な料理を、仕事で疲れているにも関
わらず。

そんな光景を見れば、明久は玲さんを帰すわけに行かず、引き止

めぬしか無いわけだ。

まあ、いろいろ騒がしい日常を送る「」となるんだろうが、それはまあ、文用式の日常とこつわけだ。

さて、テストも終わったので、もうすぐ夏休みだ。

夏休みに入つてすぐは、戦争で潰れた分の補習があるから、その後から本格的な夏休みだな。

まず、山に行くのは毎年恒例だし……

後は秋音姉の都合も聞いてみて、それから決める「」となるな。

でもまあ…………楽しみだ。

「さて、中途半端に余ったので、雑談」「——ナ——」

「雑談」と言つても何を話すんですか?」

「こひいろ謎に包まれている七伏家についてまじつですか?」

「ああ、やつですね。やつは、父上と母上は今ビーバーへ。

「ああ? でもおちと仕送つされたから、問題ないでしょ」

「それもやつですね」

「二人は」こんなチートなわけだけど、どんな教育を受けてたの？」

「いたつて普通ですよ？」

「うん。ただ、小さい頃からお伽話とかのかわりに物理や生態系についてわかりやすく説明されただけだけど」

「私は各国の文化や地理的条件ですね」

「その時点からおかしいね」

「やつでしょ？」「

「メープルはどんな」と聞かされたの？」

「私は古典作品が中心ね」

「はい」アウト

「まあ、ウチの父も自称冒険家の義父さんの友人だからねえ……」

「まあ、父上に関わる人は皆おかしいようですよ。従姉である秋音姉さんもその例ですね」

「ていうか、いったいどうやって稼いでいるんだか。結構昔から気になつてるんだけど」

「ああ、私もです」

「実は私も」

『まあ、尻尾をつかむのも難しいから、わからないんだけどね（で
すけどね）』

僕とケンカとネガティブシンキング（前書き）

早めに謝りておればしそう。
内容があれで「ぬるみなさい」。

僕とケンカとネガティブシンキング

僕とケンカとネガティブシンキング

ある朝、僕はいつも通りに学校に登校した。

「あ、博人おはよー。今日は遅いね」

「あ
……
」

トボトボと席に着く。

「あ
……
」

さつきからため息ばかりがでてしまつ。

「は、博人。どうしたの？」

「あ、明久おはよー」

「あ、うん。おはよう」

「ふむ
……
」

「はあ
……
」

「ホントどうしたの？」

「あれ？ 明久いつのまにそこいたの？」

「さつき挨拶したよね！？」

「あ、ごめん。忘れてた」

うん、確かに記憶にはいつもちらりと残っている。

「で？ ホントにどうしたの？」

「ここまで心配されちゃあ、話すしかないだらつなあ……

「実は……

メープルとケンカしたんだ」

「へへ…………って、ええええーー！」

なんか予想以上のリアクションをされた。

「何ー？ 何したら博人と楓さんがケンカするのー！？」

「別に…………僕たちだってケンカはするよ…………。一番新しいのは、確か13年前だったかな」

「うん、まったくケンカしてないね。いつも一緒にいるのこ、ほんとに何したの？」

「それなんだよ…………。メープルはいつも僕と一緒にいるけど、そのせいでメープルの友好関係が狭まつたり、メープルが不当な評価を受けたりしするのが嫌なんだ。でも、メープルは僕と離れたくないと言つんだ」

「うん、ちょっと殴つていいかな？」

「なんで……。明久あ…………嫌われてないかなあ？」

「それはないから大丈夫」

なんか断言されてしまった。

「でも、どうやつて仲直りすれば…………」

「謝つてくれば？」

「でも、今ちょっとアレだし…………」

「面倒くさつ！」

なんて言いようだ。こっちは真剣なのに…………

「とにかく！博人は謝ればいいの！まずはそこから！」

明久に言われた後も、踏ん切りがつかず、無駄に時間を過ごし放課後になってしまった。

仕方ないので、メールで家に呼び出した。

「お邪魔します」

すべにて、メープルはやつてきた。

そして、僕は誠心誠意土下座した。

「いめんなさい」

「…………顔を上げて」

指示された通りに顔を上げる。

「私…………寂しかったんだけど、今日ハクと話ができなくて

「申し訳ありません」

「お弁当も一緒に食べれなかつたし」

「この身で償います」

「ふうん…………じゃあ、誠意を見せて?」

誠意…………土下座じやなくて、えーと……

キス…………とか?

いやいや、待て待て。

そんなんで良いわけがない。

そもそもメープルを寂しがらせた僕なんかのキスなんて何に価値が

いや、それ以前に嫌われてないことも確かでないし……

「…………ヘタレ。仕方ない、ハク。目を閉じて」

もちろん反対する事はできないので、言われた通りにする。

すると、柔らかい何かが僕の唇に触れた。

少し気になつて目を開けると、メープルが。

つまりこれは、許されたと?

腕をまわってきて抱きついていることからもそう考えて良いだろ?。

「…………ハクのヘタレ」

「…………『めんなさい』」

「寂しかった」

「もひ、一度としない」

「ふふ…………それでいいよ」

一度離した唇をふたたび近づかる。

僕とケンカとネガティブシンキング（後書き）

すみませんでした―――っ！

第七十九問「キブリは集合フロロモンで集まる～

第七十九問

遂に、遂にやつてきましたよ、マイシーズン

夏だ！山だ！昆虫だ！

そして……補習だ！

なんというか…………すゞく納得がいかない。

試合戦争があつたから、その分の遅れを取り戻すために補習があるのは良い。当然だ。

しかし…………補習やらされるほど授業無駄にしたってのに、教室の設備が変わつていないので、気に食わない。

僕は頑張つたぞ。敵戦力を悉く切り裂き、Bクラス戦のトドメを決めたし、メープル、行平、優子の三人を相手に勝利した。他にもBクラスと戦争になつたときも、敵を壊滅させた。

ここまでやつてるのに、座布団、卓袱台、畳つてのは、それもこれも全部雄一のせいだ。

まあ、今現在雄一はこのボロい教室の最も熱く、風通しの悪い場所

にいるから、少しいい気分だ。

そんな状況にあるせいか、雄一が脱走を企てているが、その計画に賛同しているのは、位置の悪い十人ほど。

明久は、期末テストの成績と覗き不参加のことから結構位置は良いので雄一の作戦には乗っていない。

まあ、参加者は絶対捕まるだろう。

しかも、西村先生はそれを察知したのか、黒板に向かって文字を書いていたのに、いきなり声を出した。

「全員動くな！」

「――――――」

腰を浮かせて脱走の準備をしていたものは、その声によつて機先を制されていた。

「貴様ら……。脱走とは良い度胸だな。そんなに俺の授業は退屈か？」

それにして、流石は西村先生。

気配だけで脱走を察知するなんて……。

一度御教授願いたいな。

「……どうか。お前らがそこまで退屈しているとは気がつかなかつ

た。これはつまらない授業をしてしまった俺の落ち度だな

西村先生は今日は鉄拳ではなく、別の制裁を下さるようだ。

「詫びと言つてはなんだが、代わりに一つ面白い話をしてもいい。

……脱走の意志の無かつたものは耳を塞げ」

指示通りに耳を塞ぎ、僕は唇の動きが読めるので、さうして目も瞑つておく。

それから少しして目を開けると、教室には数人のFクラスの人間が転がっていた。

「それにしてもバカだなあ、雄一は、鉄人相手に脱走なんてできるわけないじゃないか」

「俺の席の状態だと、脱走は死活問題なんだよ…………」

「全く…………どうせ脱走企てるんだつたら、きちんと行動してよ。鉄人が雄一を捕まえにいつたら逃げようと思つてたのに」

「テメエ…………」

「なんか雄一が殴りかかるうとしようとしたみたいだけど、立ち上がりず卓袱台に頭を乗せてもがいでいるだけだった。

「なかなか良い作戦だね、明久。でも、多分外から鍵閉められるか

ら、脱走は難しかつたと思つよ」

最初の脱走者を追うのを優先して、鍵を閉めないといふことも考えられなくはないが、相手はあの西村先生。おそらく鍵を閉めるだろう。

「そついいえば、召喚獣の装備がリセットされたんだよね。ちょっと見てみない？」

……あれ？ 確か今は学園長がシステム弄るのに失敗して、召喚獣が変なことになつてゐんじやなかつたつけ？

「そついやそつだな。鉄人から召喚許可貰つて、確認してみるか」

第八十問～ハナカマキリは自身の姿だけでも餌をおびき寄せられるらしい～（説

サブタイトル

花にそっくりな形で有名なハナカマキリですが、花に擬態するだけではなく、その姿だけでも昆虫をおびき寄せられるそうです。

第八十問 ハナカマキリは自身の姿だけでも餌をおびき寄せられぬりして

第八十問

わい、どうしようか。

いいで下手に止めるとかえって怪しまれるだろ? な。

うん、西村先生に許可を取るみたいだから、西村先生に一任しよう。

あれ?

なんか召喚許可を取りに行つたら、あからさまに『厄介なことになつた』といった顔したよ。

ポーカーフェイスの欠片もない。

そんなんじゃ拷問受けたとき大変ですよ?

「あー……。いいか吉井。お前は観察処分者だ。人よりもずっと力があり、しかも物や人に触ることのできる召喚獣をもつていて。そんな危険なものをみだりに喚び出すことは感心できません。そんな余計なことを考えずにだな——」

先生…… あんた、隠し事に向いてないよ……

「西村教諭。ワシらは別に悪巧みをしておるわけではないぞい。ただ、純粹に召喚獣の装備がどうなつておるのかが気になるだけなのじゃ」

「」「さういひ秀吉の助けが入る。

「こや、しかしだな、木下。試合戦争でもないのに召喚獣を喰び出すところのはあまり良くないぞ」

「西村先生、そろそろ休憩終わらせましょ」「へー

「やうだな。ほり、席について次の授業の準備をするんだ

この際強引に無視して強制終了しかない。

あのままバレるよつは、まだ可能性がある。

「ちよつと待つた

しかし、その可能性を否定するかのように、雄一が西村先生の腕を掴んだ。

「なんだ坂本」

「どつやう向かあつたのは間違いなやうだな。じつなりや召喚許可をよこせなんて言わねえ。ただし、何が起きたのか説明はしてもうつせーー起動つ

「雄一の呼び声に応じ、白金の腕輪が起動する。

雄二の白金の腕輪の能力はフィールド作成。

…………「いつこう時、僕の黄金の腕輪は使えないから困る。干渉を起こさずに、僕のフィールドだけが残るのだから、全く意味がない。」

「それじゃ、早速——試験召喚つ！」

明久が召喚をすると、おなじみの幾何学模様が現れ——

「あれ？なんだか僕の召喚獣が……？」

おなじみでない姿の召喚獣が現れた。

「おいおい……。明久のクセになんだか妙に贅沢な装備になつたな。これは甲冑か？」

「剣まで持つてるわね。今までとは全然違つじゃない」

「それに、随分と背が高くないですか？」

明久の召喚獣は、白銀の甲冑に身を包み、一振りの大剣を携えていた。

「す、凄い！なんだかかなり強そうに見えるよつー。」

「いやはや……。」いつは凄いな。試験戦争が本物の戦争みたいにならうじゃないか

「せうじやな。これならば本物の人間とそいつ変わらんから」

強そうな装備になつて、喜んでいるのか、明久が装備を見せびらかすようにクルクル廻つていると……

頭が、首から離れ落卜した

「　　」

明久達は、この異常な状況に絶句していた。その間、生首は畳の上で何度も回転し、卓袱台の脚にぶつかつて、こちらを向いて止まつた。

「　あやあああああーっ！？」

「えええっ！？な、何これ！？僕の召喚獣がいきなりお茶の間にはお見せできない姿になっているんだけど！？」

明久の召喚獣は、仁王立ちをしたまま、頭だけが転がつている。デフォルメされていないので、結構グロい。

まあ、叫ぶほどではないだろ。どう考へても。

第八十一問 海棲ワニがいた（前書き）

サブタイトル

現在は絶滅しますけど。

第八十一問 海棲ワードがいた

第八十一問

「あ…………うん。はい、明久接着剤」

「ありがとっ…………って違うー説明をー説明をプリーズ！」

「せめてp—easeと言こなさい」

「発音はどうでもいいから

『Fクラス 吉井明久
総合科目 1319点』

「わかったよ。点数見てわかるとおり、これは戦闘不能じゃない。
実は、今喚び出される召喚獣は、化け物の類が何かになっているんだ

「お化け、ですか？」

「うん。学園長のミスで、調整を間違えてね。以前試しに作ってた
お化け召喚獣のデータが適用されちゃったわけ。現在復旧中だよ」

「けど、どうしてテュラハンなんだろう？お化けなら日本の妖怪と
かもいっぱいいるはずなのに」

まあ、それは思ひよね。

しかし、これは言つても良いのか…………?

「明久…………実は」これは、召喚者の特徴や本質から喰び出される妖怪が決定されるんだ」「

「ほつほつ…………つて僕召喚システムにバカにされてるのー…?」

正解だが、これ以上を答えるのはアレなので、サッと皿を逸らす。

「じゃ、じゃが、じうして見る限りは以前の召喚獣よりも強そうではないか。武器も金属のようだし、鎧もつけておる」

「や、そうだよね。前よりは強そつだよね」

強引に話題を変えにかかる秀吉だが、その話題もあまりよいものではない。

「俺には強くなつたようには見えないけどな」

「雄一は『氣づいて』るよつだ」

「…………あ」

「…………やら明久も重大な欠陥に気がついたようだ。」

「むへ~ど~したのじや明久よ」

「「」の召喚獣って…………頭が落ちたらどうすれば良いんだらうね

『…………』

「まあ、そういうわけだから、明久の召喚獣は強くなつたわけではないんだ」

「頭を抱えたままないと戦えないなんて、ハンデもいいところだな」

装備は強くなつたけど、むしろ弱くなつていてる。

僕たちがそうやって騒いでいたら、クラスメイトが数人こちらにやつてきた。

「吉井、さつきからなんか面白そうなことやつてるな

「これ召喚獣か？特徴や本質がどうとか言つてなかつたか？」

「なるほど。だから吉井の召喚獣は頭がないのか

違う…………明久のバカは、良いバカなんだ！

…………まあ、バカはバカで変わりないんだけど。

「せつ言いつのならそつちも喚び出してみなよ。きっと僕のより酷い召喚獣が出てくるからさ」

明久がそういうと、三人は揃つて嫌な笑みを浮かべた。

「おこおこ吉井。そんなこと言つていいのか？」

「俺たちは今までとは違つんだぜ？」

「新しいスタートをきつた俺たちが、酷い召喚獣を喚びすわけないだろ？いいか、見てるよ——」

「——試験召喚つ！——」「——

三人の声に応じて、召喚獣が出現した。

……ズズズズズ　ゾンビ登場

……ズズズズズ　ゾンビ登場

ああ、そつときヤツらが言つてたことと関係しているな。

新しいスタート　復活　ゾンビ

うん、見事にドンマイ。

第八十一話 石炭紀の「キブリ」には産卵管があった（前書き）

サブタイトル

生きた化石といっても、変化はしているところなのです。

第八十一話 石炭紀の「キブリ」には産卵管があつた

第八十一問

「まあ、お前たち。まだ時期が早かつただけだ。そう氣を落とさないで」

「導師さま……次こそは、格好いい召喚獣を喚び出してみせぬー。」

だから導師じやないって。

まあ、三人で肩を寄せ合つてやる氣を高めているから、今回は何も言わないでおこう。

次はないかもしぬないが、頑張るんだぞ。

「しかしまあ、これはこれで面白いもんだな。秀吉はどんな召喚獣なんだ?」

「んむ? ワシか? そ、うじやな……。ワシの特徴と言えばやはり演劇じやからな。妖怪ではないが、舞台で有名なオペラ座の怪人あたりが妥当じやううか。……どれ。試験召喚つ」

「へえ～。猫のお化けか。可愛いね。秀吉こよなく似合つてゐるよ」

「じつやう秀吉の特徴は『可愛い』とこいつといつこな」

「つ、つこロワシは召喚システムにまでそんな扱いを……」

まあ、人生そんなこともあるわ。

秀吉の場合には必ずおもむと思ひなさる。

「こいつなつたら私たちも…………」

「せうね、少しきらりい褒めてもらひこましょい」

「明久君、いきますー。」

「あ、うん。楽しみにしてるよ」

「試験が免除です」

ポンッ サキュバス登場

「あ…………うん、僕はあつち向ことくね。姫路さん」

明久の反応があまり芳しくないな。サキュバスだし。

あまり刺激の強いものは歌美以外避けたいのだろう。

うん、考察しててバカップルつぶりがよくわかるな。

なぜか今、お前が言つなどか言われた気がするが、気のせいだな。

僕に思い当たるフシはないし。

ないと言つたらない。

「めん、ウソ

「す、凄い召喚獣ね……。特に胸が」

「そこまで露出が多いわけでもないのに、随分と大きさが強調されているもんだな」

「ど、とにかく上着を……あいつ！通り抜けちゃいます……っ！」

しそうがない、少し手伝つてあげるか。

「起動！」
アウェイクン

黄金の腕輪を起動し、生物フィールドを張る。

雄一のフィールドにいた召喚獣は、フィールドと共に消滅した。

「あ、ありがとうございます……」

うん、姫路さんの召喚獣については、これ以上口に出さない方がいいだろ？

周りのみんなも同意見のようだし。

「そ、そういうえば美波の召喚獣はどんなのかな？」

少々気まずくなり始めた空気を察したのか、明久が話題を変え始めた。

うんグッジョブだ。

「ウチなら、瑞希と違つて何の心配もないから、妖精とか女神とか戦乙女とか、そういうた可愛いのが出てくるはずだから。見てなさい――試獣召喚つ！」

ゴーリーゴーリー……ぬりかべ登場

笑笑笑笑笑笑 WWW

ダメだつ！爆笑しそうだ……つ！

なんて面白いものを出すんだ……これがエンターテイメントといつやつか……

第八十三問～辛さは痛みか～（前書き）

やつとテストが終わりました……

サブタイトル

辛さは痛みと同じ場所で感知します。

第八十二問～辛也會は痛哉～

第八十二問

「ど、とひりで、ムツツコー！ほづんな召喚獸のかな？」

「や、やひじやな、ムツツコー！召喚してはくれぬか？」

「…………試獣召喚」

ムツツコーが咳き、近くに顔色の悪い、タキシード姿の少年が召喚された。

「なるほど確かにいつも血を欲しているイメージがあるからな」

「若い女が好きといつも血を欲しているイメージがあるしの」

ヴァンパイアか。ちなみにアリキュラは固有名詞らしい。

まあ、アリキュラ伯爵の名前だもんな。

「ううまでくると雄一と博人も気になるよな。召喚してみてよ」

「ワシらと違つて雄一の性格は攻撃的じやからな。戦闘向きの妖怪が出てくるやもしれんな」

「確かにそうだね。おつきな金棒を持った鬼とか、ごついチエーンソーを持つたジェイソンとか、もしかしたら凄い鎌を持った死神なんかが出てくるかも」

「それじゃ俺からいくぞ。…………試験召喚つ！」

明久らの装備予想を受けつつ、雄一の喚び声に応えて召喚獣が現れた。

雄一の召喚獣は、鍛えられた肉体と、引き締まつた肉体と、筋肉に覆われた肉体だった。

「また手ぶらじゃないかあーっ！」

さすがは雄一の召喚獣だ。堂々と素手で現れた。

「つていうか、雄一の召喚獣は今までのよりも退化してない！？装備がズボンだけじゃないか！」

「しかも何の特徴もなく雄一そのものが出でておったな。これでは服装以外雄一と区別がつかん」

「ちよ、ちよっと田のやつ場に困りますね…………

「せめて服ぐらいは着た召喚獣をだしなよ

雄一の召喚獣は下にズボンを穿いているだけで上半身は裸。暑苦し

「雄一…………。とつあえずその見る人全てを不幸にする召喚獣を早くしまつてよ…………」

いや、霧島さんなら大喜びだ。

「わかつてゐる。こんなもん、俺だつて見たくもない」

「じゃが、雄一の召喚獣は結局何の妖怪なのじゃ？これではわかつぱりわからんぞ」

「…………ドッペルゲンガーとか？」

ドッペル『ゲンガー』！？

いや、必要ないとこに反応してしまつた。

それにして、こいつは何の妖怪なんだら？

「二人とも何を言つているのさ。これは最近日本で確認された新種の妖怪『坂本雄一』じゃないか。醜い用容姿と汚い性格で美人の幼なじみを騙すつて話の」

「明久。召喚獣を喚び出せ」

「ん？別にいいけど。試験召喚つ」

まだ明久は咄嗟のことに反応できるようになつてないよつだ。

今回起じる」とを教訓として、軽はずみな返事をしないように心掛けでもらねば。

「田舎セワールドカップ！（ガロッ）」

「あがあつー蹴ったね雄一ー！？僕の召喚獣の首をサッカー ボールに見立ててゴミ箱に蹴り込んだね！？なんてことしてくれたのぞー！」

「まあ、落ち着くんだ明久。今回は明久が悪い。次からは、自分の安全を確保してから雄一をバカにするようにするんだ」

「もうだね」

「待て」「アハ」

「んむ？ 雄一。お主の召喚獣の様子が変じやぞ」

「お？ 本當だな。何が起きるんだ？」

雄一の召喚獣が身震いをすると、その口が大きく裂け、全身から毛が生えてきた。

「きやあああーっ！ー！」

「…………狼男」

「なるほど。そういうことか」

「多分、明久の召喚獣の首が回転して丸く見えたんだろうね」

「随分適当だな…………」

まあ、そこまで凝る必要はないし。

「さて、最後は僕だね。試獣召喚」

第八十四問「人魂はガガンボ?」（前書き）

サブタイトル

ガガンボにつく発光バクテリアによつて光り病になり、蚊柱を作ると、人魂のよう見えるそうです。

第八十四問「人魂はガガンボ？」

第八十四問

僕の声に反応して、召喚獣が現れた。

そいつは―――小豆を洗っていた。

「ああ、小豆洗いね。うん納得」

「え？ まったく博人っぽくないじゃないか」

「一つ、ヒントをあげよつ。小豆洗いの正体つてチャタテムシつて
いつ昆虫の出す音なんだよね」

『ああ、なるほど』

昆虫といつキーワードがでた時点で、皆さん納得してくれたようだ。

つまり、僕の本質は『昆虫』。

「それはそうと、この召喚獣はきちんと次の試召戦争までには直る
のか？ こんなのでクラス間戦争なんてやつたら妖怪大戦争になっち
まうだろ」

「そ、それは困ります……。怖いのも困りますし、私の召喚獣は恥

ずかしいですし……」

「まあ、一応復旧の日処はたつてるよ」「

いきなり教室に秋音姉がやつてきた。

(結構久しぶりの登場だ)

「しかーし！せっかく設定が変わったので、最初つかうこの設定変更は肝試しのためとこうことになつたのだ！」

「それを言つちやダメでしょ…………」

「まあ、やつこいつといひは良いんだよね。どうでも

まあ、今更取り繕つても仕方ないか。

「というわけで、肝試し大会を始めるから、準備だよ～」

『おーーー！誰かそこの釘とつてくれーー！』

『暗幕足りないぞ！体育館からひつペガしてこーー！』

『ねえ、ここJの装飾つて涸れ井戸だけでいいのー？』

「これはまた、凄い騒ぎじゃな

「うん。雄一が鉄人の補習をサボるために本気で手を回していたからね」

翌日、文月学園二階新校舎三階は、肝試しの改裝作業で賑わっていた。

「それにしても、まさかAクラスまで協力してくれるとは思わなかつたよ」

「いや、メーブル、行平、霧島さんっていう有力者が賛成したから、影響受けて参加するのはおかしくないと思うけど」

メーブルが参加した理由はもちろん僕がいるからだそうだ。

行平は秋音姉に頼まれたから。

「まあ、Aクラスとてワシらと同じ高校生じゃ。勉強ばかりでは息が詰まるじゃないからな。期末試験も終わってばかりじゃし、渡りに船といったところじゃろ」

「というかお前ら…………作業を手伝つてよ

さつきから話しながらも装飾を作っているのに、こいつらは何もせず喋っているだけ。

働けよ、馬車馬のよつ。

といつか僕は指示出したり、作業したり、先生と連絡とつたりつて仕事おおすぎやしませんかね！？

さすがに少し疲れるつて。

「お疲れっす、ハク」

「メープル～手伝つて……」

「そんなに大変っすか？」

「うん、ちょっと疲れそつ

「」の仕事量でちょっと疲れるだけだから、仕事を任せられるんだと思つます

「事実は事実なんだからしようがないでしょ」

「まあ、何でもいい」と聞くとこうなら、手伝つます

「さて、ひとりで頑張るかな」

「断れば、手足縛つてやりたい放題つす

「是非とも協力してくださいー。」

僕は…………無力だ

まあ、メープルのお願いなら良いけど。

第八十五問～昆虫は四億年まえに誕生した～（前書き）

サブタイトル

トビムシらしき化石が発見されていて、それが最古の昆虫と考えられています。

第八十五問～昆虫は四億年まえに誕生した～

第八十五問

さて、仕事もだいぶ片付いたし、少し周りの様子を見てくるか。

『うわーーっ！』

『なんだこりやあーーっ！』

『きやあーーーっ！』

いつの間にか、準備していた教室は妖怪大戦争の戦場になっていた。

「「「お前らうるせえんだよ……」「」」

しかも先輩達まで怒鳴り込んできた。

なんだよこの展開は…………。

「騒がしい」と思つたらやつぱりまたお前か！吉井！

「お前はつべづべ田障りな奴だな…………！」

「えー？僕被害者なんですけどー？」

とこうかいつたいどうしたんだこの先輩（笑）たちは。

「変た——変態先輩でしたっけ？」

明久、言わぬ方がよい事実もあるぞ。

「おい！？今言い直そうとしたくせに俺たちの顔を確認して言い直すのやめなかつたか！？」

「お前俺たちを心の底から変態だと思つてゐるだろー常川と夏村だ！いい加減名前くらい覚えろ！」

「それで常夏先輩。どうしたんですか？」

明久が運んでいたロッカーを下ろして先輩達に向き直つた。

「テメヒ……。個人を覚えられないからつてまとめやがつたな……」

「さすがはあの吉井明久だ。脳の容量が小さすぎるぜ」

「覚えるに足りない人物だつてことを理解して下さいよ、常夏先輩」

おおう……明久、結構毒吐くようになつたな。

「お前、ひつむせえんだよー俺たちへの当てつけかコラーー！」

「夏期講習に集中できねえだらうが！」

常村と夏川の後ろにいる先輩たちも「そりだそりだ」と謔を立てて

い。

「お~お~先輩たち、それは酷い言いがかりだな

「確かに僕たちはさかつたが、これも試験召喚獣を使った勉強の一つです。もちろん、学園長も許可しています」

「それに何より、ここは新校舎だ。古くでボロい旧校舎ならともかく、試験戦争という騒ぎを前提として作った新校舎で、下の階の騒ぎが上の階の戸を開めた教室の中まで聞こえる訳がないだろ?」

「うん、その通りだ。少なくとも眞面目に教室で授業を受けていれば、ここでの騒ぎが聞こえるわけがない」

「要するに、だ。センパイ方は勉強に飽きてフリフリしているところで俺たちが何か楽しげなことをしているのに気がついて、ハツ当たりをしてきたってワケだ」

雄一の発言に図星をつかれ、先輩達はバツが悪そうに目を逸らした。

「それじゃあ言わせてもらいうが坂本よー! お前らは迷惑極まりないんだよー! 学年全体での覗き騒ぎに、挙げ句の果てには一年男子全員が停学だぞ! ? この学校の評判が落ちて俺たち三年までバカだと思われたらどうしてくれんだ! 内申に響くじゃねえか! ?

自分が詰まつたからって責任転嫁つてどうなのよ。

しかも一年男子全員ではないし。正確な情報も知らずに大声で叫ぶとか恥の上塗りだ。

とこうか先生の前でこんなこと言ひてゐる方が内申に響くと思つんだが。

そもそも内申氣にするくらいだつたら、フラフラしないで勉強すればいいのに。

「おい博人……思考が口から漏れてるぞ」

「ああ、わざとだし。すみませんね先輩。正論言つてしまつて」

第八十五問～昆虫は四億年まえに誕生した～（後書き）

今回が100部目です。

ここまで約6ヶ月…………よく続きました。

これからも頑張ります。

第八十六問～昆虫は地球の生物の種の数の約75%～

第八十六問

少し挑発したら、すぐに常夏先輩は乗ってきた。

3年の先輩達に悪感情はないが、常夏は別だ。

文化祭の営業妨害の恨みがあるからね。

「だいたいお前ら一年は出来が悪い連中が多くなんだよ。バカの代名詞の觀察処分者だつて一年にしかいねえし、学園祭で校舎を花火で破壊したのだってそこのクズコンビだろ？」

「呼ばれたよ雄」。謝りなよ

「お前のことだろ明久」

「お前ら二人ともだクズ」

「「そんなバカな！？」」

「なんでお前らはそこまで心外そうな顔ができるんだ！？普通に考えたら当然の評価だろ！？」

常夏先輩…………できれば早く逃げて下さい。

「明久をクズ呼ばわりなんて、覚悟はおけいかな？」

「ちょっと…………いろいろ落ち着くつす、歌美」

「そうですよ。もつとネチネチと社会的に殺してからでなくっては

「ちょっとユキは黙つて！」

黒いオーラが！歌美から黒いオーラがっ！

チート性能のメープルもだいぶ手こずつているよ。

あ、体力が尽きたみたいだ。

どうやらまだ入院後の体力低下が戻つていないうようだ。

そのため、あまりに全力を出したせいで、力尽きるのも早かつたようだ。

「で、僕たちを罵倒して話は終わりですか？変たーーーモザイク先

輩」

新しい名前だな、さすがは明久だ。

「おい、なんだよモザイクつてーーー？」

「忙しいんでしたら早くかえつて下さい」

「…………ちつー言われるまでもねえ」

「あ、先輩の方々、夏の思い出として、肝試しと一緒にやりませんか？」

「お前今俺たちに帰れって言つたよな！」

「明久……素なのか？素で言つてるのか！？」

「先輩をバカにするとどうなるか、教えてやるよー。」

「「試験召喚」」

『Aクラス 常村 勇作
世界中 174点

&
Aクラス 夏川 俊平
163点』

「さつき坂本が言ったように、これはあくまで試験召喚獣を使った模擬戦だから問題ないよな？これだってうちの学校では立派な授業の一環だからな」

「やれやれ、受けて立ちますよ。モザイク先輩」

『Fクラス 吉井 明久
世界史 194点』

『.....』

明久より低い先輩達の点数（笑）

周りの三年生からも常夏に対する微妙な雰囲気が漂っている！

第八十七問／寄生バチの中には、仲間が生んだ子を殺してから産卵するものがいる

第八十七問

「ふむ、一体」というのも不公平ですので、私も参加しましょう。

試験召喚

までそこの悪魔。お前が参加したら公平なんて言葉は崩れ去るぞ。

『Aクラス 七伏 行平
世界史 687点』

ほら見ろこのチート性能め！

しかも呼び出した妖怪は……なんだ？

随分きらびやかな着物姿だが……

「秋音姉さんから聞いた話では、崇徳上皇だそうです」

崇徳上皇……日本三大悪妖怪の一つ。大天狗の一種で、保元の乱に敗れた崇徳上皇が島流しされ、失意のうちに没し怨霊になつたと言われる。

天皇だし、本質は高貴といふことかな？

それにしても変だなあ……

根は立派な紳士つてことか。

まあ、武器がアイアンメイテンとギロチンな時点でぬ無しだけどねー

「」から読みとれるのは、紳士が残酷さを着て歩いてる。ところ
のが行平の特徴だろ？

そうこえは、メープルの呪喚獣はどんなのだろ？

まあ、あとで見せてもらおう。

きっと、いい感じのが出て来るにちがいない。

なんてつたつてメープルだし。

「さて、邪魔なのではやく消えて下をこ」

一撃。それだけで先輩達は消え去った。

具体的には、馬頭がいきなりアイアンメイテンにブチ込まれて、見るも無惨な姿になつて、牛頭は一瞬でギロチンにセッテされて、首と鮮血で教室を彩つた。

「良かつたですね、先輩方。私の腕輪の能力を使つまでもなく終わ

つて。妖怪仕様だと、強制フィードバックが私の能力なんですよ

勝負が決し、常夏達ががくがくぶるぶるしていると、一人の来客ー

ーー秋音姉と学園長が来た。

「まつたく……何をやつてゐるさね」

「あ、学園長。ここんちちは」

「ああ、こんにちは。さて、アンタ達に伝えたいことがあってきたんだよ」

「はい、何でしちゃか」

「ここの肝試し、学園側が援助してやるつじやないか。大掛かりな設営も召喚の為の教師も応援する。せいぜい派手になるこいつたね」

「そいつはまた、随分と氣前がいいな。どうこいつことだ?」

「その代わり、作った物はそのままにしておく」と。盆休みあたりに一般公開でもしてやろうかと思つていてるんでね」

「あ、行君。肝試しのPRの為、ネットに今回の様子を載せよっと思つただけど、手伝える?」

「もちろんですよ」

行平は秋音姉と始終一緒にいるだらうから、リタイアだらうな。

「それと……折角だからね。三年もこの肝試しに参加しな。こんな

とにかくで小競り合いしているよつはその方が有意義さね

学園長から通達され、実は結構興味があつたのか、三年生達は特に嫌がる素振りも見せずを受け入れた。

「冗談じゃねえ。」こんなクズどもち仲良く肩を並べて肝試しなんてやつてられるか

「だよな。胸くそ悪い」

常夏以外は。

まあ、常夏は邪魔なので、退場してもらつか。

「西村先生、お願ひします」

「戦死者は補習…」

いやあ…………行平はいい仕事したなあ…………。

「さて、それでは先輩方。よろしくお願ひします。折角ですから、勝負しませんか？」

三年生から、代表として一人出てきて、勝負の内容について質問してきました。

「驚かす側と驚かされる側に分かれて勝負するんですよ。今回の肝試しもその方式をとる予定でしたから」

「わかった。では、三年が驚かす側でいいか?」ここまで二年が用意

してくれたからな。あとは任せてくれ

三年生の申し出を受け入れ、一年生は驚かされる側になった。

先輩達がわざわざ仕事の多い驚かす側をやつてくれるんだ。

僕たちもしつかりしないとね。

さて、細かいルールを直すか。

第八十八問 モンシロチョウは外来種

第八十八問

そして、翌日。

文翔学園新校舎三階は、お化け屋敷となっていた。

薄暗い雰囲気に、外観からでも伝わってくる複雑な構造と、だいぶ手が込んでいた。

「ひつや、三年も結構本気だな」

「流石は最高学年つてところだね」

僕もここまで良い出来のものが完成するとほんとそれほど思っていなかつたな。

「いや、ここまで頑張ってくれなくとも良かつたんですけど……」

「そ、そうよね。頑張りすぎよね」

化け物の類が苦手な姫路さんと島田さんは、雰囲気満点な外装に、早くも怯えていた。

「雄一。僕らは旧校舎に集合だつたよね」

「ああ。三年は新校舎3F、俺たちは旧校舎3Fでそれぞれ準備。開始時刻になつたら1組目のメンバーから順次新校舎に入つて行くつて寸法だ」「

現在旧校舎と新校舎の間の渡り廊下には、防火シャッターが下ろされていて、雰囲気は伝わるが、中の様子は窺えなくなつている。

「……………カメラの準備もできている」

今回の肝試しの勝負のでは、悲鳴をあげたペアは失格となる。

その悲鳴を判断するために、カメラを利用する事になつたのだ。

また、他にも今回のルールは、「一人一組での行動を必須とする」とや、「チェックポイントで召喚勝負をし、一年生が全滅する前にすべてのチェックポイントをクリアできれば一年生の勝ち、逆も然りとなつてている。

まあ、カメラで撮つた映像を使ってPVでも作るうつて思つてゐるんだどうな、秋音姉と行平は。

「俺たちの準備は組み合わせ作りだけだな」

「あ。そつか。組み合わせをまだ決めてなかつたよね」

ルールでは肝試しは原則一人組。まったく化け物の類を怖がらない人も盛り上がるよう、といつづりの处置だ。

「ま、組み合わせは折角だから極力男女のペアになるようにするか。その方が盛り上がるだろ」

「え？ 雄一、いいの？」

いぐりただの遊びとはいっても、勝負にこだわる雄一にしては珍しい。

「別に良いだろ。俺は地獄の鉄人補習フルコースをサボりたかっただけだからな。肝試しの準備も三年がやつてくれたんだ。それほど勝負にこだわる必要もないだろ」

「ふうん。なるほどね。だから男女ペアってことにしてたのか〜」

明久は納得したように頷いた。

「で、本音は？」

「翔子にペアを組むよつに脅された腹いせに全員を巻き込んでやろうと思つた」

ものす」》予想通りだ。

「ハク――！ 肝試しのペアをお願い！」

「喜んで」

男女ペアにしといて本当に良かった。

」のぐらうしか楽しみないもんね。

まあ、メープルも怖がらないから、僕も気が楽だ。

あ、でも怖がってるメープルってのも案外良いかも……

涙目で、ぎゅっと手を握つてくるメープル……うん、ギャップがあつて良いかも。

でもそつなるには、メープルに怖い思いをさせるのが前提だからなあ……

怖がるものがない上に、有つたとしても、わざわざ怖い思いなんてさせたくない。

まあ、メープルは笑顔が一番。

一緒に楽しめればいいさ。

第八十九問 幼虫の姿のままのホタルがいる

第八十九問

「明久……ペアいいかな？」

「もちろんだよ。歌美」

「おお、あっちでもペアが成立したみたいだな。

「おっす、博人」

「ああ、海渡か。ペアは……決まつたみたいだね」

「ああ、もちろん美春だ。といつかそれ以外にないだろ？」

「ハイハイ、バカツップルバカツップル」

「それこそお前に言われたくねえよ！」

「……それは、そうかもしねないな。

先日ケンカしてから、メープルを寂しがらせたりしないように、一緒にいてあげられるように、今まで以上に距離が縮まった。

まあ、気にするほどでもないな。

ちなみに海渡。

ビハビハ学力強化合宿のときから付き合って始めたらしい。

何でもうつかり告白したら、了承されたらしい。

やや不幸めな海渡にしては珍しいラッシュキーだ。

「まあ、今日は楽しんでくれたまえ」

「ああ、楽しませてもらひや。じゃあな」

ビハビハ清水さんのところに戻つてこつたようだ。

それについても、僕たちの出番まわしていくるかな?

なんか、投入したらすぐ終わるとか言われて一番最後にされたし。

折角手繋いで参加できるのに……

『な、ねえ……。あの角、怪しくない……?』

『や、やつだな……何か出できやつだよな……』

ムツシコーーが設置したモニターから、肝試しの映像が送られてく

る。

まず最初に向かうのはBクラスで、そこは江戸時代あたりの町並みをイメージした作りになっていた。

演出として、光量が絞られていて、なかなかつまかった

『そ、そつこじや、俺が先に行くから』

『うん……』

カメラは見るからに怪しそうな曲がり角を映していた。

そのペアは、ゆっくり、慎重に歩を進めていった。

『行くぞ……つーー』

『うふ……つー』

カメラが曲がり角の向こうを映し出す。

しかしながら、そこには何も映っていなかつた。

あー、このペア終わつたな。

『『ぎやあああーつー』』

予想通りモニターから、悲鳴が聞こえてきた。

まったく……少しば情報収集しなよ……

第九十問「殺虫剤が強壮剤になる」ともある

第九十問

まったく使えない……

最初の曲がり角で失格など、なにをしにいつたんだって話だ。

「これだと最初のところになにがあるのかわからないね」

「あれだけではむしろ余計身構えてしまい、恐怖が助長されるだけじゃな」

まあ、最初はこんな物か。

少なくとも、三年生が本氣であることはわかった。

「…………」組田がスタートした

ムツツリーがカメラへのモニターを示す。

「今度は向こうがどんなことをしてくるかがはつきつ映るといいね

「やつじやな」

「無理だよ、おれりくね

残念ながら、一組目の様子をみると、僕の予想は当たるだろ？

「え？ 博人、それってどういう――」

『『ひやああああ――つ――?』』

「「あやあああ――つ――?」」

モニターに向ひつの悲鳴にいちいち反応するなつて。

何が怖いんだか……

「…………失格」

今度はさつきとは若干手前のポイントだつた。

まあ、ポイントをずらさないなんて愚かなことはしないのは当たり前だ。

『ち、血塗れの生首が壁から突然でてきやがつた……』

『後ろにこきなり口裂け女がいるなんて……』

いきなり後ろにいたら、まずは距離とつて、戦えるようになるのが基本だろ？

「のう博人。さつきおぬしが言つた無理とはどうこうじゃ？」

「カメラを使つてゐるのは、一年生だけじゃないことつすよ

「カメラ一派、良いタイミングで答えてくれる。

「三年生もこの映像を見てるつてことへ

「むしろ、見ない理由がないね。こちだけがカメラが使えるなんて、有利すぎるからね。向こうは回りでメリットがあるんだよ」

「そつなの？僕はてっきり自信があるからだと思った

今度は僕の代わりに、雄一が答える。

「まあそれもないわけじゃないだろうが……。こちのカメラの映像を見ていたら、標的がどの位置でどちらへんに注意を払っているのかがわかるからな。驚かす側としてもタイミングが取り易いし、死角から襲いかかるのも簡単だ」

「あ、そっか

位置確認なら他の方法もあるが、注意を払つてゐる場所なんかは、カメラを使った方が断然わかりやすい。

「それに、普通の召喚獣は物に触れないしね。障害物をすり抜けるなんてお手のもの。位置と方向がわかれば、相手の背後に配置するのも簡単だろ？」

「なるほど。何台もの固定カメラを用意しなくともワシら自身が相手に情報を与えておるのか。それは向こうもさぞかしやります

いじやろ？」

「…………召喚獣を使った肝試しならでは」

モニターには、三組目が映されているが、またも失敗。

チェックポイントに至るまではいかない。

「あまり切羽詰まつてなくとも勝負は勝負だからな。一方的にやられたままつていつのも気に食わねえ」

負けず嫌いな雄一らしいな。

「んじゃあ、Fクラス部隊を投入する?」

「ああ、それがいいだろ?」

第九十一問／鳴くコキブリがいるらしい

第九十一問

「皆一順番変更だ！Fクラスの須川＆福村ペアと、同じくFクラスの浅倉＆有働ペアを先行させてくれ！」

雄一が指示を出すと、じぱりくしてカメラ？とのモニターに見慣れたFクラスの顔が映つた。

『行つてくるぜー』

『カメラは俺が持つぞ』

時間をずらして突入するので、朝倉君と有働君には待機してもらつて、まずは須川君と福村君がカメラを持つてスタッタと進んでいく。

まったく怖がる素振りもなく、件の曲がり角へ迫つていった。

「あ。こいつって何でもなによつに映してもうつと、せつときよつも怖くなくて助かります」

「やつね。これならまだマシよね」

怖いか怖くないかはおいといて、脅かす側からしてみれば、ズンズン進まれるのはイミングが取りずらいだろう。

『あ。あそこだつたか？何か出るつて場所』

だな

早くも三組のペアがやられやがつた曲がり角をカメラが映す。

「「 もやもやあーうー」」

そこには血みどろの生首が浮いていた。

そして、そのままカメラが背後を映すと、耳まで口が裂けている口裂け女がいた。

まつたくつねむかこなあと思つていたら、急に耳に入つてくる音が小さくなつた。

どうやら後ろからメープルが耳を塞いでくれているようだ。

メープル…………… 気遣いもできるなんて、やっぱりいいなあ

■ ■ ■ ■ ■

『おっ。この人、少し口は大きいけど美人じゃないか?』

『こちらの方も美人だと思うぞ。首から下がないからスタイルはわからないけど、血を洗い流したら綺麗なはずだ』

全員このくらい冷静なら、僕も助かるんだけど。

「な、なんでアイツらあんなに平氣そうなのよ！？アキたちも！怖くないの！？あんなにリアルなお化けなのよ！？」

顔を青くして島田さんが叫ぶが……

「別に命の危険があるわけじゃないからね」

「グロいものはFクラスで見慣れたからな

『女性相手に怖がるなんて言語道断だ！』

うん、Fクラスのメンバーもキチンとした心構えだ。

「グロいものなんてよく見るしね。解剖とか」

「ハクが大丈夫なら大丈夫っす」

『それにしても暗いな……。何かに躊躇って転びそうだ』

『ああ。それなら一度良い。あそこにある明かりを借りて行こうぜ』

モニターに装飾として飾られている提灯が映し出される。

須川君と福村君はそれを押借するため、近づいていった。

——ボンッ

「「あやああああーっ！！」

いきなり提灯に顔や手足が現れた。

セットの中にお化け提灯か…………なかなかうまいな。

それにしても、この人の本質はなんだろうな？

提灯が証明器具であることから、性格が明るいとかだらうか？

『お？これ掴めないぞ？』

『召喚獣なら掴めるだろ。試獣召喚つ』

相手の演出は無視して福村君らは、更に先に進み始めた。

「な、なんか……かなりシユールな光景ね……」

「そ、そうですね……。TVを見ているみたいですね……」

「……雄一。怖いから手をつないで欲しい」

「黙れ翔子。お前は全然怖がってなかつただろうが」

「……怖くて声が出なかつた」

「嘘つけ。悲鳴をあげるタイミングを計り損ねただけだろ」

まあ、確かにこんな面白い映像は、PVを作るのに秋音姉と行平も喜んでいるだろう。

……あれ？なんかメープルが僕の手を握ってきたけど？

ああ、せっかくつないでも不自然じゃない状況なんだから、繋いでいたいってことか。

メープルの考えを理解し、僕の方からもメープルの手を握る。

……所轄、恋人握りとかいうやつになつた。

第九十一問 カラスは鳥目ではない（前書き）

サブタイトル
夜でも目がきます。

第九十一問 カラスは鳥目ではない

第九十一問

そのまましばらく須川君と福村君の快進撃が続いた。

ある程度時間が経ったので、カメラ?を持つて、朝倉君と有働君も突入した。

「んむ？ そう言えば雄二」。お主、肝試しは極力男女ペアにするといつておらんかつたかの？」

まあ、確かにさつきの須川君と福村君、今回の朝倉君と有働君、全員男だ。

「だいたいそうなるようにしてあるんだけどな。俺たちFクラスは殆どが男子だからどうしても数が合わないんだ」

学年全体では男女比はほぼ等しいが、Fクラスは48:2。

夏期講習に参加していたメンバーは男女比がほぼ等しかったから、Fクラスの分だけ男子が多いことになる。

全員が男女のペアになれないのは、仕方あるまい。

まあ、僕にはメープルがいるからね！

《あー、畜生。じつせなら女子と一緒に良かつたぜ……》

《アヤメちゃんは学校違うからな……》

《ああ、駅前で不良から助けたことで知り合って、現在はお前の彼女の人か？》

なんとこい！ソングフレ展開。

《羨ましいか》

《ねえよ》

《死ね》

おお…………なぜかいきなり殺伐としてきたぞ。

《テメェアヤメちゃんの可愛さがわかつてねえからそんなことが言えるんだよ》

《何言つてんだ。ここでがつついにことをアピールしたほうがポイント高いだろ？》

それを口に出せなければね。

《まあ、非リアは頑張つてくれや》

『ああん？あんま調子乗つてんじゃねえぞ』

『なんだ？非リアの逆ギレか？』

『オモテに出でや」「フー・』

あ、音声メーターが赤に。

「…………失格」

何をやつているんだ何を。

全く……メープルが一番可愛くてきれいに決まっているのに。

「けど、須川君たちのおかげで相手の仕掛けがわかつたね」

「だな。朝倉たちもいる」とだし、チョックポイントまで行くのも時間の問題だる」

少し間をあけてから突入した朝倉君たちもだいぶ進んでいた。

井戸からろくろ首、柳の下から一つ目小僧などオーソドックスなものから奇抜なものまで、いろいろ演出があった。

しかし、後発の何組かは来るのがわかつていたのに失格になっていた。

まったく情けない。

だがまあ、他の組は概ね順調と言つても問題ない。

その後、朝倉君たちがチェックポイントに到達した。

そこには三年生の人が一人と、布施先生。

つまり、教科は化学だ。

『おお。チェックポイントか。結構余裕だつたな』

『Bクラスの教室だけあって長い迷路だつたけどな』

『ここまでつまく進んできたんだが、チェックポイントはどうだらう?』

『――試験召喚つ』

布施先生がフィールドを開け、それぞれが召喚獣を喰び出した。

まずは三年生の点数が明らかになる。

『Aクラス 近藤良文
化学 326点

&

Aクラス 大竹貴美子
化学 263点』

ふむふむ……だいぶ高いな。

朝倉君たちは大丈夫だらうか?

第九十三問～ツチハンミョウは密室に入っている～（前書き）

サブタイトル

ツチハンミョウの幼虫はハチにくつつき、土に巣が作られ、卵を生むときに侵入し、その後親バチによって巣が閉じられ、密室で成長します。

第九十三問～ツチハンミョウは密室に入っている～

第九十三問

続いて二年生側の点数。

『Fクラス』
朝倉正弘
87点

8

Fクラス 有働住吉 82点

相手は二年生のトップクラス。

開始早々押されている。

『くそつ！ 戦力が違うすぎる！』

『当たれええ――――――つ！』

為すすべもなく一人はやられた。

しかし最後、朝倉君の攻撃が相手を掠め、点数を20点ほど削った。

それだけだが、点数が3～4倍ある相手にダメージを『えたんだ』。

十分仕事はしたと言える。

「というかあれE～ロクラス並みの点数だよな」

「せりつと勉強方法教えただけなんだけじね」

まったく勉強してなかつただけに、すればするほど伸びる。

これは今のFクラスの強みだな。

「流石はハクつすね。この調子で私に保健たいいく
——」

「よし、これでチェックポイントまでの全容がわかつたねー…これで
勝率はだいぶあがった！一気に勝負に出よ！」

今のは別に逃げたわけじゃない。

確かにメープルとベタベタになつたけど、情事とかはダメ。

いろいろあれだし。うん、アレ。

「そうだな。今の連中に対抗できそうな点数のペアはドンドン突入
してくれ！」

雄一が待機している旨に声をかけてくれる。

『俺たちに任せとけっ！』『』

「お前たちはなしだ」

『『『ガーン（。 。 ）ー』』』

全員でDトレーつてるよ……

まあ、どうせカッコつけたいだけだから、放つておけば良い。

『よしつーBクラス制覇ー』

『やつたね真一君ー』

朝倉君たちが撃破されてから七組のペアを投入し、そのうち五組がチェックポイントへ到達した。

今回の勝負は点数補充はできないので、何回戦つてか消耗させればクリアすることは造作もない。

Bクラスをクリア……ということで次から入るペアは、Dクラスからとなる。

『それじゃあ、引き続き俺たちはDクラスに向かうぞ』

『がんばらうね、真一君』

モニターには、Bクラスを突破した一人がDクラスに向かう様子が

映し出されていた。

ここから先はまだ知らないエリアだが、仕掛けは変わったとしても僕にとっては関係ないな。

第九十四問～は虫類の卵は上下の位置が変わると、死ぬ～

第九十四問

『怖がつたらこいつでも言えよ真美。俺が守つてやるからな』

『うん。ありがとう。頼りにしてるからね真一君』

『　　チ……ツ……』

モニターからの一人の会話に対して、教室の至る所から舌打ちが聞こえてくる。

やつてこるのはFクラスの男子たちだった。

Fクラスのメンバーはそんなことはしない。

「さて、ちょっと『祝福』してくるか」

「こやこや、『お祝い』の方がいいだろ?」

「待てよ。『祝』しかないだろ。やつぱつ」

『祝福』『お祝い』『祝』については一人「メントだ。

ヒントは、恋愛の試練(?)とその後のわざやかな(×100以上)サポートだ。

「頼りにしてるよ、ハク」

「うん、僕も頼りにしてるよ、メープル」

僕たちの間では、頼りっぱなしなんてない。

お互いがお互いを考えているからこそギブアンドテイク。

もう少しだけ助けたい。

お互いを思っている。

………… わて、怒気はここまでにして、ゲームに意識を向けよう。

Dクラスの教室は、Bクラスに比べて狭く、三分の一程度だ。

単純に言えば、クリアは楽なんだるつねびーーーーー

《ああああああー》

《えー…どうした真美！？何かあったのか！？》

《な、何かヌメリとしたものが首筋に……！》

やつぱり、そう簡単にほいかないよね。

「ねえ。今の、何をされたか見えた？」

「いや。カメラには何も映らなかつた

Dクラスのセットは、暗く、『じみ』みした装飾だ。

「これのせいでの、脅かされた本人も、何が起こったか、よくわからないだろ？」

まあ、逆にそこから原因を推理はできるけど。

『おひきやあああーっ！』

『おひつー。ビリしたー！？』

Dクラスに投入された二組田も失格。

「…………恐らく、直接接触」

「だらうな」

「まあ、十中八九そうだらうね」

「こんな時の定番といえば、『ンニヤクだらうか？』

『おわあっ！？へ、蛇！？』

『か、カエル！カエルが降つてきた！』

「ちよつと回収行つてくる！」

「落ち着くつす、ハク。あれはおもちやつす」

なんだ つまらない。

「どうか本物があるわけないとと思うよ、博人」

ふつ 甘いな明久！

「実はカバンの中に今朝拾つたアオダイショウが」

「いめんなさい」

チツ 折角御披露田できると思つたのに。

第九十五問) ユーカリは毒によって他の植物を排除する(前書き)

サブタイトル

アレロパシーといいます。

第九十五問／ユーカリは毒によつて他の植物を排除する

第九十五問

「それにしても三年生もなかなかうまいよね」

「だな。うまく切り替えてきやがる」

「切り替えるって、脅かし方を？」

「そうですよ。与えてくる刺激を、視覚から触覚に変えてきたつす

「向こうも頭を使ってるね？」

さつきまでは、目に見える恐怖。

そして今度は、物に触れる恐怖。

そう簡単に切り替えはできまいから、しばらくは失敗が続くのは、仕方あるまい。

「それならこっちだつて手を打つてやろうじやねえか。Fクラス部隊第一陣、出撃準備だ！」

『『おつづけ』』

『『氣合』の入った返事をしてくれる八人。

まあ、以前よりはそこそこ使える人材たちだけど、根っこがFクラスなのはかわらないからなあ……

今度は一体どんな珍事を起すのやら。

『『おじい。坂本や戻ってきたヤツの話だと、どいつもこには何かよくわからん物を当てるからうらしい』』

『『やつなのか。それだとさっきまで見ていたBクラスよりやつにくいな』』

『『ああ』』

Fクラス第一陣一組目がモニターに映る。

『『つやう周りを警戒していくよ』』

さすがにFクラスといえども、今回の相手は少しありへこりしこ。

『セレヒ、俺はちゅうとした対策を考えてきたんだ』

『対策？なんか良い方法があるのか？』

『おう。とつておきの方法だ。……いいか？突然触つてくるものが怖くなつて悲鳴をあげるんだろう？』

『ああ。やうだな』

『なら、話は簡単だ。すべて、打ち落とせばよいのだね？』

『なつ…………』の鬪志…………

いやつ、できる…………一』

『開 眼（カツ！）』

ヒュウ…………ペタン

『…………』

あ、顔面にロンニーヤクが乗つかつてるよ。

一瞬カメラに映つたからわかるが、十分取れる速さだつたぞ。

『ヤレヤレ…………だからお前はダメなんだ……』の中二病患者め

『…………』

『くづ…………無念』

。　

『うつこりのは、さう、イメージだ』

『な……なんだとー』

そのリアクションは何なんだろうね。

『これこそが俺の案――――――』

無駄にタメをつくるな。

第九十六問～昆虫とクモはかなり遠縁～

第九十六問

『幻想世界…………これこそがここを突破する俺の案だ』

中一臭いどこの話じゃないぞ、おい。

『俺たちに必要なのはシチュエーションだ。そつ、ここは夕焼け色に染まつたグラウンド。そして、飛んできたボール。その進行方向には、可憐な少女』

あつ、モニターに飛行物が映つたぞ。

『ふつー!』

パシイツ！

見事にキャッチしていた。

『うーで、お怪我はありませんか?——と、つづきやあああああ
つー!』

「キリッ」とでもいいたげな顔をイメージの女性に向けたのは良いが、その顔を向けた先には、妖怪（男性）がいた。

そのせいで悲鳴をあげ、失格だ。

何がしたかったんだ？あの二人は。

ただ二一人で中一を暴露しただけだろ。

「これだけの人をまとめるなんて、ハクは大変ですね。よしよし」

メープルが柔らかい手で頭をなでてくれる。

労うような、穏やかな撫で心地が良い。

うん、絶対に勝利に導いてみせよ。

「明久、現状はどう？」

「今の二人はともかく、他の三組は順調そうだね」

「そうだな。突然の接触に驚きはするものの、悲鳴をあげるほど纖細な神経をしている連中じゃないからな」

声が出ても失格にならないレベルだ。

「そう。それじゃあ、そろそろ向こうも動きをみせるんじゃないかな」

「ああ。向こうもうちの様子は筒抜けだからな。また別の方まで

落としにかかるべるだらう」

お互いの情報がリアルタイムで伝わる以上、即対応されるのは避けようがない。

「やうなると、今度は何をしてくるのかな?」

「さあな。見当もつかないが——ん?」

モニターからの映像の、雰囲気が変わった。

どうやら広い場所に出たようだ。

「何も仕掛けがなさそう元気見えぬね」

「つむ。広めの空間だけのよじや。あとは……中央の上部に証明設備らしきものが見えるくらこじやな」

流石は秀吉。

演劇についてなら、ケーブルだけでスポットライトがわかるらしい。

『なんか不気味だな』

『ああ。よくわからねえけどヤバい感じがする』

モニターから、固唾を呑む一人の様子が伝わってくる。

誰がどう見ても、ここが勝負どころであるのは、明らかである。

「…………人の気配」

ムツツリーーが小さく呟く。

確かに画面には、暗闇の中に静かに佇む、人影がある。

向こうの仕掛けか、それとも囮か。

判断はつかないが、少なくとも重要な役割を担っていると見える。

『突つ立っていても仕方ない。先に進むぞ』

『わかった』

第九十七問 イルカは大きくなるとクジラになる（前書き）

サブタイトル

イルカ、クジラの判別は、体の大きさだそうです。
つまり、大きいイルカは鯨で、小さい鯨はイルカといった感じです。
分類上に差異はありません。

第九十七問 イルカは大きくなるとクジラになる

第九十七問

二人が暗闇の中、歩を進めていく。

そして、空間の中央まであと三歩といつといふで、

バン！

という音をたて、荒々しく照明のスイッチが入った。

そして、暗闇から一転した画面に映っていたのは、常夏コンビの片割れ、坊主頭の変態である、夏川だった。

——全身に可愛らしいフリフリがついた、ゴシックロリータファッショングで。

『…………』

画面の内外から、心の底からの恐怖を現した悲鳴が聞こえる。

幸い僕はあの醜悪な物体を恐れではないが、飾ることのない、純粋な気持ち悪さをあのカス坊主に感じている。

「大丈夫？ メープル」

「うん、嫌悪感はハンパじゃないけど」

「あれは流石にね…………。深呼吸して、まずは少し嫌悪感を和らげよ」

「それよりも抱きつかせて。気分が良くなるから」

胸に寄りかかってぐるメープルを、しつかり包み込む。

「…………うん、もう大丈夫」

「それは良かつた」

ふつ、と呼吸を整えて、メープルは僕から離れる。

それにしてもあの坊主、あまりの気持ち悪さにビックリしたな。

あとで写真をバラまいて———駄目だ。

被害が大変なことになる。

「坊主野郎めつ！ やつてくれたな！」

「汚いつー・やり方も汚ければ映っている絵面も汚いよー！」

「悲鳴の音は苦手なのにね？…………その上気持ち悪いし？」

「わわわわわわーっ！お化け！いや、お化けじゃないけどお化けより怖いですー！」

「うううう…………うー夢に見る…………絶対ウチ今夜は眠れないわ…………」

「…………氣持ち悪い」

「あれは流石にワシも耐えられん…………」

周りのみんなからも、悲鳴をあげられている。

ホントあの坊主は人の気分を害する天才だな。

『なんだ？今、じつの方から何か聞こえなかつたか？』

『ああ。間違いない。そこで悲鳴が——わわわわわわーっ！』

『まづい。一組田もやられてしまつた。

しかし…………今の状況では打つ手がない。

彼らは非常に残念だったが、避けられなかつた犠牲と云ふことで、必ず敵は討とう。

『わわわわわわーっ！誰か、誰か助けーー』

『嫌だ！嫌だ嫌だ嫌だ！頼むからここから出してくれ！』

『助けてくれ！それができないならせめて殺してくれ！』

《がああああああああああああ———つつつ——!——!》

「突入部隊全滅つ！」

「アーティスト...」

突入したもののらは、全滅。

彼らは精神に多大なダメージを受けてしまったかも知れない。

まあ、メープルが直接見ることがなくて、本当に良かつたとは思つている。

第九十七問「イルカは大きくなるとクジラになると」（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

感想、意見等よろしくお願いします。

第九十八問 バナナがなるのは葉らしい

第九十八問

『坂本つ！導師様つ！仇を……一アイツらの仇を討つてくれ……』

『Iのまま負けたら、散つていったアイシーリー申し訳がたたねえよ』

クラスの皆が、僕たちに訴えてくる。

だから、導師じゃないって。

ところが「」はひとまず置いて、まあこれ以上画面にあの「」ミを映すのは、メープルにとつても良いことではないので、これには賛同だ。

「わかつてゐる。あちらがそつ来るなら、いひもそれ相応の手段をとらせてもらひまへ

「突入準備をしている連中を全員下げるー。マッソリーーー&工藤愛子ペアを投入するぞ！」

『 』 』 』 』 』 』 』 』 』 』

流石はあの保健体育ペアだ。

名前だけで教室の志氣を上げてくれた。

『『『ムツツリーーーー・ムツツリーーーー』』』

『『工藤！工藤！』』

うん、お前らちよつとつむわい。

もう一回ダウンして。

志氣があがるのは良いが、つむさいのは嫌いだ。

「だつてさ。よろしくね、ムツツリーー君」

「…………（ゴクリ）」

ムツツリーーに、緊張している様子は見られない。

あのR-18指定されてもおかしくないグロ画像を見ても平然としているのはたいしたものだ。

「頼んだぞーーーとも。なんとしてもあの坊主を突破して、Dクラスをクリアしてくれ」

雄一が一人の目を見て話しかける。

Dクラスの教室の広さからすると、坊主で結構スペースをとつてい

るので、坊主を突破すればすぐにチョックポイントだ。

幸いなことに、Dクラスに配置されているのは保健体育教師。

この一人なら問題なくクリアはできるだらう。

ところがこの一人がクリアしないと、いろいろ困る。

「うーん。約束はできなけれど、一応頑張るよ坂本君」

何ら変わらない、飘々とした口調で愛子は答える。

頼もしい限りだ。

「ああ。よろしく頼む。ムツツリーも、いけるな?」

「…………問題ない」

ムツツリーは、静かに、小さくつぶやいた。

「…………あの坊主に、真の恐怖を教えてやる

「皆一、もうすぐあの衝撃映像がくるよー。女子は全員目を閉じるんだ！」

ムツツリーーと愛子のカメラが、目的地に近づいていく。

まあ、僕はもう耐性できたり、メープルも然りなので、目を閉じる必要はない。

『ムツツリーー君。あの先だっけ？さつきの面白い人が待ってるの
つて』

『…………準備はできている』

ムツツリーーは、その準備とやらか、何かを抱えている。

「やつぱりまた真っ暗になつてるね」

「突然現れる方が効果があるだろうからな。タイミングを見計らってスポットライトを入れるんだろ」

モニターの闇の中に、人影を捉えた。

第九十九問～酵母菌って菌だけど菌じゃない？～（前書き）

サブタイトル

酵母菌は、細菌類などの属するモネラ界ではなく、キノコやカビなどの属する菌界の生物です。

第九十九問～酵母菌つて菌だけじやない?～

第九十九問

「アリセラベル」

「うん……つー」

教室中から、息をのむ気配が伝わる。

.....ぐるりー

バンッ!（スポットライトのスイッチが入る音）

ドンッ!（ムツツリーーーが大きな鏡を置く音）

ケポケポケポッ（坊主が嘔吐する音）

『て、てめえ！なんでもの見せやがるー思わず吐いちゃつたじゃね
でかー』

『…………吐いたことは恥じゃない。それは人として当然のこと』

『くそつ。想像を絶する気持ち悪さに自分で驚いたぜ……。道理で
着付けをやつた連中が頑なに鏡をみせてくれねえワケだ……』

こんな化け物の着付けをさせられるなんて、不運な人がいたもんだ。

『ムツツリー二君。この先輩、ちょっと面白いね。来世でなら知り
合いになつてあげてもいいかなつて思つちやうよ』

『ちょっと待てお前！俺の現世を全面否定してねえか！？ついでいう
か生まれ変わつても知り合いでまりかよー』

『あ。ごめんなさいあまり悪気はなかつたんですけど口野郎。あとや
つぱり知り合いも生理的に無理です』

『純粹な悪意しか見られねえよ！つて待てやコラー！てめえナ二人の
こんな格好を撮ろうとしてやがるんだー』

『海外のホンモノサイトにヒョウする』

『じょ、冗談じゃねえ！覚えてろおおつーー』

坊主は にげだした！

「にしても、愛子はだいぶ毒舌だったね」

「普段はああいうことは言わないっすけどね。行平じゃあるまいし」

「となると、誰かの入れ知恵か」

「そりいえば工藤は突入する前に清水に何か聞いておったな」

「ああ、納得」

海渡といるときはだいぶ性格が柔らかくなっているとは言え、清水さんはやはり清水さん。

罵倒のレベルは依然として落ちていないようだ。

……まあ、聞きに行つた相手が清水さんでよかつた。

行平に聞きに行つてたら……ガクガクブルブル。

廢人一人が確実に生産されるだろうな。

『…………先に進む』

『多分チェックポイントまであとちょっとだよね』

坊主が走つていった方向に、二人は向かっていく。

少し歩くと、三年生らしき一人が待ちかまえていた。

さつきの仕掛けのスペースが大きすぎたのだろう。

すぐそばにチェックポイントはあった。

「あれ？ こここのチェックポイントは坊主先輩じゃないんだね。 つてきりあの人が出でくるものだと思つてたよ」

「別にそういう決まりは作つてないからな。 後のAクラスかCクラスにでもいるんだろ」

「出でこないってことはないだろ？ うね」

「あれだけ挑発したんだ、出でくるだろ」

まあ、今までの点数を見た限り、それほど厄介ではないからね。

あれ相手なら楽に戦えるだろう。

第一百問　和語記念？（前書き）

今回から百九問まで、記念としていつたん本編は中斷します。

「さあ、始まりました。100部記念企画。バトルロイヤル！」

「司会は私、高橋洋子と」

「名も無き同窓せん」がお送りします

「まあ氣になるのせぬ黒毛姫をここにひこです。いつたい誰な
のじょつかへ。」

「あ、実際名前のないキャラです。司会をできるキャラがないので、こうして私という即席使い捨てのキャラが神によつてつくられたわけです！名前をつけてあげたい、今後も出番をあげたい、というかたは感想までよろしくお願ひします！眼鏡つ娘の美少女ですよ

「アーティストの腕前は、この感覚が大切だ。

「それはそうでしょう。なんといっても同会のためだけに生まれた
わけですから。同会じゃなくなればその時点で終了ですよ。存在消
滅ですよ」

「随分卑屈ですね」

「このひでもして自分の不憫さをアピールしないと感想で出番を望む声がないかもせんからね」

「そうですか。時間もおしてきましたので、今回の企画を紹介しますよ！」

「今回の企画、『文用学園バトルロワイヤル』は文用学園の一年生全員で召喚獣を呼び、最後まで生き残ったものが勝者です。召喚フィールドは校舎全体、科目はエリアによつて変更です」

「特別参加として、杉本秋音先生も加わっています」

「さて、それでは予定時間になりましたので開始カウントダウンを始めたいと思います。5……4……3……2……1……0！スタートです！」

ルール

・行動範囲はフィールド内のみに限る。フィールドを出た場合は失格とする。

・各階で旧校舎、新校舎ごとにフィールドが異なる。

・科目は特殊ミッションによって切り替えることができる。

・途中での回復試験は受けられない。

・生徒が腕輪によつてフィールドを展開することを禁止する。

・最後に残つたものを優勝者とする。

十分前から校舎を歩き回って、クラスに関係なく校内に散らばつて
いた僕たちに開始の合図がかかった。

今回はバトルロワイアル。最後まで生き残ったものが勝ちとこいつ
となので……

逃げよ、ひと想ひ。

わざわざ後半で不利になる必要もないし、じつせんじりでひぶし合
いをしてくれるだろ、ひ。

もちろん、闘討ちができる状態にあつたら、高得点者はできるだけ暗
殺する。

飛び道具がないのが暗殺としては不利だが、相手がバトルしている
最中や、気を抜いた瞬間パパツとやってしまおう。

とにかくメープル、行平、秋音姉に当たつた時に、こちらが有利にな
るようじしないと。

まあ、どうせ同じことを同じようにも考えてこるのである。

S.i.d.e 明久

よし、今日は豪華賞品が用意されてるってことだから、強くなつた力で、優勝を目指してみよつと思つ。

多分博人なんかは突破できないだらうけど、最後まで足搔いてやるし、少なくとも雄一には引導を渡してやりたい。

田頃の恨みにボコボコにしてやる…………！

さて、敵はいないかな？

カツカツカツカツカツカツ……

…どうやら誰か近づいてきているみたいだ。

僕だつて最近は点数が高くなつたんだ。

操作技術もあるし、ここりで記念すべき一人目を倒すといつのも悪くない。

よしつ！覚悟つ！

「おや、明久ではないですか」

ラスボス
行平 が あらわれた！

逃げる 逃げる 逃げる 逃げる 逃げる 逃げる

「ふむ……なかなかの戦力ですし、つぶし合つて貰いましょう。今は隠れるのが優先ですね」

うまく
逃げ切れた！

第五回　虹説記念？（後書き）

虹説に付くまで読んでいただき、誠にありがとうございました。
これからも、どうぞよろしくお願いします。

第一百一問　印説記念？（前書き）

「」ねえなセー、投稿の順番の間違いがありました。

印一説と印説が逆の順番でした。

すみませんでした。

第一百一問 百話記念？

第一百一話 百話記念？

「さて、ご存知司会さんが前回までのあらすじです！始まつたバトルロワイアル！」

まだまだ戦闘は序盤。ほぼ全員無傷の状態です！

今回の注目は4人。まさに四天王と呼ぶべき実力者です。

一人目、高速高火力、『速攻』の代名詞、七伏博人！

二人目、紳士でありながらSでもある、七伏行平！

三人目、ラブライチャイチャ甘い空気はお手の物、佐藤楓！

四人目、低めの身長に幼い顔。ホントに成人してるのでか？杉本秋音先生！

今回の勝負は、この四人がキーですね。

ちなみに現在は博人君が三階新校舎、化学フィールド。

行平君が一回新校舎、世界史フィールド。

佐藤さんが二階旧校舎、英語Wフィールド。

杉本先生が四階旧校舎、物理フィールドです。

それぞれ得意な科目で戦えるワケですが、やはり最も得意な教科がある、佐藤さんと杉本先生が有利でしょうか？

七伏兄弟には、是非ともミッションをクリアして、フィールドの変更をしてほしいところです。

さて、解説はいったんここまでにして、実際の戦場を見てみましょ
う

S·i·d e 博人

どうやら現在校舎に張られているフィールドは、

一階の新校舎に世界史、旧校舎に数学。

二階の新校舎に日本史、旧校舎に英語。

三階の新校舎に化学、旧校舎に現代文。

四階の新校舎に古文、旧校舎に物理。

理系科目の中でも、最も強敵と出会つ可能性の低い化学を選んだ。

物理はもちろん秋音姉、数学には海渡がいるだろ？。

ミツショーンによって、科目を変えられるというが、さすがに序盤からミツショーンはないので、正直言って僕は今することはない。

行平のように遠距離で攻撃できるなら教室に陣取つて入ってきたものを射殺、という方法もあるが、あいにく僕は近接戦のみ。

というわけで現在校舎の外壁にいる。

今回のルールでは、『校舎』に張られたフィールドを出た時点で失格、とあるが、『校舎内』とはどこにも書いていない。

つまり、この外壁はルール的にセーフだ。

他人は見つけることができないので、最高の隠れ場所だ。

『Fクラス 七伏博人
化学 743点』

S.i.d.e 行平

さて、空き教室を拠点として、入ってきたものを射殺する体制も整いました。

先ほどから、時々この教室に入ってくる人もいるのですが、ドアをあけた瞬間に敗退しています。

頭のない召喚獣をマヌケな顔で見ている姿は滑稽なものです。

まあ、そのような雑魚は前菜のもなりません。

やはりメインは博人と勝負でしょう。

博人と全力で戦うと、血が踊るというものです。

もちろん、メープルと秋音姉さんとの勝負も同じく楽しみですが。

それまでには、Aクラスの上位程度が前菜の役割を果たしていただけないと嬉しいのですが。

まあ、それでも物足りなければ、明久を狩るのも面白そうですね。

フフフッ。先が楽しみですよ。本当に。

第五十問　何話記念？

百一問　100話記念？

「さて、今回も回数わんの解説から始まります。

高橋先生、なぜ監督としてここまで必死になつてゐるか、ご存知ですか？」

「優勝商品が豪華と聞きましたが……」

「その通りですよ、高橋先生。なんと今回の商品は――――

なんと！願いを叶えることができるのです！」

「つまり、可愛い服を着せ替え―――あれ？向をやうとしたのでしようか？」

「おやぢへ、別世界の影響でしよう」

「よくわかりませんが、そのでしようか」

「さて、まあ気を取り直して、本戦を観ていきまじゅう」

Sideメープル

フフフッ！

今回のバトルロワイヤル、まあなんと学園長も氣前の良いことだ。

なにせ常識的な範囲とはいえ、願いを聞いてくれる。

これで――――――

ハクに聞かないと聞いてもいたね。

こつむはやだれなこよつなこととかを実践する良い機会ね。

ハくく……

ちゅうとくへりこ強気に出してもひつひつ命令したりして……

あ、他に……少し、良こよひたれたり……

あれ？ こいつがえるともしかして私、ハクに責められたかった？

そういうえばいつも私が主導権握ってるから、可愛い姿をみせてくれるけど、そんはことしてるから凛々しい姿を見せてくれないんだ。

だから、ハクに主導権をとられたいのね。

ああ、考えるだけでも楽しみ。

まあでも、そのあとはあまり調子に乗られないようにきつちり主導権は握らないと。

私の目的のために、この勝負は本気の本気だ。

『Aクラス 佐藤楓
英語W 730点』

Side out

「さて、試合開始から、だいぶ時間がたちました。

多くの選手が、脱落してきました。

しかし、勝負はまだこれから。

現に、四天王はまだ無傷です。

このまま四天王の独走をゆるすのか、それとも誰か挑戦者が現れるのか。

それが中盤の見所になりそうです。」

S·i·d·e 博人

なんか、この勝負は負けられないような気がしてきた。

自分の身の安全といつもあるけど、何より僕自身に願いがあるからだ。

それはもちろん――――――

ミカンの木だ。

アゲハはミカン科植物を食草とするのが多いから、ここに手にはいるとふとじゅが非常に嬉しい。

まあ、このぐらいしか望みなんてないしなあ。

だからといって、氣を抜くつもりはないが。

そろそろ脱落者が増えてきたが、まだこの場から離れる必要性は感じないな。

おやりく、勝負を促すためにフィールドの範囲が小さくなるだらう。

その時になれば、我が家の人間にはこの場所でとどまることなど危険以外のなんでもないので、本格的な活動をせねばならんだろうな。

第五三問 口話記念？

第五三問 口話記念？

Side 行平

「さて、中盤に入つてきましたので、戦闘エリアを制限します。今から15分後に、一階新校舎、世界史フィールドを封鎖します。中のいる生徒は、速やかに移動してください。なお、時間内にフィールドから出なかつたものは失格となりますので、『注意ください』

スピードから、司会の少女の声が聞こえます。

ふむ…………悪状況ですね…………

仕方ありません。時間ギリギリに上の日本史フィールドに……

いや、ここは殲滅のチャンスですね。

幸いここで多くの敵を殲滅すれば、まだどこか――おそらく一階旧校舎か、四階のどちらかが――封鎖されます。

そうなれば、一歩もとしても悪いことではないので。

まずは私は、階段上から優雅に射殺するとこまじゅう。

ククク…………ハハハハハハハハ！

『Aクラス 七伏行平
日本史 788点』

Side明久

まずいことになつたなあ…………唯一の得意科目が…………

しうがないから、移動しよう。

以前の僕なら、何も考えずすぐに移動しただろうけど、キチンと考
えれば、こっちで時間つぶしてからのが断然有利。

頭が良くなつてるのが実感できるね。

ま、そろそろいい時間だから、移動しよう。

ちゅうび、階段にさしかかった時だった。

「これで十四人ですね。次は…………明久ですか、死になさい」

容赦なく行平から銃弾が放たれる。

「どうわあつ！」

マズいマズいマズいマズいマズいマズい

掠つたよ、今掠つたよ！

掠つただけなのにこの激痛。

化け物か、アレは！？

階段が使えない以上、一階旧校舎に逃げるしかない。

タイムアップギリギリ、といふところで、なんとか数学フィールドに入れた。

雄一を殺すまで、負けるもんか…………

『Fクラス 吉井明久
数学 95点』

フィールド封鎖から数分後、まだ僕は落ち着ける場所を見つけてな

かつた。

そんなとき、突如としてネギが飛んできた。

「どうわあつ！」

間違いない。このネギ。

「疲れているところ申し訳ないが、消えてもうつぜ」

Dクラスにして、Aクラスレベルの成績優秀者、浅井海渡

『Dクラス 浅井海渡
数学 432点
VS
Fクラス 吉井明久
数学 95点』

第一百四問 百話記念？

第一百四問 百話記念？

Side 海渡

観察処分者、吉井明久。

バカの代名詞…………といったところだが、今戦っている相手は、バカと呼ぶには強すぎる。

観察処分者としての操作技術の高さ、低くない点数。

早めに、かつ最小限の被害で潰すべき存在だ。

召喚獣に、ネギナタを構えさせ、突っ込んでいく。

まずは、見切りにくい突き。

吉井はこれを転がってかわすが、突きの体制から切りかかり、追撃する。

今度のこれも、直撃はせずに受け流された上に体を移動させられたので、回避された。

武器は完全に振り切ったので武器での攻撃はあきらめ、威力ではなく、牽制目的の蹴りを入れる。

受け流された時のまま、防御の姿勢であつた木刀によつて直撃ではなくなつたが、壁にかなりの勢いで激突させた。

「どうしたよ？こんなもんか」

「こちで…………まだまだ…………」

「早くくたばつてくれると助かるんだがな」

再び距離を詰め、ネギナタを振り抜く。

紙一重、といつといろでかわされ、隙をさりす」とになる。

攻防逆転。

相手の木刀を受け続けることになる。

しかし俺だつてわざわざこんな強敵相手に戦いを挑んだわけがない。

連續で振るわれる木刀の嵐をネギナタで受け続けながら後退し、「口三箱の中に召喚獣を入れる。

ドゴォー！

対観察処分者用の戦術。

相手が物理干渉をすることを逆手に取らせてもらつた。

物理干渉のない、一般召喚獣ならゴミ箱をすり抜け、中に隠れることができる。

しかし、観察処分者用の召喚獣では、相手の召喚獣に攻撃を当てる前に、ゴミ箱が障害物となる。

よつて、相手は無防備。

今がチャンスだ。

「くたばれえつー！」

そのチャンスを活かすため、強力な一撃を――――――

「貴様雄一っ！そつちがくたばれ！」

「うるせえー死ね！」

Fクラス代表、坂本雄一が打ち込もうとした。

その後も、田の前で醜い争いを続けている。

「両方くたばれ」

一閃。

お互い攻撃を放つ直前のポーズで、真っ二つに切り裂かれた。

「ぎゃああああああああつ！痛いつ！あつ、追撃やめてつ！みじん切りはダメだから！」

ストレス発散完了。

勝負はあやふやになつちましたが、二体の強敵を葬れたのは手放しで喜ぼう。

坂本は点数が高いからな。

無傷で倒せたのはヤツパリいろいろバカだからだな。

S·i·d e 秋音

ふんふんふんふーん

準備完了

これで私の有利は揺るがないね。

さて、だいぶ人数が減ってきたので、外壁から離れ、校舎内を動き回ることにしたのだが、今度は四階新校舎——古文フィールド——が封鎖されることになった。

三階であるここにも流れてくる者がいるだろうから、再び身を隠すとしよう。

第一百五問 百話記念？

第一百五問 百話記念？

「さて、戦いもそろそろ終盤になつてきました！未だ四天王は無傷！流石と言つたところですー。」これからどんな勝負があるのでしきう！？」

S·i·d·e 博人

現在、使えるフィールドがかなり制限されて、範囲は一階と二階のみ。

それも、教科は日本史、英語W、化学、現代文だ。

こじりで、少しおかしい点がある。

初期のフィールドと得意科目から考えて、もといた場所を追いやられたのは一人、行平と秋音姉だ。

行平は日本史に移ったとして、秋音姉は？

ここ化学フィールドは僕のテリトリーであることがわかつてくるだ
るから、入つてくることはないだろう。

他の一人のところもだ。

そう考へると、秋音姉は現代文フィールドにいるのだろう。

だが、ミッションがあるのに、科目を変更しようとしていない。

おそれりく、何か策があるのであらう。

「よつ、良いところであつたな。博人」

考え方の最中、海渡が勝負をしかけてきた。

『Dクラス	浅井海渡
化学	223点
VS	
『Fクラス	七伏博人
化学	743点』

ここでは僕の方が圧倒的有利なのだが、何を考えているのだろうか。

もしくはただ戦いを求めてきたか。

おそらく後者だな。

まあ、どちらにせよ潰すのみなので、特に返事もせず切りかかる。

「うおっとーあぶねえな

振り下ろした右の一撃をかわされたので、地面にその右手をつけ、支点として、体全体を使って蹴りを放つ。

今度はキチンとヒットし、攻撃をガードしたネギナタと一緒に吹き飛ばす。

そのまま追撃を行つため、一直線に駆け出す。

渾身の右の一撃はかろづじて起き上がった海渡から外れた。

しかし、読み通りだ。

そのまま回し蹴り、左手の斬、肘のブレードとつなげていく。

「くつそ…………容赦ねえなおい」

『Dクラス 浅井海渡
化学 67点』

「悪いが、僕は負けることができない（ミカンの木のために）」

「俺だって、勝つためにやつてんだよ」

「なるほど。お前は『勝たむとして』であり、僕は『負けじ』といふわけか。僕としては、相手に勝つことよりも、負けないことを重視するからこの言葉を選んだのだが、なかなか互いの認識が言葉に現れておもしろいじゃないか。まあ、今のは徒然草で、『勝たむ』とうつべからず。負けじとうつべきなり』ってところから引用するなら、僕のが戦いに向いているようだ。まあ、双六について記述なんだけど」

負けは即ち死と直結する。

相手に勝てば負けないワケだから、今みたいに勝つことも多々あるがね。

「おしゃべりはここまでだ。じゃあ、終わりだ」

死に体の海渡に武器を振り上げる。

「悪あがきはさせてもひづせー。」

短く持つたネギナタで顔面を狙つてくるが、その程度の予想はできている。

首を動かして掠ることもなく回避。

そして、一撃。

『Dクラス 浅井海渡
化学 DEAD

V S

Fクラス 七伏博人

無傷で勝利、満足のいく結果だ。

『科目変更ー科目変更ーただいまより、このヒリアは公民となりますー』

スピーカーからアナウンスが響く。

それは、悪魔の襲来を告げた。

「おや、心外ですね」

第一百七問　百話記念？

第一百六話　百話記念？

悪魔、襲来。

「さて、存分に死合いましょう！」

どうする！？

選択肢としては逃げるのが一番無難だ。

だからこそ、何かしら対策があるかもしねい。

まずは、様子見で速攻してみよう。

召喚獣を駆け出させる。

行平はボウガンを構え、迎撃。

放たれる銃弾の嵐を避けられるものは避け、擲げるものは擲いていく。

ある程度近づいたところで、バックステップされ、距離を取られ、

また乱射される。

それを後退しつつかわす。

そして、そのまま逃走。

「まあ、今のところはこれで良いでしょ?」

Sideメープル

「さて、そもそも出てきたらどうすか? 秀吉君に康太君」

虚空に向かつて問いを放つ。

「……………どうしてバレた」

「……………どうして、ねえ……」

「そんなの私がハクの同類だからです」

「妙に納得してしまったのはなぜじゃ…………?」

さて、どうやら同盟を組んでいる二人には、私の願いのために、
退場してもいいおつ。

「それじゃあ、バイバイっす」

一瞬で距離を詰めて、秀吉君に片手刀を振る。

「…………危ないっ！」

ガキンシと音を立てて割り込んできた康太君が防ぐが、点数差により吹き飛ばし、秀吉君もそれに巻き込まれた。

「いやあ、かつこよかつたつすよ康太君！お姫様を守つた騎士つすかね！でもまだまだ足りないっすよ！せめて体を温めるくらいにはなつてよ？ハクを下さなくちゃならないっすからー！」

戦いの空氣に、テンションがあがつてくる。

勝ち続ければ、ハクといろいろできるからね。

ああ、わくわくが止まらない。

この衝動が今すぐ叶えられないなら、欲求不満程度はぶつけでも良いよね？

「あなたがたの末路をオノマトペで表現してみると、ガリガリ、チプチ、グチャグチャ、バラバラってところね」

体勢を立て直して構えを取つた一人に、刀を投げる。

私の点数から放たれる凶器は、刃だけでなく、たとえ柄が当たつてもただではすまない。

慌てて飛び退いた一人に肉薄し、盾を使って裏拳。

グシャツーと康太君の頭を吹き飛ばす。

驚いている秀吉君の召喚獣も、手刀で首を切る。

うーん、呆氣ない。

最初は楽しめるかと思つたんだけどなあ。

ヤツパリハクとかと戦わないと満足できないかな?

「さて、次は歌美つすか?」

「あれ?バレてたのかな?」

強敵を察知し、急いで武器を拾つ。

『Aクラス 佐藤楓
英語W 730点

VS

Aクラス 稲垣歌美
英語W 387点』

第五七問　百話記念？

第五七問　百話記念？

「えじや、問答は必要ないっすよね」

「うふ？当たり前のことだね？」

歌美はレイピアを、私は刀と盾を構える。

緊張状態の中、先制攻撃をしかける。

速攻は、おつ七…………恋人の得意技である以上、私もキチンと田に焼き付けてあるから、行動に移せる。

まずは、威力のない牽制の斬。

もちろんかわされて、レイピアで反撃されるけど盾で受けれる。

相手の武器はレイピア一本なので、一回攻撃を受け止めれば、一撃がすぐにくることはない。

その隙をついて、足を払う。

ジャンプして避けられるけど、狙い通り！

空中の歌美に刀で突きを入れる。

レイピアで軌道は逸らされたけど、それでも軽くはない切り傷を入れた。

そして、私の腕輪の能力も。

攻撃が当たる瞬間に『毒』を武器に付与した。

後の大勝負のために、最も点数の消費が少ない、武器に付与という方法の上、一瞬だけなので、減った点数は一点だけ。

これで相手も心理的に急ぐだろうから、やりやすくなつたかな？

長期戦になればこちらが断然有利なので、いつたん距離を大幅にとる。

すかさず歌美が距離を詰めてくるけど、多少の焦りが見える。

それでもある程度は冷静なようだが、大振りはなく、絶え間ない連撃を放つてくる。

どうやら、まずは一撃入れて、そこを起点にして流れを持っていきたいみたいね。

私からしてみると、ちょっと甘いかな。

ハクだつたらいつも以上にフェイントしかけて錯乱させてくるだろうし、ユキだつたら毒なんてお構いなしにいつも通り撃ち殺そうと

していくんだろう。

でもまあ、今はまだメインじゃない。

連撃を続けて集中力が切れ始めた歌美の攻撃は、だいぶ読みやすくなってきた。

その一撃を受け流し、カウンターを入れる。

勢いよく吹き飛ぶけど、容赦はない。

そのまま相手の落下地点まで追いつき、刀を振り下ろす。

「あれれ？ 負けちゃったかな？」

『Aクラス 稲垣歌美
英語W 0点』

「科目変更！ 科目変更！ 三階新校舎、旧校舎のフィールドが物理フィールドに変更されます！ また、一階の新・旧校舎は現時点より五分後に閉鎖されます」

え？

つまり、実質全フィールドが物理つてこと？

やつてくれたな、秋音さん。

そして、その後三階旧校舎も封鎖され、四人が集まつた。

第一百八問 百話記念？

第一百八問 百話記念？

四人——僕、行平、メープル、秋音——が集まつた。

どうやらこれが最終決戦のようで、他の人の気配は感じられない。

いいね、全力で潰し合えるわけだ。

「にやはは、ゴメンね、私も勝ちたいから」

「まさか、ここまで用意周到に進められるとは思いませんでした」

「まあ、どんな条件だろうと、私は負けないから」

「負けない。それだけだ」

まずは、恒例の僕が突っ込む。

続いて、メープル、行平も動き出す。

———標的を秋音姉に向けて。

「落ちろつ！」

腕をクロスさせ、クローザーで斬りかかる。

それをチーンソーで防がれるが、行平の射撃で、追撃を免れる。

『Fクラス 七伏博人
物理 642点

VS

Aクラス 七伏行平
物理 452点

Aクラス 佐藤楓
物理 431点

VS

物理教師 杉本秋音
物理 975点

点数は、秋音姉がぶつちぎり。

それゆえ、全員で狙っている。

この戦いは、勝者のみが願いを叶えられる。

それならば、最も勝者に近い者が狙われる。当然だ。

もちろん、秋音姉の点数がある程度下がつたら、次は僕だろう。

だが、それはそれで楽しそうだ。

まずは、秋音姉との戦いを楽しませてもらおう！

「こい！』— *Dynastes hercules excavatorianus* 『ディナステス・ヘラクレス・エクアトリアヌス』
!』— *Dorcas titanus pallawanicus* 『ドルカス・ティタヌス・パラワニクス

昆虫召喚を使い、特に攻撃向けの昆虫を呼び出す。

そのまま自分を含め、三体で取り囲む。

一体一体フェイントを入れて、慎重に攻撃していく。

「あーもう一鬱陶しい！」

秋音姉が、周囲に腕輪の能力である電撃を放つてくる。

バックステップで最大限遠ざかつたが、それでもいくらかダメージが入る。

「そこそこ！」

強烈な電撃によって、一瞬姿を覆うほどの光が発生し、それに隠れ第一撃を放つ用意を終えた秋音姉が紫電の槍を飛ばしてくる。

――回避、不能

ダメージを最小限に抑えるために、体を捻るが、左手に当たる。

フィールドバックで激痛が走るが、無視する。

「ハニ！『オオカマキリ』『アオオサムシ』」

わざと肉食性の昆虫を召喚。

一気にたたみかける。

しかし、再度電撃で吹き飛ばされて、距離をあけられる。

「セヒ、どうするか…………タツチ」

召喚獣に、近くの壁にあるスイッチを押せせる。

「科目変更要請。教科は保健体育」

三階新校舎の科目変更のミッション——設置されたスイッチをすべて回る」と――を達成する。

『科目変更！科目変更！残りフィールドが一つなので、現在より、三階新校舎の物理フィールドが保健体育フィールドとなります！』

「セヒ、同じ土俵で死合おつか」

第一百八問　　何話記念？（後書き）

学名つて格好いいよね。

そういう話でした。

ちなみにクラクレス・エクアトリアヌスとパラワンオオヒラタクワ
ガタです。

いままでありがとうございました。

これからもよろしくお願ひします。

第一百九問　百話記念？（前書き）

今まで読んでいただき、誠にありがとうございます。
これからも、駄文ながら頑張っていきたいと思います。
今後とも、どうぞよろしくお願いします。

第一百九問 百話記念？

第一百九問 百話記念？

『Fクラス	七伏博人
保健体育	432点
VS	
『Aクラス	七伏行平
保健体育	450点
VS	
Aクラス	佐藤楓
保健体育	419点
物理教師	杉本秋音
保健体育	449点

スコアは全員ほぼ同じ。

よつて、誰を初めに狩るか、などは決まらない。

まあ、そんな状況でも、僕の安定行動は速攻だ。

日頃の恨みを込め、行平に突っ込む。

死ねっ！

「『じめんハク！でもハクにも利がある』ことだから。」

「それが怖いんだよ！」

行平に攻撃するのを、メーブルが横から攻撃を入れてくるので回避する。

反撃したいところだが、標的を行平の射撃を防いでいる秋音姉に変える。

「あつーーーの卑怯者めーつーーー！」

「そつくつそのまま返す！」

クロード裏拳をするが、チエーンソーで弾かれる。

すると行平が射撃をしてきた。

ちりりと見ると、その隙にメーブルが攻撃していた。

なんといつか…………

『やせこじこーーー。』

「全員まとめて相手ある…………」「……『ハノ!!』『カ』『クビキツギス』『オオゴキブリ』。」

「毒弾二方向！」

「紫電！」

全員思つたことは同じよつで、敵全員に攻撃を仕掛けた。

まあ、全部防がれてるけど。

「いひなつたら決めにいくか…………『飛蝗現象』」

『Fクラス 七伏博人
保健体育 12点』

点数のほとんどを使い、大量の『サバクトビバッタ』を召喚する。

飛蝗現象——無数のバッタの大群が植物を食い尽くしながら移動する現象

「いけつ！」

そのバッタの大群が、三人に襲いかかる。

廊下は羽音で満たされ、声は聞こえない。

球状に動くバッタたちによつて、中にいるその姿は見えない。

さすがにこの大群を操るのは至難の業で、自然と解除されてしまつ。

その災害の跡地に残つたのは――――

行平とメープルだつた。

だが、メープルはもう虫の息。

地面に伏している。

行平はおそらく、腕輪の能力『絶対防御』を使い続けたのだろう。

外傷はなかつた。

『Aクラス 七伏行平
保健体育 31点』

能力を使い果たし、点数も劣つてゐる僕に、勝機はないだろう。

「それでも…………それでも僕は、行平に復讐したい!」

底をついた力を振り絞り、召喚獣を突っ込ませる。

行平は狙いを絞つて、必中させる氣だ。

速く、速く、速く!

跳躍し、クロ一ーを振りかぶる。

対する行平も、引き金に力を込める。

そして――――

飛来した刀が一人を貫いた。

『……………え？』

「私の勝ちね」

見ると、メープルの召喚獣が伏せたまま投擲を終えた体制になっていた。

『ここに、勝者が決定しました！ 勝者は、Aクラス佐藤楓さんです！』

一番最後に処理すればいいかと油断していたのが仇となつたか。
……………全身に悪寒を感じているのだが、どうすれば良いのだろう。

「おめでとうござります。メープル」

「ありがと、ユキ」

「それで、願い事は何をするんですか？」

「ちょっと主人様……ハクにお願いを聞いてもらおうと」

「主人様！？何！？何要求されるの！？」

「それは…………キャッ」

「逃げるー！」

「またあとでね～」

「へんおおひー！」

その後、要求を否められたんだけど、メープルが「冗談のつもりで言った

『たまにはいつのものもいね…………お父さん』

には、背筋を凍らせるを得なかつた。

ガクガクブルブル

第一百九問　百話記念？（後書き）

百話記念が終わったところで、申し訳ありませんが、一週間ほど、投稿を休みます。すみません。

第一百十問 蝶は前足に人間でいう舌とおなじ器官がある～（前書き）

一週間ほどお待たせしました。

第一百十問 蝶は前足に人間でいつまでもおなじ器官がある

第一百十問

『『『試験召喚』』』

画面をみると、召喚をしていた。

ムツツリーは吸血鬼、愛子はペリモード。

「上藤さんの召喚獣がのっぺりぱつのはどうしてなんだろ?」

「さあな。顔がない、つまり素顔を見せないと人に何かがあるのかもしないな」

いや、それは深読みしちゃぎ。

「そう言えば、ワシは前に演劇の題材の怪談話を探しておったのじゃが、その中にのっぺりぱついの尻田とこいつものがあつての」

「尻田?」

「うへ。そののっぺりぱつはなんでも、人に出来つけと全裸になつた
そうだ」

うん、わかりやすい。

「それはそうと、いつもだけど、向こういつも向こうで分かり易いお化けだね」

「そうだな。おかげで敵の行動も予測しやすそうだ」

三年生の召喚獣は、フランケンシュタインの怪物とミイラ男——もしくは透明人間かもしない——だ。

ちなみにフランケンシュタインは、怪物を作った博士の名前なので、フランケンシュタインはお化けの名称ではない。

おそらく特徴は、根は優しいとか、怪我をしやすいとかだろう。透明人間だった場合は、影が薄いとかだろうけど。

『Aクラス 市原兩次郎
保健体育 303点
&
Aクラス 名波健一
保健体育 301点』

点数は三百点越え。なかなか優秀なヒトのようだ。

でもまあ、『なかなか』程度では、勝ち田があるとは思わないが。

なにせ——

『Aクラス 工藤愛子
保健体育 479点
&
Aクラス 土屋康太
保健体育 557点』

この点数だ。

勝負は一瞬。

あまりの戦力差により、一度も組み合つことなく、決着はついた。

保健体育に置いては、この一人は教師にも負けないだろう。

まあ、僕は本気なら負けることはない。

本体のスペックで圧倒できるからね。

「ねえ。今の勝負、何があつたか見えた？」

「ああ。はつきりと見えたわけじゃないが……ヴァンパイアの方は、一瞬で狼に変身してフランケンを切り裂いて、また人型に戻つていた」

「それで、のっぺらいぽいの方は？」

「僕ははつきり見えたんだけど…………一瞬で全裸になつてミイラ男をボコボコにじて、また服を着ていた」

なんで服を脱いだのかは理解不能だ。

「あと、ムツツリーはその一瞬で出血・止血・輸血を終わらせていた」

そのスケベ心には、僕も驚愕を覚えた。

それにしても、なぜか握っていた手が、メープルの胸でギュッと抱かれているのはなぜだろう。

ふわふわで柔らか…………げふんげふん

ああ、召喚獣とはいえ、全裸を見たからか。

メープル以外には興味ないのに。

第一百十一問 カマキリは、頭を食べられても交尾を続ける

第一百十一問

『じゃあ、Bクラスもクリアってことで。次はビックに行けばいいんだっけ?』

『…………Cクラス』

『はーい。了解。…………ところでマッソリー君。毎日して鼻にティッシュ詰めているのかな?』

『…………花粉症』

『へえー。ふうん。花粉症ねえー』

何かティッシュの理由に思い当たるのか、愛子はニヤニヤしていた。

うん、まあ理由なんてバレバレなんだだけね。

『あれ?この口が二つある女人の人ってなんのお化けだっけ?』

『…………ふたくち女』

『じゃあ、あいつの身体が伸びてる女のは?』

『…………高女』

『そつちの毛深い男の人は?』

『…………どひどもい』

なるほど、ずいぶんマッシュリーらしい紹介だな。

「順調だね。」のままだとあの一人で全部突破できちゃうじゃないかい?」

まあ、確かにあの二人はお化けで悲鳴をあげるなんてことはないだろ?が…………

「いや、さうでもない。さつきの保健体育の点数を見て向こうにマッシュリーの正体に気がついただろ?からな」

「やつらそろ対策をしてくるだろ?ね」

「え? やつら?」

「三年はマッシュリーついで名前は知らないても『保健体育が異常に得意なスケベがいる』ってことぐらいは知っているだろ?。そうなると、弱点もバレている可能性が高い」

「弱点？弱点ついで言つても、ムツツリーは鼻血を噴いて倒れるだけでしょうか？別に悲鳴をあげる」ではないじゃないか

「ああ。悲鳴はあがらないかもしれないな」

やはり、強ければ強いほど情報が筒抜けになる分、デメリットも「力」なあ。

「それってどういふ意味を雄一」

「悲鳴じゃなくても標的に大きな音を立てさせるのは可能だつてことだ。例えば、鼻血の噴出音とか、な」

「あ、あはは……。何を言つてゐたか雄一。まさか三年生がそんなことを」

「まあ、見ていればわかる。……そろそろへるや」

モニターは『ムツツリー対策』とみられる女性の姿を映していた。

《…………つー（くわつ）》

『む、ムツツリー君？何をそんなに真剣な顔を——つて、なるほどね……』

徐々に姿が鮮明になつてくる。

その女の人は結い上げた髪の切れ目の美人だった。

まあ、メープルには及ばないけどね！

その女性は着物を着崩しているが、メープルがやつた方が色っぽいと思う。

うん、さすがメープル。僕の思考がメープル一筋になっている。

『…………（グッ）』

Fクラスの面々は、感動を分かち合うために、力強い握手を交わしていた。

うん、叫ばないだけ良いことだ。

第一百十一問「アブラムシはメスだけで増える」とも

第一百十一問

まあ、霧島さんに近いタイプの人だから、舞い上がるのは仕方ない……のか？

「……雄二」

「み、見ていない！俺は全然見ていないぞ翔子！」

「……私だつて、着物を着たらあんな感じになる」

「おー、珍しいな。自分と似たタイプの人間だから対抗意識からカムツとしている。

「ああいや、別にお前に着物着てほしいとは言つていなんだが」

「……丁度良かつた。結婚式にどちらを着るか迷つていたから」

「ん？ドレスと着物か？まあ、誰と結婚するかは置いといて、悩むくらいなら両方着るつて選択肢も——

「……じゃあ、着物と猫耳メイド服の両方着る」

「なんだその選択肢！？出席する両親も色んな意味で涙が止まらない

いだろー?」

「ハクは、どつちがいい?」

「うーん、式場によるからねえ……と言つても僕大学院は行くからだいぶ先だよ」

「それまで我慢かあ……」

『…………』の…………程度……………この俺……………ひー』

『ムツツリーー君。足こきてるみたいだケド?』

『…………（ブンブンブン）』

うん、ムツツリーーがピンチだ。

こんな理由でいちいちピンチになるやつがいるのは、この学校めんどくさいことこの一つだわつ。

「す」「ーあのムツツリーーがここまでの色氣を粗手に鼻血を我慢するなんて!この勝負は勝つたも同然だよ!」

成長したとは確かにいえるが、この程度で勝てるわけないだろ、普通。

「いや待てーまだ何かあるー」

「え？」

雄一の声によつて、勝利を確信していた明久が正気に戻つた。

『ようこそいらっしゃいましたお一方。私、三年A組所属の小暮葵と申します』

小暮葵先輩は頭を下げて挨拶しながらも、着崩した着物をそれ以上はだけさせない。

なんて無駄な技術を習得してゐるんだ。

『小暮先輩ですか。こんなにちは。ボクは——A所属の工藤愛子です。その着物、似合つてますね』

『ありがとうございます。いつ見てもわたくし、茶道部に所属しておりますので』

『あ、そつか。茶道つて着物でやるんだもんね。その服装はユニフォームみたいなもんだよね。ちょっと着方はエッチだけど』

『はい。ユニフォームを着てゐるのです』

『そうですか。それじゃ、ボクたち先を急ぐので』

『そして、実はわたくし——』

『?なんですか?まだなにか』

『――新体操部にも所属しておりますの』

はだけられた着物を脱ぎ捨て、現れたのは、レオタードだった。

『土屋康太、音声レベルおよびモニター画像全て赤!失格です!』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2176s/>

バカと速攻と昆虫少年

2011年12月20日22時54分発行